



2019シラバス 多摩大学 経営情報学部

現代の志塾

多摩大学は「今を生きる時代についての認識を深め、課題解決能力を高める」ため、教育理念を「現代の志塾」と定め、教育・研究・社会貢献の全分野の共通理念としています。「現代の志塾」とは「アジアユーラシアダイナミズム」の「現代」、社会の不条理の解決のために自らの職業や仕事を通じて貢献をする「志」、人間的な触れ合いによる少人数制ゼミを中心とした「手作り教育」の「塾」を意味しています。実社会の問題解決の最前線に立つ「志」人材の育成に尽力するため、個性と特色にあふれた「ゼミ力の多摩大」を形成しています。

学年暦

・補講は原則土曜日に実施します。

	日	月	火	水	木	金	土
4月		1	2	3	4	5	6
			オリエンテーションⅠ	オリエンテーションⅡ	オリエンテーションⅢ	入学式	①履修登録期間開始
	7	8	9	10	11	12	13
		①	①	①	①	①	②
	14	15	16	17	18	19	20
		②	②	②	②	②履修登録期間終了	③履修登録確認期間開始
	21	22	23	24	25	26	27
		③	③	③	③履修登録確認期間終了	多摩大 スポーツフェスティバル	④
	28	29	30				
	昭和の日	国民の休日					

	日	月	火	水	木	金	土
5月				1	2	3	4
				新天皇即位に伴う祝日	国民の休日	憲法記念日	みどりの日
	5	6	7	8	9	10	11
	子どもの日	④振替休日	④	④	④	③履修登録削除期間開始	⑤
	12	13	14	15	16	17	18
		⑤	⑤	⑤	⑤	④	⑥
	19	20	21	22	23	24	25
		⑥	⑥	⑥	⑥履修登録削除期間終了	⑤	⑦
	26	27	28	29	30	31	
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑥		

	日	月	火	水	木	金	土
6月							1
							⑧
	2	3	4	5	6	7	8
		⑧	⑧	⑧	⑧	⑦	⑨
	9	10	11	12	13	14	15
		⑨	⑨	⑨	⑨	⑧	⑩
	16	17	18	19	20	21	22
		⑩	⑩	⑩	⑩	⑨	⑪
	23	24	25	26	27	28	29
	⑪	⑪	⑪	⑪	⑩	⑫	

	日	月	火	水	木	金	土
7月	6月30日	1	2	3	4	5	6
		⑫	⑫	⑫	⑫	⑪	⑬
	7	8	9	10	11	12	13
		⑬	⑬	⑬	⑬	⑫	⑭
	14	15	16	17	18	19	20
		⑭海の日	⑭	⑭	⑭	⑬	⑮
	21	22	23	24	25	26	27
		⑮	⑮	⑮	⑮	⑭	
	28	29	30	31			
	⑮金曜授業	定期試験 I	定期試験 II				

	日	月	火	水	木	金	土
8月					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
				追試験日	追試験予備日		
	11	12	13	14	15	16	17
	山の日	振替休日					
	18	19	20	21	22	23	24
			8月集中講義①	8月集中講義②	8月集中講義③	8月集中講義④	8月集中講義⑤
	25	26	27	28	29	30	31

	日	月	火	水	木	金	土
9月	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
							卒業のつどい
	15	16	17	18	19	20	21
		敬老の日			① 履修登録期間開始	①	①
	22	23	24	25	26	27	28
		秋分の日①	①	①	②	②	②
	29	30					
	②						

	日	月	火	水	木	金	土
10月			1	2	3	4	5
			②	② 履修登録期間終了	③履修登録 確認期間開始	③	③
	6	7	8	9	10	11	12
		③	③	③履修登録 確認期間終了	④	④	④
	13	14	15	16	17	18	19
		④体育の日	④	④	⑤履修登録 削除期間開始	⑤	⑤
	20	21	22	23	24	25	26
		⑤	即位礼正殿の儀	⑤	⑥	⑥	⑥
	27	28	29	30	31		
	⑥	⑤	⑥履修登録 削除期間終了	⑦			

	日	月	火	水	木	金	土
11月						1	2
						⑦	⑦
	3	4	5	6	7	8	9
	文化の日	⑦振替休日	⑥	⑦	⑧	多摩祭事前準備	多摩祭Ⅰ
	10	11	12	13	14	15	16
	多摩祭Ⅱ	多摩祭後片付け	⑦	⑧	⑨	⑧	⑧
	17	18	19	20	21	22	23
		⑧	⑧	⑨	⑩	⑨	⑨勤労感謝の日
	24	25	26	27	28	29	30
	⑨	⑨	⑩	⑪	⑩	⑩	

	日	月	火	水	木	金	土
12月	1	2	3	4	5	6	7
		⑩	⑩	⑪	⑫	⑪	AL 発表祭⑪
	8	9	10	11	12	13	14
		⑪	⑪	⑫	⑬	⑫	⑫
	15	16	17	18	19	20	21
		⑫	⑫	⑬	⑭	⑬	⑬
	22	23	24	25	26	27	28
		⑬					
	29	30	31				

	日	月	火	水	木	金	土
1月				1	2	3	4
				元日			
	5	6	7	8	9	10	11
		⑭	⑬	⑭	⑮	⑭	⑭
	12	13	14	15	16	17	18
		成人の日	⑭	⑮	⑮金曜授業	センター試験準備	センター試験
	19	20	21	22	23	24	25
	センター試験	⑮	⑮	定期試験日 I	定期試験日 II		⑮
	26	27	28	29	30	31	
				追試験日	追試験予備日		

	日	月	火	水	木	金	土
2月							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
		2月集中講義①	建国記念の日 2月集中講義②	2月集中講義③	2月集中講義④	2月集中講義⑤	2月集中講義⑥
	16	17	18	19	20	21	22
		2月集中講義⑦	2月集中講義⑧	2月集中講義⑨			
	23	24	25	26	27	28	29
天皇誕生日	振替休日						

	日	月	火	水	木	金	土
3月	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
						春分の日 卒業のつどい	
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30	31				



1. 基本理念	1
2. 経営情報学部ディプロマポリシー	2
3. 経営情報学部カリキュラムポリシー	3
4. 学生生活	4
5. 授業	5
6. 初年次教育科目の指定について	10
7. 履修登録・確認・削除	11
8. 学期末試験	14
9. 成績	17
10. 学科選択	20
11. 進級・卒業要件、履修上限、認定科目	21
12. 教職課程	28
13. オフィスアワー制度について	32
14. 授業評価アンケート(VOICE)について	33
15. 単位互換科目について	33
16. アセスメント	35
17. TOEIC 試験補助について	35
18. 多摩大学学則(抜粋)	36
19. 多摩大学学生懲戒規程	43
20. 多摩大学履修規程(抜粋)	45
21. 多摩大学早期卒業規程(抜粋)	46
22. 多摩大学経営情報学部早期卒業細則(抜粋)	47
23. 多摩大学成績評価規程	48
24. 前提科目一覧	49
25. カリキュラム表(科目一覧)・カリキュラムマップ・カリキュラムマトリックス	51
26. 実務経験のある教員一覧	62
27. シラバス	65

1. 基本理念

多摩大学の設立母体である学校法人田村学園建学の精神である「質実清楚・明朗進取・感謝奉仕」を礎とした本学の基本理念は「国際性・学際性・実索性」の3つのキーワードで表現されます。

<国際性>

グローバル社会の一員として、積極的な役割を果たす人材を育成する。

<学際性>

行き過ぎた専門化の弊害を是正するため、学際的な研究・教育への取組みを重視する。

<実索性>

大学に対する「象牙の塔」批判を克服すべく、「社会に通用する大学」を標榜する。

2. 経営情報学部ディプロマポリシー

1 育成する人材

本学は「現代の志塾」を教育理念とし、グローバル化、情報化社会の進展に即応して、世界の中で大きな役割を担うことで日本の将来を背負うという自覚に基づいた強い実行力と、それぞれの地域社会の可能性に対しての広い視野を持ち、自らを厳しく律することができる高い倫理観を備えた「志」の高い「多摩グローバル人材(多摩のローカリティを究めることにより、グローバルに目を開く“グローバルリティ”という思想を持つ、多摩地域の活性化をリードするグローバル人材)」を育成する。

経営情報学部では、「多摩グローバル人材」の具体像として、企業経営、情報科学に関する学術と応用を教育研究し、高度の経営情報知識と、これを支える豊かな教養とを合わせ備えた創造的、実践的な問題解決能力を有する人材を育成する。

2 学位授与方針

経営情報学部の教育課程においては、以下の学修成果目標を達成し「志」を実現できる力すなわち「学士力」を備え、学則に定める単位数などの卒業要件を満たした者に卒業を認定し、学位を授与する。

(学修成果目標)

(1) 知識と理解【グローバル社会に対する理解】

基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

(2) 思考と判断【考え抜く力】

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

(3) 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】

物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしていける巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動していける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになる。

(4) 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】

自分の意思をわかりやすく伝えることができる発信力や、聞き上手になって積極的に相手の意見を受け止められるようになる傾聴力、組織の中で自分がどのような役割を果たすべきなのかが理解できる状況把握力や協調性を身につけることで、コミュニケーション能力を高め、所属する組織や社会の活動に貢献できるようになる。

(5) 高い志【環境対応能力と先進性】

社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができる多様性や、社会のルールや約束を守ることができる規律性を身につけ、社会の発展に積極的に関与していくという高い志を確立する。

3. 経営情報学部カリキュラムポリシー

経営情報学部では、「志」の高い「多摩グローバル人材」を育成するため、ディプロマポリシーで掲げた5つの学修成果目標を以下の2つの柱で構成されたカリキュラムに反映させて、学生自身が各自の「志」を実現できる「学士力」を身につけ、人間的成長を促すための教育を体系化された教育課程で実現する。

講義の成績は、一般講義科目に関してはシラバスに記載された到達目標への達成度により絶対評価で評価する。ゼミなどの演習科目に関しては、ディプロマポリシーで掲げた5つの学修成果目標を評価の視点として、ゼミ活動によりどれだけ成長できたのかを総合的に判断し評価する。

(1) ゼミ中心教育カリキュラム

双方向型少人数教育をゼミの形で行い、産業社会や地域社会の中で直面する問題を採り上げ、それらを分析し解決策を提案・実施する活動を通じて、問題解決の実践力を養う実学教育プログラムを展開する。

まず入学直後の1年次には、「プレゼミ」を履修する。「プレゼミ」は、今後のキャリア形成を見据えて自らの「志」を確立することと、ゼミ活動を通じて主体的学びの態度を習得することで、自らが学修計画を立てる大学での学びへのソフトランディングを図ることを目的としている。

2年次から4年次までの3年間は、担当教員の指導の下、特定の専門分野を深掘りするための演習を行う「ホームゼミ」を履修し、問題解決能力に磨きをかけると共に、社会に対する関心を広げ、グループワークを通じてコミュニケーション能力を高める。

「プレゼミ」と「ホームゼミ」により、卒業まで連続した4年間ゼミを実施する。

(2) 実践的知識獲得のための講義カリキュラム

問題の分析・解決策提案・実践に必要な考え方や知識を幅広く学ぶため、学際性、国際性、実働性を考慮した科目群を配置する。講義内容は、知識断片の記憶を排し、どのような手法や知識がどのような問題解決に役立つかを中心に教える実学教育プログラムを展開する。

経営情報学部のカリキュラムは、豊かな人格形成の基礎となる教養と産業社会に関する基礎的な理解を得ることを目的とする「産業社会科目群」と、特定の専門領域に関する問題を探求する「問題解決学科目群」によって構成している。

1年次の段階では、基礎的な知識の習得と自らの可能性と向き合って将来の方向性を発見し「志」を固めていくことを目標に「産業社会科目群」を中心に履修し、2年次以降に所属する学科とホームゼミの選択を通じて、集中的に学んでいく専門領域を確定させる。

2年次からは、「経営情報学科」と「事業構想学科」に分かれ、それぞれの学科の「問題解決学科目群」の科目を中心に、ホームゼミ担当教員の指導の下、体系的に専門教育を実施する。

また、「多摩グローバル人材」となるためには、実体験に基づく実社会に対する深い理解が重要なことから、一般講義科目のほか、インターンシップなどのキャリア教育科目、および課外活動や留学などの特別教育プログラムを幅広く実施する。特別教育プログラムでの学修成果については、国内のものは「アクティブ・ラーニング実践」で、海外のものは「Study Abroad」で単位の認定を行う。

4. 学生生活

(1) 学生証

学生証は本学学生の身分を証明する重要なものです。請求のあったときにはいつでも提示できるよう、常に携帯してください。

《提示が必要なとき》

- ・授業で出席登録を行うとき
- ・通学定期を購入するとき
- ・多摩大学所定の学期末試験を受けるとき
- ・各種証明書の発行を受けるとき
- ・学割証の発行を受けるとき
- ・その他、本学教職員から請求があったとき

《学生証に関する注意》

- ・他人に貸与又は譲渡してはいけません。
- ・紛失や盗難にあった場合は、直ちに学生課に届け出て、再発行(有料)の申請をするとともに、必ず最寄りの警察に届け出てください。(再発行の手続は学生課にて行ってください。)
- ・破損・汚損した場合や記載事項に変更のある場合は、学生課に届け出てください。
- ・卒業、退学等により学籍を離れるときは、直ちに学生課に返却してください。

(2) 事務局窓口受付時間

平日 8:50~17:00

土曜日 8:50~12:30

(日曜日、祝祭日、その他大学所定の休日は休業)

(3) T-NEXT(多摩大学学生ポータル)

T-NEXTは多摩大学の学生と教職員だけが閲覧できる学内システムです。ウェブシラバス、履修登録／確認、学科選択、掲示板、講義サポート(講義資料掲示等)といった大学での重要な申請や通知を行います。T-NEXTへのログインの方法や個人のパスワード等については、入学時の説明会にて説明を実施しています。不明な場合はメディア・サービス(ALC)にお問い合わせください。

(4) 大学からの伝達、連絡事項の確認方法について

学生の皆さんに対する伝達、連絡等は、原則としてT-NEXTのみでお知らせします。掲示した事項については、周知されたものとして取扱います。大変重要な掲示をT-NEXTで行いますので**必ず毎日確認**してください。

(5) 伝言・照会

電話による伝言依頼、住所、電話番号の照会等は受け付けておりません。教員と連絡が取りたい場合は、T-NEXTで掲示する教員のメールアドレス宛に連絡してください。

(6) 学生手帳

1年次生に学生手帳を配布します。スケジューリング能力やメモ力の向上を目的としており、授業でも使用します。常に携帯してください。

5. 授 業

(1) セメスター制

1年を春学期と秋学期の2学期に分けて授業を行います。そして、本学では1学期毎に授業が完結するセメスター制を導入し、半期に集中して授業を行うことにより学修効果を高めています。

学期毎に15回の授業を実施します。週2回授業を行う科目もあります。授業は学年暦に従って行われ、祝日に授業を行うこともあります。

春学期 4月1日(月)から9月18日(水)まで

秋学期 9月19日(木)から翌年3月31日(火)まで

(2) 単位制

科目の履修には単位制が採用されています。単位制とは、科目毎に一定の基準により単位数が決められ、その科目を履修し、試験等に合格して単位を修得する制度です。その修得した単位数が卒業の要件として定められた基準を満たした場合に、卒業が認められます。

(3) 授業時間

授業時間は1時限90分で行います。

時 限	授 業 時 間
1時限	9時00分 ～ 10時30分
2時限	10時40分 ～ 12時10分
昼休み	12時10分 ～ 13時00分
3時限	13時00分 ～ 14時30分
4時限	14時40分 ～ 16時10分
5時限	16時20分 ～ 17時50分
6時限	18時00分 ～ 19時30分

(4) 休講

① 教員の届出による休講

担当教員が病気や学会出張等止むを得ない理由により出講できない場合には、補講・代講等の講義又は課題等への振替を行います。

② 交通機関の運休による休講

交通機関の事故・ストライキ、台風・地震等自然災害による交通機関の運休が発生した場合、休講の措置を取ります。この場合は、T-NEXT又は本学ホームページにてその旨を掲示します。

③ 台風および大雪にともなう休講

台風や大雪等により警報が発せられた場合、休講措置をとります。この場合は、T-NEXT又は本学ホームページにてその旨を掲示します。

(5) 補講

補講は休講等に対する措置として、平常授業を補うために行うものです。補講日は原則土曜日に設定されていますので、土曜日に授業を行うことがあります。補講が行われる科目や日時についてはT-NEXTの掲示にて連絡します。

(6) 欠席届の手続き

履修科目の単位修得には授業への出席が重視されます。科目によっては欠席が多いと単位の修得ができなくなります。止むを得ない理由で欠席をする(した)場合は、担当教員に欠席届(書式は自由)を提出してください。但し、欠席届を考慮するかしないかは、担当教員の判断に任されています。

(7) 授業中のマナー

本学は、学生の皆さんが安心して勉学に励むことができるよう、快適で安全な環境づくりを心がけています。学生の皆さんが快適で楽しいキャンパスライフを送ることができるよう、下記のとおり授業中のマナー向上にご協力をお願い致します。

- ・私語
 - * 授業中は控えてください。
- ・教室の入退室
 - * 遅刻はしないでください。
 - * 授業担当教員の断りなく途中退出はしないでください。
- ・出席
 - * 代返等、出席に関する不正行為はやめましょう。
 - 代返：学校で出欠をとる際、出席しない者に代わって出席をよそおって返事をする事。
出典 三省堂大辞林
- ・携帯電話・スマートフォン端末等の使用
 - * 授業担当教員の指示・許可を得て授業のために使用する場合を除き、これらの機器の使用を禁止します。
 - * 授業中は必ず電源を切るかマナーモードに設定してください。
 - * 授業に関係のないイヤホンの使用は禁止します。
- ・飲食
 - * 原則できませんが、授業担当教員の指示に従ってください。
- ・ゴミの放置
 - * 授業中や休み時間に出たゴミは、教室に放置せずゴミ箱へ入れ、教室美化に努めましょう。

(8) アクティブ・ラーニング(以下「AL」)

学生を中心とした効果的な学修を目指し、主体的な深い学びを得るため、下記のAL手法を取り入れた授業を行います。

AL手法の概要

【授業形態】

- 講義：知識伝達・習得を目標とする授業
- 演習：既習知識の応用を目標とする授業

【活動人数：個人(一人での回答・作業)】

■プレゼンテーション

聴衆に対して、計画を提案したり、グループ活動の成果を報告するといった目的で行われる発表形態の一つ。パワーポイントなどのソフトを使用し、スライドを提示しながら発表者(プレゼンター)がプレゼンを行う形態が一般的である。図表や音声、映像などを使用するなどの工夫を行うことで、情報を簡潔かつわかりやすく伝えることが求められる。

■ワークシート

授業で使用するワークシートに、授業中に気づいたことや疑問点などを書いたり、先生から問われたことについて記入をする。双方向性を高めながら振り返ることが可能となる。また、ワークシートに記入した内容に基づいてペアワークを行ったり、グループでの意見交換を行ったりすることもある。

■T/Fテスト(正誤テスト)

授業内容について、「True」「False」のいずれかで回答可能な質問が提示されるので、答えを個人で考え、選択肢を選んだりプリントに記入して回答する。回答はペアやグループ、クラスで発表することで情報を共有し、場合によって、教員が解説を行う。

■問題作成

その回の授業内容に基づいて問題を学生自身が作成する手法。
提示された問題の形式に合わせて問題を考え、用紙などに記入する。作成した問題は周囲の人と交換し互いに回答しあうことも可能。

【活動人数：ペア(二人一組で意見交換をしたり回答を考える)】

■ペアワーク

ペアになった学生同士で、先生から提示された問題や質問について互いの意見を話し合う。目的や用途に応じて、時間制限を設けたり、役割を明確にし、考えやアイデアを引き出したり、二人の話す機会を均等にするための工夫がなされる。

■相互教授法

ペアになった学生で、先生役と学生役を決め、先生役と学生役で話し合いながら、分からない言葉や概念について意味を明確化する。学生役は、話し合った内容についての質問を作成して先生役に問いかけ、先生役はそれに回答する、というやり取りを行う。

■ピア・レビュー

既習知識の応用を目標とする授業で行われる。各自でレポート課題に取り組み、ペアを作ってお互いのレポートを交換する。教員から提示されたレポートへのコメントの観点に沿って、相手のレポートを読み、メモやコメントを記入する。そのメモやコメントに基づいて口頭でも説明しあう。そして意見交換を踏まえ、自分のレポートを改善する。

■ノートテイキング=ペア

ペアとなった二人の学生が協力して各自のノートの改善を行う。他の学生と作業することで違う視点からのノートの再検討が可能となる。まずは各自で授業内容の重要なポイントをまとめたノートを作成し、ペアになった相手にノートに沿って、重要なポイントについて説明を行う。相手の説明を聞く中で、自分のノートへの補足や、相手の説明で理解できない、納得できない箇所がないか考え、もしあればその内容について話し合う。

■ロールプレイ

自分を別の人物や役割に置くことで、既習知識やスキルを応用したり、問題解決などを体験することができる手法。理論を現実を使うことを検討できることに加え、多くの役割を設けて、多様な視点から物事を捉えることにつなげることができる。

状況設定やシナリオに合わせてペアやグループを構成し、役割分担をした後、自分の役に基づいて発言したり、議論を行ったりする。シナリオの中で求められる結論に達したり、役の特徴に沿って展開できるようになるなどの目標が達成された時点でロール・プレイは終了し、ペア・グループ内での気づきや疑問について話しあい、またクラス全体で議論内容を共有する。

【活動人数：グループ(複数人からなるグループ内で話し合ったり、問題に取り組む)】

■PBL(Problem-based Learning/Project-based Learning)

少人数グループである「問題」を選び、問題に対して、「情報の共有」「状況の評価」「問題解決のための計画」を紙やボードにまとめながらグループで問題の状況・解決方法について話し合う。

問題の状況から把握できる事実を洗い出し、「導かれる問題解決のアイデア」、「アイデア実現の為に何を行う必要があるのか」をグループで話し合う。また、必要に応じて、話し合った内容に基づいて調査や活動を行う。行った調査や活動について評価や振り返りを行い、活動の計画を見直す。

■Ball-toss(ボール-トス)

複数人のグループで円型に並び、学生から学生へランダムにボールを投げ渡すと同時に、質問を投げかける。質問された方は受け取りながら回答し、次の学生へ質問とともにボールを投げ渡す手法。

■ジグソー法

あるトピックやテーマについて複数の視点で書かれた資料をグループに分かれて読み、自分なりに納得できた範囲で説明を作って他の人とその情報を交換し、交換した知識を統合してテーマ全体の理解を構築する手法。

「他者に説明することで自分の考えをはっきりさせる」、「他者の考えをできるだけ正確に理解して自分の知識を増やす」、「自分の考え方と人の考え方を比較して、それらを統合する」などが期待される。

■ Buzz Group(バズ=グループ)

4~6人のグループを作り、クラス全体に提示された質問について制限時間内に話し合い、グループごとで考えを出し合い、その後クラス全体で情報を共有する。クラス全体の話し合いの前に小さなグループ内で意見交換を行うことで、自分の考えを表現する機会が与えられ、様々な意見やアイデアを引き出すことができる。

■ KJ法

各自で収集したデータやアイデアを一つにつき一枚のカードに記述し、カードを似通ったものごとに複数のグループにまとめ、そのグループに見出しをつけて図解化・体系化を行う。収集したデータや、ブレインストーミングによってさまざまなアイデアを出した後に、それらのデータやアイデアを統合したり、整理することで新たな発想を生み出したり、問題解決の糸口を探ることができる。

■ マインド・マップ

紙に頭の中の思考・発想を図式化するもの。用紙の中心に、表現したい概念の中心となるキーワードやイメージを置き、そこから放射状に関連するキーワードやイメージをつなげていく。個人の思考を整理したり、グループでの話し合いで豊かな発想を引き出すことを目指すものである。

6.初年次教育科目の指定について

(1) 初年次教育科目について

大学での学修は、自ら資料・情報を収集し、自ら考えをまとめていく側面が強くなります。また、皆さんは「経営情報学」等の専門分野を学ぶこととなります。よって、1年生のときに、大学での学修の基礎的能力を皆さんに養ってもらいたいと思います。

このような観点から、多摩大学経営情報学部では「初年次教育科目」を指定しています。

カリキュラム上、必修科目ではない科目もありますが、「初年次教育科目」のうち★のついた科目は、1年生のうちに原則必ず履修することになります。

※初年次教育(First Year Experience)とは

主に大学新生を対象にした、高校からの“円滑な移行”をはかり、学習及び人格的な成長の実現にむけて、大学での学習と生活を“成功”させるべく、総合的につくられた教育プログラム(2006,中央教育審議会大学分科会大学教育部会)

(2) 初年次教育の内容と科目の指定について(全員履修科目19科目)

内容 (中央教育審議会大学分科会大学教育部会)	科目 ★：全員履修科目
①大学生活への適応(大学生活、学修、対人関係等)	★プレゼミⅠ ★プレゼミⅡ
②大学に必要な学修技術の獲得(読み、書き、批判的思考力、調査、タイムマネジメント)	★スタディースキル入門 ★ビジネススキル入門 ★ITコミュニケーション入門 ★ビジネス数学基礎
③当該大学への適応	★多摩学Ⅰ ★多摩学Ⅱ
④自己分析	★多摩学Ⅰ(上記③を兼ねる。) ★多摩学Ⅱ(上記③を兼ねる。)
⑤ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入	ライフ・デザイン ★キャリア・デザイン入門
⑥学修目標・学修動機の獲得	★多摩学Ⅰ(上記③④を兼ねる。) ★多摩学Ⅱ(上記③④を兼ねる。)
⑦専門領域への導入	★地域ビジネス入門 ★グローバルビジネス入門 ★ITビジネス入門 ★グローバルヒストリーⅠ ★グローバルヒストリーⅡ ★IT活用法Ⅰ マーケティング入門 マクロ経済学 ミクロ経済学

7.履修登録・確認・削除

(1)履修登録とは

履修登録とは、授業を受けて単位を修得するために、毎学期の始めに、各自の履修計画に基づき、シラバス、カリキュラム表やその学期の時間割表等から履修科目を決定して、履修科目の登録をする手続きのことです。履修登録を怠ったり、登録漏れや間違いがあったりした場合は、たとえ授業に出席し試験を受けたとしても単位は修得できません。従って、この手続きは、最も重要な手続きであることを認識してください。また履修系統図をホームページに記載しており、卒業までに身につけることができる知識・能力が、どのように授業に対応しているのかを図に示してあります。履修科目を選択する際の参考にしてください。

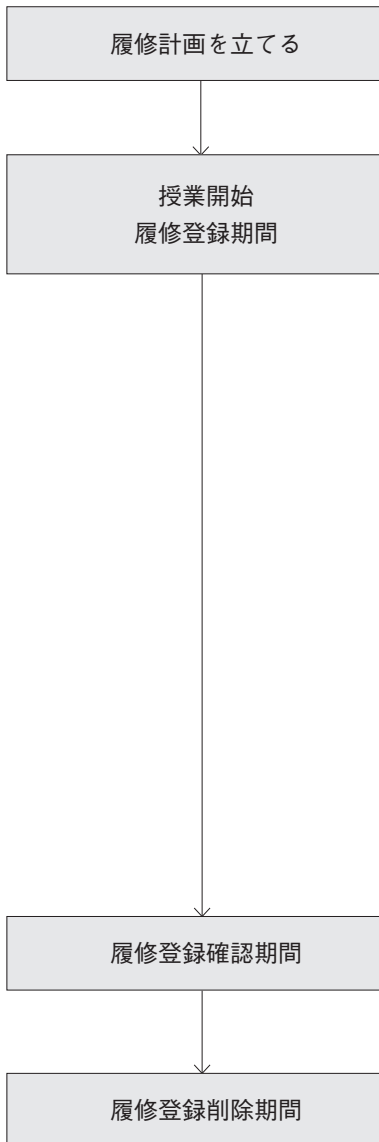
(2)登録・確認方法

T-NEXT上から科目を登録・確認する方法により行います。なお、システムの利用にあたっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。

(3)履修登録・確認上の注意

- ・履修登録及び確認は、パソコン及びスマートフォン等から行ってください。なおパソコン教室のパソコンも使用可能です。
- ・履修登録・確認期間中(特に最終日)は学内のパソコン及び学内ネットワークの利用が混雑したり、パソコンの動作が遅くなったりすることが予想されます。登録にあたってはあらかじめ科目を決定した上で、十分に時間的な余裕を持って行ってください。
- ・履修登録・確認に当たっての詳細な注意事項は別途指示します。

(4)履修登録・確認・削除の流れ



前学期の成績結果、カリキュラム表、シラバス、時間割等から、履修する科目を決定してください。

授業開始

春学期：4月6日（土）

秋学期：9月19日（木）

履修登録期間

春学期：4月6日（土）から4月19日（金）

秋学期：9月19日（木）から10月2日（水）

- ・クラス分けされている科目があるので注意してください。
- ・履修について、卒業要件や進級要件で不明なことや確認したいことがある場合、提供されている資料を確認した後、教務課窓口まで相談に来てください。
- ・登録は、T-NEXT上から行います。システム利用にあたっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。不明な場合は、メディア・サービス(ALC)で再発行手続きをしてください。
- ・ネットワークの混雑を考え、登録は余裕を持って行ってください。

履修登録確認期間

春学期：4月20日（土）から4月25日（木）

秋学期：10月3日（木）から10月9日（水）

履修登録削除期間

春学期：5月10日（金）から5月23日（木）

秋学期：10月17日（木）から10月30日（水）

(5) 履修登録に関するルールについて

- ・履修登録確認期間中での科目追加、削除は、それぞれ8科目を上限とします。
- ・履修登録確認期間後の科目追加、削除は、それぞれ4科目を上限とします。ただし、履修登録確認期間最終日を含め、14日以内とします。その最終日が休業日の場合であっても手続き可能な日程は延長しません。
- ・履修登録確認期間中と履修登録確認期間後14日以内に履修登録科目の追加や削除を希望する学生は、教務課で所定の申請用紙にて変更及び登録申請を行います。本申請は当該学期中1度のみとします。
- ・履修登録削除期間中に、単位修得が困難だと判断した科目等の削除申請を教務課で所定の申請用紙にて受け付けます。

○履修登録確認期間から履修登録削除期間における追加、削除可能科目数

	履修登録確認期間中	履修登録確認期間後 14日以内	履修登録削除期間中
追加	8科目まで	4科目まで	不可
削除	8科目まで	4科目まで	上限なし ※但し、登録した全科目を 削除することは不可

(6) 履修者の選抜について

1 履修者の選抜について

初回の講義に出席した者の中から、教室の規模に見合った受講者数等になるように選抜を行い、履修登録を認める履修許可者を決定します。

履修許可者において、履修を希望しない者は、履修登録期間中はT-NEXTにて、履修登録確認期間以降は、教務課で申請用紙にて削除の申請をしてください。

2 履修許可者の選抜方法

履修許可者は、各科目の初回の講義に出席した者の中から選抜します。初回の講義に出席しなかった者には履修許可を与えません。

ただし、初回講義の出席に関して正当な理由(病気や事故、交通機関の障害など)があつて参加できなかった者で、履修登録期間中に担当教員にその旨を申し出、その理由が証明できる場合に限り、追加で履修許可の選抜を受けることができることとします。

8. 学期末試験

(1) 学期末試験の種類

① 定期試験

各学期末の試験期間中に実施する試験であり、春学期定期試験と秋学期定期試験の年2回実施します。

○ 試験期間

春学期定期試験：7月30日（火）、7月31日（水）

秋学期定期試験：1月22日（水）、1月23日（木）

○ 試験時間

試験時間は1時限60分間です。

時 限	試験時間	遅刻限度時間	途中退席可能時間
1 限	9:20～10:20	9:40	10:00
2 限	10:50～11:50	11:10	11:30
昼休み	11:50～12:30		
3 限	12:30～13:30	12:50	13:10
4 限	14:00～15:00	14:20	14:40
5 限	15:30～16:30	15:50	16:10
6 限	17:00～18:00	17:20	17:40

※平常講義の時間割と時間帯・教室・曜日が異なりますので発表された時間割に注意してください。

※試験開始後、20分以上遅刻した場合、受験を認めません。

※試験開始から40分経過以降、途中退席を認めず。

○受験には学生証を必要としますが、試験当日持参しなかった場合、教務課にて仮学生証の交付を行います。その際には、手数料として、100円を徴収します。

・仮学生証の有効期限は当該試験期間内に限ります。

・一旦納入された手数料は、如何なる理由があっても返金しません。

② 授業内試験

○各担当教員の判断により、講義時間中等に必要に応じて随時実施する試験をいいます。

○仮学生証の発行は行いません。試験当日に学生証を持参しなかった場合には、各担当教員によって取扱いが異なります。

③ 定期試験の追試験

定期試験中に病気又は止むを得ない理由により、試験を受験できなかった者には、審査の上で追試験を許可することがあります。

○ 手続き期間

教務課窓口への事前届出を原則としますが、事後となった場合は、当該科目の試験当日を含む3日以内とします。なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日までとします。（期間の過ぎた申請は、一切受け付けません。）

○**手続きの際に必要な書類**

1. 追試験受験願 (教務課に備付)
2. 理由を証明する添付書類
 - 病気・ケガ・・・医師の診断書
 - 交通機関の遅延等・・・遅延証明書等
 - 忌引・・・・・・・・・・会葬礼状等
 - その他・・・・・・・・理由を詳細に記載した書類等

○**追試験受験料 (1科目につき1,000円。但し、1親等以内の忌引の場合は免除します。)**○**試験日**

- 春学期試験の追試験・・・8月7日(水)
- 秋学期試験の追試験・・・1月30日(木)

④**再試験**

卒業年次の学生は、その年度の春学期又は秋学期に履修登録して不合格になっている場合に限り、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験を受験できる可能性があります。
再試験を実施する科目は制限がありますので十分注意してください。

○**多摩大学経営情報学部再試験実施要領**

この要領は、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験の実施に関する事項を定める。

- ① 再試験を実施する科目は、卒業年次に履修登録を実施している演習科目以外の科目を原則とする。
- ② 再試験は次の要件をすべて満たした者に受験を許可する。
 - ・再試験対象の科目が不合格となり卒業に必要な単位が不足してしまった場合
 - ・再試験対象の科目において、指定された課題を提出、又定められた試験を受験している場合
 - ・不足単位が3科目以内の場合
 - ・再試験を受験し合格(単位修得)することにより不足単位が満たされ「卒業」が可能となる場合
 - ・授業科目担当者が再試験受験を許可した場合
- ③ 再試験を受験できる科目数は、不足単位の科目数とする。
- ④ 再試験の受験が許可された者は、指定の期間内(発表日を含め3日以内、なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日まで)に再試験料を納入し、受験手を完了しなければならない。
- ⑤ 再試験の合格評価は、履修規程第9条に定める合格最低評価をもって行う。

※詳細に関しては、別途T-NEXTの掲示等にて告知します。

○**手続きの際に必要な書類**

- 再試験受験申請書 (教務課に備付)

○**再試験受験料 (1科目につき3,000円。但し、1親等以内の忌引の場合は免除します。)**○**試験日**

- 別途連絡します。

(2) 試験実施上の注意事項

受験できる科目は、「履修登録」をして許可を受けた科目に限ります。受験に際して次のことに留意してください。

- 1 試験会場は講義が行われる講義室とは異なるので注意すること。
- 2 講義が行われる曜日・時限とは異なるので注意すること。
- 3 科目によっては講義室を2教室以上使用して試験を行うので、指示された講義室を間違えないように注意すること。
- 4 受験の際は、学生証を必ず持参し、試験中は机上の右上に置くこと。
- 5 学生証を持参しない場合は受験することはできない。但し仮学生証の交付を受けた場合は受験を認める。
- 6 答案には学部、学科、学籍番号、氏名を明瞭に記入すること。記入してない答案は無効となる。
- 7 受験中、机上におくことのできる物品は、学生証のほかには次のとおり。
 - (1) 筆記用具(ボールペン、万年筆、鉛筆、鉛筆削り、消しゴム)
 - (2) 時計(ただし計算機、辞書機能付きは除く)
 - (3) 目薬・ティッシュペーパー
 - (4) 当該科目の持込許可条件で許可されたもの
- 8 試験会場には、携帯電話を持ち込まないこと。もし持参している場合は電源を必ず切りカバンの中に入れてしまうこと。
- 9 荷物は床もしくは隣のイスの上に置くこと(机の中には入れないこと)。本やノート等は必ずカバンの中に入れてしまうこと。
- 10 遅刻は試験開始後20分までであれば、認める。この際、遅刻した学生の席は各教室毎に指定されているので監督者の指示に従うこと。
- 11 その他、監督者の指示に従うこと。
- 12 試験時間中に不正行為をした者は、事実を確認の上多摩大学学則、多摩大学履修規程第8条及び多摩大学学生懲戒規程により処罰される。

不正行為とは

- ① 替え玉受験すること(依頼すること、引き受けること)。
- ② 答案や他人が所持する持込可能指定物を交換すること(双方)。
- ③ カンニングペーパー(器具)を使用すること
(机上・机の中・衣服の中であって、たとえ使用していなくても不正行為とする)。
- ④ 机、その他(壁、床、手など)に記入し、これを利用しようとする事。
- ⑤ 他人の答案や他人が所持する持込可能指定物を見て写すこと及び故意に他人に見せること。
- ⑥ 試験中に携帯で話すこと。試験時間中に電話が鳴動した場合、理由にかかわらず、不正行為とみなす。
- ⑦ 「解答はじめ。」の指示の前に問題冊子を開き解答を始めること。
- ⑧ 「解答やめ。鉛筆を置いてください。」の指示に従わず、鉛筆を持ち解答を続けること。
- ⑨ その他上記①～⑧に類似する行為。
- ⑩ 監督者の指示に理由なく従わないこと。

9. 成績

(1) 成績評価

成績評価は、学期末試験(定期試験・授業内試験)、レポート及び出席状況等を総合的に考慮して絶対評価で判定します。

	一般講義科目		演習科目	
	成績通知書	成績証明書	成績通知書	成績証明書
合格	A +	A +	P	P
	A	A		
	B	B		
	C	C		
不合格	F	表示しない	F	表示しない
認定※	N	N	N	N

※認定科目の単位認定、又編入学における単位認定等の場合のみ付与します。

認定科目 ※2019年度入学生適用分		
インターンシップ I・II	AP 数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	単位互換科目	

(2) 成績発表

成績は、「成績通知書」を保証人宛に発送します。学生にはT-NEXTで発表します。

春学期「成績通知書」発送予定・・・9月中旬頃

秋学期「成績通知書」発送予定・・・3月中旬頃

(3) 成績評価に関する問合せ

当該学期の成績評価について確認をしたい場合は、次学期授業開始日より14日間以内の窓口受付時間に、教務課に申し出てください。

(4) 評定平均(GPA)

成績評価方法の一種として授業科目毎の成績評価を5段階 (A+又はP、A、B、C、F) で評価し、それぞれに対して4.0、3.0、2.0、1.0、0のグレードポイントを付与し、この単位当たり平均(GPA、グレード・ポイント・アベレージ)を出します。認定(N)はGPA計算に算入しません。

GPAは成績優秀者奨学金や、早期卒業、退学勧告、学科選択の学生選考、ホームゼミ選抜、教職課程の履修許可など幅広く活用されます。

GPA除外科目 ※2019年度入学生適用分		
インターンシップ I・II	AP数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	教職に関する科目	単位互換科目

(5) 褒賞制度

本学では学業や社会活動において優れた業績を挙げた学生を褒賞する制度を設けています。

褒賞名	褒賞内容
最優秀学生賞 (Best Academic Achievement Award)	大学在学中4年間を通じて総合的に最も優秀な成績を収めた卒業予定者5名及び本学学生として模範的行為のあった者若干名
成績優秀学生賞 (Academic Achievement Award of the semester)	成績優秀者奨学金受給学生に該当する者
優秀学生賞 (Academic Achievement Award)	各講義科目において顕著に優れた成績を収めた学生(各科目1名) 教育補助(SA)として著しい功績があった者 成績向上が顕著な者(GPAの向上等を基準) 学業に対する取組みが真摯で他の模範となる者
社会・研究活動賞 (Outstanding Achievement Award in Research and Social Activities)	コンテスト等において優秀な成果を収めた者又は団体 課外活動で全国大会に出場する等顕著な成績をおさめた者又は団体 在籍期間を通じて学生会等の活動にて特に貢献のあった者 優れた研究成果又は論文を発表した者又は団体
学長賞及び学部長賞 (President's Award、Dean's Award)	本学学生として模範的行為のあった者又は団体

(6) 成績優秀者奨学金制度

学費減免を目的として各学期の評定平均(GPA)上位者20名に対して奨学金を付与します。

- ・ 区分1…各学期分の授業料
- ・ 区分2…5万円

(1) 評定平均算出方法

$$\frac{4.0 \times ([A+] \text{と} [P] \text{の修得単位数}) + 3.0 \times ([A] \text{の修得単位数}) + 2.0 \times ([B] \text{の修得単位数}) + 1.0 \times ([C] \text{の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数}([F] \text{の単位数を含む})}$$

(2) 選定要領

- ・ 入試合格時に選定され奨学金を支給されている者(1年次生)及び、支給日当日に在籍していない者は対象外とする。

- ・ 区分1の奨学生候補者数の選定
 - ア、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修していて評定平均が3.2以上の者とする。
 - イ、複数名が対象となった場合は、評定平均最上位の者とする。
 - ウ、評定平均最上位の者が複数名の場合は、修得単位の多い者、修得単位数が同一の場合は、その者全員を区分1とし、奨学金は、区分1の定員(1名)を超える人数分については区分2の支給額を加え、均等に分配することとする。なお、均等に分配できない場合は、小数点を切り捨てる。
- ・ 区分2の奨学生候補者数は、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修している者とし、区分1と併せて各学期20名以内とする。

(7)成績不良者

下記のとおり「望ましい学年・学期別の単位修得目安(累積)※2019年度入学生適用分」を定めています。よって、本目安に到達できなかった場合は、成績不良者として保証人にご報告します。

年次	学期	各学期修得単位数	望ましい学年・学期別の単位修得目安(累積)	成績不良者の基準
1年次生	春学期	各学期16単位から 20単位修得して ください。	16単位～20単位	16単位未満
	秋学期		32単位～40単位	32単位未満
2年次生	春学期		48単位～60単位	48単位未満
	秋学期		64単位～80単位	64単位未満
3年次生	春学期		80単位～100単位	—
	秋学期		96単位～120単位以上	—
4年次生	春学期		112単位～124単位以上	—
	秋学期		124単位以上	—

(8)成績不振者

「各学期の修得単位数が4単位未満の学生」を成績不振者として定義しています。

成績不振者は教員と今後の就学に関して面談を実施する場合があります。

(例)

- ・ 1つの学期で3単位修得→成績不振者として面談実施の可能性がります。
- ・ 1つの学期で4単位修得→成績不振者として面談は実施しません。

(9)退学勧告について

多摩大学成績評価規程により、在籍期間やGPA、修得単位数、修学的意思に応じて退学勧告を行っています。

10. 学科選択

(1) 学科選択とは

経営情報学部において入学後の1年間は、学生は学科には所属せず経営情報学部の学生として広く経営情報の素養を身につけることが期待されます。学生の皆さんは、2年進級時に経営情報学科もしくは事業構想学科に所属する事になり、これを学科選択と言います。学科選択においては学生の志望が優先されますが、志望者数が定員を超えた場合は、GPAによる選抜が行われます。

(2) 選抜方法

基本的に1年次の成績（1年間の※評定平均（GPA））をもとに選抜を行います。不本意な結果を招かないために、1年次に努力を払うようにしてください。

※評定平均(GPA)算出方法

$$\frac{4.0 \times ([A+] \text{と} [P] \text{の修得単位数}) + 3.0 \times ([A] \text{の修得単位数}) + 2.0 \times ([B] \text{の修得単位数}) + 1.0 \times ([C] \text{の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数}([F] \text{の単位数を含む})}$$

(3) 申請手続きの流れ

仮選択

プレゼミ I で詳細を連絡します。

学科説明会

プレゼミ II で詳細を連絡します。

申請期間

プレゼミ II で詳細を連絡します。

所属学科発表

2020年3月にT-NEXTにて通知します。

11.進級・卒業要件、履修上限、認定科目

(1)平成31(2019)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択 必修 ^{※1}	選択必修 ^{※1}		選択	合計
産業社会	教養	6	2	10	(語学) 4	60	124
	ビジネス			6			
問題解決学	学科専門	4		16 ^{※2}			
	演習 ^{※3}	16					
合計		26	2	36		60	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期20単位まで履修登録することができます。ただし、前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	A P 数学	Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目	立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目	ホームゼミⅠ～Ⅷ

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ・ホームゼミⅠ～Ⅷ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	A P 数学	Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	単位互換科目	

(2)平成30(2018)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{※1}	選択必修 ^{※1}		選択	合計
産業社会	教養	6	2	10	(語学) 4	72	124
	ビジネス						
問題解決学	学科専門	4		16 ^{※2}			
	演習 ^{※3}	6		4			
合計		16	2	34		72	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	単位互換科目

(3)平成29(2017)年度・平成28(2016)年度入学生**1.『進級要件』**

＜3年次から4年次への進級＞

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{*1}	選択必修 ^{*1}		選択	合計
産業社会	教養	4	2	10	(語学) 4	74	124
	ビジネス						
問題解決学	学科専門	4		16 ^{*2}			
	演習 ^{*3}	6		4			
合計		14	2	34		74	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	単位互換科目

(4)平成27(2015)年度入学生

1.『進級要件』

＜3年次から4年次への進級＞

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{*1}	選択必修 ^{*1}		選択	合計
産業社会	教養	4	2	10	(語学) 4	74	124
	ビジネス						
問題解決学	学科専門	4		16 ^{*2}			
	演習 ^{*3}	6		4			
合計		14	2	34		74	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	単位互換科目

(5)平成26(2014)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群	必修	特別選択 必修科目	選択必修 ^{※1}		選択科目	合計
基本科目	14	2	A区分	10	68	124
			B区分			
			C区分			
			E区分			
			D区分	4		
基礎科目						
専門科目				16		
演習科目 ^{※2}	6			4		
合計	20	2		34	68	124

※1 基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	単位互換科目

(6)平成25(2013)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群	必修	特別選択 必修	選択必修 ^{*1}		選択科目	合計
基本科目	14	2	A区分	10	68	124
			B区分			
			C区分			
			E区分			
			D区分	4 ^{*2}		
基礎科目						
専門科目				16		
演習科目 ^{*3}	6			4		
合計	20	2		34	68	124

※1 基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 基本科目群D区分の4単位は、同一言語で満たすものとします。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	単位互換科目

(7)平成24(2012)年度入学生**1.『進級要件』**

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群	必修	特別選択 必修科目	選択必修 ^{※1}		選択科目	合計
基本科目	12	2	A区分	10	70	124
			B区分			
			C区分			
			D区分	4 ^{※2}		
基礎科目						
専門科目				16		
演習科目 ^{※3}	6			4		
合計	18	2		34	70	124

※1 基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 基本科目群D区分の4単位は、同一言語で満たすものとします。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	単位互換科目

12. 教職課程

教員の免許状を取得したい学生は、教職課程を履修して必要な単位を修得してください。

(1) 多摩大学経営情報学部にて取得可能な免許状

学部	学科	種類	教科
経営情報学部	※1) 経営情報学科	高等学校教諭(一種)	情報・※2) 数学

※1) 事業構想学科を学科選択した学生は、多摩大学では高等学校教諭(一種)情報の教職免許を取得することはできません。

※2) 明星大学での数学科教員免許取得について

高等学校教諭(一種)数学の教員免許は、明星大学通信教育部の科目等履修生として取得することができますが、多摩大学で高等学校教諭(一種)情報の教員免許を取得することが必須条件になります。数学科教員免許取得を希望する学生は、1年生の秋学期授業終了までに教務課へお問い合わせください。基本的には2~4年生で科目履修をすることとなります。

(2) 最低修得単位数(教育職員免許法で定められている最低単位数)

大学において修得することを必要とする科目の最低単位数				
教育職員免許法 施行規則 第66条の6に 定める科目	教科及び 教科の指導法に 関する科目	教科の基礎的理解に 関する科目	道徳、総合的な学習 の時間等の指導法 及び生徒指導、 教育相談等に 関する科目	教育実践に 関する科目
8	24	10	8	5

(3) 教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目(基礎教育科目)

(◎：必修科目、○：選択必修科目)

免許法施行規則に定める科目及び単位数		左記に対応する開設授業科目
科目	単位数	科目
日本国憲法	2	◎法学(憲法)
※1) 体育	2	○スポーツⅠ
		○スポーツⅡ
※2) 外国語コミュニケーション	2	○English Expression Ⅱ
		○韓国語Ⅱ
		○中国語Ⅱ
※3) 情報機器の操作	2	◎IT活用法Ⅱ

※1) スポーツⅠまたはスポーツⅡより1科目選択必修

※2) English Expression Ⅱ、韓国語Ⅱ、中国語Ⅱの3科目より1科目選択必修

※3) 2014年度入学生及び2015年度入学生は、「業界研究Ⅰ」を履修してください。「IT活用法Ⅱ」は基礎教育科目としてカウントされません。

2016年度以降入学生は、「IT活用法Ⅱ」を履修してください。「業界研究Ⅰ」は基礎教育科目としてカウントされません。

(4)教職に関する科目

<2019年度入学生>

(◎：必修科目)

免許法施行規則に定める科目区分	本学で開講している科目名	配当年次・開講学期	単位数
教育の基礎的理解に関する科目	◎教育原理	1-秋	2
	◎教職概論	1-秋	2
	◎教育制度論	2-春	2
	◎教育心理学	3-春	2
	◎特別支援教育概論	2-集中(春学期)	1
	◎教育課程総論	2-春	1
道徳、総合的な学習の時間の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	◎特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2-秋	2
	◎教育方法	2-秋	2
	◎生徒指導・進路指導論	2-秋	2
	◎教育相談	3-秋	2
教育実践に関する科目	◎教育実習	4-集中(春秋学期)	3
	◎教職実践演習	4-集中(秋学期)	2
合計			23

※ 教職に関する科目及び教科に関する科目のうち「情報科教育法Ⅰ・Ⅱ」は、卒業要件単位に含まれません。(教育心理学、教育相談を除く。)

<2018年度入学生>

(◎：必修科目)

免許法施行規則に定める科目区分	本学で開講している科目名	配当年次・開講学期	単位数
教職の意義等に関する科目	◎教職概論	1-秋	2
教育の基礎理論に関する科目	◎教育原理	1-秋	2
	◎教育心理学	3-春	2
	◎特別支援教育概論	2-春	1
	◎教育制度論	2-春	2
教育課程及び指導法に関する科目	◎情報科教育法Ⅰ	3-春	2
	◎情報科教育法Ⅱ	3-秋	2
	◎特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2-秋	2
	◎教育課程総論	2-春	1
	◎教育方法	2-秋	2
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	◎生徒指導・進路指導論	2-秋	2
	◎教育相談	3-秋	2
教職実践演習	◎教職実践演習	4-秋	2
教育実習	◎教育実習	4-集中(春又は秋)	3
合計			27

※ 教職に関する科目は、卒業要件単位には含まれません。(教育心理学、教育相談を除く。)

(5) 教科に関する科目

[◎印は必修科目、○印は選択必修科目]

本学で開講している科目名

免許法施行規則に定める科目区分	2015年度開講科目	単位	2016年度開講科目	単位	2017年度開講科目	単位	2018年度開講科目	単位	配当 年次	2019年度開講科目	単位	配当 年次
基礎教育科目 (66条の6に定める 科目)	◎法学(憲法)	2	◎法学(憲法)	2	◎法学(憲法)	2	◎法学(憲法)	2	1-秋	◎法学(憲法)	2	1-秋
	◎スポーツ I	2	◎スポーツ I	2	◎スポーツ I ◎スポーツ II ※1つ選択すること	2	◎スポーツ I ◎スポーツ II ※1つ選択すること	2	1-春秋	◎スポーツ I ◎スポーツ II ※上記より1つ選択すること	2	1-春秋
	◎ English Expression II ◎韓国語 II ◎中国語 II ※1つ選択すること	2	◎ English Expression II ◎韓国語 II ◎中国語 II ※1つ選択すること	2	◎ English Expression II ◎韓国語 II ◎中国語 II ※1つ選択すること	2	◎ English Expression II ◎韓国語 II ◎中国語 II ※1つ選択すること	2	1-秋	◎ English Expression II ◎韓国語 II ◎中国語 II ※上記より1つ選択すること	2	1-秋
	◎ビジネスコミュニケーション入門 I	2	◎ビジネスコミュニケーション入門 I	2	◎ビジネス最新線研究	2	◎業界研究 I ※	2	2-春	◎ビジネスコミュニケーション入門 I	2	2-春
	◎IT活用法 II	2	◎IT活用法 II	2	◎IT活用法 II	2	◎IT活用法 II ※	2	2-春	◎IT活用法 II	2	2-春
情報社会及び 情報倫理	◎情報通信と社会	2	◎情報倫理	2	◎情報倫理	2	◎情報倫理	2	2-春	◎情報倫理	2	2-春
	○データフィクション I ◎情報とセキュリティ ◎情報法	2 2 2	◎経営とセキュリティ ◎情報法	2 2	◎経営とセキュリティ ◎情報法	2 2	◎経営とセキュリティ ◎情報法	2 2	3-秋 2-秋	◎経営とセキュリティ ◎情報法	2 2	3-秋 2-春
	◎ビジネス数学基礎 ◎Webサービス開発	2 2	◎ビジネス数学基礎 ◎Webサービス開発	2 2	◎ビジネス数学基礎 ◎Webサービス開発	2 2	◎ビジネス数学基礎 ◎Webサービス開発	2 2	1-春 3-秋	◎ビジネス数学基礎 ◎Webサービス開発	2 2	1-春 3-秋
コンピュータ 及び情報処理 (実習を含む)	◎デザインワークショップ I ◎デザインワークショップ II ◎コンピュータ概論 ◎コンピュータサイエンス ◎情報探索法	2 2 2 2 2	◎ビジネス数学基礎 ◎Webサービス開発 ◎Webプログラミング ◎デザインワークショップ I	2 2 2 2	◎ビジネス数学基礎 ◎Webサービス開発 ◎Webプログラミング ◎プログラミング入門 I	2 2 2 2	◎ビジネス数学基礎 ◎Webサービス開発 ◎Webプログラミング ◎プログラミング入門 I	2 2 2 2	1-春 3-秋 2-春 2-春	◎ビジネス数学基礎 ◎Webサービス開発 ◎Webプログラミング ◎プログラミング入門 I	2 2 2 2	1-春 3-秋 2-春 2-春
	◎データフィクション II ◎システムデザイン ○システム分析概論	2 2 2	◎データベース II ◎データベース I	2 2	◎データベース II ◎データベース I	2 2	◎データベース II ◎データベース I	2 2	2-秋 2-春	◎データベース II ◎データベース I	2 2	2-秋 2-春
	◎コンピュータネットワーク活用 ◎クリエイティブデザイン II ◎ITデザイン I	2 2 2	◎コンピュータネットワーク活用 ◎クリエイティブデザイン II ◎ITデザイン I	2 2 2	◎コンピュータネットワーク活用 ◎クリエイティブデザイン II ◎情報ネットワーク	2 2 2	◎コンピュータネットワーク活用 ◎クリエイティブデザイン II ◎情報ネットワーク	2 2 2	3-春 2-秋 3-春	◎コンピュータネットワーク活用 ◎クリエイティブデザイン II ◎情報ネットワーク	2 2 2	3-春 2-秋 3-春
	◎マルチメディア表現 及び技術 (実習を含む)	2 2 2 2 2	◎クリエイティブデザイン I ◎Webデザイン I ◎Webデザイン II ◎問題解決メソッド I ◎問題解決メソッド III	2 2 2 2 2	◎クリエイティブデザイン I ◎Webデザイン I ◎Webデザイン II	2 2 2	◎クリエイティブデザイン I ◎Webデザイン I ◎Webデザイン II	2 2 2	2-春 2-春 2-秋	◎クリエイティブデザイン I ◎Webデザイン I ◎Webデザイン II	2 2 2	2-春 2-春 2-秋
情報と職業	◎経営情報論 I ◎情報と職業	2 2	◎経営情報論 I ◎情報と職業	2 2	◎経営情報論 I ◎情報と職業	2 2	◎経営情報論 I ◎情報と職業	2 2	2-春 3-春	◎経営情報論 I ◎情報と職業	2 2	2-春 3-春
	各教科の指導法 (情報論及び教材の活用を含む)									◎情報科教育法 I } ※2 ◎情報科教育法 II }	2 2	2-春 3-秋

・ 選択必修科目のうち14単位以上修得すること。

※1 2016年度以降入学生は、「IT活用法 II」を履修してください。「業界研究 I」は2014・2015年度入学生用の科目のため、教科に関する科目としてカウントされません。

※2 2018年度以前入学生は、「教職に関する科目」に「情報科教育法 I・II」が含まれています。

(6) 教科に関する科目における新旧対照表

	2015年度開講科目	→	2016年度開講科目	→	2017年度開講科目	→	2018年度開講科目	備考	→	2019年度開講科目	備考	
変 更 科 目 一 覧	スポーツ I	→	スポーツ I	→	スポーツ I スポーツ II	→	スポーツ I スポーツ II		→	スポーツ I スポーツ II		
	English Expression II 韓国語 II 中国語 II	→	English Expression II 韓国語 II 中国語 II	→	English Expression II 韓国語 II 中国語 II	→	English Expression II 韓国語 II 中国語 II		→	English Expression II 韓国語 II 中国語 II		
	ビジネスコミュニケーション入門 I	→	ビジネスコミュニケーション入門 I	→	ビジネス最新線研究	→	業界研究 I	名称変更	→	業界研究 I		
	情報通信と社会	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止	→	廃止	廃止	
	データフィクション I (区分:情報社会及び情報倫理)	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止	→	廃止	廃止	
	デザインワークショップ I	→	デザインワークショップ I	→	プログラミング入門 I	→	プログラミング入門 I		→	プログラミング入門 I		
	デザインワークショップ II	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止	→	廃止	廃止	
	コンピュータサイエンス	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止	→	廃止	廃止	
	情報探索法	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止	→	廃止	廃止	
					データベース II	→	データベース II		→	データベース II		
					データベース I	→	データベース I		→	データベース I		
					廃止	→	廃止	廃止	→	廃止	廃止	
					廃止	→	廃止	廃止	→	廃止	廃止	
					データフィクション I (区分: 情報システム(実習を含む))	→	廃止	廃止	→	廃止	廃止	
					ITデザイン II	→	情報工学概論	→	情報工学概論	→	情報工学概論	
					ITデザイン I	→	情報ネットワーク	→	情報ネットワーク	→	情報ネットワーク	
					情報とセキュリティ	→	経営とセキュリティ	→	経営とセキュリティ	→	経営とセキュリティ	
				問題解決メソッド I	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止	
				問題解決メソッド III	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止	

(7) 教職課程の履修について

①教職課程の履修要件は原則として、教員採用試験の受験を1年次で希望していること。

②教職課程の履修が認められる者。

・1年次終了時

2年次に進級する際に、原則として、1年次中に修得した単位が40単位以上で、かつその成績の評定平均が2.1以上に達した者。

評定平均の算出方法

$$\frac{4.0 \times (\text{「A+」と「P」の修得単位数}) + 3.0 \times (\text{「A」の修得単位数}) + 2.0 \times (\text{「B」の修得単位数}) + 1.0 \times (\text{「C」の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数(「F」の単位数を含む)}}$$

・2年次終了時

・80単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。

・3年次終了時

・110単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。

・原則として、教職に関する科目の必修科目（教育実習と教職実践演習を除く）をすべて修得していること。

・原則として、必修科目30単位全てと、選択必修科目の内14単位以上修得していること。

③「教育実習」3単位のうち1単位は「事前・事後指導」とし、これに出席しなければ教育実習の単位は認定されない。

(8) 教育実習について

①教育実習の目的

教育実習は、学校教育の実状や教員の実務を理解し、これまで大学で身につけた知識や理論を基に、実習校において、教育職員として必要な現場の知識や技術、態度等を身につけるための実地修練の場です。

②教育実習の実施時期

教育実習の実施時期は4年次の6月を原則としますが、実習校(基本的に母校実習)の都合により、他の時期に行うこともあります。

③教育実習の説明会

4年次の教育実習履修有資格者を対象に、4月に教育実習説明会を実施し、教育実習申込書、教育実習日誌等を配布します。

④教育実習手数料

教育実習手数料は、教育実習申込みの際に教務課窓口にて納入してください。

→ 教育実習手数料 20,000円

⑤実習校との事前打ち合わせ

教育実習開始前に、教育実習についての打ち合わせが実習校で行われます。実習に際しての指導を受けたり、実習生の準備状況の報告を行ったりするもので、実習に欠かせない重要なものです。必ず出席してください。日時は実習校の教員と調整をして決定します。(2年次終了頃～3年次)

(9) 教員免許状の申請について

大学から東京都教育庁へ教員免許の一括申請を行います。

教員免許状申請料は、案内が教務課から届きますので、それに従って所定の料金を教務課窓口にて納入してください。(4年次1月～2月頃)

→ 教員免許状申請料 3,700円

13. オフィスアワー制度について

【オフィスアワーとは】

多摩大学経営情報学部では、オフィスアワーを実施しています。オフィスアワーとは、本学の経営情報学部の学生が受講する授業科目に関し、担当の教員に直接質問等をし、教員が返答するために行う面談の時間のことです。1週間の中に必ず90分以上設定し、公表した上で、学生からの相談を受けられるように待機しています。予約は不要です。

※担当授業科目には、ホームゼミを含みます。

※上記「学生」とは、経営情報学部生に加え、経営情報学部の科目を受講している科目等履修生と聴講生を含みます。

※非常勤教員については、授業後の時間及び随時電子メールで質問を受け付けています。詳細はT-NEXTの掲示で確認してください。

【基本原則】

- ・面談内容は授業内容に関するものとします。
- ・面談場所は3階教育サポート室奥のラウンジを使用します。
- ・オフィスアワー情報(曜日、時間)については、教育サポート室とホームページで公表します。
URL : <https://www.tama.ac.jp/student/smis/support.html>
- ・1人の面談時間単位は、15分です。

【予約希望の場合】

面談は、予約なしでも可ですが、事前に予約することもできます。希望する学生は、3階教育サポート室カウンターにて、面談予約希望の旨を申し出てください。また申し込む場合は、申込用紙を受け取り、必要事項を記入して提出してください。

※予約申込時間：月曜日～金曜日午前9:30～午後4:30

※直接教員と約束をした場合でも、該当する時間に予約があった場合には予約した学生を優先します。

※曜日や時間、面談場所が変更になる場合があります。

※予約可能な時間は15分間を限度とします。

予約した場合には、面談当日指定された場所に遅れない様に直接行ってください。もしも予約時間定刻に予約した学生がいない場合、他の学生が優先されます。

14. 授業評価アンケート(VOICE)について

全ての講義科目について、学生による授業評価アンケート(VOICE)を実施しています。よりよい講義の実施のために、学生から真面目で率直な意見を聞くマークシートによる無記名式アンケートです。詳細は掲示にてお知らせしますので、積極的に回答してください。

なお、過去の授業評価アンケート(VOICE)結果については、3階図書館にて公開しています。履修する授業を選択する際などに参考にしてください。

15. 単位互換科目について

● 申請資格

多摩大学経営情報学部に在学する学生

● 履修期間・履修単位制限

1. ネットワーク多摩単位互換制度によって開講されている他大学の科目(産学連携科目を含む)を履修することが出来ます。開講科目の詳細については、T-NEXTにて確認してください。
2. 単位互換制度により他大学の科目を履修し、単位を修得できるのは在学中30単位までとし、各学期の履修単位数上限に含みます。また、修得した単位は「単位互換科目」の単位として卒業要件に含みます。

● 履修申請

1. 履修登録は当該科目受講の翌学期に行い、単位認定されます。つまり、他大学の春学期開講科目を受講した場合、多摩大学で秋学期に履修登録し、秋学期の成績となります。
2. 履修申請は、春学期は3月下旬～4月中旬、秋学期は8月下旬～9月中旬(決定次第T-NEXTで発表します)までに「履修申請書」を顔写真添付のうえ教務課に提出してください。申請期間内であっても、開設大学の受付期間が終了している場合には受付が出来ません。原則として、受付期間外の受付は出来ませんので、申請は余裕を持って行ってください。
3. 「履修申請書」を提出し、開設大学より許可を受けた科目は成績等にかかわらず必ず履修することとします。
4. 履修許可者の発表はT-NEXTにて行います。

● 履修上の注意

1. 履修科目は、ネットワーク多摩単位互換制度により開講されている、単位互換科目及び産学連携事業科目のうち、半期完結の科目に限ります。
2. 在籍年次よりも上級年次に配当されている科目を履修することは出来ません。
3. 履修に当たっては移動時間を考慮し、他大学科目を履修する前後の時間に配置された多摩大学科目又は他大学科目を履修することは出来ません。ただし、昼休みを挟む場合はこの限りではありません。

● 授業

1. 休講・補講等の授業及び試験日程等に関する通知は、開設大学が通常所属大学の学生に対する通知方法により行われますので、各自の責任において確認してください。
2. 出席状況によっては、学期の途中であっても開設大学から履修の許可を取り消されたり、試験の受験資格が取り消されることがあります。
3. 学年暦の差異により、多摩大学と開設大学での授業・補講(代講)の日時が重複した場合、どちらの授業に出席するかは自身で判断してください。

● 試験

- 1.開設大学の試験と多摩大学の試験の日時が重複した場合は、その事実が判明したら直ちに 本学の教務課に相談してください。相談が無い場合、対応措置を講じることができません。
- 2.病気等により開設大学の試験を欠席したときは、追試験の受験を認められることがあります。その場合の手続き等は開設大学の定めに従います。
- 3.開設大学における授業及び試験の詳細については、開設大学が配布する資料などで確認してください。

● 成績

- 1.成績評価は開設大学の基準及び表示方法により行い、多摩大学の基準及び表示方法に置き換えて認定します。
- 2.成績の質問は、開設大学の定めるところによるものとします。

● 特別聴講学生証

- 1.特別聴講学生証は、開設大学において交付されます。
- 2.有効期限は開設大学が必要と定める期間とします。また、有効期限内であってもこれを必要としなくなったとき、又は有効期限が満了したときは特別聴講学生証を多摩大学教務課まで返却してください。

● その他

- 1.ネットワーク多摩単位互換制度を利用して履修する授業科目の聴講料は免除されます。ただし、教材費や実習費が必要な授業科目については、実費を徴収されることがあります。
- 2.開設大学における図書館等の施設・設備の利用範囲、自転車・バイクの利用、開設大学で特に注意する事項などについては、開設大学が配布する資料等で確認してください。
- 3.開設大学において急病になった、又は事故にあった場合など、急を要する治療が必要な場合は、開設大学の診療施設を利用することが出来ます。また、直ちに救急措置を講じる必要がある場合、本学の判断により保険情報を含めた個人情報開設大学の診療施設に提供することがあります。
なお、通学及び授業中に事故にあった場合、「学生教育研究災害傷害保険」の適用を受けることが出来る場合がありますので本学の学生課に問い合わせてください。

16.アセスメント

アセスメントとは、専攻・専門にかかわらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を測定するためのプログラムです。1年生と3年生の4月のオリエンテーション等でアセスメントテストを実施します。外部の一般化された試験を用いて社会で求められる一般的な能力等を測定し、自身の現状を客観的に把握することが出来ます。また、1年生と3年生の両方で受験することで、カリキュラムによる学修成果を、大学の成績とは異なる視点で確認できます。

アセスメントでの気づきを通して、大学での学びをより主体的なものにする原動力としてください。

17.TOEIC 試験補助について

大学から補助を受けて、無料で学内TOEICを受けることができます。

就職や留学に行く際の目安、また自分の英語の実力がどの程度伸びたかを見るよいチャンスです。積極的に活用して、自身の成長の指標にしてください。申し込みの詳細については随時更新しますので、教育サポート室で最新情報を確認してください。

18.多摩大学 学則(抜粋)

第1章 総則

(目的)

第1条 多摩大学(以下「本学」という。)は、永年に及ぶ産業教育における経験を基盤とし、国際化・情報化時代に即応して、学生に高度な外国語能力と世界に通用する教養・最新の経営知識及び的確な情報処理能力を修得せしめ、国際的ビジネスの場で活躍できる人材の育成を目指すとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に寄与する指導的人材を育成することを目的とする。

(自己点検及び評価)

第2条 本学は、その教育研究水準の向上を図り、大学の目的及び社会的使命を達成するため、大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行う。

2 自己点検及び評価について必要な事項は、別に規程で定める。

(個人情報保護)

第3条 本学は、教育・研究活動等の適正かつ円滑な運営を図り、個人情報の有用性に配慮するため、個人の権利及び利益を保護する。

2 個人情報保護について必要な事項は、別に規程で定める。

(ハラスメントの防止)

第4条 本学は、ハラスメントの防止及びハラスメントに起因する問題が生じた場合に、適切な対応を行うための措置を講じ、学生、教育職員及び事務職員等の快適な環境を作り、教育、研究及び就業の機会と権利を保障する。

2 ハラスメントの防止について必要な事項は、別に規程で定める。

第3章 修業年限、在学年限、学年、学期及び休業日

(修業年限)

第10条 本学の修業年限は、4年とする。ただし、第38条の規定により卒業を認められた者については、この限りでない。

(在学年限)

第11条 学生は、8年を超えて在学することができない。

2 編入学、転入学及び再入学の許可を得た者の在学年限は、第20条第2項に定める。

(学年)

第12条 学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。ただし、秋学期入学生については、10月1日に始まり、翌年9月30日に終る。

(学期)

第13条 学年を次の2学期に分ける。

(1)春学期 4月1日から 9月30日まで

(2)秋学期 10月1日から翌年3月31日まで

(休業日)

第14条 授業を行わない日(以下「休業日」という。)は、次のとおりとする。ただし、学長が必要と認めるときは、休業日を変更又は臨時に休業日を定めることができる。

(1)日曜日

(2)国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日

(3)本学の開学記念日 10月20日

(4)メモリアルデー 1月16日

- (5)夏季休業 8月10日から9月20日まで
 - (6)冬季休業 12月25日から 翌年1月5日まで
 - (7)春季休業 翌年2月10日から3月31日まで
- 2 休業日の変更又は臨時の休業日については、その都度公示する。

第4章 学籍

(入学の時期)

第15条 入学の時期は、学年の始めとする。ただし、再入学及び転入学については、学期の始めとすることができる。

(入学資格)

第16条 本学に入学することができる者は、次の各号の一に該当する者とする。

- (1)高等学校若しくは中等教育学校を卒業した者
- (2)通常の課程による12年の学校教育を修了した者又は通常の課程以外の課程により、これに相当する学校教育を修了した者
- (3)外国において、学校教育における12年の課程を修了した者又はこれに準ずる者で、文部科学大臣の指定した者
- (4)文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
- (5)専修学校の高等課程（修業年限が3年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。）で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者
- (6)文部科学大臣の指定した者
- (7)高等学校卒業程度認定試験規則による高等学校卒業程度認定試験に合格した者（旧規程による大学入学資格検定に合格した者を含む。）
- (8)学校教育法第90条第2項の規定により大学に入学した者であって、本学において、大学における教育を受けるにふさわしい学力があると認めたる者
- (9)本学において、個別の入学資格審査により高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めたる者で、18歳に達した者

(入学の出願)

第17条 本学に入学を志願する者は、入学願書に所定の入学検定料及び別に定める書類を添えて願出しなければならない。

(入学者の選考)

第18条 前条の入学志願者に対しては、試験を行いその成績等により選考する。

(入学手続き及び入学許可)

第19条 入学者の選考に合格した者は、所定の期日までに入学誓約書その他所定の書類を提出し、第42条に規定する、所定の学費を納付しなければならない。

2 学長は、正当な事由なくして期日までに前項の手続きを完了しない者の合格を取消することができる。

3 学長は、第1項の入学手続きを完了した者に入学式において入学を許可し、学生証を交付する。

(編入学、転入学及び再入学)

第20条 次の各号の一に該当し、本学に入学を志願する者は、次のとおりとする。

- (1)大学を卒業した者又は退学した者
- (2)短期大学又は高等専門学校を卒業した者
- (3)専修学校専門課程を卒業した者
- (4)他の大学に在学中の者で、現に在学する大学の学長による転学の承認を得たる者
また、学長は次の各号の一において、入学を許可することができる
- (1)編入学については、編入学定員内において、選考の上、入学を許可することができる。

(2) 転入学及び再入学については、定員に欠員のある場合に限り、選考の上、相当年次に入学を許可することができる。

2 前項の規定により入学を許可された者の既に履修した授業科目及び単位数の取扱い並びに在学すべき年数については、教授会の議を経て学長が決定する。

3 前3条の各規定は、第1項の入学に準用する。

(休学)

第21条 疾病その他特別の事由により修学することができない者は、1学期又は1年間(2学期)を区分として、様式第1に規定する休学願を提出し学長の許可を得て休学することができる。

2 学長は、疾病その他特別の事由により修学することが適当でないと認めるときに、教授会の議を経て、休学を命ずることができる。

(休学の期間)

第22条 休学期間は、1年以内とする。ただし、特別の事由があるときは、1年を限度として休学期間の延長を認めることができる。

2 休学期間は、通算して4年を超えることができない。

3 休学期間は、第10条の修業年限及び第11条の在学年限に算入することができない。

(復学)

第23条 休学期間中にその事由が消滅したときは、様式第2に規定する復学願を提出し学長の許可を得て復学することができる。

(転学)

第24条 他の大学又は短期大学に入学又は転入学を志願しようとする者は、様式第3に規定する転学願を提出し学長の許可を得なければならない。

(転学部)

第25条 転学部を願い出る者は、選考し各教授会の議を経て、学長がこれを許可する。

2 転学部について必要な事項は、別に規程で定める。

(留学)

第26条 外国の大学又は短期大学で修学することを志願する者は、様式第4に規定する留学願を提出し学長の許可を得なければならない。

2 第36条の規定は、前項の留学の場合に準用する。

3 第1項の許可を得て留学した期間は、第11条に定める在学年限に含めることができる。

(願い出による退学)

第27条 病気その他の事由により退学しようとする者は、様式第5に規定する退学願を提出し学長の許可を得なければならない。

(除籍)

第28条 次の各号の一に該当する者は、教授会の議を経て、学長が除籍する。

(1) 第11条に定める在学年限を超えた者

(2) 第22条第2項に定める休学期間を超えてなお修学できない者

(3) 長期間にわたり行方不明の者

(4) 学費の納付を怠り、催促してもなお納付しない者

第5章 教育課程及び履修方法等

(授業科目)

第29条 授業科目は、基礎教育科目及び専門教育科目とする。

2 授業科目の種類及び単位数等は、別表第1及び第5のとおりとする。

(単位の計算方法)

第30条 各授業科目の単位は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成すること

を標準とし、次の基準により計算する。

- (1) 講義及び演習については、15時間の授業をもって1単位とする。
 - (2) 実験、実習及び実技については、30時間の授業をもって1単位とする。
- 2 各授業科目の授業は、15週にわたる期間を単位として行う。ただし、学長が本学で教育上特別の必要があると認められるときは、教授会の議を経て、これらの期間より短い特定の期間において授業を行うことができる。

(履修方法)

第31条 学生は、所属する学部及び学科の所定の授業科目を履修しなければならない。

- 2 学生は、当該年度又は当該学期に履修する授業科目を選択し、指定期間内に所定の方法により履修科目を届出なければならない。
- 3 履修について必要な事項は、別に規程で定める。

(単位修得等の認定)

第32条 単位修得の認定その他授業科目履修の認定は、試験その他の審査により行う。

- 2 試験及び審査の方法について必要な事項は、別に規程で定める。

(第1年次に入学した者の既修得単位の認定)

第33条 本学の第1年次に入学した者が大学又は短期大学を卒業又は中途退学している場合、本学で教育上有益と認めるときは、教授会の議を経て、学長が既に修得した単位から、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目について、合計30単位を超えない範囲において、本学で修得したものとして認定することができる。

(成績の評価)

第34条 授業科目の成績は、一般講義科目は、A+、A、B、C、Fの5段階、ゼミナール科目はP、Fの2段階の評語をもって表示する。

- 2 表示した成績は、Fを不合格としその他を合格とする。
- 3 第33条、第35条及び第36条により認定された授業科目の成績は、認定(N)の評語をもって表示する。
- 4 成績評価について必要な事項は、別に規程で定める。

(他学部科目の履修)

第35条 学生は、他の学部開設されている授業科目のうち定められた科目を、24単位を超えない範囲において履修することができる。ただし、履修を希望する者は、あらかじめ学部長の許可を得なければならない。

- 2 前項の履修により修得した単位は、卒業に必要な修得単位数に算入することができる。

(他の大学の授業科目の履修)

第36条 学生は、他の大学、短期大学又は外国の大学との協議に基づき、授業科目を履修又は外国の大学に留学することができる。

- 2 前項の規定により履修した授業科目について修得した単位は、教授会の議を経て、学長が60単位を限度として認定することができる。
- 3 本学を休学時に他の大学、短期大学又は外国の大学で修得した単位の認定については、別表第2に掲げる単位認定料を徴収する。

(教育職員免許状取得のための課程)

第37条 本学に教育職員免許状取得のための課程を置く。

- 2 本学において資格の取得できる教育職員免許状の種類及び免許教科は、別表第3のとおりとする。
- 3 教育職員免許状を得ようとする者は、別表第4に定める「教科に関する基礎及び専門科目」及び別表第5に定める「教職に関する科目」を履修しなければならない。
- 4 別表第5に定める「教職に関する科目」は、卒業に必要な単位数に算入することができない。

第6章 卒業及び学位

(卒業)

第38条 本学に4年以上在学し、別表第1に定める所定の単位数以上を修得した者は、教授会の議を経て、学長が卒業を認める。

2 当該学部(部)の学生として3年以上在学した者が、別表第1に定める所定の単位数以上を優秀な成績で修得したと認めるとき、前項の規定にかかわらず教授会の議を経て、学長が早期卒業として認めることができる。

3 早期卒業について必要な事項は、別に規程で定める。

(学位)

第39条 学長は、卒業を認めた者に次の学位を授与し、「卒業証書・学位記」を交付する。

(1) 経営情報学部 学士(経営学)

(2) グローバルスタディーズ学部 学士(グローバルスタディーズ学)

第7章 賞罰

(表彰)

第40条 人物及び学業の優秀な者又は本学の学生として表彰に値する功績があった場合は、教授会の議を経て、学長が表彰する。

(懲戒)

第41条 本学則若しくは本学で定める諸規則に違反した者又はその他学生としての本分に反する行為があった場合は、教授会の議を経て、学長が懲戒する。

2 前項の懲戒の種類は、退学、停学及び訓告とする。

3 懲戒について必要な事項は、別に規程で定める。ただし、定めた規程は、本学則と同様の取扱で公開する。

第8章 学費

(学費の種類及び額)

第42条 学生は、学年毎に授業料その他所定の学費を納付しなければならない。

2 学費の種類及びその額は、別表第2のとおりとする。

(学費の納付)

第43条 授業料は、年額の二分の一ずつを次の2学期に分けて納付しなければならない。

(1) 春学期(4月から9月まで)：納期4月中

(2) 秋学期(10月から翌年3月まで)：納期10月中

2 施設費(維持費)及び図書教材費は、学年始めの月に一括して納付しなければならない。

(復学等の場合の学費)

第44条 春学期又は秋学期の中途において復学又は入学した者は、復学又は入学した月から当該期末までの授業料並びに当学年度分の施設費(維持費)及び図書教材費が未納の場合は、これ等を含め一括して復学又は入学した月に納付しなければならない。

(退学等の場合の学費)

第45条 春学期又は秋学期の途中で退学又は除籍された者の当該学期分の学費は、徴収する。

2 停学期間中の学費は、徴収する。

(休学の場合の学費)

第46条 休学を許可された者又は命ぜられた者は、休学期間が1学期以上にわたる場合においてその学期分の授業料を免除する。ただし、休学在籍料として別表第2に定める額を納付しなければならない。

(研究生等の学費)

第47条 研究生、聴講生及び特別聴講学生の入学検定料、入学金及び授業料等の学費については、別に定める。

(既納の学費)

第48条 既納の入学検定料、入学金及び授業料等の学費は、返還しない。ただし、入学式までに入学を辞退した場合には、既納した入学手続納付金のうち、入学金を除く金額を返還する。

第9章 奨学

(奨学)

第49条 能力があるにもかかわらず経済的理由によって就学が困難な者及び特に学力が優れている者に対して、奨学の方法を講ずることができる。

2 奨学の方法は、奨学金の給付又は貸与とする。

3 奨学について必要な事項は、別に規程で定める。

第10章 研究生、特別聴講学生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生

(研究生)

第50条 本学の特定の専門事項について、研究することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が研究生として入学を許可することができる。

2 研究生について必要な事項は、別に規程で定める。

(特別聴講学生)

第51条 他の大学又は外国の大学の学生で、協議に基づき本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、学長が特別聴講学生として入学を許可することができる。

2 特別聴講学生について必要な事項は、別に規程で定める。

(科目等履修生)

第52条 本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が科目等履修生として入学を許可することができる。

2 科目等履修生について必要な事項は、別に規程で定める。

(聴講生)

第53条 本学の特定の授業科目を聴講することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が聴講生として入学を許可することができる。

2 聴講生について必要な事項は、別に規程で定める。

(外国人留学生)

第54条 外国人であって、外国において通常の過程による12年の学校教育課程を修了した者又はこれと同等以上の資格ある者が、本学に入学を志願するときは、日本政府、日本政府の承認した外国政府若しくは日本駐在の外国公館の発行した身分証明書又はこれに準ずる証明書のある者に限り、選考し学長が入学を許可することができる。

2 外国人留学生について必要な事項は、別に規程で定める。

第11章 公開講座

(公開講座)

第55条 地域社会の発展に寄与し、社会人の教養を高め、文化の向上に資するため、本学に公開講座を開設することができる。

2 公開講座について必要な事項は、別に規程で定める。

第12章 寄付講座

(寄付講座)

第56条 学外の機関等から授業科目の運営に必要な経費の寄付を受け、本学の教育研究に資するため、本学に寄付講座を開設することができる。

2 寄付講座について必要な事項は、別に規程で定める。

19. 多摩大学学生懲戒規程

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則(以下「学則」という。)第41条の規定に基づき学生の懲戒について必要な事項を定めることを目的とする。

(懲戒の定義)

第2条 懲戒対象者は、学則に規定する学部学生、研究生、特別聴講生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生(以下「学生」という。)とする。

2 懲戒は、本学で学生の本分を全うさせるために、学校教育法及び学校教育法施行規則に基づき行う。

3 懲戒は、総合的に検討し教育的見地に基づき行う。

4 懲戒により学生に科す不利益は、懲戒目的を達成するため必要最小限とする。

(懲戒の種類)

第3条 学則第41条第2項で規定した懲戒の種類は、次の各号の一に該当する内容とする。

(1)退学は、学生としての身分を奪う事。

(2)停学は、無期又は有期としその期間の登校を禁止する事。

ア 停学の期間は、在学年限に含め修業年限に含めない。

イ 停学の期間が1ヶ月以下でかつ特別の事情がある場合は、学生委員会で審議し第7条に規定する学長の決定において修業年限に含めることができる。

ウ 有期停学は6ヶ月以下とする。

(3)訓告は、口頭及び文書により嚴重な注意を行い、期限を定めて反省文の提出をさせる事。

(懲戒の基準)

第4条 前条に定める懲戒の基準は、次の各号の一に該当する内容とする。

(1)退学

ア 本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

イ 学内又は学外において重大な非違行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

ウ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

エ 本学が実施する試験等において、不正行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

オ その他退学を受けた者の行為を教唆若しくは幫助した場合

(2)停学

ア 本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合

イ 学内又は学外において悪質な非違行為を行った場合

ウ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で悪質と判断した場合

エ 本学が実施する試験等において、悪質な不正行為を行った場合

オ その他懲戒処分をしても改善の見込みがない場合

(3)訓告

ア 学内又は学外において非違行為を行った場合

イ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合

ウ 本学が実施する試験等において、不正行為を行った場合

(審議)

第5条 学部長は、学生が懲戒の対象となりうる事項があったと認められるとき、学生委員会に調査を命ずる。

2 学生委員会は、事実関係の調査及び懲戒の種類を審議を行い、結果を教授会へ報告する。

(調査)

- 第6条 学生委員会は、当該学生及び関係者等から資料の提出を求め、事情及び意見を聴くことができる。
- 2 学生委員会は、当該学生に弁明の機会を与える。
 - 3 当該学生は、弁明の場において必要な証拠を提出し証人の喚問を求めることができる。また、当該学生は、補佐人を指名し補佐を受けることができる。
 - 4 当該学生が、弁明の場を正当な理由なく欠席したとき、弁明の権利を放棄したものとする。
 - 5 学生委員会は、懲戒処分決定前に謹慎を命ずることができる。ただし、謹慎の期間は、3ヶ月以内とする。
 - 6 謹慎は、当該学生の行為が第4条で定める懲戒基準に該当するとき行うことができる。
 - 7 謹慎期間は、停学期間に通算することができる。
 - 8 謹慎期間中は、本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、参加ができる。
 - 9 謹慎期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。

(懲戒の決定及び解除)

- 第7条 懲戒は、教授会の議を経て、学長が行う。
- 2 懲戒は、様式第1に定める懲戒通知書に理由も添えて当該学生に通知する。ただし、有期停学の場合は、停学解除日も通知する。
 - 3 無期停学の解除を行う場合は、教授会の議を経て、学長が行う。学長は、決定により停学解除を当該学生に文書で通知する。

(再審査)

- 第8条 懲戒を受けた学生は、事実誤認、新事実の発見又はその他正当な理由があるとき、それらを示す資料を添えて文書にし、学長に再審査の申請を行うことができる。
- 2 再審査の申請は、懲戒通知書の決定日から1ヶ月以内とする。
 - 3 学長は、再審査を行うかどうか判断し教授会の議を経て決定する。
 - 4 学長は、再審査の必要があると決定したとき、学部長に再審査を命じる。
 - 5 学長は、再審査の必要がないと決定したとき、当該学生に文書で通知する。
 - 6 再審査の申請を行い学長が教授会の議を経て、懲戒の決定又は解除行うまでは、すでに決定された懲戒内容の変更はできない。
 - 7 再審査の調査は、第6条の規定を準用する。

(停学期間中の措置)

- 第9条 停学期間中は、当該学生が本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験、及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、この限りではない。
- 2 停学期間中は、当該学生に対して定期的な面談及び指導を行う。
 - 3 停学期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。

(事務)

- 第10条 学生課は、学生の懲戒についての庶務を担当する。

(規程の公開)

- 第11条 本規程は、学生の不利益等につながる重要な規程であることから、本学のホームページ、学生ハンドブック等に学則と同様の取扱で公開する。

20. 多摩大学履修規程(抜粋)

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則(以下「学則」という。)第31条、第32条及び第34条の規定に基づき、授業科目(以下「科目」という。)の履修、試験及び成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。

(科目の履修)

第2条 学生は、学則第31条第2項の履修科目届により、履修しようとする科目を登録しなければならない。

2 登録した科目の変更又は追加は認めない。

3 学科・年次・クラスが指定された科目については、その指定に従い履修するものとする。ただし、科目担当者が特に認めた場合はこの限りでない。

4 同一科目を同一年度に重複して履修することはできない。ただし、教育課程表及び授業時間割表において指示する特定の科目についてはこの限りでない。

5 すでに単位を修得した科目を履修することはできない。

6 履修に関するその他の事項については、教育課程表、講義要綱及び時間割表に定める方法によるものとする。

(定期試験)

第3条 定期試験は、学期末に行う。

2 定期試験を受験することができる者は、履修科目届けを提出したものに限る。

3 受験できる科目は、登録した科目とする。

4 授業料その他の納付金の未納者は、受験することができない。

(追試験)

第4条 追試験は、定期試験を実施した科目(レポートにより実施した科目を除く。)を、病気その他やむを得ない理由により受験できなかった者に対し、本学が指定する日にこれを行うことができる。

2 追試験を希望する者は、医師の診断書等理由を証明するに足る書類を添え、原則として当該科目の試験日を含む3日以内(ただし、日曜日、祝日は除く。)にその申請をし、教務委員会の許可を得なければならない。

3 追試験を許可された者は、所定の期日までに追試験料を納付しなければならない。

(再試験)

第5条 卒業年次の学生及び進級年次の学生が、履修登録した科目のうち不合格になった科目に対し、再試験を実施することがある。

2 再試験についての必要な事項は、別に定める。

3 再試験を許可された者は、所定の期日までに再試験料を納付しなければならない。

(試験の実施)

第6条 第3条、第4条及び第5条の試験に関する事項は別に定める。

(臨時試験)

第7条 臨時試験は、各科目担当者が随時これを行うことがある。

(不正行為)

第8条 第3条、第4条及び第5条に定める試験において、不正行為を行なった者は多摩大学学生懲戒規程に基づき処分する。

2 受験中に答案を持ち出した者については、その受験科目を不合格とする。

(成績照会)

第10条 成績評価について疑問がある場合は、成績の照会を申出ることができる。

2 成績照会は、次学期授業開始後2週間以内に事務局担当窓口に出なければならない。

21. 多摩大学早期卒業規程(抜粋)

(対象学生)

第2条 早期卒業の対象学生は、学則第38条第2項に規定する者とする。ただし、再入学、編入学及び転入学した学生又は教職課程科目の履修者は、対象とならない。

(早期卒業要件)

第5条 早期卒業の要件は、3年又は3年半在学して所定の科目を履修し、多摩大学履修規程に規定する卒業要件単位数以上を修得しなければならない。ただし、休学した期間は在学期間に含まれない。

2 早期卒業要件について必要な事項は、別に細則で定める。

(申請の取下げ)

第6条 早期卒業希望者は、卒業の1ヶ月前までに早期卒業申請を取下げることができる。

(卒業の時期)

第7条 早期卒業の時期は、春季入学生にあつては3年次の3月以降、秋季入学生にあつては3年次の9月以降とする。

22. 多摩大学経営情報学部早期卒業細則(抜粋)

(認定要件)

第2条 早期卒業の認定要件は、早期卒業規程第3条第1項に定めるもののほか、2年次終了時において、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

(1)以下の単位を修得していること。

卒業に必要な必修・特別選択必修科目の単位の全てと卒業に必要な合計単位数の75%以上。(小数点以下の端数は切り上げとする)

(2)GPAが3.2以上であること。

(3)ホームゼミナールに所属し、担当教員の推薦を得ていること。ホームゼミナールに所属しない場合は専任教員2名の推薦状を得ていること。

(4)早期卒業の意志及び理由が明確であること。

(学習指導体制)

第3条 学習指導体制として、ホームゼミナール担当教員、教務委員長及びホームゼミナール担当教員が指名した教員1名(合計3名)又はホームゼミナール未所属の場合は教務委員長及び学生を推薦した専任教員2名(計3名)を配置する。

(早期卒業要件)

第4条 早期卒業の要件は、早期卒業規程第5条第1項に定めるもののほか、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

(1)GPAが3.2以上であること。

(2)本学大学院の入学許可を得ていること。

(GPA)

第5条 成績評価の評定平均値(GPA)は、次の方法で算出する。

$$\{(4.0 \times A + \text{とPの修得単位数}) + (3.0 \times A \text{の修得単位数}) + (2.0 \times B \text{の修得単位数}) + (1.0 \times C \text{の修得単位数})\} \div \text{総履修登録単位数} (\text{「F」の単位数を含む})$$

23. 多摩大学成績評価規程

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則第34条に基づき、成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。

(GPA)

第2条 成績評価の評定平均値(GPA)は、次の方法で算出する。

$\{(4.0 \times A + P \text{の修得単位数}) + (3.0 \times A \text{の修得単位数}) + (2.0 \times B \text{の修得単位数}) + (1.0 \times C \text{の修得単位数})\} \div \text{総履修登録単位数(「F」の単位数を含む)}$

(卒業)

第3条 卒業判定にGPAを使用する場合、多摩大学早期卒業規程による。

(面談の実施)

第4条 成績不振者の基準は、各学期の修得単位数が4単位未満の者とし、成績不振者に対する履修指導面談、就学的意思確認面談は、各年度に1回以上行い、3月31日までに実施する。

(退学勧告)

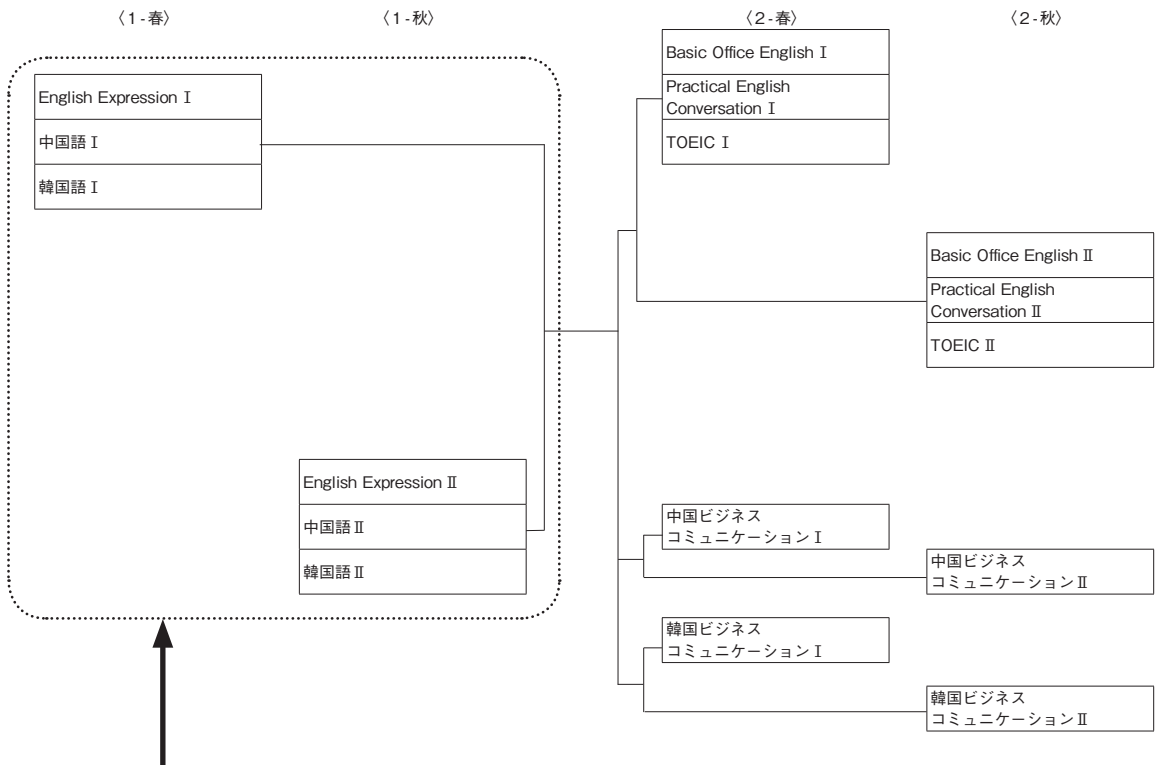
第5条 5年を超えて在籍し、GPAが1.0以下、かつ修得単位数が60単位未満の学生については、就学的意思確認面談を実施し、必要に応じて退学勧告を行うものとする。

24. 前提科目一覧

◆◇2014年度以降入学生用◇◆

2019年度 前提科目一覧

【語学系】<2014年度以降入学生適用>



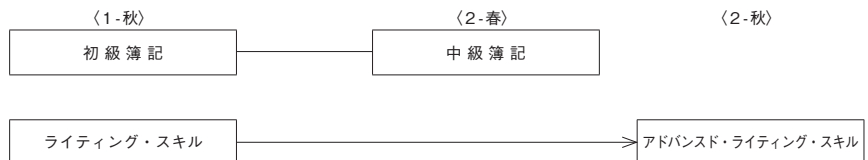
※2012年度入学生～2013年度入学生は同一言語にて4単位修得してください。
2014～2019年度入学生は、同一言語にこだわらず、4単位修得してください。

※既に2013年度までに上記の2年次以降に配当されている科目を履修した学生の皆さん

2014年度より上記ルールに則り履修登録が必要となるものであり2013年度までに履修された科目が取り消されることはありません。

(例：中国語 I を履修していない学生が2013年度に中国ビジネスコミュニケーション I の単位を修得した場合、2014年度以降もその単位が取り消されることはない。)

【その他】



※既に「文章伝達入門」の単位を修得している学生は、「アドバンスド・ライティング・スキル」を履修できます。

※上記科目以外に関しては、前提科目として特に定めておりませんが、単位修得を前提として講義を進めていく場合があります。シラバスをよく参照してください。



25. カリキュラム表(科目一覧)・
カリキュラムマップ・
カリキュラムマトリックス

2019年度入学生カリキュラム

科目群	区分	1年		2年	
		春学期	秋学期	春学期	秋学期
産業社会科 目群	必修	スタディスキル入門	スタディスキル入門		
		多摩学Ⅰ	ビジネススキル入門		
		ビジネススキル入門			
	特別選択必修			特別講座Ⅰ	特別講座Ⅱ
	選択必修	ITコミュニケーション入門(1年生専用)	ITコミュニケーション入門(1年生専用)	アントレプレナーシップ論	アドバンスド・ライティング・スキル
		グローバルヒストリーⅠ	グローバルヒストリーⅡ	グローバルヒストリーⅢ	グローバルヒストリーⅣ
		ビジネス数学基礎	スポーツ・マネジメント論	サブカルチャー論	立身人物伝
			多摩学Ⅱ	哲学入門	
			ライティング・スキル		
	選択必修 (語学)	English Expression Ⅰ	English Expression Ⅱ	Basic Office English Ⅰ	Basic Office English Ⅱ
		韓国語Ⅰ	韓国語Ⅱ	English Expression Ⅰ(再履修用)	English Expression Ⅰ(再履修用)
		中国語Ⅰ	中国語Ⅱ	English Expression Ⅱ(再履修用)	English Expression Ⅱ(再履修用)
		日本語講座(初級):留學生用	日本語講座(中級Ⅱ):留學生用	Practical English Conversation Ⅰ	Practical English Conversation Ⅱ
		日本語講座(中級Ⅰ):留學生用	日本語講座(上級):留學生用	TOEIC Ⅰ	TOEIC Ⅱ
				韓国ビジネスコミュニケーションⅠ	韓国ビジネスコミュニケーションⅡ
				中国ビジネスコミュニケーションⅠ	中国ビジネスコミュニケーションⅡ
				ドイツ語Ⅰ	ドイツ語Ⅰ
				ドイツ語Ⅱ	ドイツ語Ⅱ
				フランス語Ⅰ	フランス語Ⅰ
			フランス語Ⅱ	フランス語Ⅱ	
選択必修		キャリア・デザイン入門	キャリア・デザインⅠ	キャリア・デザインⅡ	
選 択	AP数学	IT活用法Ⅰ	インターンシップⅠ	インターンシップⅠ	
	Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	Study Abroad Ⅰ～Ⅷ	業界研究Ⅰ	業界研究Ⅱ	
	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	スポーツⅡ	経営シミュレーションゲーム	
	産業社会特講	コンピュータ概論	スポーツと健康	社会心理	
	スポーツⅠ	産業社会特講	日経BP総研 サステナブル経営ラボ 中堅	スポーツⅡ	
	単位互換科目Ⅰ～Ⅴ	スポーツⅠ	中小企業経営センター冠講座	ビジネスコミュニケーションⅡ	
	マーケティング入門	単位互換科目Ⅰ～Ⅴ	ビジネスコミュニケーションⅠ	ビジネス法	
	ミクロ経済学	法学(憲法)			
	ライフ・デザイン	マーケティングマネジメント論			
		マクロ経済学			
	余暇マネジメント				
経営情報学 科専門 科目	必修			経営情報論Ⅰ	経営情報論Ⅱ
	選択必修	ITビジネス入門	ITビジネス入門	IT概論Ⅰ	IT概論Ⅱ
		グローバルビジネス入門	グローバルビジネス入門	IT活用法Ⅱ	WebデザインⅡ
		地域ビジネス入門	書記簿記	ITパスポート	クリエイティブデザインⅡ
			地域ビジネス入門	WebデザインⅠ	クリエイティブデザインⅢ
				クリエイティブデザインⅠ	経営科学
				経営学概論	経営思想史
				情報法	原価計算
				情報倫理	財務会計
				中級簿記	データサイエンスⅡ
				データサイエンスⅠ	データベースⅡ
				データベースⅠ	ビジネス数学Ⅱ
				ビジネス数学Ⅰ	プログラミング入門Ⅲ
				プログラミング入門Ⅰ	ベンチャー企業論
				プログラミング入門Ⅱ	マーケティング・データ分析
		マーケティング・リサーチ			
		リーダーシップ論			
事業構 想学 科専門 科目	必修			事業構想論Ⅰ	事業構想論Ⅱ
	選択必修	ITビジネス入門	ITビジネス入門	IT概論Ⅰ	IT概論Ⅱ
		グローバルビジネス入門	グローバルビジネス入門	ITパスポート	NPO・NGO論
		地域ビジネス入門	書記簿記	経営学概論	アメリカ経済論
			地域ビジネス入門	国際経営入門	金融論
				国際経済学	グローバルマーケティング
				地域スポーツ論	経営思想史
				地域ビジネスプランニング	原価計算
				中級簿記	財務会計
				リーダーシップ論	消費心理
					地域政策プランニング
					ビジネス戦略Ⅱ
					ベンチャー企業論
					ヨーロッパ経済論
演習 科目	必修	プレゼミⅠ	プレゼミⅡ	ホームゼミⅠ	ホームゼミⅡ
	選択必修		インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ
教職 専門 科目	教職に関する科目		教育原理	教育課程総論	教育方法
			教職概論	教育制度論	生徒指導・進路指導論
			特別支援教育概論	特別活動・総合的な学習の時間の指導法	

※経営情報学専門科目の「選択必修科目」は事業構想学専門科目の「選択科目」、事業構想学専門科目の「選択必修科目」は経営情報学専門科目の「選択科目」となります。

※「IT活用法Ⅱ」は、経営情報学所属学生は必ず履修してください。

3 年		4 年		区 分	科目群
春学期	秋学期	春学期	秋学期		
				必修	教 養 産 業 社 会 科 目 群
				特別選択必修	
	立志特講Ⅰ(2月集中)			選択必修	
	立志特講Ⅱ(2月集中)				
	立志特講Ⅲ(2月集中)				
				選択必修 (語学)	
キャリア・デザインⅢ	キャリア・デザインⅣ			選 択	ビ ジ ネ ス
インターンシップⅡ	インターンシップⅡ				
教育心理学	教育相談				
業界研究Ⅲ	業界研究Ⅳ				
サービス産業論	認知心理				
ビジネスコミュニケーションⅢ	ビジネスコミュニケーションⅣ				
				必修	問 題 解 決 学 科 目 群 経 営 情 報 学 科 専 門 科 目
Webプログラミング	Webサービス開発				
経営と意思決定	経営とセキュリティ				
コンピュータネットワーク活用	情報工学概論				
情報と職業	データサイエンスⅣ				
情報ネットワーク					
データサイエンスⅢ					
データ分析実践					
	問題解決学特講Ⅰ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅱ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅲ(2月集中)				
				選 択	事 業 構 想 学 科 専 門 科 目
アジア経済論Ⅰ	アジア経済論Ⅱ				
経営組織	韓国経済論				
現代メディア論	経済統計学				
国際公共政策	事業デザイン論Ⅱ				
事業デザイン論Ⅰ	人材マネジメント論				
地域観光論	多国籍企業				
地域産業論	地域金融論				
中国経済論	ビッグデータ活用法				
日本経営論	ブランドマネジメント				
日本経済論	ロシア経済論				
	問題解決学特講Ⅰ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅱ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅲ(2月集中)				
ホームゼミⅢ	ホームゼミⅣ	ホームゼミⅤ	ホームゼミⅥ	必修	演 習 科 目
インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	選択必修	
ホームゼミⅦ～Ⅷ	ホームゼミⅦ～Ⅷ	ホームゼミⅦ～Ⅷ	ホームゼミⅦ～Ⅷ	教職に関する科目	教 職 専 門 科 目 群
教育心理学	教育相談	教育実習	教育実習		
情報科教育法Ⅰ	情報科教育法Ⅱ		教職実践演習		

学士力とディプロマ・ポリシーの関連について

DP1：学士力「知識・理解」

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解

DP2：学士力「統合的な学習経験と創造的思考力」

自らが立てた新たな課題を解決する能力

DP3：学士力「態度・志向性」

自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力

DP4：学士力「汎用的技能」

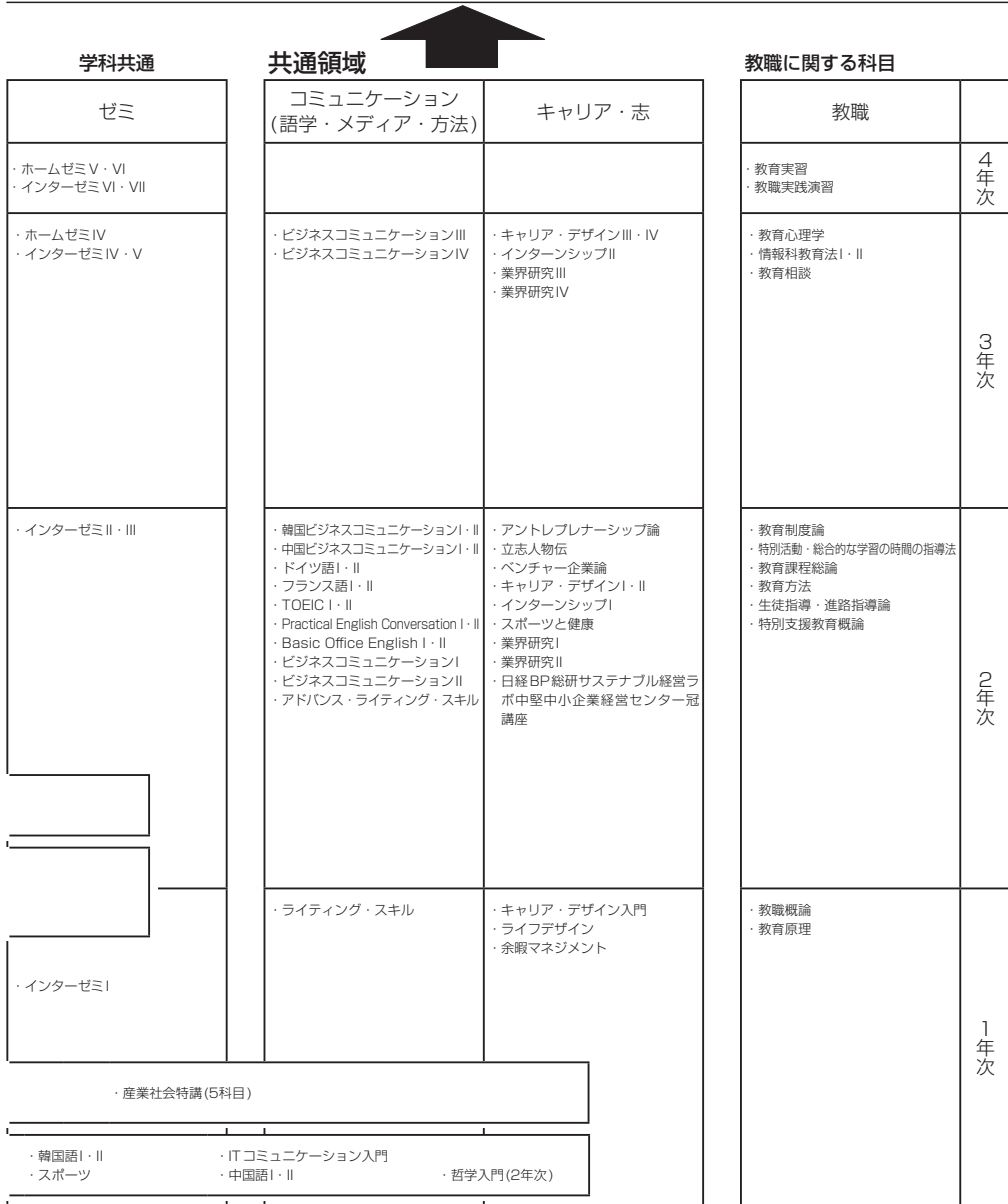
知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能

DP5：学士力「態度・志向性」

修得する。
活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるように

分担により組織目標の達成に貢献する力)
 かりやすく伝えることができる発信力や、聞き上手になって積極的に相手の意見を受け止められるようになる傾聴力、組織の中で自分がどのような役割を果たすべきなのが理解でき協調性を身につけることで、コミュニケーション能力を高め、所属する組織や社会の活動に貢献できるようにする。

能力と先進性]
 様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができる多様性や、社会のルールや約束を守ることができる規律性を身につけ、社会の発展に積極的に関与していくという高い志を確立



◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】	
産業社会科 目群	必 修 科 目	スタディスキル入門	1	2		◎		○		
		多摩学I	1	2			○		◎	
	特 別 選 択 必 修 科 目	ビジネススキル入門	1	2	◎			○		
		特別講座I	2	2	◎		○			
	選 択 必 修 科 目	特別講座I-I	2	2	◎		○			
		ITコミュニケーション入門	1	2	◎			○		
		アドバンスド・ライティング・スキル	2	2		○		◎		
		アントレプレナーシップ論	2	2			○		◎	
		グローバルヒストリー-I	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリー-II	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリー-III	2	2	◎	○				
		グローバルヒストリー-IV	2	2	◎	○				
		サブカルチャー論	2	2	◎		○			
		スポーツ・マネジメント論	1	2	◎		○			
		多摩学II	1	2		◎	○			
		哲学入門	2	2	◎	○				
		ビジネス数学基礎	1	2		○		◎		
		ライティング・スキル	1	2		○		◎		
		立身人物伝	2	2			○		◎	
		立志特講I	3	2				○	◎	
		立志特講II	3	2				○	◎	
		立志特講III	3	2				○	◎	
		選 択 必 修 科 目 (語 学)	Basic Office English I	2	2	◎			○	
			Basic Office English II	2	2	◎			○	
			English Expression I	1	2	◎				
			English Expression II	1	2	◎			○	
			Practical English Conversation I	2	2	◎			○	
			Practical English Conversation II	2	2	◎			○	
			TOEIC I	2	2		○		◎	
			TOEIC II	2	2		○		◎	
			ドイツ語I	2	2					
			ドイツ語II	2	2					
			フランス語I	2	2					
			フランス語II	2	2					
			韓国ビジネスコミュニケーションI	2	2			○	◎	
			韓国ビジネスコミュニケーションII	2	2			○	◎	
			韓国I	1	2			○	◎	
			韓国語II	1	2			○	◎	
			中国ビジネスコミュニケーションI	2	2	○				◎
	中国ビジネスコミュニケーションII		2	2	○				◎	
	中国語I		1	2						
	中国語II		1	2						
	日本語講座初級		1	2			◎	○		
	日本語講座上級		1	2	◎				○	
	日本語講座中級I		1	2		◎		○		
	日本語講座中級II		1	2		◎			○	
	選 択 必 修 科 目		キャリア・デザイン入門	1	2	○				◎
		キャリア・デザインI	2	2	○				◎	
		キャリア・デザインII	2	2	○				◎	
		キャリア・デザインIII	3	2	○			◎		
		キャリア・デザインIV	3	2	○				◎	
		選 択 科 目	AP数学	1	2		○		◎	
			IT活用法I	1	2	○	◎			
			Study Abroad I	1	2	◎		○		
			Study Abroad II	1	2	◎		○		
			Study Abroad III	1	2	◎		○		
			Study Abroad IV	1	2	◎		○		
			Study Abroad V	1	2	◎		○		
			Study Abroad VI	1	4	◎		○		
			Study Abroad VII	2	4	◎		○		
			Study Abroad VIII	2	4	◎		○		
			アクティブ・ラーニング実践I	1	2		◎	○		
			アクティブ・ラーニング実践II	1	2		◎	○		
			アクティブ・ラーニング実践III	1	2		◎	○		
			アクティブ・ラーニング実践IV	1	2		◎	○		
			アクティブ・ラーニング実践V	1	2		◎	○		
			アクティブ・ラーニング実践VI	1	4		◎	○		
			アクティブ・ラーニング実践VII	1	4		◎	○		
			アクティブ・ラーニング実践VIII	1	4		◎	○		
			インターンシップI	2	2			○		◎
			インターンシップII	2	2			○		◎
			業界研究I	2	2	◎				
			業界研究II	2	2			○		◎
			業界研究III	3	2	○			◎	
			業界研究IV	3	2		○		◎	
			教育心理学	3	2	◎		○		

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境能力と先進性】			
産業社会科目群	ビジネス	選択科目	教育相談	3	2	◎		○				
			経営シミュレーションゲーム	2	2	○	◎					
			コンピュータ概論	1	2	◎	○					
			サービス産業論	3	2	◎	○					
			産業社会特講(ビジョン・マネジメント論2019春)	1	2			○	◎			
			産業社会特講(米トランプ政権とグローバル社会)	1	2	◎		○				
			産業社会特講(スマートスピーカーアプリ開発)	1	2	○	◎					
			産業社会特講(地域の歴史から生きるヒントを学ぶ)	1	2		◎	○				
			産業社会特講(メディアの時代を生きる)	1	2			◎	○			
			社会心理	2	2	◎		○				
			スポーツI	1	2							
			スポーツII	2	2							
			スポーツと健康	2	2	◎			○			
			単位互換科目I	1	2							
			単位互換科目II	1	2							
			単位互換科目III	1	2							
			単位互換科目IV	1	2							
			単位互換科目V	1	2							
			日経BP総研特別★経営★中堅中小企業経営センター冠講座	2	2	○				◎		
			認知心理	3	2			◎	○			
			ビジネスコミュニケーションI	2	2			○		◎		
			ビジネスコミュニケーションII	2	2			◎		○		
			ビジネスコミュニケーションIII	3	2	◎				○		
			ビジネスコミュニケーションIV	3	2			○		◎		
			ビジネス法	2	2	◎		○				
			法学(憲法)	1	2	◎		○				
			マーケティングマネジメント論	1	2	○		◎				
			マーケティング入門	1	2	◎		○				
			マクロ経済学	1	2	○		◎				
			ミクロ経済学	1	2	○		◎				
			余暇マネジメント	1	2			○		◎		
			ライフ・デザイン	1	2			○	◎			
			問題解決学科目群	経営情報学科専門科目	必修科目	経営情報論I	2	2	◎		○	
						経営情報論II	2	2	◎		○	
					選択必修科目	IT活用法II	2	2	◎		○	
						IT概論I	2	2	◎		○	
						IT概論II	2	2	◎		○	
						ITパスポート	2	2	◎			○
						ITビジネス入門	1	2	◎			○
						Webサービス開発	3	2	◎	◎		
						WebデザインI	2	2	◎			○
						WebデザインII	2	2	◎			◎
						Webプログラミング	3	2	○	◎		
						クリエイティブデザインI	2	2		◎		○
						クリエイティブデザインII	2	2		◎		○
						クリエイティブデザインIII	2	2	○	◎		
						グローバルビジネス入門	1	2	○		◎	
経営科学	2	2				○	◎					
経営学概論	2	2				◎	◎					
経営思想史	2	2				◎						
経営と意思決定	3	2					◎		○			
経営とセキュリティ	3	2				○	◎					
原価計算	2	2				◎						
コンピュータネットワーク活用	3	2				◎		○				
財務会計	2	2				◎		○				
情報工学概論	3	2				◎		○				
情報と職業	3	2				◎		○				
情報ネットワーク	3	2				○	◎					
情報法	2	2				◎		○				
情報倫理	2	2				◎		◎				
初級簿記	1	2				◎		○				
地域ビジネス入門	1	2				◎		○				
中級簿記	2	4				◎		○				
データサイエンスI	2	2				◎						
データサイエンスII	2	2					◎		○			
データサイエンスIII	3	2					◎		○			
データサイエンスIV	3	2				◎		○				
データ分析実践	3	2				◎			○			
データベースI	2	2				◎		○				
データベースII	2	2				○		◎				
ビジネス数学I	2	2				○	◎					
ビジネス数学II	2	2				◎						
プログラミング入門I	2	2					◎		○			
プログラミング入門II	2	2				◎		○				
プログラミング入門III	2	2				◎		○				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会に貢献する力】	DP4 表現と技能と役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】	
問題解決学 科目群	経営情報学 科専門科目	選択必修科目	ベンチャー企業論	2	2		◎		○	
		マーケティング・データ分析	2	2	◎			○		
		マーケティング・リサーチ	2	2		◎		○		
		問題解決学特講I	3	2				○	◎	
		問題解決学特講II	3	2				○	◎	
		問題解決学特講III	3	2				○	◎	
		リーダーシップ論	2	2			◎	○		
		アジア経済論I	3	2	○		◎			
		アジア経済論II	3	2	◎		○			
		アメリカ経済論	2	2	◎	○				
		NPO・NGO論	2	2	◎		○			
		韓国経済論	3	2	◎		◎			
		金融論	2	2	○	◎				
		グローバルマーケティング	2	2	◎	○				
		経営組織	3	2	◎	○				
	経済統計学	3	2	○	◎					
	現代メディア論	3	2	○	◎					
	国際経営入門	2	2	○		◎				
	国際経済学	2	2	○	◎					
	国際公共政策	3	2	◎				○		
	消費心理	2	2	◎	○					
	事業デザイン論I	3	2		○	○				
	事業デザイン論II	3	2		○	◎				
	事業構想論I	2	2	◎		○				
	事業構想論II	2	2	◎		○				
	人材マネジメント論	3	2	◎	○					
	多国籍企業	3	2	○		◎				
	地域観光論	3	2	◎	○					
	地域金融論	3	2	○	◎					
	地域産業論	3	2	○	◎					
	地域スポーツ論	2	2	◎	○					
	地域政策プランニング	2	2	◎	○					
	地域ビジネスプランニング	2	2	◎	○					
	中国経済論	3	2	◎		○				
	日本経営論	3	2	◎	○					
	日本経済論	3	2	○	◎					
	ビジネス戦略	2	2	○	◎					
	ビッグデータ活用論	3	2		◎	○				
	ブランドマネジメント	3	2		◎	○				
	ヨーロッパ経済論	2	2	◎		○				
	ロシア経済論	3	2	◎	○					
	演習科目	必修科目	ブレゼミI	1	2			○	◎	
			ブレゼミII	1	2			○	◎	
			ホームゼミI	2	2					
			ホームゼミII	2	2					
ホームゼミIII			2	2						
ホームゼミIV			2	2						
選択科目		ホームゼミV	2	2						
		ホームゼミVI	2	2						
		インターゼミI	1	2		◎	○			
		インターゼミII	1	2		◎	○			
		インターゼミIII	1	2		◎	○			
		インターゼミIV	1	2		◎	○			
		インターゼミV	1	2		◎	○			
		インターゼミVI	1	2		◎	○			
		インターゼミVII	1	2		◎	○			
ホームゼミVII	2	2								
ホームゼミVIII	2	2								
教職専門 科目群	教職に関する 科目	教育課程総論	2	1	◎	○				
		教育原理	1	2	◎				○	
		教育実習	4	3			◎	○		
		教育制度論	2	2	◎	○				
		教育方法	2	2	◎	○		◎		
		教職概論	1	2	◎		○			
		教職実践演習	4	2				◎	○	
		情報科教育法I	3	2			○	◎		
		情報科教育法II	3	2			○	◎		
		生徒指導・進路指導論	2	2		◎		○		
		特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2	2			○	◎		
		特別支援教育概論	2	1	◎	○				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境能力と先進性】	
産業社会科目群	必修科目	スタディースキル入門	1	2		◎		○		
		多摩学I	1	2			○		◎	
	特別選択必修科目	ビジネススキル入門	1	2	◎			○		
		特別講座I	2	2	◎		○			
	選択必修科目	特別講座II	2	2	◎		○			
		ITコミュニケーション入門	1	2	◎			○		
		アドバンスド・ライティング・スキル	2	2		○		◎		
		アントレプレナーシップ論	2	2					◎	
		グローバルヒストリーI	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリーII	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリーIII	2	2	◎	○				
		グローバルヒストリーIV	2	2	◎	○				
		サブカルチャー論	2	2	◎		○			
		スポーツ・マネジメント論	1	2	◎		○			
		多摩学II	1	2		◎	○			
		哲学入門	2	2	◎	○				
		ビジネス数学基礎	1	2		○		◎		
		ライティング・スキル	1	2		○		◎		
		立志人物伝	2	2			○		◎	
		立志特講I	3	2				○	◎	
		立志特講II	3	2				○	◎	
		立志特講III	3	2				○	◎	
		選択必修科目(語学)	Basic Office English I	2	2	◎			○	
			Basic Office English II	2	2	◎			○	
			English Expression I	1	2	◎				
			English Expression II	1	2	◎			○	
			Practical English Conversation I	2	2	◎			○	
			Practical English Conversation II	2	2	◎			○	
			TOEIC I	2	2		○		◎	
			TOEIC II	2	2		○		◎	
			ドイツ語I	2	2					
			ドイツ語II	2	2					
	フランス語I		2	2						
	フランス語II		2	2						
	韓国ビジネスコミュニケーションI		2	2			○	◎		
	韓国ビジネスコミュニケーションII		2	2			○	◎		
	韓国I		1	2			○	◎		
	韓国語II		1	2			○	◎		
	中国ビジネスコミュニケーションI		2	2	○				◎	
	中国ビジネスコミュニケーションII		2	2	○				◎	
	中国語I		1	2						
	中国語II		1	2						
	日本語講座初級		1	2			◎	○		
	日本語講座上級		1	2	◎				○	
	日本語講座中級I	1	2		◎		○			
	日本語講座中級II	1	2		◎			○		
	選択必修科目	キャリア・デザイン入門	1	2	○				◎	
		キャリア・デザインI	2	2	○				◎	
		キャリア・デザインII	2	2	○				◎	
		キャリア・デザインIII	3	2	○			◎		
キャリア・デザインIV		3	2	○				◎		
AP数学		1	2		○		◎			
IT活用法I		1	2	◎	◎					
Study Abroad I		1	2	◎		○				
Study Abroad II		1	2	◎		○				
Study Abroad III		1	2	◎		○				
Study Abroad IV		1	2	◎		○				
Study Abroad V		1	2	◎		○				
Study Abroad VI		1	4	◎		○				
Study Abroad VII		2	4	◎		○				
Study Abroad VIII		2	4	◎		○				
アクティブ・ラーニング実践I		1	2		◎	○				
アクティブ・ラーニング実践II		1	2		◎	○				
アクティブ・ラーニング実践III		1	2		◎	○				
アクティブ・ラーニング実践IV		1	2		◎	○				
アクティブ・ラーニング実践V		1	2		◎	○				
アクティブ・ラーニング実践VI		1	4		◎	○				
アクティブ・ラーニング実践VII		1	4		◎	○				
アクティブ・ラーニング実践VIII		1	4		◎	○				
インターンシップI		2	2			○		◎		
インターンシップII		2	2			○		◎		
業界研究I		2	2	◎						
業界研究II		2	2			○		◎		
業界研究III		3	2	○			◎			
業界研究IV	3	2		○		◎				
教育心理学	3	2	◎		○					

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境力と先進性】				
産業社会科目群	ビジネス	選択科目	教育相談	3	2	◎		○					
			経営シミュレーションゲーム	2	2	○	◎						
			コンピュータ概論	1	2	◎	○						
			サービス産業論	3	2	◎	○						
			産業社会特講(ビジョン・マネジメント論2019春)	1	2			○	◎				
			産業社会特講(米トランプ政権とグローバル社会)	1	2	◎		○					
			産業社会特講(スマートスピーカーアプリ開発)	1	2	○	◎						
			産業社会特講(地域の歴史から生きるヒントを学ぶ)	1	2		◎	○					
			産業社会特講(メディアの時代を生きる)	1	2			◎	○				
			社会心理	2	2	◎		○					
			スポーツI	1	2								
			スポーツII	2	2								
			スポーツと健康	2	2	◎			○				
			単位互換科目I	1	2								
			単位互換科目II	1	2								
			単位互換科目III	1	2								
			単位互換科目IV	1	2								
			単位互換科目V	1	2								
			日経BP総研「経営5年」中堅中小企業経営者冠講座	2	2	○				◎			
			認知心理	3	2		◎	○					
			ビジネスコミュニケーションI	2	2		○	◎		◎			
			ビジネスコミュニケーションII	2	2		◎	○		○			
			ビジネスコミュニケーションIII	3	2	◎		○		○			
			ビジネスコミュニケーションIV	3	2		○	◎		◎			
			ビジネス法	2	2	◎	○						
			法学(憲法)	1	2	◎	○						
			マーケティングマネジメント論	1	2	○	◎						
			マーケティング入門	1	2		◎	○					
			マクロ経済学	1	2	○	◎						
			ミクロ経済学	1	2	○	◎						
			余暇マネジメント	1	2		○			◎			
			ライフ・デザイン	1	2		○	◎					
			問題解決学科目群	事業構想学科専門科目	必修科目	事業構想論I	2	2	◎		○		
						事業構想論II	2	2	◎		○		
					選択必修科目	IT概論I	2	2	◎	○			
						IT概論II	2	2	◎	○			
						ITバースポート	2	2	◎				
						ITビジネス入門	1	2	◎			○	
						アジア経済論I	3	2	○		◎		
						アジア経済論II	3	2	◎		○		
アメリカ経済論	2	2				◎	○						
NPO・NGO論	2	2				◎		○					
韓国経済論	3	2				○		◎					
金融論	2	2				○	◎						
グローバルビジネス入門	1	2				○		◎					
グローバルマーケティング	2	2				◎	○						
経営学概論	2	2				○	◎						
経営思想史	2	2				◎	○			○			
経営組織	3	2				◎	○						
経済統計学	3	2				◎	◎						
原価計算	2	2				◎							
現代メディア論	3	2				○	◎						
国際経営入門	2	2				○		◎					
国際経済学	2	2				○	◎						
国際公共政策	3	2				◎	◎			○			
財務会計	2	2				◎	○						
消費心理	2	2				◎	○						
初級簿記	1	2				◎	○						
事業デザイン論I	3	2					◎	○					
事業デザイン論II	3	2					○	◎					
人材マネジメント論	3	2				◎	○						
多国籍企業	3	2				○		◎					
地域観光論	3	2				◎	○						
地域金融論	3	2				◎	○	◎					
地域産業論	3	2				○	◎						
地域スポーツ論	2	2				◎	○						
地域政策プランニング	2	2				◎	○						
地域ビジネスプランニング	2	2				◎	○						
地域ビジネス入門	1	2				◎	○						
中級簿記	2	4				◎	○						
中国経済論	3	2				◎		○					
日本経営論	3	2				◎	○						
日本経済論	3	2	◎	○									
ビジネス戦略	2	2	○	◎									
ビッグデータ活用法	3	2		◎	○								
ブランドマネジメント	3	2		◎	○								

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境力と先進性】	
問題解決学科目群	選択必修科目	ベンチャー企業論	2	2			◎		○	
		問題解決学特講I	3	2				○	◎	
		問題解決学特講II	3	2				○	◎	
		問題解決学特講III	3	2				○	◎	
		ヨーロッパ経済論	2	2	◎		○			
		リーダーシップ論	2	2			◎	○		
		ロシア経済論	3	2	◎	○				
		IT活用法II	2	2	○	◎				
		Webサービス開発	3	2	○	◎				
		WebデザインI	2	2	◎			○		
		WebデザインII	2	2	○	◎				
		Webプログラミング	3	2	○	◎				
		クリエイティブデザインI	2	2		◎		○		
		クリエイティブデザインII	2	2		◎		○		
		クリエイティブデザインIII	2	2	○	◎				
	経営科学	2	2	○	◎					
	経営情報論I	2	2	◎		○				
	経営情報論II	2	2	◎	○					
	経営と意思決定	3	2		◎		○			
	経営とセキュリティ	3	2	○	◎					
	コンピュータネットワーク活用	3	2	◎		○				
	情報工学概論	3	2	◎		○				
	情報と職業	3	2	◎	○					
	情報ネットワーク	3	2	○	◎					
	情報倫理	2	2	○	◎					
	情報法	2	2	◎	○					
	データサイエンスI	2	2	◎						
	データサイエンスII	2	2		◎	○				
	データサイエンスIII	3	2		◎	○				
	データサイエンスIV	3	2	◎	○					
	データ分析実践	3	2	◎			○			
	データベースI	2	2	◎	○					
	データベースII	2	2	○	◎					
	ビジネス数学I	2	2	○	◎					
	ビジネス数学II	2	2	◎	○					
	プログラミング入門I	2	2		◎		○			
	プログラミング入門II	2	2	◎	○					
	プログラミング入門III	2	2	◎	○					
	マーケティング・データ分析	2	2	◎			○			
	マーケティング・リサーチ	2	2		◎		○			
	演習科目	必修科目	プレゼミI	1	2			○	◎	
			プレゼミII	1	2			○	◎	
			ホームゼミI	2	2					
			ホームゼミII	2	2					
			ホームゼミIII	2	2					
ホームゼミIV			2	2						
選択科目		ホームゼミV	2	2						
		ホームゼミVI	2	2						
		インターゼミI	1	2		◎	○			
		インターゼミII	1	2		◎	○			
		インターゼミIII	1	2		◎	○			
		インターゼミIV	1	2		◎	○			
		インターゼミV	1	2		◎	○			
		インターゼミVI	1	2		◎	○			
		インターゼミVII	1	2		◎	○			
ホームゼミVII	2	2								
ホームゼミVIII	2	2								
教職専門科目群	教職に関する科目	教育課程総論	2	1	◎	○				
		教育原理	1	2	◎				○	
		教育実習	4	3			◎	○		
		教育制度論	2	2	◎	○				
		教育方法	2	2		○		◎		
		教職概論	1	2	◎		○			
		教職実践演習	4	2				◎	○	
		情報科教育法I	3	2			○	◎		
		情報科教育法II	3	2			○	◎		
		生徒指導・進路指導論	2	2		◎		○		
		特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2	2			○	◎		
		特別支援教育概論	2	1	◎	○				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

26. 実務経験のある教員一覧

専任教員

担当教員	実務経験の内容	担当科目	
		春学期	
金 美德	株式会社三井物産戦略研究所にて北東アジア地域を担当・統括し、世界潮流の把握、同地域の政治経済動向とビジネストレンドの分析、地政学リスクの助言、アジア戦略の提案などを行った。具体的には、三井物産の経営幹部・各部署・各支店、二木会(三井グループ社長会)、関係省庁向けに資料・情報の提供やブリーフィングを行った。	アジア経済論 I	
小林 英夫	日本IBM株式会社でSEおよびソリューション営業に従事後、イー・アクセス株式会社(現ソフトバンク)の創業に参画。主に組織管理や経営企画を担い東証1部上場に貢献、代表取締役副社長を務める。子会社としてイー・モバイル株式会社(現ソフトバンク・ワイモバイル事業)の創業も手掛け、経営戦略本部長・情報システム本部長、副社長を歴任。	経営組織	
佐藤 洋行	2008年から株式会社ブレインパッドにて、データ分析事業およびwebサービス開発事業のマネジメント、データ分析関連教育事業の立ち上げを行う。2014年からは、同社とヤフー株式会社とのジョイントベンチャーである、株式会社Qubital データサイエンス取締役を兼任。	データ分析実践	IT概論 I
志賀 敏宏	株式会社日立製作所 家電研究所にて、世界初の半導体撮像素子によるビデオカメラの電子回路設計、半導体開発、シミュレーション、製品化に従事。特許出願10件余。株式会社三菱総合研究所にて自動車・電機企業の新規事業の開発・マーケティングコンサルティング等70件程度に従事。高精細カラープリンタ事業等を支援。	日本経営論	
長島 剛	多摩信用金庫にて、シニア・中小企業向けの事業企画に従事。多摩市・多摩信用金庫・多摩大学の三者による「多摩市創業支援事業連携協定」締結をはじめ、多摩地域の市町村や大学・高専等との地域連携多数。多摩ブルー・グリーン賞、ブルームセンター、課題解決プラットフォームTAMA、創業支援センターTAMA等開設。	地域金融論	
中庭 光彦	日本コンベンションサービス株式会社でPCO(Professional Congress Organizer)となり国際航路会議、多摩学長国際会議等数々のMICEの企画・運営、自治体のMICE戦略策定業務に携わる。その後、株式会社プロジェクトブレーンを創業し、企画担当役員・文化事業のプランナーとして活躍。1999年のミツカン水の文化センター創立に当初から参画し、第11回(2009)日本水大賞厚生労働大臣賞を受賞。現在もアドバイザーを継続中。	地域ビジネスプランニング	地域観光論
西村 知晃	三菱マテリアル株式会社人事部門において、東京本社および九州工場(福岡)の人事・総務を経験。給与・賞与・退職金制度の改定・実施、労組折衝のほか、新卒・中途採用、社員教育を担当。また、神戸大学大学院にて金井壽宏教授のもとでリーダーシップ論他組織行動論を、平野光俊教授のもとで人的資源管理論を学ぶ。	リーダーシップ論	
バトル	株式会社三井物産戦略研究所国際情報部にて、親会社の株式会社三井物産の会長以下経営陣をはじめ、経営企画部、各商品本部(含国内・海外拠点)向けに、大中華圏におけるビジネス戦略の立案・企画と情報支援活動に参画。また、三井グループの関連企業の経営陣向けにも定期的に情報支援活動に従事した。	中国経済論	
初見 康行	株式会社リクルートHRマーケティング(現:リクルートジョブズ)において法人営業に従事。中小企業から大手企業に対し、広告媒体を使用した採用支援活動を行う。その後、自社の人事部に異動し、主に新卒採用の企画立案・実施に携わる。	キャリア・デザイン I	キャリア・デザイン III
浜田 正幸	本田技研工業株式会社、株式会社本田技術研究所にて自動車レースのF1プロジェクトのマネジメントチームに参画。その後株式会社野村総合研究所で経営コンサルタント。独立して株式会社ケアブレインズ創業。共同ファウンダー。株式会社ジェイ・フィールド創業。取締役副社長。	キャリア・デザイン I	業界研究 I
松本 祐一	株式会社シー・エンド・シーにて、国内食品・飲料メーカーの商品開発のための市場調査の企画、実査、分析等に従事。その後株式会社アイアンドディーにて、国内外のIT関連企業のマーケティング、特に顧客開発のための戦略立案・実行を担当。また、学生時代に国際NGO国境なき医師団日本事務局にて、学生NPOの立ち上げと運営を経験している。	事業デザイン論 I	
村山 貞幸	株式会社電通にて、自動車、時計、化粧品などのクライアントを担当。ヨーロッパ、アフリカ、中近東メディアキャンペーン、台湾市場参入キャンペーン、ソ連空港看板、パリVOGUEタイアップ広告、汎アジアクラシックコンサート、アジア広告企業コンベンションなどを企画・運営した。	マーケティング入門	

担当科目				
春学期	秋学期			
	韓国経済論			
	キャリア・デザイン 入門	ベンチャー企業論		
データサイエンスI	マーケティング・ データ分析			
	ビジネス戦略			
	事業デザイン論II			
	地域政策プランニ ング			
	人材マネジメント 論			
	アジア経済論II			
	キャリア・デザイン II	キャリア・デザイン IV		
インターンシップ I・II	キャリア・デザイン II	キャリア・デザイン 入門	インターンシップ I・II	消費心理
	NPO・NGO論			
	ブランドマネジメ ント	業界研究II		

非常勤教員

担当教員	実務経験の内容	担当科目	
		春学期	秋学期
秋庭 淳志	中小企業政策の中核的な実施機関に所属し、中小企業診断士として、数多くの中小企業の経営・マーケティング戦略の策定や事業計画の作成支援などに従事。マーケティングリサーチを中心とした調査や経営課題の分析を得意とする。また、多様な業種の中小企業と地域のブランドを創生する事業など、数々の新規事業を立ち上げた経験を有する。	業界研究Ⅲ	業界研究Ⅳ
荻原 哲雄	警視庁、ベンチャー企業で勤務の後、組織風土改革プロフェッショナルファーム スコラ・コンサルの創業期に参画。同社パートナーを経て、独立。職場の結束力を高めて、ビジョンを行動へ変える「バイディング・アプローチ」手法を提唱して、株式会社 チェンジ・アーティストを設立。代表に就任。20年間、3万時間のコンサルティングを展開して、1万人以上のリーダーを支援する。	産業社会特講 (ビジョン・マネジメント論 2019春)	
梶原 裕	小売向けITベンダーにて、VB.NET・C#・Java・Javascript (jQuery) を用いて小売向け基幹システムの開発、導入支援に従事。その後、フロントエンドエンジニアとしてクラウドを用いた企業向けITソリューション開発を経て、現在はETLツールやBIツールを活用したクラウドに載せるビックデータ基盤の構築を行っている。	産業社会特講 (スマートスピーカーアプリ開発)	
橘川 幸夫	1972年、音楽投稿雑誌「ロッキングオン」創刊、編集室長。1978年、全面投稿雑誌「ポンプ」を創刊、編集長。その後、メディア開発、マーケティングリサーチ、企業コンサルティングなどを勤める。1996年、株式会社デジタルメディア研究所を創業。インターネット関連の業務、コンサルを行う。「暇つぶしの時代」(平凡社)「森を見る力」(晶文社)など著作多数。	産業社会特講 (メディアの時代を生きる)	
久米 信行	イマジニア株式会社でゲーム企画開発と営業、日興証券でAI相続診断システム開発・研修担当を経て、家業のTシャツメーカー久米繊維工業の三代目経営者(現在相談役)。いちはやくITを活用し、日経インターネットアワード、経済産業省「IT経営百選」、東京商工会議所「勇気ある経営大賞」特別賞を受賞。APEC2010中小企業サミット日本代表。東商墨田支部副会長・墨田区観光協会理事として観光地域づくりに邁進。		ビジネスコミュニケーションⅡ
後藤 涼子	野村證券株式会社企業情報部を経て、ゼネラルビジネスサービス株式会社にて企業向けMS Office等各種アプリケーション、WEB制作研修等に携わる。その後ITインストラクター及びライターとして、講師活動を行うとともに、IT関連書籍の執筆多数。	データベースⅠ	
須山 憲之	大学を卒業後、百貨店、エレクトリック・コマース、外資系製造卸、商業デベロッパー、外食産業に勤務。その間、東南アジアを中心に海外現地法人に10年間勤務。主なポジションは、バイヤー、営業統括部長、ショッピングモール管理責任者、ファストフード業CEO。海外にてM&Aも手掛け、現地法人の買収なども行う。		グローバルマーケティング
西村 公児	株式会社ルーチェを経て、株式会社富士通ソーシアルサイエンスラボラトリーの共創活動支援に参画。共創活動支援のIT起業進化論に従事し、中小企業経営者のためのIT化を促進したWebコアInnovation Suiteの事業化を図る。		ビッグデータ活用法
久恒 啓一	日本航空株式会社、ロンドン空港支店、客室本部労務担当等を経て、本社広報課長、サービス委員会事務局次長を歴任。ビジネスマン時代から「知的生産の技術」研究会(現在はNPO法人)に所属し著作活動も展開。その後、新設の宮城大学教授を経て、多摩大学経営情報学部教授、多摩大学副学長を歴任。著作や雑誌への寄稿や講演など全国区で活躍。	ビジネスコミュニケーションⅠ	立志人物伝
諸橋 正幸	日本アイ・ビー・エム株式会社にて、1974-99年まで、日本語による関係DBの質問応答システム「やちまた」の開発、仮名漢字変換および文書作成管理システム「ことだま」の開発、クレーム文の分析による顧客関心の動向把握システムの開発、日英自動翻訳システムJETSの開発、テキスト情報の自動分類と可視化システム「Information Outlining」の開発などに従事。		経営とセキュリティ



27. シラバス

2019 年度シラバス 目次

《一般科目》

1 年生

English Expression I	1
English Expression II	2
IT コミュニケーション入門	3
IT 活用法 I	4
IT ビジネス入門	5
韓国語 I	6
韓国語 II	7
キャリア・デザイン入門	8
グローバルビジネス入門	9
グローバルヒストリー I-X	10
グローバルヒストリー I-Y	11
グローバルヒストリー II	12
コンピュータ概論	13
産業社会特講 (米トランプ政権とグローバル社会)	14
産業社会特講 (スマートスピーカーアプリ開発)	15
産業社会特講 (地域の歴史から生きるヒントを学ぶ)	16
産業社会特講 (ビジョン・マネジメント論 2019 春)	17
産業社会特講 (メディアの時代を生きる)	18
初級簿記	19
スタディースキル入門	20
スポーツ・体づくりとスポーツ	21
スポーツ・シェイプアップフィットネス	22
スポーツ・テニス	23
スポーツ・バドミントン	24
スポーツ・フットサル	25
スポーツ・マネジメント論	26
多摩学 I	27
多摩学 II	28
地域ビジネス入門	29
中国語 I-X	30
中国語 I-Y	31
中国語 II-X	32
中国語 II-Y	33
日本語講座初級	34
日本語講座中級 I	35
日本語講座中級 II	36
日本語講座上級	37
ビジネス数学基礎	38
ビジネススキル入門	39

法学 (憲法)	40
マーケティング入門	41
マーケティングマネジメント論	42
マクロ経済学	43
ミクロ経済学	44
余暇マネジメント	45
ライティング・スキル	46
ライフ・デザイン	47

2 年生

Basic Office English I	48
Basic Office English II	49
English Expression I	50
English Expression II	51
IT 概論 I	52
IT 活用法 II	53
IT パスポート	54
NPO・NGO 論	55
Practical English Conversation I	56
Practical English Conversation II	57
TOEIC I	58
TOEIC II	59
Web デザイン I	60
Web デザイン II	61
アドバンスド・ライティング・スキル	62
アメリカ経済論	63
アントレプレナーシップ論	64
韓国ビジネスコミュニケーション I	65
韓国ビジネスコミュニケーション II	66
キャリア・デザイン I	67
キャリア・デザイン II	68
業界研究 I	69
業界研究 II	70
金融論	71
クリエイティブデザイン I	72
クリエイティブデザイン II	73
クリエイティブデザイン III	74
グローバルヒストリー IV	75
グローバルマーケティング	76
経営科学	77
経営学概論	78
経営思想史	79

経営シミュレーションゲーム	80	マーケティング・データ分析	122
経営情報論Ⅰ	81	マーケティングリサーチ	123
経営情報論Ⅱ	82	ヨーロッパ経済論	124
国際経営入門	83	リーダーシップ論	125
国際経済学	84	立志人物伝	126
財務会計	85		
サブカルチャー論	86	3年生	
事業構想論Ⅰ	87	Web サービス開発	127
事業構想論Ⅱ	88	Web プログラミング	128
社会心理	89	アジア経済論Ⅰ	129
消費心理	90	アジア経済論Ⅱ	130
情報法	91	韓国経済論	131
情報倫理	92	キャリア・デザインⅢ	132
スポーツⅡ-シェイプアップフィットネス	93	キャリア・デザインⅣ	133
スポーツⅡ-世代間交流健康トレーニング	94	業界研究Ⅲ	134
スポーツⅡ-テニス	95	業界研究Ⅳ	135
スポーツⅡ-フットサル	96	経営組織	136
スポーツと健康	97	経営と意思決定	137
地域スポーツ論	98	経営とセキュリティ	138
地域政策プランニング	99	経済統計学	139
地域ビジネスプランニング	100	現代メディア論	140
中級簿記	101	国際公共政策	141
中国ビジネスコミュニケーションⅠ	102	コンピュータネットワーク活用	142
中国ビジネスコミュニケーションⅡ	103	サービス産業論	143
データサイエンスⅠ-A	104	事業デザイン論Ⅰ	144
データサイエンスⅠ-B	105	事業デザイン論Ⅱ	145
データサイエンスⅡ	106	情報工学概論	146
データベースⅠ	107	情報と職業	147
データベースⅡ	108	情報ネットワーク	148
哲学入門	109	人材マネジメント論	149
特別講座Ⅰ・Ⅱ	110	多国籍企業	150
日経BP 総研サステナブル経営ラボ中堅中小企業経営センター冠講座	111	地域観光論	151
ビジネスコミュニケーションⅠ	112	地域金融論	152
ビジネスコミュニケーションⅡ	113	地域産業論	153
ビジネス数学Ⅰ	114	中国経済論	154
ビジネス数学Ⅱ	115	データサイエンスⅢ	155
ビジネス戦略	116	データサイエンスⅣ	156
ビジネス法	117	データ分析実践	157
プログラミング入門Ⅰ	118	日本経済論	158
プログラミング入門Ⅱ	119	日本経営論	159
プログラミング入門Ⅲ	120	認知心理	160
ベンチャー企業論	121	ビッグデータ活用法	161

ブランドマネジメント	162
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	163
ロシア経済論	164
立志特講Ⅰ～Ⅲ	165

《演習科目》

プレゼミⅠ	166
プレゼミⅡ	167
ホームゼミ 石川 晴子	168
ホームゼミ 出原 至道	169
ホームゼミ 今泉 忠	170
ホームゼミ 梅澤 佳子	171
ホームゼミ 大森 拓哉	172
ホームゼミ 加藤 みずき	173
ホームゼミ 金 美德	174
ホームゼミ 清松 敏雄	175
ホームゼミ 久保田 貴文	176
ホームゼミ 小西 英行	177
ホームゼミ 小林 英夫	178
ホームゼミ 齋藤 S. 裕美	179
ホームゼミ 彩藤 ひろみ	180
ホームゼミ 佐藤 洋行	181
ホームゼミ 椎木 哲太郎	182
ホームゼミ 志賀 敏宏	183
ホームゼミ 下井 直毅	184
ホームゼミ 杉田 文章	185
ホームゼミ 丹下 英明	186
ホームゼミ 趙 佑鎮	187
ホームゼミ 中澤 弥	188
ホームゼミ 中庭 光彦	189
ホームゼミ 中村 その子	190
ホームゼミ 中村 有一	191
ホームゼミ 野坂 美穂	192
ホームゼミ バートル	193
ホームゼミ 初見 康行	194
ホームゼミ 浜田 正幸	195
ホームゼミ 増田 浩通	196
ホームゼミ 松本 祐一	197
ホームゼミ 水盛 涼一	198
ホームゼミ 村山 貞幸	199
ホームゼミ 良峯 徳和	200

ホームゼミ (志)	201
インターゼミ	202

《認定科目》

アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～ⅤⅢ	203
AP 数学	204
スタディーアブロードⅠ～ⅤⅢ	205
インターンシップⅠ・Ⅱ	206

《教職に関する科目》

教育課程総論	207
教育原理 (2017年度以前入学生対象)	208
教育原理 (2018年度以降入学生対象)	209
教育実習	210
教育心理学	211
教育制度論	212
教育相談	213
教育方法	214
教職概論	215
教職実践演習	216
情報科教育法Ⅰ	217
情報科教育法Ⅱ	218
生徒指導・進路指導論	219
特別活動・総合的な学習の時間の指導法	220
特別支援教育概論	221

科目名 English Expression I (English Expression I) ※2019年度入学生用**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村(そ)、石川、永木、潮田、田口、吉田、奥村 **対象学年** 1年生(2019年度入学生用) **区分** 春学期**■講義目的**

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。客観的指標としてTOEIC350点程度の実力をつけることを目標とする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を1.5時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第2講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第3講 ファッションや健康、スポーツなど興味があることや趣味などについて
- 第4講 ファッションや健康、スポーツなど興味があることや趣味などについて
- 第5講 ここまでの復習と性格や外見についての描写
- 第6講 性格や外見についての描写
- 第7講 性格や外見についての描写
- 第8講 天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所
- 第9講 天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所
- 第10講 天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所
- 第11講 自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現
- 第12講 自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現
- 第13講 自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 下記の配分で得点を付け、90点以上の場合
- 評価 A (89～80点) : 下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合
- 評価 B (79～70点) : 下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合
- 評価 C (69～60点) : 下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合
- 評価 F (59点以下) : 下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

出席20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに合わせて直接お話しすることも可能です。このクラスはプレースメントテストの結果に基づくクラス指定があり、1クラスあたりの人数は20人以下となります。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 English Expression II (English Expression II) ※ 2019 年度入学生用**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村(そ)、石川、永木、潮田、田口、吉田、奥村 **対象学年** 1 年生(2019 年度入学生用) **区分** 秋学期**■講義目的**

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。客観的指標として TOEIC400 点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を 1.5 時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

第 1 講 教員と学生のアイスブレイキング、夏休みのできごとについて語り合う

第 2 講 テレビ番組と感想、賛成不賛成、将来計画

第 3 講 テレビ番組と感想、賛成不賛成、将来計画

第 4 講 テレビ番組と感想、賛成不賛成、将来計画

第 5 講 買い物に関連する表現

第 6 講 買い物に関連する表現

第 7 講 買い物に関連する表現

第 8 講 自分の住んでいる町の名所、イベント、長所短所などについて

第 9 講 自分の住んでいる町の名所、イベント、長所短所などについて

第 10 講 自分の住んでいる町の名所、イベント、長所短所などについて

第 11 講 著名人、尊敬する人物の生まれや仕事、人生に関係する表現

第 12 講 著名人、尊敬する人物の生まれや仕事、人生に関係する表現

第 13 講 著名人、尊敬する人物の生まれや仕事、人生に関係する表現

第 14 講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション

第 15 講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 下記の配分で得点を付け、90 点以上の場合

評価 A (89 ~ 80 点) : 下記の配分で得点を付け、80 点から 89 点の場合

評価 B (79 ~ 70 点) : 下記の配分で得点を付け、70 点から 79 点の場合

評価 C (69 ~ 60 点) : 下記の配分で得点を付け、60 点から 69 点の場合

評価 F (59 点以下) : 下記の配分で得点を付け、59 点以下の場合

■評価方法

出席 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどによって直接お話しすることも可能です。このクラスはプレースメントテストの結果に基づくクラス指定があり、1 クラスあたりの人数は 20 人以下となります。

科目名 ITコミュニケーション入門 (Introduction to IT Communication) ※2019年度入学生用

サブタイトル 「MOS Excel 2013 Specialist」対策講座

担当教員 良峯、増田

対象学年 1年生(2019年度入学生用)

区分 春・秋学期

■講義目的

経営情報学部において、必須かつ基礎的なスキルである「マイクロソフトオフィス-特にエクセル(表計算)」の使い方を修得する。本学が重視するアクティブ・ラーニングにおけるプレゼンテーション力に直結するスキルの向上を目指す。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

MOS (マイクロソフトオフィススペシャリスト) 資格のExcelのスペシャリストレベル (一般レベル) の合格。特に意欲ある者は、Excelのエキスパートレベル (上級レベル) の合格を目指して欲しい。また、これらのスキルを足がかりに、自らワード (Word) やパワーポイント (PowerPoint) の資格合格を目指すことも可能である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

表計算ソフトの操作に関する基礎的な学力を養い、産業社会で要求されるさまざまな課題にデータサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

教科書の問題集を見ながらExcelを操作すること。予習・復習の時間はあわせて1.5時間以上。

■授業の概要

- 第1講 インTRODクション。Excelの用語・基本操作。
- 第2講 ワークシートやブックの作成と管理①
- 第3講 ワークシートやブックの作成と管理②
- 第4講 ワークシートやブックの作成と管理③ セルやセル範囲の作成①
- 第5講 セルやセル範囲の作成②
- 第6講 セルやセル範囲の作成③ テーブル①
- 第7講 テーブル② 数式や関数の適用①
- 第8講 数式や関数の適用②
- 第9講 数式や関数の適用③
- 第10講 グラフやオブジェクトの作成①
- 第11講 グラフやオブジェクトの作成②
- 第12講 グラフやオブジェクトの作成③
- 第13講 模擬試験 (期末試験①)
- 第14講 模擬試験 (期末試験②)
- 第15講 模擬試験 (期末試験③)

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、コメントを記入することでフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 下記、配分により90点以上
 評価 A (89～80点) : 下記、配分により80点以上89点以下
 評価 B (79～70点) : 下記、配分により70点以上79点以下
 評価 C (69～60点) : 下記、配分により60点以上69点以下
 評価 F (59点以下) : 下記、配分により59点以下

■評価方法

出席25%、課題25%、期末等に授業で行う模擬試験の結果50%。ただし、出席は全体の2/3以上、課題も全体の2/3以上を最低条件とする。模擬試験は、合格相当:30～50点。合格圏内:20～29点。合格圏外:0～19点。

■留意点

①本科目は、2019年度入学者専用の科目である。②履修制限科目であるので履修希望者は必ず初回講義に参加すること。クラス指定を実施するので、掲示によるクラス分け表を確認すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 IT 活用法 I (Utilizing Method of IT I)**サブタイトル** ゲームと商品開発を通してデータに触れる**担当教員** 出原、彩藤**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義の目的は、ゲームや商品開発の実験を通して、実社会で活躍するために必要な情報の捉え方、考え方を身につけることにある。

■講義分類

ビジネス ICT、ビジネス創造、社会人育成

■到達目標

チームでさまざまな意見を出し合う中で、主体的に意思決定に関与できる。表面的に観察される現象に対して、戦略的な行動をとることができる。データに基づいた議論ができ、そのために表計算ソフトウェアを活用できる。自分の意見を分かりやすく伝えることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ゲームや商品開発の実験を通して、実社会で活躍するために必要な情報の捉え方、考え方を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

各回に示す内容について、チームごとに 90 分の議論を行い、記録する。(一部個人課題)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 ゲームルールの解説
- 第3講 ゲームの実験
- 第4講 ゲームのデータ分析
- 第5講 チーム戦略のプレゼンテーション
- 第6講 プロトタイピングによる商品開発
- 第7講 プロトタイピング(実践)
- 第8講 プロトタイピング(実践と分析)
- 第9講 プロトタイピング プレゼンテーション
- 第10講 データに基づいた商品開発(概説)
- 第11講 プロトタイピング(実験計画)
- 第12講 プロトタイピング(実験・分析)
- 第13講 プロトタイピング(分析)
- 第14講 プロトタイピング(分析)
- 第15講 プロトタイピング プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対して、ウェブ上でコメントする。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

欠席理由を問わず 3 分の 2 以上の出席を前提として、平常点 40 点、レポート (3 回) 各 20 点で評価する。

■留意点

- ・初回講義で全体解説及び選抜を行うため、履修希望者は必ず初回講義に出席すること。特段の事情がある場合を除き、初回講義に出席していないものの受講を認めない。
- ・コンピュータを持参しない者の受講を認めない。

科目名 IT ビジネス入門 (Introduction to IT Business) ※2018年度以降入学生用**サブタイトル** 経営情報学科への誘い**担当教員** 小西、久保田他**対象学年** 1年生※2018年度以降入学生用**区分** 春・秋学期**■講義目的**

経営情報学科では、ITを活用したビジネスについて学びます。この講義では、ITを専門に扱うIT企業はもちろん、ITを活用してビジネスを行う一般企業においても、必要不可欠な知識や技術の「きほん」を優しく解説します。そしてこの講義を通じて「経営情報学科」での学びを誘います。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

IT企業や、ITを活用してビジネスを行う一般企業で必要とされる、ITに関する基本的な用語を理解し、身の回りの具体事例を挙げるができるようになることを目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

IT企業やITを活用してビジネスを行う企業について、グローバルに展開する具体事例を挙げて説明出来るようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

次回授業のテキスト該当部分の予習及び、当回授業のテキスト該当部分の復習(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 ITビジネスのきほん
- 第2講 経営のきほん
- 第3講 会計のきほん
- 第4講 マーケティングのきほん
- 第5講 技術開発のきほん
- 第6講 プログラミングのきほん
- 第7講 コンピュータのきほん
- 第8講 システムのきほん
- 第9講 ソフトウェアのきほん
- 第10講 ハードウェアのきほん
- 第11講 オペレーションのきほん
- 第12講 マルチメディアのきほん
- 第13講 データベースのきほん
- 第14講 ネットワークのきほん
- 第15講 セキュリティのきほん

■フィードバックの要領

授業内で実施するミニレポート等を返却する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ITビジネスの用語について詳しく理解し、グローバルな具体事例を挙げて説明できる。

評価 A (89～80点) : ITビジネスの用語について詳しく理解し、身の回りの具体事例を挙げて説明できる。

評価 B (79～70点) : ITビジネスの用語について理解し、身の回りの具体事例を挙げて説明できる。

評価 C (69～60点) : ITビジネスの用語について理解しているが、具体事例を挙げるできない。

評価 F (59点以下) : ITビジネスの用語について理解ができず、その具体事例を挙げることもできない。

■評価方法

出席 (50%)、授業内ミニレポート (50%)

■留意点

毎回出席し、授業内ミニレポートを必ず提出してください。予習復習や授業内の発言によってボーナス点を付与することがあります。欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しません。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 韓国語 I (Korean I)

サブタイトル ハングルのマスター

担当教員 趙、高

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

多摩大学では世界潮流としてのアジアダイナミズムを体得すべく諸々の教育プログラムを提供しているが、アジアの第一関門は隣国の韓国であろう。本講義では韓国語をはじめて学ぶ学生を対象に、ハングル文字と発音、基礎的文法やコミュニケーションを学ぶことを目的とする。韓国語の単語を一つ知るごとに、フレーズを一つ学ぶごとに、学生の目に映る韓国や韓国人は変わってくるものである。韓国語のみならず韓国や韓流を知りたい意欲ある学生の参加を望む。本講義を1年間積極的に参加することで、中級レベルの韓国語も扱う韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱの学習につながることを期待するものである。

■講義分類

ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

①ハングル文字や発音を徹底してマスターした後、ハングル能力検定試験5級レベルの語彙や文法表現を学習する。②韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ・韓国経済論・アジア経済論Ⅰを学ぶ際の土台づくり、③来年度の6月に行われるハングル能力検定試験5級を目指し、その実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

韓国語の文字であるハングルの学習することで韓国語の読み書きができるようになり、文法や語彙など基本的な表現を学習することで簡単な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(毎回学習した内容の小テスト)

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前には、その回の該当課の本文をスムーズに読めるようにすること。また、その回に小テストを行う際には、その回の授業が始まる前に教科書の練習問題を復習すること(各1.3時間学習相当)。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション、韓国語について

第2講 2課「子音②」と3課「子音③」

第3講 4課「子音④」と5課「合成母音」

第4講 6課「パッチム」と7課「連音化」

第5講 8課「～는～입니다」/9課「～라고 합니다」/鼻音化

第6講 10課「～가～예요」/11課「～를～해요」/濃音化

第7講 12課「해요体①」/13課「해요体②」/ㅎの弱音化

第8講 14課「～이십니다/～이세요」/15課「～가 아니예요」

第9講 16課「～으십니다/～으세요」/17課「안～」

第10講 18課「일, 이, 삼」/19課「이것, 그것, 저것」

第11講 20課「있다/없다」/21課「하나, 둘, 셋」

第12講 22課「앞, 뒤, 옆」/23課「잘하다/못하다」/激音化

第13講 24課「～으세요」/25課「～을까요?」

第14講 26課「～ㅂ어요」/27課「아직 안～ㅂ어요」

第15講 映画鑑賞、個人面談

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ハングルの完全マスターし、文法を高度に理解し、基本ボキャブラリーが豊富である

評価 A (89～80点) : ハングルのマスターし、基本的文法を良く理解、基本ボキャブラリーを習得している

評価 B (79～70点) : ハングル文字や発音を一定程度マスターしており、基本的文法を一定程度理解している

評価 C (69～60点) : ハングルの基本的なスムーズには読めて、基本的文法のいくつかを習得している

評価 F (59点以下) : ハングルのスムーズに読めず、あるいは読めるものの欠席が多い

■評価方法

・授業での毎回の小テストの総計点(100%)

・出席を疎かにすると毎回実施する小テストを受けられないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

・語学の学習には地道さ、根気強さが必要であるため、なるべく毎回の出席を望む。これまでの経験だと、出席が良好な学生が成績も上位であり、毎回の出席こそ語学上達の近道である。一定の出席に満たない場合、学期途中においてもFになる可能性を警告する。

・授業では随時、筆記や発音の小テストがあるが、決して高いハードルではない。

・小テストに対してフィードバックを行う。

科目名 韓国語 II (Korean II)**サブタイトル** 初級単語と文法の学修**担当教員** 趙、高**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

多摩大学では世界潮流としてのアジアダイナミズムを体得すべく諸々の教育プログラムを提供しているが、アジアの第一関門は隣国の韓国であろう。本講義では韓国語をはじめて学ぶ学生を対象に、ハングル文字と発音、基礎的文法やコミュニケーションを学ぶことを目的とする。韓国語の単語を一つ知るごとに、フレーズを一つ学ぶごとに、学生の目に映る韓国や韓国人は変わってくるものである。韓国語のみならず韓国や韓流を知りたい意欲ある学生の参加を望む。本講義を1年間積極的に参加することで、中級レベルの韓国語も扱う韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱの学習につながることを期待するものである。

■講義分類

ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

①ハングル文字や発音を徹底してマスターした後に、ハングル能力検定試験5級レベルの語彙や文法表現を学習する。②韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ・韓国経済論・アジア経済論Ⅰを学ぶ際の土台づくり。③来年度の6月に行われるハングル能力検定試験5級を目指し、その実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

韓国語の文字であるハングルを学習することで韓国語の読み書きができるようになり、文法や語彙など基本的な表現を学習することで簡単な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(書いた作文の発表)

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前には、その回の該当課の本文をスムーズに読めるようにすること。また、その回に小テストを行う際には、その回の授業が始まる前に教科書の練習問題を復習すること(各1.3時間学習相当)。

■授業の概要

- 第1講 28課「～고」/29課「～고 싶다」
- 第2講 30課「吳～」/31課「〇変則」
- 第3講 32課「～지요/죠」/33課「～겠」
- 第4講 34課「～바니다만」/35課「～요/요?」
- 第5講 36課「～하고 같다」/37・38課「模擬試験(筆記)」
- 第6講 39・40課「模擬試験(聞き取り)」/会話練習(1)「自己紹介」
- 第7講 会話練習(2)「日課」
- 第8講 会話練習(3)「将来の夢・希望」
- 第9講 会話練習(4)「体験・経験」
- 第10講 会話練習(5)「お正月」
- 第11講 会話練習(6)「番組」
- 第12講 会話練習(7)「ショッピング」
- 第13講 会話練習(8)「パソコンとインターネット」
- 第14講 会話練習(9)「語学」
- 第15講 映画鑑賞、願書作成

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

- 評価A+(90点以上)：ハングルの完全マスターし、文法を高度に理解し、基本ボキャブラリーが豊富である
- 評価A(89～80点)：ハングルのマスターし、基本的文法を良く理解、基本ボキャブラリーを習得している
- 評価B(79～70点)：ハングル文字や発音を一定程度マスターしており、基本的文法を一定程度理解している
- 評価C(69～60点)：ハングルの基本的にスムーズには読めて、基本的文法のいくつかを習得している
- 評価F(59点以下)：ハングルのスムーズに読めず、あるいは読めるものの欠席が多い

■評価方法

- ・授業での毎回の小テストの総計点(100%)
- ・出席を疎かにすると毎回実施する小テストを受けられないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

- ・語学の学習には地道さ、根気強さが必要であるため、なるべく毎回の出席を望む。これまでの経験だと、出席が良好な学生が成績も上位であり、毎回の出席こそ語学上達の近道である。一定の出席に満たない場合、学期途中においてもFになる可能性を警告する。
- ・復習を重視すること。
- ・授業では随時、筆記や発音の小テストがあるが、決して高いハードルではない。
- ・小テストに対してフィードバックを行う。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶ キャリア・デザイン入門 (Introduction to Career Design)

サブタイトル ▶▶ 自分の人生を考える

担当教員 ▶▶ 浜田、小林 (英)

対象学年 ▶▶ 1年生以上

区分 ▶▶ 秋学期

■講義目的

キャリア・デザインとは、まさに人生設計のことである。これまで大学に入学するまでは、ある程度既定路線を進んでくれば良かったが、この先は決まった線路も道路もない。自ら自分の進む方向を決めて、自らそこに道を作って、自分の足で歩いていくしかない。その方向性と道を作り始めないと、大学卒業後の生活(人生)ができなくなってしまう。本講では、自分の将来設計の際に考えなければならない様々な事柄について現状認識するとともに、様々な人物の職業観を学ぶ。その上で、社会と自分がどう関わっていくのかを考え、大学卒業後に一社会人として、精神的・経済的に自立して、社会に貢献していく自分自身のキャリアをデザインすることを目的とする。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

自身の置かれている社会環境の現状や自らの志を理解し、職業観を醸成して自分自身の将来ビジョンをイメージするとともに、そのビジョン実現に向けた方策ならびに課題や大学での学びが明確になっている。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

自分の将来を、自分の人生という側面と社会の中での位置づけから理解し、社会の発展に貢献する力と高い志を身につけることができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(ミニツッパーパー、質問受付)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、指定図書や授業資料に目を通し疑問点を明確にする。指定時は事前課題実施(1.5時間)。授業後に、講義内容やノート整理、未解消疑問点は自己調査や教員質問等で解消(1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 インTRODクシヨン
- 第2講 社会人基礎力を学ぶ
- 第3講 正規社員としての仕事とアルバイトの違いを学ぶ
- 第4講 将来必要なおカネについて学ぶ
- 第5講 おカネを稼ぐ方法を学ぶ
- 第6講 仕事の社会的意義について学ぶ
- 第7講 地球社会の現状と自身の就業観を考える
- 第8講 授業内中間試験
- 第9講 企業経営者の職業意識を学ぶ
- 第10講 企画職の職業意識を学ぶ
- 第11講 芸術専門職の職業意識を学ぶ
- 第12講 医療関係者の職業意識を学ぶ
- 第13講 技能職人の職業意識を学ぶ
- 第14講 職業従事において困難に直面する人の意識を学ぶ
- 第15講 授業内期末試験

■フィードバックの要領

毎回のコメントシートや課題レポートの講評、質問・意見への回答を翌講義回に行う

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 前半(第二講～第八講)と後半(第九講～第一五講)の合計が90点以上

評価 A (89～80点) : 前半と後半の合計が80点以上90点未満

評価 B (79～70点) : 前半と後半の合計が70点以上80点未満

評価 C (69～60点) : 前半と後半の合計が60点以上70点未満

評価 F (59点以下) : 前半と後半の合計が60点未満

■評価方法

出席・課題(40%) 到達度確認テスト(60%)

■留意点

後半の授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回提出のコメントシートをA(授業を聴き良い気づきがあった)、B(授業を聴いていた)、C(授業を聴いていたとは思えない)の3段階評価し授業貢献点とする。Aは加点対象(6点)、Bが標準(4点)、Cは減点(-4点)、欠席は0点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。後半の授業貢献点は最大25点。

科目名 グローバルビジネス入門 (Introduction to Global Business)**サブタイトル** 世界と日本を知る**担当教員** 金、中村(そ)、趙、バートル、下井、水盛、石川 **対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

担当教員7名が、「世界から見た日本」と「日本から見た世界」という視点から、日本と世界、政治と経済、企業とビジネス、文化とマーケティングなどをテーマに最前線事例を踏まえて解説する。また、日本や世界を高度産業社会に再構築するための問題点と解決策を考察する。主な目的は、事業構想学科への誘導である。また、グローバルビジネス系科目や特別講座Ⅰ・Ⅱ(寺島学長監修リレー講座)の基礎学習や社会科学の基本的な考え方を学ぶこと。さらに、自らの立ち位置や、将来進むべき方向性を思索することである。主なキーワードは、世界潮流、時代認識、アジア・ユーラシアダイナミズム、日中韓、国際経済、国際経営、国際協力、日本企業のグローバル戦略、グローバルマーケティング、若者の文化と留学である。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

①グローバルビジネス系統科目の特性を理解するとともに、他の系統科目との関連性を把握する。②2年時の特別必修科目である「特別講座ⅠとⅡ(共通テーマ「世界潮流と日本の進路」)」の基礎知識を習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

「世界から見た日本」と「日本から見た世界」の視点から政治・経済・企業・文化の問題点と解決策を考え、グローバルビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の発展に貢献できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (教員7名によるオムニバス形式で授業を行う。)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

2講義終了毎にレポートを提出すること(2時間)。合計7レポート提出することとなる。

■授業の概要

第1講 ガイダンス

第2講 「アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか(1)」(金美德)

第3講 「アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか(2)」(金美德)

第4講 「海外に羽ばたこうー若者留学事情を中心に」(趙佑鎮)

第5講 「東アジア共同体一日中韓関係をを中心に」(趙佑鎮)

第6講 「日本経済はどのように推移してきたか」(下井直毅)

第7講 「貿易についての考え方は、どう変わってきたか」(下井直毅)

第8講 「中国経済と日本企業のビジネス戦略(1)」(バートル)

第9講 「中国経済と日本企業のビジネス戦略(2)」(バートル)

第10講 「中国の公共投資と景気浮揚」(水盛涼一)

第11講 「新規事業分野の開拓にみる日中ビジネス思想の比較」(水盛涼一)

第12講 「ユニークなおもしろ海外CM—文化はCMにどのように反映されるか」(石川晴子)

第13講 「効果的な英語コマーシャルの作り方—キャッチコピー、スローガン」(石川晴子)

第14講 「海外テレビCMの特徴とその分析および日本のテレビCMとの比較」(中村そのこ)

第15講 「海外での屋外PR企画および大規模イベントとテレビCMの関係」(中村そのこ)

■フィードバックの要領

各教員が、レポートに対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+(90点以上):出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、90%以上であること。

評価A(89~80点):出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、89~80%以上であること。

評価B(79~70点):出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、79~70%以上であること。

評価C(69~60点):出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、69~60%以上であること。

評価F(59点以下):出席(60%)と7レポート(40%)の合算点が、59%以下であること。

■評価方法

出席率(60%)と合計7つのレポート(40%)に基づいて評価する。担当教員7名が、2講義ずつオムニバス形式で合計14講義を行い、それぞれレポート(A4用紙1枚以上)の提出を求める(合計7レポート:A4用紙7枚以上)。

■留意点

①第1回目のガイダンスに必ず出席すること。理由は7名の担当教員によるオムニバス形式の講義が第2回目より開始されるため受講要領を承知しておく必要があるため。②PC・携帯電話・音楽イヤホンは使用を禁止する。③私語・帽子着用・飲食は禁止する。④遅刻及び途中退室は厳禁とする。⑤レポートは、1教員の講義(2回連続講義)が終了し、1週間後の木曜日16時30分までに教務課に提出すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 グローバルヒストリー I-X (Global History I)

サブタイトル 前近代の日本における国際認識と文化的特質

担当教員 大森 映子

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

歴史を学ぶことは、過去の事実を明らかにするだけでなく、現代社会を客観化することでもある。ここでは、過去の日本社会の特質を歴史的に振り返りながら、現代社会がかかえている矛盾点を明らかにし、問題解決の方法を探る糸口を考える。今年度は主として次の2点に注目したい。第一は、これまで漠然と「思い込み」で理解されてきた日本文化の実像を明らかにし、文化的特質を再検討すること、また第二は、前近代における日本の政治的な観点から対外政策を軸に、国際認識のあり方を辿ることである。このような観点から日本の政治や文化を歴史的に見直していくことにより、現代社会がかかえる諸問題を浮き彫りにしていきたい。

■講義分類

社会人力育成、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標

(1) 過去の事実に向き合うことの重要性を理解する。(2) 歴史認識は、現代社会の矛盾点を発見する手掛かりになる事を理解する。(3) 歴史を踏まえた上で、現状分析を試み、考え抜く力を養う。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

歴史的なものの見方や分析の仕方を養い、現代社会における諸問題の発見と対処能力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

復習を重視し、授業内容を振り返って簡単なレポートにまとめる。また次の授業に備えて提示された重要用語について予習しておく。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 15回の授業の方針と概要
- 第2講 仏像と絵画からみた日本文化の特質—CG技術による日本文化の復元
- 第3講 水中考古学の世界—沈没船の調査からみた中世社会
- 第4講 伝統的建造物と自然災害(1)—台風被害
- 第5講 伝統的建造物と自然災害(2)—地震被害
- 第6講 世界遺産とは何か—文化の継承をめぐる国際協力
- 第7講 日本における世界文化遺産—木造建造物の特徴
- 第8講 中間のまとめ—日本の伝統文化の特質について
- 第9講 16世紀におけるヨーロッパとアジアの出会い
- 第10講 豊臣秀吉の対外政策—二度にわたる朝鮮侵略戦争
- 第11講 江戸時代における国際認識(1)—いわゆる「鎖国」体制と「四つの口」
- 第12講 江戸時代における国際認識(2)—海外情報と日本の技術
- 第13講 近代日本の問題点—急速な欧米化と伝統文化
- 第14講 近代日本と周辺地域—国際社会における日本の立場と周辺諸地域への政策
- 第15講 まとめ—前近代における国際認識と伝統文化

■フィードバックの要領

レポートや提出物については、コメントし、共有できるものは授業内で紹介する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 授業の趣旨と内容を十分に理解し、自分の意見を持てるようになった。
 評価 A (89～80点) : 授業の趣旨と内容を、基本的に理解し、自分の意見を持てるようになった。
 評価 B (79～70点) : 授業の趣旨と内容を、一応理解できた。
 評価 C (69～60点) : 不十分なところはあるが、授業の趣旨は一応理解できた。
 評価 F (59点以下) : 授業の趣旨、内容ともに理解できていない。

■評価方法

平常点 60% (授業内で求める簡単なレポート、およびワークシートを重視する)、中間レポート (グループディスカッションを含む) 20%、最終レポート (グループディスカッションを含む) 20%を原則とする。

■留意点

①履修希望者多数の場合は人数制限を行うため、初回は必ず出席すること。②受講者数によって一部授業の順序の入れ替えをする場合があるので、注意すること。

科目名 グローバルヒストリー I-Y (Global History I)**サブタイトル** 地球規模で考えてみよう**担当教員** 小林 昭菜**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

外国の歴史は現代の私たちの生活とは何の関連もないのか？このような問いを念頭に置き、人、集団、国家がいかなる「つながり」によって形作られ、展開してきたのかを学習し、今生きている世界や文化がどのような「つながり」によって形成されているのかを理解する。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス創造、顧客理解

■到達目標

現在生きている世界の政治、経済、社会の構造を体系的に理解できるようにする。新聞を読む習慣をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会で経験を積むためには、まず知識をつけそれを理解したのち、理解した内容に思考を重ね物事を判断していく必要がある。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習
 [個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()
 [ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()
 [グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()
 [上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業で指示するテキストを事前に読み、毎回感想を500字程度で記入し授業に持参すること。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション。グローバルヒストリーとは何か。
 第2講 地球に誕生した様々な文明。
 第3講 ヒト・モノの大規模な移動の始まり。
 第4講 不平等な社会構造の形成とその歴史。平等へ向けた取り組み。
 第5講 神は一人なのかそれ以上いるのか。世界の宗教と宗教をめぐる戦争。
 第6講 ○○人とは何で分けられるのか。国民国家とはなにか。
 第7講 科学技術の進歩と戦争。
 第8講 お金の価値って何？資本主義と経済。
 第9講 不平等な格差社会は変えられる？社会主義、共産主義、計画経済。
 第10講 もう一つの世界戦争。なぜ二つ目の戦争は起こったのか。
 第11講 兵器を作り「にらみ合う」戦争。核の戦争とイデオロギーの戦争。
 第12講 アジアに冷戦は持ち込まれたのか。
 第13講 世界をつなぎ合わせていく時。冷戦の終焉。
 第14講 グローバル化とはなにか。
 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

授業の感想やコメントに対して授業内でフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 出席率と授業での積極的発言や学習態度が非常に良い。試験の出来 9割以上。
 評価 A (89～80点) : 出席率良好、授業での積極的発言や学習態度が良い。試験の出来 8割。
 評価 B (79～70点) : 出席率 8割、授業での積極的発言や学習態度まあ良い。試験の出来 6～7割。
 評価 C (69～60点) : 出席率 7割、授業での積極的発言や学習態度は良い。試験の出来 5割。
 評価 F (59点以下) : 欠席が多く授業での積極的発言や学習態度が悪い。試験の出来 4割以下。

■評価方法

授業内で毎回課す課題(プリントを読んだ感想):50%、授業への積極的態度や発言:25%、期末試験:25%。

■留意点

新聞記事を積極的に読むことを推奨する授業である。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 グローバルヒストリー II (Global History II)

サブタイトル 国際社会のなかの日本とアジア

担当教員 水盛 涼一

対象学年 1年生以上

区分 秋学期

■講義目的

近くて遠い国、中国。現在の日本にとって中国は生産拠点や市場として無視できない存在でありながら、歴史解釈や領土について大きな問題を抱えています。そこで本講義では日本がどのように中国と接してきたのか注目し、日中関係の展開を解説します。大まかに前半では近代から現代にいたる歴史を説明し、日本と中国の類似する点および相違する点を明確にします。また後半では現在の中国が置かれている諸問題を概略し、現在の中国の人々のインターネットでの言論を紹介、彼らがどのような思考をしているのか確認します。その過程で、現代における異文化理解の難しさ、また交流の重要性を理解していきます。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

グローバル化の時代において、情報の海に飲み込まれることなく自ら思考して異文化を理解するスタンスを涵養する。その格好の題材として、中国の心性を把握し、日本や諸外国への相対的な視点を獲得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

世界の歴史は諸文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎次にわたって冒頭にミニッツペーパー、最後に講義レビューの提出が求められます。また一か月の各節終了時には講義内で MBR (Monthly Brief Report) を作成しますが、その予習が必須となります。(1.5時間)

■授業の概要

第1講 ガイダンス

第2講 略説中国史——中国の地形と少数民族

第3講 中国の試験地獄——社会体制と官僚試験 第一回

第4講 中国の試験地獄——社会体制と官僚試験 第二回

第5講 中国の試験地獄——社会体制と官僚試験 第三回

第6講 中国の試験地獄——社会体制と官僚試験 第四回

第7講 歴史時代の長い好景気 第一回

第8講 歴史時代の長い好景気 第二回

第9講 歴史時代の長い好景気 第三回

第10講 歴史時代の長い好景気 第四回

第11講 中華と夷狄——国境線のない世界の自己と他者 第一回

第12講 中華と夷狄——国境線のない世界の自己と他者 第二回

第13講 中華と夷狄——国境線のない世界の自己と他者 第三回

第14講 中華と夷狄——国境線のない世界の自己と他者 第四回

第15講 そして現在の日本と中国へ

■フィードバックの要領

毎次にわたって BRD (Brief Report of the Day) を学生・教員間で往復します。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 90点以上。

評価 A (89～80点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 89～80点。

評価 B (79～70点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 79～70点。

評価 C (69～60点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 69～60点。

評価 F (59点以下) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 59点以下。

■評価方法

MBRの内容(60%)、講義レビューや海外文化理解を通して見た授業に取り組む姿勢・積極性(40%)

■留意点

①講義は毎回、前週に配布した資料を読み込んでいることを前提として進行する。資料の持参を忘れた者、読んでこなかった者は、原則として当日の受講を認めない。②第2回までに重要不可欠な点を説明するとともに、連続性を重視した積み上げ型の講義であるため、第2回の講義までに全く出席しなかった者、さらに途中で欠席3回を超えた者は、本講座の履修を認めない。

科目名 コンピュータ概論 (Introduction to Computers)**サブタイトル** コンピュータの仕組みを理解して有効に利用する**担当教員** 中村 有一**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

この講義では「コンピュータはどういう機械か」ということを学ぶ。受講者はコンピュータに関する知識を持たないという前提で講義する。講義の狙いは、コンピュータに親しみを持ってもらうこと。コンピュータに関する広告や新聞記事に、怖れず目を通せるようになることである。講義内容は、コンピュータとは何か、コンピュータの歴史、コンピュータの構成要素などである。最新の話題より基礎的な知識に重点を置く。この知識がないとコンピュータを使えないということではないが、コンピュータを勉強する上で必須となる知識が中心となる。文系・理系とわけると理系っぽい講義の一つであるが、文系の人にも知っておいてほしい内容がほとんどである。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

コンピュータに関する基礎的な用語が理解できていること。コンピュータの仕組みがだまかに把握できていること。2進数などの演算の仕方が理解できていること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

コンピュータに関して基礎的・教養的な知識を習得し、実社会に出てからも必要な考え方を身に着ける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5時間) 復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5時間)

■授業の概要

第1講 「コンピュータとは何か」

第2講 「コンピュータの種類と構成要素」

第3講 「ビット、バイト、ヘルツ」

第4講 「コンピュータの歴史(誕生)」

第5講 「コンピュータの歴史(発展)」

第6講 「最新ハードウェアの話」：PC部品のスペックの読み方を概観する。

第7講 「コンピュータの歴史(利用者視点)」

第8講 「インターネットの話」：仕組みとその意味、発展の歴史

第9講 「コンピュータは0、1で勝負する(1)」：コンピュータの基礎は2進数

第10講 「コンピュータは0、1で勝負する(2)」：「真か偽」を扱う論理演算について学ぶ。

第11講 「数や文字とその表現」：数値や文字をコンピュータで扱う仕組みについて話す。

第12講 「マンマシンインタフェースと図形や音」

第13講 「人間の思想を伝えるために」：OSとプログラミング言語について取り上げる。

第14講 「データベースの話」：大量のデータを蓄え、整理する

第15講 「近未来の話」：新しい原理のコンピュータを取り上げる

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：ほぼ完ぺきな理解度と評価

評価 A (89～80点)：上位の評価

評価 B (79～70点)：中位の評価

評価 C (69～60点)：下位の評価

評価 F (59点以下)：不十分な理解度と評価

■評価方法

学期末試験 70% レポートなど平常点 30%

■留意点

復習してわからない点などがあれば、できるだけ授業中に質問して解決すること。その他、授業と並行して、入門書レベルの本を数冊読むことを勧める。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名	産業社会特講 (米トランプ政権とグローバル社会) (Special Lecture on Industry Society Trump Administration and Global Society)		
サブタイトル	激変する国際社会と私たち		
担当教員	萩野 博司	対象学年	1年生以上
		区分	春学期

■講義目的

政治経験を持たないトランプ氏を大統領に選び、内向き志向を強める米国。難民問題に揺れ、英国が離脱を決めた欧州連合 (EU)。経済力、軍事力を背景に世界秩序のリーダーを目指す中国。核開発を急ピッチで進める北朝鮮、徴用工問題などで日本との緊張が続く韓国。そして、「イスラム国 (IS)」こそ壊滅に追い込んだものの、依然として続くテロの恐怖。世界の各地で秩序や常識を覆す事態が進んでいる。それは、日本の企業社会にも深刻な影響を及ぼしている。こうした激動の根底にあるもの、これからの方向について、新聞やウェブなどのメディアも活用しながら探っていく。企業訪問の直前になって新聞を読みだす「にわか勉強」では得られない内容の濃いものとし、授業にはその時々トピックを盛り込む。それぞれの問題解決力を高めるため、グローバル化に伴って日本政府や企業が解決を迫られる問題も想定し、どのように取り組んだらいいのかを考えてもらう。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント

■到達目標

大きく変わるグローバル社会の現状を理解し、自らの判断能力を高める。幅広い情報を取り込み、分析することに取り組む。具体的には次の通り。1. 欧米やアジアの変容について、歴史的な視点で考える。2. メディアの情報を鵜呑みにするのではなく、批判的に吸収するメディアリテラシーを得る。3. 自らの体験を世界的な変化と連動させてとらえ直し、産業や社会の将来像を考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

大きく変動する世界の現状を理解し、その背景にある各地域の経済、政治、社会構造や歴史を深く理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

グローバル経済に関連する事項に関する記事を事前に読んでおくとともに、授業で返された資料を確認する。さらに次回のテーマに関する記事を必ず1本読む (1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 情報の取り込み方 (テーマ: トランプ政権)
- 第2講 日本経済の現況1 = アベノミクス前夜
- 第3講 日本経済の現況2 = アベノミクス登場
- 第4講 日本経済の現況3 = 悪魔のシナリオ
- 第5講 グローバル経済と日本1
- 第6講 グローバル経済と日本2
- 第7講 米国経済・政治の現況
- 第8講 米国各論 = 格差社会
- 第9講 米国各論 = 財政危機
- 第10講 欧州経済の現況
- 第11講 欧州各論 = 曲がり角の通貨統合
- 第12講 アジア経済の現況1 = 中国
- 第13講 アジア経済の現況2 = 韓国、ASEAN
- 第14講 日本の将来
- 第15講 補論

■フィードバックの要領

提出されたレポート類はコメントを付して返却する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 授業に積極的に関与し、試験においてもトップクラスの成績を上げた者。

評価 A (89 ~ 80 点) : 上記に順ずる成績を取めた者。

評価 B (79 ~ 70 点) : 授業における関与は物足りないものの、平均レベルの成績を取めた者。

評価 C (69 ~ 60 点) : 最低限の知識は得たと認められる者。

評価 F (59 点以下) : 授業への関与度、試験の成績などから判断し、履修したとは認められない者。

■評価方法

以下のような観点から判定する。1. 問題の概要を理解しているか。2. 自らの視点から論じられるか。3. 説得力のある説明ができるか。評価の配分は次の通り = 授業姿勢 50%、小テスト・レポート 10%、期末試験 : 40%

■留意点

科目名	産業社会特講 (スマートスピーカーアプリ開発) (Special Lecture on Industry Society Developing Applications of Smart Speaker)		
サブタイトル	Alexa スキル開発		
担当教員	梶原 裕	対象学年	1 年生以上
		区分	春学期

■講義目的

近年会話を利用した新たなテクノロジーとして台頭しているスマートスピーカーと音声アシスタントがあります。なかでも有名なものが、Amazon が開発しているスマートスピーカー Echo と音声アシスタント Alexa (アレクサ) です。Alexa が使う利用者 (エンドユーザー) のみでなく開発者にも Alexa のプラットフォームは開放されており、誰でも Alexa を使った機能「スキル」を開発し、公開することができます。この講義では、Alexa のスキル開発がどのようなものであるかを理解し、実際に開発することで、VUI (VoiceUserInterface) 開発がどのようなものかを理解することを目的とします。講義には PC の持参を必須とします。受講生の技術レベル・進捗や Alexa のアップデートに応じて、講義内容を調整することがあります。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

(1) Alexa の開発に必要な考え方を理解する (2) JavaScript (Node.js) を学習し、利用できる。(3) AWS Lambda を学習し、利用できる。(4) Alexa SDK を学習し、利用できる。(5) 対話モデルを学習し、作成できる。(6) Alexa スキルを開発できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

新しい技術である VUI (VoiceUserInterface) を用いた問題解決に資する能力を得る。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義時間内でも演習を行うが、それだけでは最終課題を提出に必要な技術習得は難しいと言える。最低 90 分程度の復習を中心に、授業で行った課題や操作を理解することを推奨とする。

■授業の概要

- 第 1 講 オリエンテーション
- 第 2 講 Node.js 入門 (1)
- 第 3 講 Node.js 入門 (2)
- 第 4 講 AWS Lambda 入門 (1)
- 第 5 講 AWS Lambda 入門 (2)
- 第 6 講 スキルの対話モデルを実装する (1)
- 第 7 講 スキルの対話モデルを実装する (2)
- 第 8 講 スキルのエンドポイントを実装する
- 第 9 講 スキルのエンドポイントの登録・テストを行う
- 第 10 講 インテントの追加を行う
- 第 11 講 スロットの利用を行う
- 第 12 講 発話のバリエーションを試す
- 第 13 講 スキルの設計を行う
- 第 14 講 統合
- 第 15 講 プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーション時に発表内容に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 数値評価 90 点以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 数値評価 80 点以上 90 点未満
 評価 B (79 ~ 70 点) : 数値評価 70 点以上 80 点未満
 評価 C (69 ~ 60 点) : 数値評価 60 点以上 70 点未満
 評価 F (59 点以下) : 数値評価 60 点未満

■評価方法

課題提出 (50%)、システム開発 (30%)、平常点 (20%)

■留意点

① PC 持参必須。② 本授業では実際に開発の現場で用いているツールや技法を用いるが、それらの習熟の時間は授業内では設けることはできないため、講義時間外に自ら理解を深める努力が求められる。③ 受講者数や受講者の技術レベルにより、Alexa スキル開発という範囲内で難易度および題材が変わる可能性がある。

科目名	産業社会特講 (地域の歴史から生きるヒントを学ぶ) (Special Lecture on Industry Society Life Tips to Learn from the Region)		
サブタイトル	地域の歴史と偉人の教訓をいかに人生に生かすか		
担当教員	河合 敦	対象学年	1年生以上
		区分	春学期

■講義目的

史跡・遺物、史資料を用いて偉人や地域の歴史を学習することによって、志を養うとともに、問題解決の方法や実践的知識を獲得する。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

本講義で学習した偉人の生涯や地域の歴史的事象を、現代社会や自身の問題に置き換えてとらえ、教訓や問題解決のための理論として役立てることができるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

多摩地域の詳しい歴史や偉人を学ぶことを通じて、この地域における先人の業績を知り、その遺産を多摩地域の活性化に活かそうとする意識、さらには日本全体に活用しようとするグローバルな視点を有するようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (フィールド・ワーク)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

2回にわたる学外学習の前に入念な下調べを行い、事後には小レポートを提出してもらいます。また、後半は各自がプレゼンテーションを行います。このため、各回平均 1.8 時間程度の準備学習が必須となります。

■授業の概要

- 第1講 「オリエンテーション」
- 第2講 「歴史学とは何か。なぜ人は歴史に学ばなくてはならないのか」
- 第3講 「幕末の志士の生き方から学ぶ問題解決のための理論」
- 第4講 「校外学習 地域にある資料館・博物館を見学する」
- 第5講 「実際の遺物・史料に触れてみよう」
- 第6講 「武蔵地域 (東京周辺) で活躍した人物」
- 第7講 「多摩から出た偉人たち—新選組を中心に」
- 第8講 「次回の校外学習の事前学習」
- 第9講 「校外学習① 新撰組の活動拠点・日野を歩く」
- 第10講 「校外学習② 新撰組の活動拠点・日野を歩く」
- 第11講 「校外学習③ 新撰組の活動拠点・日野を歩く」
- 第12講 「プレゼンテーションの準備学習」
- 第13講 「学生によるプレゼンテーション①」
- 第14講 「学生によるプレゼンテーション②」
- 第15講 「学生によるプレゼンテーション③」

■フィードバックの要領

学生のレポートやプレゼンに対しコメントを記入したり述べる。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計が 90% 以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 80 ~ 89%
 評価 B (79 ~ 70 点) : 出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 70 ~ 79%
 評価 C (69 ~ 60 点) : 出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 60 ~ 69%
 評価 F (59 点以下) : 出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 59% 以下

■評価方法

出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25%

■留意点

科目名	産業社会特講 (ビジョン・マネジメント論2019春) (Special Lecture on Industry Society Vision Management Theory 2019 Spring)		
サブタイトル	一職業の学びを「稼ぐ力」へ変える!【荻阪式「7つの成長技法」】一		
担当教員	荻阪 哲雄	対象学年	1年生以上
		区分	春学期

■講義目的

本特講は1年生～4年生の全学年が対象です。講義の目的は、あなたの学びを、稼ぐ力へ変える【ビジョン・マネジメント】を学び、そのスキルを身につけることです。あなたの【将来ビジョン】をテーマに「社会」と「職業」と「人生」を、じっくりと考えられる授業です。教室は、履修生が「主人公」になり、自分の「志」から「職業のビジョン」を描く「実験教室」になります。15回の講義で学ぶ「荻阪式7つの成長技法」は、【飛躍の7力(ななりき)】と呼ばれています。社会に出る前に、知っておきたい!このスキルは、1万2000名の企業リーダーを支援してきた組織開発コンサルタントの荻阪哲雄が、プロフェッショナル・フィールドの最前線で掴み、体系化した「オリジナルの思考法」です。将来の人生で必要となる「プロのノウハウ」を全公開します!あなたが成長するための力を身につけ、最終回までに、自分の「職業ビジョン・ストーリー」を、一緒にアウトプットすることをめざしませんか?

■講義分類

社会人力育成、ビジネスマネジメント、ビジネス創造

■到達目標

①講義を聴き、自分で考え、内省を行って【所感レポート】を、毎週、提出することができる ②講義で学んだ7つの技法を、相手と対話しながら【現実の行動】へ移すことができる ③講義の学びを、自らの職業ビジョンへ変えて、相手に【自分の言葉】で伝えることができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

①社会と自分の関わりを考えて、職業ビジョンを描き、自らを内省する力を磨く。②自分の言葉で、ビジョンを、発信できる技能を修得。③自分の表現と技能を身につけることで、社会・組織に貢献できる人材を育成。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習
 [個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()
 [ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ●その他(所感技法)
 [グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ●その他(所感の全体紹介技法)
 [上記以外] ●インプット学習法 ●転換思考法 ●アウトプット表現法

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎週水曜日の授業終了日から、講義の復習に1.5時間以上をかけて「所感レポート」を書き、日曜日夜23時まで、指定の指示方法にて提出。所感レポートは(Word、A4の1枚、400字以上)で書くこと。

■授業の概要

- 第1講 職業の働き方をつくる「ビジョン・マネジメント論」の全体像を紹介する
 第2講 職業の働き方を見つける 第1の成長技法「熱望力」とは、何か?
 第3講 なぜ、惹く「熱望力」が、必要なのか?
 第4講 職業の働き方を起こす 第2の成長技法「実験力」とは、何か?
 第5講 なぜ、試す「実験力」が、必要なのか?
 第6講 職業の働き方を高める 第3の成長技法「修業力」とは、何か?
 第7講 なぜ、磨く「修業力」が、必要なのか?
 第8講 職業の働き方を変える 第4の成長技法「結果力」とは、何か?
 第9講 なぜ、生み出す「結果力」が、必要なのか?
 第10講 職業の働き方を深める 第5の成長技法「体験力」とは、何か?
 第11講 なぜ、身につける「体験力」が、必要なのか?
 第12講 職業の働き方を強める 第6の成長技法「盟友力」とは、何か?
 第13講 なぜ、支え合う「盟友力」が、必要なのか?
 第14講 職業の働き方を省みる 第7の成長技法「好転力」とは、何で、なぜ必要なのか?
 第15講 最終回【ビジョン・プレゼンテーション】/私の「職業ビジョン」とは、何か?

■フィードバックの要領

講義の所感レポートに対し、講師から各履修生へ助言メールでフィードバックを贈る。

■評価基準

評価A+ (90点以上) : 受講姿勢、対話内容、所感レポート、最終提出物が、到達目標へ達し優れている場合。
 評価A (89～80点) : 受講姿勢、対話内容、所感レポート、最終提出物が、到達目標へ達している場合。
 評価B (79～70点) : 受講姿勢、対話内容、所感レポート、提出物のいずれかが到達目標へもう一步の場合。
 評価C (69～60点) : 受講姿勢、対話内容、所感レポート、提出物がもうひと踏ん張りですぐに期待する場合。
 評価F (59点以下) : 低い出席率で、所感レポートが出せず、最終アウトプットを提出できない。

■評価方法

講義の出席 (25%) 所感の提出 (25%) 課題の成果物 (50%)

■留意点

本講義は、全学年が対象です。講義を受けた履修生の感想には【人生を失敗しないための知恵を、身につけることができる講義】【高校の授業では学べなかった、社会に出た後の生き方が学べる講義】【何をしたいかが決まっていなかった時に、自分がどんなことをすべきかわかる講義】との評価の声がありました。昨年、本講義を履修した人も、もう一度、学びたいという方は歓迎。再履修の方も評価基準を満たせば、新たに2単位が取得できる。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 産業社会特講（メディアの時代を生きる）（Live in the Media of the Era kitsukawa）

サブタイトル あらゆるものがメディアによってつながる時代の生き方を探る。

担当教員 橘川 幸夫

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

現代社会において、メディアの役割は大きなものとなっています。本講座においては、私たちをとりまく、さまざまなメディア環境の歴史と構造を示し、最前線事例を紹介しながら、これからの社会のあり方と、実践的知識獲得を目標とします。

■講義分類

ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標

社会に出るにあたり、自分の役割や方向性を見出す、手がかりを見つけ出すこと。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲（未来社会への意欲） DP4 表現と技能（役割分担により組織目標の達成に貢献する力）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

自分の頭で考え、自分の言葉で語ることの楽しさ。コミュニケーション能力の向上。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他（ ）

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他（ ）

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他（ ）

[上記以外]（なし）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

日ごろから接しているメディア（テレビ、ネット、新聞、雑誌、書籍など）について、自覚的にその役割を認識すること。予習、復習に各 1.5 時間をあてる。

■授業の概要

- 第1講 個人的メディア体験論
- 第2講 出版のメディア史
- 第3講 見ること・伝えること
- 第4講 映像のメディア史
- 第5講 人間と社会の変遷
- 第6講 音楽のメディア史
- 第7講 商品の文化史
- 第8講 ゲームのメディア史
- 第9講 戦後日本の文化変遷史
- 第10講 放送のメディア史
- 第11講 メディアとしての教育
- 第12講 インターネットの意味
- 第13講 参加型メディア論
- 第14講 シングularityとメディア
- 第15講 森を見る力

■フィードバックの要領

毎回の授業で、講義の内容と、課題について用紙に記入して提出のこと。

■評価基準

- 評価 A+（90 点以上）：期末試験と課題の得点が 90 点以上
- 評価 A（89～80 点）：期末試験と課題の得点が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B（79～70 点）：期末試験と課題の得点が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C（69～60 点）：期末試験と課題の得点が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F（59 点以下）：期末試験と課題の得点が 60 点未満

■評価方法

出席 50%、課題 20%、試験 30%

■留意点

社会の中での自分の役割や、自分と社会の関係のとり方に関心のある学生の受講を希望します。

科目名 初級簿記 (Introductory Level Bookkeeping)**サブタイトル** 複式簿記入門**担当教員** 木村 太一**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

私たちは普段の生活において、お金を払って物を買ったり、仕事やアルバイトをしてお金を受け取ったりする。あるいは銀行にお金を預けたり、引き出ししたりといったこともするだろう。このように、私たちの生活にはお金のやり取りが欠かせない。そうしたお金のやり取りを記録する方法、それが複式簿記である。そんなものを使わなくても、今やお小遣い帳はアプリでつける時代。それにもかかわらず、私たちが身近に知っている会社も、そうでない会社も、会社はみんな複式簿記を使ってお金のやり取りを記録している。はるか昔から、時代を超えて今なお使われているこの複式簿記という記録の方法を知る。これが本講義の目的である。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

複式簿記においてお金のやり取りをどのように記録するのかを知る。具体的には、商品の仕入や売上、現金の貸し借り、土地や建物購入といったやり取りの記録を学ぶ。また、日々の記録をどのようにまとめるのかを知る (貸借対照表、損益計算書の作成)。なお、本講義では東京商工会議所が主催する日商簿記検定試験初級の取得を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

複式簿記というビジネスに不可欠な技術を得られ、これを通じて取引を2つの面から捉えるという複式簿記ならではの世界の見方に触れる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

複式簿記の習得には、とにかく多くの問題を解き、慣れることが大切である。予習は特に必要ないが、復習として、その日に取り扱った内容に関する問題を次の講義までに何度も解いて身に付けていくことが求められる。

■授業の概要

第1講 複式簿記の記録方法である仕訳について学ぶ。

第2講 商品売買①

第3講 商品売買②

第4講 現金預金

第5講 手形と電子記録債権 (債務)

第6講 貸付金・借入金

第7講 ここまでのまとめ

第8講 未払金・未収入金と立替金

第9講 前払金・前受金

第10講 仮払金

第11講 給料と預り金と消耗品

第12講 固定資産

第13講 税金と資本金

第14講 試算表と伝票

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

適宜小テストを行い、それを基にした指導を行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が 90 点以上。

評価 A (89 ~ 80 点) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が 80 点以上 90 点未満。

評価 B (79 ~ 70 点) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が 70 点以上 80 点未満。

評価 C (69 ~ 60 点) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が 60 点以上 70 点未満。

評価 F (59 点以下) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が 60 点未満。

■評価方法

授業内小テスト 30%、授業内期末テスト 70%

■留意点

電卓を使用するので各自購入のこと。また、教科書は指定した本の最新の版を用いるので、表記に関わらず最新版を用いること。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ スタディースキル入門 (Introduction to Study Skills)

サブタイトル ▶▶▶ 「大学生・社会人」になるために

担当教員 ▶▶▶ 初見、中澤、小林(昭)、高橋、小西 対象学年 ▶▶▶ 1年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

本講義では、アクティブラーニングを用いて、大学での「学びの方法」を学ぶと同時に、大学生および社会人として求められる自ら学問を修めるようとする姿勢である自修力の養成を図る。具体的には、講義を整理する力であるノートテイキング能力、文章を読み解くためのリーディング能力、正確に文章を書くためのライティング能力、円滑にディスカッションを行うためのコミュニケーション能力、そして自身の意見を他者に正確に伝えるためのプレゼンテーション能力の5点をスタディスキルと位置付ける。その上で、これらの技能に留まらず、学修する者としての態度をも養成し、今後の学修に繋げるための自修力を身に付けることを目的とする。基本的にはランダムに割り振ったグループ学習の形式を採用する。さらに、本講義においては、受講生同士の相互フィードバックを促進するためのオンラインシステムを導入する。これにより、自身の学びをより深化させると同時に、コミュニケーション能力の育成を目指す。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

1. 「ノートテイキング能力：箇条書きや図解などを用いて会話や講義を整理できる」。2. 「リーディング能力：論理的文章を理解した上で自身の意見を整理できる」。3. 「ライティング能力：他者に誤解がないような表現を用いて論理的に書くことができる」。4. 「コミュニケーション能力：他者に対して自身の意見を適切に伝えられる」。5. 「プレゼンテーション能力：大勢に対して自身の意見を適切に伝えられる」。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

この授業では大学生としての思考のフレームワークを身につけると同時に、社会人として通用する思考力・判断力の基礎を養成していく。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●その他(プレゼンテーション、ディスカッション、ピアレビュー)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

各回の講義に際して、教科書の該当箇所を読むことを予習として課す(30分程度)。さらに、復習として資料の振り返り(15分程度)・各回の課題(30分程度)および他の履修生に対するフィードバックを行う(25分)。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション：講義の導入と「大学言葉」を紹介する。
- 第2講 ノートテイキングとメモ1：大学でのノートの取り方のヒントを提示する。
- 第3講 ノートテイキングとメモ2：図で表して整理する。
- 第4講 リーディング1：長文読解に必要な論理力を磨く1
- 第5講 リーディング2：長文読解に必要な論理力を磨く2
- 第6講 リーディング3：文章の読み方の基礎と多読トレーニング
- 第7講 リーディング4：筆者の主張の理解と自身の意見の形成
- 第8講 ライティング1：レポートの基礎を学ぶ。
- 第9講 ライティング2：レポートのピアレビュー(相互評価)から文章の執筆方法を学ぶ。
- 第10講 コミュニケーション1：ディスカッションの手法と注意すべき点を紹介する
- 第11講 コミュニケーション2：実践的なディスカッションとプレゼンテーションの基礎
- 第12講 プレゼンテーション1：プレゼンテーションの基本的なスキルの紹介と最終課題の準備
- 第13講 プレゼンテーション2：グループプレゼンテーションに向けた準備
- 第14講 プレゼンテーション3：発表の実施1
- 第15講 プレゼンテーション4：発表の実施2

■フィードバックの要領

オンラインシステムを導入し、学生同士および教員によるフィードバックを実施する。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：平常点、小課題、最終プレゼンのいずれもが顕著に優れており、合計が90点以上である。
- 評価 A (89～80点)：平常点、小課題、最終プレゼンが優れており、合計が80点以上である。
- 評価 B (79～70点)：平常点、小課題、最終プレゼンが十分に良く、合計が70点以上である。
- 評価 C (69～60点)：平常点、小課題、最終プレゼンの合計が60点以上である。
- 評価 F (59点以下)：平常点、小課題、最終プレゼンの合計が60点未満か、他の履修者の勉学を妨げている。

■評価方法

平常点：30%：毎回の講義における履修状況を評価します。小課題：40%：講義の内外で小課題を課します。最終プレゼン：30%、教員の評価20%および学生によるピアレビューを10%として、その合計によって算出する。

■留意点

1. 「履修状況に応じて、内容を変更することがある」。2. 「この授業ではパソコンを用いて授業を展開し、授業資料はwebでの配信を予定している。したがって、授業の際には端末を十分に充電して持参すること。なお、端末を忘れた場合には欠席扱いにするので気をつけること」。3. 「Google Classroomを用いて連絡を行うために随時確認すること」。

科目名 スポーツI-体づくりとスポーツ (Sports I)**サブタイトル** 筋力トレーニング、ストレッチ、体力測定、心拍数測定、登山**担当教員** 大澤 拓也**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

目的は筋力トレーニング、ストレッチ等を行い、自身の体を動かすことの楽しさを感じることに、また、体力測定を行い、自身や他者の体力や健康を理解することです。また、本講義では、心拍数計などを用いた最新の体づくりを実施し、現代社会における健康やスポーツのトレンドを経験を通じて学びます。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

体を動かすことにより、自身の体を理解すること、そして運動を通じた他者との関わり方を養うことを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】 DP5 高い志【環境対応能力と先進性】

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

運動を通じて、他者と交流することにより、自身が他者に興味を持ち、他者を理解できるようになるだけでなく、他者に自身の興味を持たせ、自身を理解してもらえる能力を養える。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(自身の体を動かすこと)
 [ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()
 [グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()
 [上記以外] (登山、相互で行う体力測定、ペア・グループでのストレッチ・筋力トレーニング)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習としては、体に関するテレビや雑誌を見るように心がける。また、復習としては、講義内で実施する筋力トレーニングやストレッチ等、また体力測定の方法を自宅で実施する。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 体力測定会①
- 第3講 体力測定会②
- 第4講 上半身のトレーニング
- 第5講 下半身のトレーニング①
- 第6講 下半身のトレーニング②
- 第7講 登山と心拍数
- 第8講 登山①(集中講義)
- 第9講 登山②(集中講義)
- 第10講 登山③(集中講義)
- 第11講 登山④(集中講義)
- 第12講 疲労と筋肉痛
- 第13講 レクリエーション・スポーツと心拍数①
- 第14講 レクリエーション・スポーツと心拍数②
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

レポートに対して、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
 評価 A (89～80点) : 技能の開発が十分行われ、将来活かされる準備ができていないこと。
 評価 B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
 評価 C (69～60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
 評価 F (59点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

■評価方法

出席 60%、レポート 40%

■留意点

①高校までの「体育」とコンセプトが異なることに留意して履修してもらいたい。②各講義において、指示が異なるので、これによく留意して受講してもらいたい。③原則として、受講希望者は、学期の第1講の日時に、指定された教室に集合しなければならない。(T-NEXTにて指示する)

科目名 ▶▶▶ スポーツI-シェイプアップフィットネス (Sports I-Fitness)

サブタイトル ▶▶▶ シェイプアップフィットネス

担当教員 ▶▶▶ 梅澤 佳子

対象学年 ▶▶▶ 1年生以上

区分 ▶▶▶ 秋学期

■講義目的

スポーツ文化の諸側面を学ぶことによって、(1)自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2)生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力(「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります)を身につけること。(3)スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4)スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人育成

■到達目標

「講義目的」に記載されている目的に即した、個人々の発展が見られることが目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となります。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に収集し、理解しておくこと。(90分程度)

■授業の概要

第1講 本講義の目的、到達目標、評価の方法、受講にあたっての注意点等についての説明

第2講 身体測定

第3講 ストレッチと身体ほぐし

第4講 ストレッチ・身体ほぐし・トレーニング

第5講 ストレッチとトレーニング

第6講 ストレッチとトレーニング

第7講 ストレッチとトレーニング

第8講 ストレッチとトレーニング

第9講 有酸素運動の理論と実践

第10講 有酸素運動とトレーニング

第11講 有酸素運動を体験する

第12講 身体測定②

第13講 3日間の食生活調査表の作成①

第14講 3日間の食生活調査表の作成②

第15講 振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

トレーニング日誌の確認とコメント記載によるコミュニケーション等

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。

評価 A (89～80点) : 技能の開発が十分行われ、将来活かされる準備ができていくこと。

評価 B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること

評価 C (69～60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること

評価 F (59点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

■評価方法

・参加の姿勢(出席を含みます) : 60% (各回の講義内容と目標を理解し身体運動を行ったかを3段階で評価します。)

・課題の提出 : 40% (指定された内容について課題を作成し提出してもらいます。)

■留意点

①高校までの「体育」と目的が異なることに留意して履修してください。②受講希望者が多数の場合、学期の第1講出席者を優先し抽選となります。③就職活動による欠席は考慮しません。今年度の講義内容については、オリンピック・パラリンピック2020関係行事により変更する場合があります。

科目名 スポーツ I- テニス (Sports I-Tennis)**サブタイトル** テニスを通じて学ぶ生涯スポーツの価値**担当教員** 佐藤 文平**対象学年** 1 年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本演習では、ラケットとボールを操作するために必要な、眼と手のコーディネーショントレーニングを行いながら、テニスの基本を学んでいく。また、ゲームを通じて、マナーや他人とのコミュニケーションスキルも習得する。技術の定量化にはボール挙動測定器 TRACKMAN を用い、ボール速度やボール回転速度の理解を深める。

■講義分類

最前線事例、社会人育成、実践的知識獲得、社会人基礎力

■到達目標

テニスは、生涯スポーツとして社会人となってからも個人の体力に応じて楽しめるスポーツである。本演習の目的は、テニスの打球スキルとルールを学び、ゲーム（シングルス、ダブルス）を楽しめるようになることである。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

生涯スポーツであるテニスの最低限必要な技術を習得するとともに、安全に配慮した他人とのコミュニケーション能力を養う。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト 問題作成 その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ●PBL ●Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ 法 ●マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テニスの基本的な歴史やルールを理解して授業に臨むことを基本とする。

■授業の概要

- 第1講 テニスで起きる傷害について予習し、予防するために必要な準備運動を学ぶ。
 第2講 テニスに必要な技術を習得し、ダブルスをプレーできるようになる。
 第3講 ストローク（フォア、バック）の基本的な打球方法を予め理解したうえで行う。
 第4講 ボレーやスマッシュの基本的な打球方法やタイミングを予め理解したうえで行う。
 第5講 サーブの種類（フラットサーブ、スライスサーブ、キックサーブ）の違い、用途について予め理解した上で行う。
 第6講 TRACKMAN を用いてのサーブ速度測定実習を行ない、自身の技術の定量化を行う。
 第7講 講義（テニスとジェントロジー：生涯スポーツとしての役割）
 第8講 ダブルスのルールを予め理解したうえでポイントゲーム練習を行う。
 第9講 講義（テニスの試合の成り立ちを予め理解したうえでスポーツビジネス・マーケティングを学ぶ）
 第10講 シングルのルールを予め理解したうえでポイントゲーム練習を行う。
 第11講 ダブルスのフォーメーション（オーストラリアンフォーメーション、“1”フォーメーション）を予め理解したうえで行う。
 第12講 テニスにおけるメンタルトレーニング（オンコート）を行い、事後のプレーにおけるメンタル的な変化を感じる。
 第13講 テニスのスキルテストを行なう。
 第14講 第6講目に行なった TRACKMAN で計測した測定値と比較する。
 第15講 まとめ。全ての技術を結集させて、シングルの試合とダブルスの試合を行う。

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入しフィードバックを行う。スキルテストでは、口頭によるフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 出席および授業参加意欲が高く、練習等のコーディネート能力が高い。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 出席および授業参加意欲があり、テニスの基本技術が備わり、試合ができる。
 評価 B (79 ~ 70 点) : テニスの基本技術は備わっているが、出席および授業参加意欲が不十分。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 出席、授業参加意欲、テニスの基本技術ともに最低限度。
 評価 F (59 点以下) : 出席、授業参加意欲が不十分で、テニスの基本技術を習得しようとする意欲がない。

■評価方法

出席 50%、技術テスト 30%、レポート 20%

■留意点

個人でラケットを所有している学生は各々のラケット、テニスシューズで授業に参加することが好ましい。安全面配慮のため、運動着の着用は必須。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ スポーツI-バドミントン (Sports I-Badminton)

サブタイトル ▶▶▶ はじめてのバドミントン

担当教員 ▶▶▶ 梅澤 佳子

対象学年 ▶▶▶ 1年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

スポーツ文化の諸側面を学ぶことによって、(1) 自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2) 生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力(「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります)を身につけること。(3) スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4) スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■講義分類

ビジネスマネジメント、社会人育成

■到達目標

「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが、講義としての目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となります。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

自らの現状を分析し、課題解決に向けて努力し、他者と協力しながら技能を高める。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ●その他(スキルを高めるグループワーク)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に収集し、理解しておいて下さい。(90分程度)

■授業の概要

第1講 講義の内容、目的、講義方法、履修する上での注意点等について

第2講 身体運動の基礎知識

第3講 体力測定

第4講 バドミントンの特性と動きを学ぶ

第5講 基本となる動作の習得

第6講 基本となる動作の習得

第7講 基本となる動作の習得

第8講 基本となる動作の習得

第9講 基本となる動作の習得

第10講 試合(ダブルス)に向けての準備

第11講 ダブルスの基本ルールを学ぶ

第12講 試合(ダブルス)

第13講 試合(ダブルス)

第14講 体力測定②

第15講 自己分析とまとめ

■フィードバックの要領

実技中心のため講義内、講義前後に対応します。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。

評価 A (89～80点) : 技能の開発が十分行われ、将来活かされる準備ができていないこと。

評価 B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。

評価 C (69～60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。

評価 F (59点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

■評価方法

・参加の姿勢(出席を含みます) : 60% (各回の講義内容と目標を理解し身体運動を行ったかを3段階で評価します。)

・課題の提出 : 40% (指定された内容について課題を作成し提出してもらいます。)

■留意点

①単に実技を学ぶだけでなく、講義も行います。②受講希望者が多い場合は、学期の第1講の出席者を優先し抽選を行います。③欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しません。就職活動による欠席は考慮しませんので注意してください。今年度の講義内容については、オリンピック・パラリンピック2020関係行事により変更する場合があります。

科目名 スポーツI-フットサル (Sports I-Futsal)**サブタイトル** フットサルと出会い、その奥深さをしるための入門スクール**担当教員** 福角 有祐**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

①人生を豊かにするためのスポーツ教養の一つとして、フットサルの知識と技能を身に着けること。②フットサルを実践することを通じて、社会人として求められる基礎能力であるコミュニケーションや判断力、実行力、協同する力などを育成すること。③フットサルを通じて、競技者へのシンパシーを獲得し、観戦する（応援する）価値について知ること。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

競技のルールやマナーの概要を知り、その面白さ、楽しさについて十分理解し他人にもそれを伝えることができる。フットサルゲームに参加し協同者と協力して楽しむことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

フットサル競技の特性は、そのスピード感であり、判断力、決断力、実行力がきわめて大切であり、社会人力育成につながる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に収集し、理解しておくこと。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 クラスメンバーの決定
- 第2講 フットサルに出会う!
- 第3講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得①
- 第4講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得②
- 第5講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得③
- 第6講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ①
- 第7講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ②
- 第8講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ③
- 第9講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ④
- 第10講 フットサル競技の実践①
- 第11講 フットサル競技の実践②
- 第12講 フットサル競技の実践③
- 第13講 フットサル競技の実践④
- 第14講 フットサル競技の実践⑤
- 第15講 全体の振り返り

■フィードバックの要領

担当教員から学びの状況と今後の方向性について直接アドバイスします。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
- 評価 A (89～80点) : 技能の開発が十分行われ、将来活かされる準備ができていないこと。
- 評価 B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
- 評価 C (69～60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
- 評価 F (59点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

■評価方法

出席 100%

■留意点

高い競技レベルを前提としてはいない。むしろ、初心者や、スポーツ未経験者にスポーツ体験をしてもらうことを重視している。経験者には、これまでの経験を踏まえて、初心者受講生へのコーチングなどを通じてよりスポーツへの理解を深めてもらうことを期待する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 スポーツ・マネジメント論 (Sports Management Theory)**サブタイトル** スポーツが現代社会にもたらす価値とは。**担当教員** 佐藤 文平**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義では、スポーツが現代社会や地域社会にもたらす利益（幸福度）を理解しながら、マネジメントすることによって生み出される価値とは、を考えることのできる視点を育む。スポーツ（する、みる、支える）をもってQOLの向上を考える。

■講義分類

多摩学、最前線事例、地域ビジネス

■到達目標

学生主体の調査をもとにグループで、スポーツ（人、モノ、環境）をマネジメントできる能力を身につける。多摩地域のスポーツを創造し、実践する。ケーススタディやグループディスカッションを通じて得るコミュニケーションスキルをもって、多摩大学独自のスポーツ・マネジメントを構築する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

スポーツ・マネジメントの価値、実践的理解を深め、今後の地域社会に落とし込める能力を育む。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ●Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ●KJ法 ●マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各回の予習課題には最低限 1.5 時間程度の学習が必要となる。さらに毎回の講義内容で学んだ事柄については、積極的に知見を広げ、問題意識を深めるための復習として、1.5～2 時間程度の復習が必要となる。

■授業の概要

第1講 本講義の概要、目的、意味を理解する（ガイダンス）。

第2講 現代社会の傾向、仕組み、問題について

第3講 スポーツ・マネジメントとはなにか

第4講 スポーツ産業の成り立ち（モノ）

第5講 スポーツ産業の成り立ち（施設）

第6講 スポーツ産業の成り立ち（メディア）

第7講 スポーツ産業の成り立ち（サービス）

第8講 スポーツ産業の成り立ち（人材）

第9講 チーム・マネジメント～集団～

第10講 チーム・マネジメント～リーダー論～

第11講 スポーツ産業とオリンピック

第12講 実践的課題演習①

第13講 実践的課題演習②

第14講 実践的課題演習③

第15講 講義のまとめ

■フィードバックの要領

講義内で提出されたレポートに対する回答等でフィードバックします。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：講義内容を十分に理解し、オリジナリティーのある優れた意見をもっている。

評価 A (89～80 点)：講義内容を理解し、自身の意見を持てるようになった。

評価 B (79～70 点)：講義内容について理解している。

評価 C (69～60 点)：講義内容を理解している。

評価 F (59 点以下)：講義への積極的な参加もなく、理解も乏しい。

■評価方法

出席 50%、中間テスト 10%、最終課題 40%、絶対評価：多摩大学の評価基準に基づいて評価します。

■留意点

本講義は、出席と小レポートの内容および提出率を重視しております。

科目名 多摩学 I (Tama Study I)**サブタイトル** ー自身の通う大学について知り、多摩大生としてのアイデンティティを確立するー**担当教員** 野坂、佐藤(文)、増田、加藤、長島、西村(知)、木村、高橋、小林(昭) **対象学年** 1 年生以上 **区分** 春学期**■講義目的**

本講義の目的は、自校を理解することで帰属意識を高め、多摩大生としての自身のアイデンティティを確立することにある。大学4年間は長いようで短く、1 年次から計画性を持って行動し、その都度、軌道修正を行いながら大学生活を過ごすことが必要である。本講義を通じて、学生自身が快適な大学生活を過ごせるように本学への理解を深めると同時に、これまで知りえなかった本学の新たな魅力を発見してもらうことが狙いである。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

(1) 「グローバル社会に対する理解」：多摩大学について全体的なイメージを持つとともに、ローカルな視点から多摩大学の役割・重要性を理解すること。(2) 「社会の発展に貢献する力」：多摩大学の特徴や強みおよび課題を自分なりに見つけ出すこと。(3) 「役割分担により組織目標の達成に貢献する力」：多摩大学の強みについて自分の言葉で説明することができ、プレゼンテーション能力を高めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

多摩大生としてのアイデンティティを確立しながら、多摩大生として社会の発展に積極的に関与する高い志を持つこと。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回の講義では、講義で使用する専用ペーパー 1 枚 (事前学習課題、講義ノート、講義に対する感想・疑問点等の記入欄を含む) を配布しますので、記入してください。(1.5 時間)

■授業の概要

第1 講 イントロダクション：多摩大学を学ぶことの意義

第2 講 大学の教育史と現在

第3 講 教育と多摩大学～多摩大学のカリキュラムの特徴を理解しよう～

第4 講 第2 講、第3 講の復習

第5 講 多摩大グッズを提案する①～グループワーク～

第6 講 多摩大グッズを提案する②～前回の続きと発表の準備～

第7 講 多摩大グッズを提案する③～プレゼンテーション～

第8 講 多摩大学におけるキャンパスライフの過ごし方

第9 講 多摩大で自身の可能性を広げる～アクティブラーニング、国際交流～

第10 講 第8 講、第9 講の復習

第11 講 多摩大学をより魅力的にするために①～グループワーク～

第12 講 多摩大学をより魅力的にするために②～前回の続きと発表の準備～

第13 講 多摩大学をより魅力的にするために③～プレゼンテーション～

第14 講 ゼミ活動と将来に続く道～ホームゼミ、インターンシップ、キャリア～

第15 講 まとめ、振り返り

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 「多摩大学」の全体像を的確に捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。

評価 A (89 ～ 80 点) : 「多摩大学」の全体像を捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。

評価 B (79 ～ 70 点) : 「多摩大学」の全体像をある程度捉えられ、自分の言葉で説明することができる。

評価 C (69 ～ 60 点) : 「多摩大学」の全体像をある程度捉えられるが、自分の言葉での説明が不十分。

評価 F (59 点以下) : 「多摩大学」の全体像をほとんど捉えられず、自分の言葉での説明も不十分。

■評価方法

出席率 30%、課題 30%、毎回の専用ペーパー 40%、= 100%、さらに発言ポイント + a として加味する。

■留意点

必修科目ですので、必ず出席をすること

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 多摩学Ⅱ (Tama StudyⅡ)**サブタイトル** ー多摩大学が立地する多摩地域の「産業」を学び、その強みと課題を考えるー**担当教員** 野坂、佐藤(文)、増田、加藤、長島、西村(知)、木村、高橋、小林(昭) **対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

私たちの大学が立地している多摩地域にも、地域なりの「力」がある。その「力」と可能性について考えることが、この地域の活性化と発展につながる。「多摩学Ⅱ」では、多摩の来歴を探り、多摩の現代について考え、多摩という視点から未来を構想する学問である。その地歴を探り、この地域の持つ意味と可能性を多角的・学際的に探求していく。本講義では、多摩地域の多様な産業に着目し、多摩地域が持つ強みと課題について考える。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネス創造、地域ビジネス

■到達目標

(1)「グローバル社会に対する理解」：多摩地域の産業について全体的なイメージを持つとともに、ローカルな視点から多摩地域の産業の重要性を理解すること。(2)「社会の発展に貢献する力」：他の地域と比べた産業の特徴や優位点および課題を自分なりに見つけ出すこと。(3)「役割分担により組織目標の達成に貢献する力」：多摩地域の産業について自分の言葉で説明することができ、プレゼンテーション能力を高めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

多摩地域の産業における現状と課題を把握・分析することができ、課題解決に向けたアイデアの提案など、自分なりの解決策を論理的に導くことができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

毎回の講義後に、次回の講義で使用する専用ペーパー1枚(事前学習課題欄、講義ノート欄、講義に対する感想および疑問点記入欄を含む)を配布しますので、記入してください。(1.5時間)

■授業の概要

第1講 イントロダクション：東京における多摩地域の位置づけ

第2講 多摩地域の30市町村について調べる

第3講 前回のグループワークの続き

第4講 30市町村のプレゼンテーション

第5講 多摩地域における産業(1)農林業の果たす役割

第6講 グループワーク

第7講 多摩地域の農産物を用いたメニューのプレゼンテーション

第8講 ゲストスピーカーによる講義(未定)

第9講 多摩地域における産業(2)中小企業(製造業)の強みとそれを支える金融機関の役割

第10講 多摩信用金庫による講義

第11講 多摩地域における産業(3)観光業の果たす役割

第12講 観光プランを考えよう～グループワーク～

第13講 プレゼンテーション

第14講 ゲストスピーカーによる講義

第15講 まとめと振り返り

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+(90点以上)：多摩地域の産業の全体像を的確に捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。

評価A(89～80点)：多摩地域の産業の全体像を捉え、自分の言葉で説明することができる。

評価B(79～70点)：多摩地域の産業の全体像をほぼ捉えており、自分の言葉で説明することができる。

評価C(69～60点)：多摩地域の産業の全体像を捉えているが、自分の言葉での説明が不十分。

評価F(59点以下)：多摩地域の産業の全体像をほとんど捉えておらず、自分の言葉での説明が不十分。

■評価方法

出席率40%、プレゼンテーション等の成果物30%、毎回の専用ペーパー30%

■留意点

ゲストスピーカーの都合により、シラバスに記載されている予定の講義の回が変更となることがあります。

科目名 地域ビジネス入門 (Introduction to Region Business)**サブタイトル** ～地域課題解決の基本を考える～**担当教員** 松本、梅澤、中庭、中澤、野坂**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

地域課題を事業の形で解決するのが地域ビジネスの世界で、グローバルビジネスや情報ビジネスとは視点が異なります。本講義は、人間、企業、産業、行政の各主体が連動し活動する地域ビジネスの世界と、それらに影響を与える文化や社会の変化、この両面を学ぶ入門科目です。地域系各教員の専門分野をもとに、地域ビジネスの世界・考え方を事例を交えて紹介します。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

地域ビジネスに関する基礎知識、基本的な考え方を習得すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域ビジネスに関する基本的な学力を養い、その視点から社会を理解する能力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

事前学習で30分、毎回のレポートを書けるように直近講義のポイント整理で1時間。

■授業の概要

- 第1講 地域社会にとってビジネスとは何か
- 第2講 クリエイティブ都市論—都市と地域を経営する(中庭)
- 第3講 沿線開発ビジネスモデルの世界—郊外地域の課題(中庭)
- 第4講 これからの観光まちづくり—着地マーケティングの世界(中庭)
- 第5講 地域における中小企業①
- 第6講 地域における中小企業②
- 第7講 地域ビジネスとしての農業(野坂)
- 第8講 地域ビジネスとしての漁業(野坂)
- 第9講 コミュニティビジネスとは何か(松本)
- 第10講 コミュニティビジネスの事業開発(松本)
- 第11講 レジャーと地域ビジネス①(梅澤)
- 第12講 レジャーと地域ビジネス②(梅澤)
- 第13講 映像産業と多摩地域(中澤)
- 第14講 ツーリズムの時代(中澤)
- 第15講 総括セミナー

■フィードバックの要領

レポートへのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 各講義について深く理解し、地域ビジネスに対する考えを明確に示すことができる。
- 評価 A (89～80点) : 各講義について深く理解し、地域ビジネスに対する考えを示すことができる。
- 評価 B (79～70点) : 各講義について深く理解し、地域ビジネスの可能性を考えることができる。
- 評価 C (69～60点) : 各講義について深く理解し、地域ビジネスの重要性を把握している。
- 評価 F (59点以下) : 各講義についての理解が不十分であり、地域ビジネスの重要性をつかんでいない。

■評価方法

出席 40%、各講義に関するレポート 60%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国語 I-X (Chinese I-X)**サブタイトル** 中国語へのいざない**担当教員** 水盛 涼一**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は14億人を超えます。これは英語(6億人)、インドのヒンディー語(5億人)、スペイン語(4億5千万人)、アラビア語(3億人)、そして日本語(1億3千万人)の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口です。しかも大中華圏は日本に近く、観光に貿易にと交流は益々密接になっています。すでに日本と切っても切り離せない関係の大中華圏について、最新の教科書を使い、社会や文化の話題を中心に、すぐに役立つ実践的な中国語を習得していきます。※母語が中国語ではない学生のみ履修できます。二次以上以上の学生の履修可否は面接のうえ決定します。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏の社会や文化について理解を深め、異文化との接触時に戸惑わず積極的に自己主張できるようにする。②中国語による自己紹介をはじめ、会話や表現への基礎力を身につける。③客観的指標として、中国語検定試験四級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

「表現と技能」が中心です。また語学はその言葉を母国語とする文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義前には必ず該当範囲を読み、CDを聞いておいてください。また毎週にわたり簡単な確認テストを実施します。そのため、講義前にはおよそ二時間弱の予習復習が必要となるでしょう。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション

第2講 中国語の発音について

第3講 教科書：第一課

第4講 教科書：第二課

第5講 教科書：第三課

第6講 教科書：第四課

第7講 教科書：第一課から第四課までの復習

第8講 教科書：第五課

第9講 教科書：第六課

第10講 教科書：第七課

第11講 教科書：第八課

第12講 教科書：第九課

第13講 教科書：第十課

第14講 期末試験に備えて

第15講 期末試験

■フィードバックの要領

毎週の小テストなどは当然ながら返却しますのでご意見をお書きください。

■評価基準

評価A+(90点以上)：評価点100点(下記“配分”参照)のうち90点以上。

評価A(89～80点)：評価点100点(下記“配分”参照)のうち89～80点。

評価B(79～70点)：評価点100点(下記“配分”参照)のうち79～70点。

評価C(69～60点)：評価点100点(下記“配分”参照)のうち69～60点。

評価F(59点以下)：評価点100点(下記“配分”参照)のうち59点以下。

■評価方法

期末試験(60%)、授業に取り組む姿勢・積極性および講義内小テスト(40%)。なお期末試験は自己紹介(30%)および文法に關する筆記試験(30%)によります。

■留意点

科目名 中国語 I-Y (Chinese I-Y)**サブタイトル** 中国語 I**担当教員** 田 園**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

授業は主にリーディングとスピーキングより構成され、中国語の発音と基礎文法を習得したうえで、「すぐに使える」ことに重きをおく。リーディングは、主に基礎文法を習得する。スピーキングは、発音と簡単な日常会話を学習した後、本文の暗唱やロールプレイング形式で、応用練習を行い、知識やスキルの定着をはかる。全体的には中国語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能を伸ばし、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。※母国語が中国語ではない学生のみ履修できる。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

①中国語リーディングとスピーキングの基礎知識とスキルの習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

中国語に関する基礎的な学力を養い、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前にはCDを聞き、単語、文法、本文の予習をしておく。(1.5時間) 授業後にはCDを繰り返して聞き、本文の読む練習・暗唱をし、練習問題を解く。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス及び中国語概説
- 第2講 第1課
- 第3講 第2課
- 第4講 第3課
- 第5講 第4課
- 第6講 第1課から第4課までの復習
- 第7講 実践：自分の名前の発音及び簡単な挨拶語
- 第8講 第5課
- 第9講 第6課
- 第10講 第7課
- 第11講 第8課
- 第12講 第9課
- 第13講 第10課
- 第14講 復習
- 第15講 期末テスト

■フィードバックの要領

宿題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：特に優れているもの
- 評価 A (89～80点)：優れているもの
- 評価 B (79～70点)：一応の努力が認められるもの
- 評価 C (69～60点)：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
- 評価 F (59点以下)：Cの水準に達しないもの

■評価方法

期末テスト(60点)、平常点(授業態度や小テストなど、20点)、授業中の会話力(20点)による総合評価

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国語 II-X (Chinese II)

サブタイトル 中国語 II

担当教員 田 園

対象学年 1 年生以上

区分 秋学期

■講義目的

授業は主にリーディングとスピーキングより構成され、「すぐに使える」ことに重きをおく。リーディングは、主に基礎文法を習得する。スピーキングは、本文を習った後、暗唱やロールプレイング形式で、応用練習を行い、知識やスキルの定着をはかる。全体的には中国語 I に引き続き、中国語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 つの技能を伸ばし、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。※母国語が中国語ではない学生のみ履修できる。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

①中国語リーディングとスピーキングの基礎知識とスキルの習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

中国語に関する基礎的な学力を養い、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ●T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・マップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前には CD を聞き、単語、文法、本文の予習をしておく。(1.5 時間) 授業後には CD を繰り返して聞き、本文の読む練習・暗唱をし、練習問題を解く。(1.5 時間)

■授業の概要

第 1 講 テキスト前半の復習

第 2 講 第 11 課

第 3 講 第 12 課

第 4 講 第 13 課

第 5 講 第 14 課

第 6 講 第 15 課

第 7 講 第 11 課から第 15 課までの復習

第 8 講 第 16 課

第 9 講 第 17 課

第 10 講 第 18 課

第 11 講 第 19 課

第 12 講 第 20 課

第 13 講 第 16 課から第 20 課までの復習

第 14 講 総復習

第 15 講 期末テスト

■フィードバックの要領

宿題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 特に優れているもの

評価 A (89 ~ 80 点) : 優れているもの

評価 B (79 ~ 70 点) : 一応の努力が認められるもの

評価 C (69 ~ 60 点) : 合格と認められる最低限の水準を満たしているもの

評価 F (59 点以下) : C の水準に達しないもの

■評価方法

期末テスト (60 点)、平常点 (授業態度や小テストなど、20 点)、授業中の会話力 (20 点) による総合評価

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科目名 中国語 II-Y (Chinese II-Y)**サブタイトル** 中国語さらに一步**担当教員** 水盛 涼一**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は14億人を超えます。これは英語(6億人)、インドのヒンディー語(5億人)、スペイン語(4億5千万人)、アラビア語(3億人)、そして日本語(1億3千万人)の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口です。しかも大中華圏は日本に近く、観光に貿易にと交流は益々密接になっています。すでに日本と切っても切り離せない関係の大中華圏について、春学期に引き続き、最新の教科書を使い、社会や文化の話題を中心に、すぐに役立つ実践的な中国語を習得していきます。※母語が中国語ではない学生のみ履修できます。基本的に「中国語 I」の履修が必要です。二年次以上の学生の履修可否は筆記試験および面接のうえ決定します。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏の社会や文化について理解を深め、異文化との接触時に戸惑わず積極的に自己主張できるようにする。②中国語による自己紹介をはじめ、会話や表現への基礎力を身につける。③客観的指標として、中国語検定試験四級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

「表現と技能」が中心です。また語学はその言葉を母国語とする文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義前には必ず該当範囲を読み、CDを聞いておいてください。また毎週にわたり簡単な確認テストを実施します。そのため、講義前にはおよそ二時間弱の予習復習が必要となるでしょう。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 中国語での自己紹介
- 第3講 教科書：第十一課
- 第4講 教科書：第十二課
- 第5講 教科書：第十三課
- 第6講 教科書：第十四課
- 第7講 教科書：第十五課
- 第8講 教科書：第十六課
- 第9講 教科書：第十七課
- 第10講 教科書：第十八課
- 第11講 教科書：第十九課
- 第12講 教科書：第二十課
- 第13講 教科書総復習
- 第14講 期末試験に備えて
- 第15講 期末試験

■フィードバックの要領

試験に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 90点以上。
- 評価 A (89～80点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 89～80点。
- 評価 B (79～70点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 79～70点。
- 評価 C (69～60点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 69～60点。
- 評価 F (59点以下) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 59点以下。

■評価方法

期末試験(60%)、授業に取り組む姿勢・積極性および講義内小テスト(40%)

■留意点

試験に対してフィードバックを行う。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 日本語講座初級 (Japanese Language Beginners Course)

サブタイトル 日本語会話、文法、語彙

担当教員 TIJ 東京日本語研修所

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

留学生が日本で生活するための日常会話、友だちと交流するための会話、また大学の職員、教師とコミュニケーションするための会話、社会から情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

(1) 日常生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。(2) 日常生活や大学生活の中で自分が言いたいことを大体伝えることができる。(3) 自分の経験や夢、希望などをスピーチ形式で発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会生活の中で必要な表現や語彙を学び、コミュニケーション力を身に付けて主体的に行動できるようにする。発信力、傾聴力、状況把握力、協調性を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ●マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習として、教科書や新聞記事等の漢字の読みや語彙を調べてくること。復習・宿題として、短文作文やレポートを提出すること。必要時間は各90分。

■授業の概要

- 第1講 プレースメントテスト、作文・作文発表・漢字
- 第2講 作文、ニュース漢字、聴解
- 第3講 作文発表、作文、ニュース漢字、聴解
- 第4講 時事会話① ニュース漢字、聴解
- 第5講 時事会話① スピーチ準備、ニュース漢字、聴解
- 第6講 時事会話① スピーチ発表、ニュース漢字、聴解
- 第7講 時事会話② ニュース漢字、聴解
- 第8講 時事会話② スピーチ準備、ニュース漢字、聴解
- 第9講 時事会話② スピーチ発表、ニュース漢字、聴解
- 第10講 時事会話③ ニュース漢字、聴解
- 第11講 時事会話③ スピーチ準備、ニュース漢字、聴解
- 第12講 時事会話③ スピーチ発表、ニュース漢字、聴解
- 第13講 修了スピーチ準備、ニュース漢字
- 第14講 修了スピーチ準備、ニュース漢字
- 第15講 期末テスト(文法・漢字)、スピーチ準備、修了スピーチ

■フィードバックの要領

期末テスト終了後に即座にフィードバックを行い、今学期の学習の総括をする。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 社会の問題について、自分が考えたことが論理的に発表できる。
- 評価 A (89～80点) : 社会の問題について、自分が考えたことが分かりやすく発表できる。
- 評価 B (79～70点) : 社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
- 評価 C (69～60点) : 社会の問題について、自分が考えたことが短く発表できる。
- 評価 F (59点以下) : 出席・授業中の活動・期末テストで基準を満たさなかった。

■評価方法

出席・授業態度・毎回のテスト・宿題：80%、期末テスト・修了スピーチ：20%

■留意点

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

科目名 日本語講座中級 I (Japanese Language Intermediate Course I)**サブタイトル** 日本語講座中級会話**担当教員** TIJ 東京日本語研修所**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

留学生が日本で生活するための日常会話だけでなく、大学の授業を聞くため、また授業に積極的に参加するために必要な力を付ける。さらに、社会から情報を得るため、また社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

(1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをほぼ伝えることができる。(3) 社会の問題について、自分が考えたことを論理的に発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

日本語を通じて人間関係を構築し、社会を学ぶ過程で遭遇するさまざまな課題に対処できる力を付ける。チームワークを大切に、リーダーシップを取れるように積極性を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ●マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

予習として、新聞記事やニュース等の漢字の読みや語彙を調べてくること。復習・宿題として、短文作文やレポートを提出すること。必要時間は各90分。

■授業の概要

- 第1講 プレースメントテスト、作文、作文発表、聴解
- 第2講 資料1 本文・まとめ・聴解・要約・熟語
- 第3講 資料1 関連の聴解・語彙・発表のための原稿書き・聴解・要約・熟語
- 第4講 資料1 プレゼンテーション準備・聴解・要約・熟語
- 第5講 資料2 本文・まとめ・聴解・要約・熟語
- 第6講 資料2 語彙・聴解・聴解・要約・熟語
- 第7講 資料2 ディベート準備・聴解・要約・熟語
- 第8講 資料2 ディベートシナリオ・聴解・要約・熟語
- 第9講 資料2 ディベート・聴解・要約・熟語
- 第10講 資料3 本文・まとめ・聴解・要約・熟語
- 第11講 資料3 聴解・語彙・原稿書き・聴解・要約・熟語
- 第12講 資料3 ディベート・修了プレゼンテーション準備
- 第13講 修了プレゼンテーション準備
- 第14講 修了プレゼンテーション準備
- 第15講 修了プレゼンテーション

■フィードバックの要領

課題や発表の後には即座にフィードバックを行ない、内容の定着を図る。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 会話がほぼ理解でき、言いたいことが伝えられ、社会問題を分かりやすく発表できる。

評価 A (89～80点) : 会話がだいたい理解でき、社会問題について、自分が考えたことがしっかり発表できる。

評価 B (79～70点) : 会話が理解でき、社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。

評価 C (69～60点) : やさしい会話が理解でき、社会問題について考えたことが短く発表できる。

評価 F (59点以下) : 出席・授業中の活動・修了プレゼンテーションが基準を満たさなかった。

■評価方法

出席・授業態度・毎回のテスト・宿題 : 80%、修了プレゼンテーション : 20%

■留意点

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

日本語講座中級 II (Japanese Language Intermediate Course II)

サブタイトル

日本語講座中級発表

担当教員

TIJ 東京日本語研修所

対象学年

1 年生以上

区分

秋学期

■講義目的

留学生が日本で生活するための日常会話、友だちと交流するための会話、また大学の職員・教師とコミュニケーションするための会話、社会から情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

(1) 日常生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをだいたい伝えることができる。(3) 自分の経験や夢、希望などをスピーチ形式で発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

日本語を学ぶことで人間関係を構築し、社会に対する批判的な視点から課題を明確にし、解決する力を養う。社会の多様性を理解し、規律性を身に付ける。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ 法 ●マインド・マップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習として、新聞記事やニュース等の漢字の読みや語彙を調べてくること。復習・宿題として、記事の背景を調べレポートや PPT を提出すること。必要時間は各 120 分。

■授業の概要

第 1 講 漢字・聴解・読解・ディスカッション

第 2 講 漢字・聴解・読解

第 3 講 漢字・聴解・読解・発表準備

第 4 講 漢字・聴解・読解・発表

第 5 講 漢字・聴解・読解・ディベート

第 6 講 漢字・聴解・読解・ディベート準備

第 7 講 漢字・聴解・読解・ディベート発表

第 8 講 漢字・聴解・読解・ディベート

第 9 講 漢字・聴解・読解・ディベート準備

第 10 講 漢字・聴解・読解・ディベート発表

第 11 講 漢字・聴解・読解・ディベート

第 12 講 漢字・聴解・読解・ディベート準備

第 13 講 漢字・聴解・読解・ディベート発表

第 14 講 漢字・修了スピーチ準備

第 15 講 期末テスト・修了スピーチ

■フィードバックの要領

課題提出や発表の後は即座にフィードバックし、内容理解を定着させる。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 会話がほぼ理解でき、社会問題について考えたことが分かりやすく発表できる。

評価 A (89 ~ 80 点) : 会話がだいたい理解でき、社会問題について考えたことがしっかり発表できる。

評価 B (79 ~ 70 点) : 会話が理解でき、社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。

評価 C (69 ~ 60 点) : やさしい会話が理解でき、社会問題について、考えたことが短く発表できる。

評価 F (59 点以下) : 出席・授業中の活動・期末テストが基準を満たさなかった。

■評価方法

出席・授業態度・毎回のテスト・宿題 : 80%、期末テスト・修了プレゼンテーション : 20%

■留意点

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

科目名 日本語講座上級 (Japanese Language An Upper Course)**サブタイトル** 日本語講座上級発表**担当教員** TIJ 東京日本語研修所**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

留学生在が日本で生活するため、大学の授業を聞くため、また授業に積極的に参加するため、及び、社会から情報を得るため、また社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。社会の多様性を理解し、社会の発展に積極的に関与していくという姿勢を身に付ける。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

(1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話が理解できる。(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを伝えることができる。(3) 社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。(4) 調べたこと、研究したことなどをプレゼンテーションできる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

世界で発生するさまざまな問題に対して、現状分析から課題を明確にし、解決のための方策を立てる専門的能力を体系的に修得する。社会の多様性を理解し、規律性を身につけ、社会の発展に貢献できる人材を育てる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ●相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ●マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

予習として、新聞記事やニュース等の語彙を調べ、関連記事を読んでくること。復習・宿題として、記事の現状・背景を調べ考察しレポートやPPTを提出すること。必要時間は各150分。

■授業の概要

第1講 プレースメントテスト(作文・発表)・インタラクティブ授業

第2講 聴解・要約・慣用句・ディベート用新聞①内容理解

第3講 聴解・要約・慣用句・グループ討議・ディベート準備

第4講 聴解・要約・慣用句・ディベート1回目

第5講 聴解・要約・慣用句・ディベート2回目

第6講 聴解・要約・慣用句・ディベート用新聞②内容理解

第7講 聴解・要約・慣用句・グループ討議・ディベート準備

第8講 聴解・要約・慣用句・ディベート1回目

第9講 聴解・要約・慣用句・ディベート2回目

第10講 聴解・要約・慣用句・プレゼンテーション用新聞 内容理解

第11講 聴解・要約・発表・慣用句・グループ討議・プレゼン準備

第12講 聴解・要約・慣用句・グループ討議・プレゼン準備

第13講 聴解・要約・慣用句・プレゼンテーション1回目

第14講 プレゼンテーション2回目、修了プレゼンテーション準備

第15講 修了プレゼンテーション

■フィードバックの要領

課題や発表の際には即座に内容を吟味し合い、クラス全体で共有する。

■評価基準

評価A+(90点以上):自分の考えが論理的に発表でき、調べたことをプレゼンテーションで披露できる。

評価A(89~80点):自分の考えが問題なく発表でき、調べたことを分かりやすくプレゼンテーションできる。

評価B(79~70点):考えたことが発表でき、調べたこと、研究したことなどをプレゼンテーションできる。

評価C(69~60点):考えたことがなんとか発表でき、調べたことなどをプレゼンテーションできる。

評価F(59点以下):出席・授業中の活動・修了プレゼンテーションが基準を満たさなかった。

■評価方法

出席・授業態度・毎回のテスト・宿題:80%、修了プレゼンテーション:20%

■留意点

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。日本語講座上級を履修するためには、それ以前に日本語講座中級を履修していることが前提条件となります。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネス数学基礎 (Practical Mathematics)**サブタイトル** 実社会に必要な数学スキル基礎**担当教員** 大森(拓)、良峯、久保田、日本数学検定協会 **対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。この講義は選択必修科目である。演習の積み重ねを通して技術が身に付く構成になっているので、欠席しないこと。本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをするとよいか、中学から高校1年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数理技能の基礎を完全習得する。

■講義分類

ビジネスマネジメント、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

経営情報学部で学ぶ上での最低限の数学の能力が身についているか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

データを扱う技法の基礎を身につけることにより、その分析技能と結果の表現方法を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

中学・高校数学の最も基礎的な知識を必要とするので、各回で取り扱う単元の事前学習(0.5時間)を行うこと。各回で完答できなかった問題を中心に、課題の復習(1時間)を行うこと。

■授業の概要

第1講 知識レベルの再評価

第2講 「把握力」

第3講 「分析力」

第4講 「選択力」

第5講 「予測力」

第6講 「表現力」

第7講 まとめ

第8講 中間テスト

第9講 「把握力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第10講 「分析力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第11講 「選択力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第12講 「予測力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第13講 「表現力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第14講 総合課題

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

毎回の授業内課題演習のチェック、中間・期末テストのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ビジネス数学検定 Lite において 90点以上およびそれに相当する成績を取ったもの

評価 A (89～80点) : ビジネス数学検定 Lite において 80点以上およびそれに相当する成績を取ったもの

評価 B (79～70点) : ビジネス数学検定 Lite において 70点以上およびそれに相当する成績を取ったもの

評価 C (69～60点) : ビジネス数学検定 Lite において 60点以上およびそれに相当する成績を取ったもの

評価 F (59点以下) : 上記以外

■評価方法

成績評価は、80%以上の出席を単位取得の条件とし、その上で試験(90%)、平常点(10%)により評価する。

■留意点

①クラスは自分が割り当てられたクラスを確認の上、そのクラスで履修する。②学期途中でクラス替えがあるので注意する。③電車の遅延や病欠などの際には、遅延証明書・診断書を提出する。

科目名 ビジネススキル入門 (Introduction to Business Skills)**サブタイトル** ビジネス能力検定ジョブパス 3 級**担当教員** 小西、高橋、葛本、加藤、西村 (知) **対象学年** 1 年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

この講義では、卒業後に期待される社会人・職業人になるために、学生時代に身につけておくべき基本的な事柄を学びます。具体的には、①規則正しい生活習慣、②コミュニケーション能力、③日常生活のマナー、④学ぶ楽しさ、⑤情報リテラシー等について、文部科学省後援「ビジネス能力検定ジョブパス 3 級」の公式テキストを用いて学びます。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

文部科学省後援「ビジネス能力検定ジョブパス 3 級」合格を到達目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスパーソンとして必要な様々な知識を理解し、社会人基礎力を身につける。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています**●講義 ●演習**

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前に配布する予習用サブノートを用いて、毎回 1 時間以上の予習が必要。さらに、授業終了時に配布する復習用ワークシートを用いて、毎回 1 時間以上の復習が必要。

■授業の概要

第 1 講 ビジネス能力検定ジョブパス 3 級について

第 2 講 第 1 編：ビジネスとコミュニケーションの基本第 1 章：キャリアと仕事へのアプローチ

第 3 講 第 2 章：仕事の基本となる 8 つの意識

第 4 講 第 3 章：コミュニケーションとビジネスマナーの基本

第 5 講 第 4 章：指示の受け方と報告、連絡・相談第 5 章：話し方と聞き方のポイント

第 6 講 第 6 章：来客対応と訪問の基本マナー第 7 章：会社関係でのつき合い

第 7 講 模擬問題演習①

第 8 講 第 2 編：仕事の実践とビジネスツール第 1 章：仕事への取り組み方

第 9 講 第 2 章：ビジネス文書の基本

第 10 講 第 3 章：電話応対第 4 章：統計・データの読み方・まとめ方

第 11 講 第 5 章：情報収集とメディアの活用第 6 章：会社を取り巻く環境と経済の基本

第 12 講 模擬問題演習②

第 13 講 模擬問題演習③

第 14 講 模擬問題演習④

第 15 講 模擬問題演習⑤

■フィードバックの要領

授業に関するコメント (ミニッツペーパー) にコメントを付して返却

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : ジョブパス 3 級検定試験に、成績優秀で合格する。

評価 A (89 ~ 80 点) : ジョブパス 3 級検定試験に合格する。

評価 B (79 ~ 70 点) : ジョブパス 3 級模擬試験に合格する。

評価 C (69 ~ 60 点) : ジョブパス 3 級合格に準ずる知識を有する。

評価 F (59 点以下) : ジョブパス 3 級合格に準ずるレベルに達していない。

■評価方法

ジョブパス 3 級検定試験、又はジョブパス 3 級模擬試験に合格すること。(100%) ただし、出席率が 3 分の 2 以上であることを要とする。

■留意点

教科書は毎回使用しますので、受講者は全員購入の上、毎回持参してください。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 法学（憲法）（Jurisprudence（including Constitution Law））

サブタイトル 大学生活と法律

担当教員 井川 昭弘他

対象学年 1年生以上

区分 秋学期

■講義目的

「社会あるところに法あり」という法諺からも知られるように、近代国家という社会は最高法規としての憲法を持ち、それはまた国の規範的な「形」をなすものである。この講義では「日本国憲法」をその人権論を中心に学ぶことで、日本国が国民に対して何を保障しているのか、つまり国民に対してどういう「形」の顔を示しているかを学ぶ。また同時に国民として他者や社会に対してどう向き合うべきなのかも考えたい。なお、昨今、政治の内外で改憲をめぐる論議がなされるようになったが、この講義ではこの問題に法哲学の観点から考察を加え、各人が将来の「日本国憲法」のあるべき姿について考える力を持ちうるような手助けも目指したい。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成

■到達目標

①日本国憲法の人権論の基本構造を学ぶ。②基本的人権をめぐる論争点を理解し、自分の考えを持てるようにする。③憲法の望ましい姿について、各人が自分の意見を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

近代国家の大前提である立憲主義および基本的人権について学ぶことで、我が国の近代国家としての「国の形」を知る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他（質問受付）

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング＝ペア ○ロールプレイ ○その他（ ）

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他（ ）

[上記以外]（なし）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前に指定する教科書の該当範囲を読書してから授業に参加する。

■授業の概要

- 第1講 法と法学について
- 第2講 日本国憲法の成立について
- 第3講 未成年者の人権について
- 第4講 定住外国人の人権
- 第5講 法の下での平等について
- 第6講 プライバシー権について
- 第7講 表現の自由権について
- 第8講 信教の自由権について
- 第9講 経済的自由権について
- 第10講 人身の自由権について
- 第11講 教育権について
- 第12講 生存権について
- 第13講 平和主義について① 憲法9条
- 第14講 平和主義について② 安保法制など
- 第15講 日本国憲法の未来

■フィードバックの要領

授業時に適宜リアクションペーパーを記入してもらう。また発表担当者の講評も行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：講義内容について、完全に近い理解を得ることができた。

評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容について、すぐれた水準の理解に達した。

評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容について、平均的な水準の理解に達している。

評価 C（69 ～ 60 点）：講義内容について、最低限の望ましい理解の水準に達することができた。

評価 F（59 点以下）：講義内容について、最低限の望ましい理解の水準に達していない。

■評価方法

期末試験で行う（100%）。「持ち込み」は一切不可である。

■留意点

特になし。

科目名 マーケティング入門 (Marketing Principle)**サブタイトル** マーケティングの意味と意義を理解する**担当教員** 村山 貞幸**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

マーケティングの仕事を学び、その面白さを知ることで、志の視野を広げる。企業のマーケティングに関する問題解決に必要な基本的な概念を、さまざまな企業の最前線事例を通じて学び、マーケティング思考力、問題解決力を鍛えることで、実践的知識・能力を獲得することを旨とする。講義では、インタラクションを重視し、ディスカッションやプレゼンテーションを組み込んで学んでいく。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

1、マーケティングの基本的な知識を利用し、マーケティング戦略をチームで立案することで、考え抜く力と役割分担により組織目標の達成に貢献する力を身に付ける。2、プロのマーケティングの志を知り、高い志を持つ基礎をつくる。3、学習した内容を多様な問題解決につなげる実践的知識・能力を獲得し、社会の発展に貢献する力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

基礎的な学力を養い、それを利用した問題解決演習により、思考する力と判断力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

講義の内容を復習し理解した上で特定の企業事例に当てはめ分析する。さらに自分たちのマーケティングプランにも応用し、戦略を立案する。必要時間は、予習 1.5時間、復習 1.5時間。

■授業の概要

- 第1講 講義の概要、受講姿勢、評価方針、その他注意点などを確認する。
- 第2講 マーケティングの実社会に対する影響の強さを知り、その面白さを確認する。
- 第3講 マーケターのこだわりをPVの中で確認し、マーケティングの面白さを知る。
- 第4講 マーケティングとは何か、その本質を確認する。
- 第5講 顧客ニーズには構造があることを理解する。
- 第6講 潜在ニーズを理解する。
- 第7講 ニーズが顧客により違う場合と同じ場合があることを確認する
- 第8講 ポジショニングを理解する。
- 第9講 セグメンテーション→ターゲティング→ポジショニングの流れを確認する。
- 第10講 競争力の違いによる戦い方について学ぶ。
- 第11講 マーケティング戦略の立て方を学ぶ
- 第12講 マーケティング戦略立案プロセスの理解を深める。
- 第13講 マーケティング戦略を立案する。
- 第14講 マーケティング戦略において、顧客の不満にも配慮する必要性を理解する。
- 第15講 講義のまとめと質疑応答。

■フィードバックの要領

レポートに対し、個別にフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : マーケティングの主要概念を完全に理解しており、それを利用して戦略立案ができる。

評価 A (89～80点) : マーケティングの主要概念を8割理解しており、それを利用して戦略立案ができる。

評価 B (79～70点) : マーケティングの主要概念を7割理解しており、それを利用して戦略立案ができる。

評価 C (69～60点) : マーケティングの主要概念を6割理解しており、それを利用して戦略立案ができる。

評価 F (59点以下) : マーケティングの主要概念の理解が6割を下回っている。

■評価方法

出席 50%、パワーポイントで作成するレポート 50%

■留意点

履修人数などにより講義の構成は変わる可能性がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 マーケティングマネジメント論 (Marketing Management)

サブタイトル マーケティング論とマネジメント論の統合

担当教員 趙 佑 領

対象学年 1年生以上

区分 秋学期

■講義目的

マーケティングとは「売れる仕組みづくり」である。そして、マーケティングマネジメント論とは、マーケティングをマネジメントの観点から捉える「システムの」、「全体最適」思考からの論である。そして、問題解決における手段と思考の多くが、マーケティングに通じるものである。この講義では、マーケティングマネジメントを行う人にとって必要な知識、概念、理論、手法、発想、技術、思考などの「基礎」を学ぶことで、その実行と問題解決の手がかりを得ることを目的とする。実際のマーケティングにおける企業を中心とした最新事例をできるだけとりあげて、現実のマネジメントに適用可能になるよう説明する。担当教員としてメリハリがあり、分かり易い講義を常に心がけたい。

■講義分類

顧客理解、ビジネス創造、ビジネスマネジメント

■到達目標

マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を理解し、マーケティング企画・マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得をめざす。中小企業診断士試験レベルの問題解説を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的なマーケティングの思考力を基に、組織と個人の課題解決に向けたマーケティングとマネジメントの統合のプロセスを理論的に理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

配布資料には翌週講義回の内容が記載しており、講義終了間際に教員が示す事前学習ポイントを中心に、それらを授業前に読んで上で(各1.5時間以上)講義に臨み、授業後にはWORDを用いてレポートを提出する。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション、マーケティングマネジメントの概要

第2講 戦略とは? 戦略の構想、ビジョン策定

第3講 マーケティング環境分析(1)、マーケティング環境の性格

第4講 マーケティング環境分析(2)、SWOT分析

第5講 STP(1) - 市場細分化するための基準

第6講 STP(2) - ポジショニング成功の鍵

第7講 コンセプトメイキング

第8講 サービス(プロダクト)

第9講 価格(プライシング)

第10講 チャネル(流通経路)

第11講 コミュニケーション(プロモーション)

第12講 マーケティングマネジメントの実際と日本企業のマーケティング

第13講 マーケティングマネジメントに必要な発想法と思考法

第14講 実社会のブランドマーケティングの専門家、またはマーケティングマネジャーのゲスト講義

第15講 総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、評価あるいはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+(90点以上): マーケティング・プロセスの基本を高度に理解し、中小企業診断士試験を勧めたいレベル

評価A(89~80点): マーケティング・プロセスの主要概念をかなり理解し、販売士試験を勧めたいレベル

評価B(79~70点): マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得がある程度に達している。

評価C(69~60点): マーケティング・プロセスの基本知識を一部有している

評価F(59点以下): マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を理解していない結果として不合格

■評価方法

・期末試験(筆記試験・50%) + 出席(50%)・詳細はオリエンテーション時に提示

■留意点

①講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後変更する場合がある。②出席点数の成績比重が高いことを納得すること。③私語、携帯電話、本授業と無関係のパソコン使用、途中退室は絶対不可であり、熾烈に厳しく注意する。学生の社会人としての常識涵養のための注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。

科目名 マクロ経済学 (Macroeconomics)**サブタイトル** 初級 (入門) 篇**担当教員** 椎木 哲太郎**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

〔(高度)産業社会〕のメカニズムを解明するために不可欠なマクロ経済学の原理を学び、「状況認識の学」として実態経済への適用を志向する。そして、マクロ経済の動向が市民生活と深い結びつきを持っていることを理解し、その健全な運営・制御に努める「問題解決の学」としての活用方法を身に付ける。さらに、双方向性を重視し、マクロ経済ニュースが理解できるよう、平易な解説に努める。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

初級レベルのマクロ経済学の理論を学び、企業活動の前提となるマクロ経済、諸変数の意味する所、その動向と因果関係、さらに日々生起するグローバルなマクロ経済ニュースに関する理解を深め、考え抜く力を高めることで、生活者・市民として望ましいマクロ経済政策を構想・評価することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

マクロ経済学の基礎的な学力を習得し、失業、インフレ・デフレ等の(マクロ)経済問題に対して、生活者・市民として必要な分析能力、政策提言能力の獲得をめざす。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●ワークシート ●その他(小テストの実施と解説)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

シラバスの講義概要・「事前学習ポイント」に従って、必ず教科書の該当部分を読んで理解した上で(質問を持って)、講義に臨むこと。そのためには、毎週最低1.5時間以上は読み込むことが必要となろう。

■授業の概要

- 第1講 マクロ経済学とはいかなる学問か「経世済民」の学、問題解決の学として
- 第2講 経済体制 経済体制・経済制度の概念とその変化について
- 第3講 「資本主義」の変貌とマクロ経済学の進化 第二次大戦後の資本主義と経済学
- 第4講 重要マクロ変数とマクロ経済ニュース 経済指標の見方について
- 第5講 SNA・GDP・国際収支 GDPの「支出」面を中心として
- 第6講 消費と投資 消費関数と投資関数
- 第7講 政府支出と財政政策
- 第8講 有効需要の原理、国民所得の決定、45度線モデル
- 第9講 経済成長理論と労働市場
- 第10講 金融(貨幣)市場 貨幣の需給と金融政策
- 第11講 IS-LMモデル(1) IS-LM曲線の導出とモデルの位置づけ
- 第12講 IS-LMモデル(2) IS-LMモデルと安定化政策
- 第13講 物価とインフレ・デフレ AD-AS分析
- 第14講 国際版IS-LMモデル マンデル=フレミング・モデルと安定化政策
- 第15講 マクロ経済学の有効性 *授業時間内最終試験の可能性

■フィードバックの要領

小テストを採点して返却し、解説する。

■評価基準

評価A+ (90点以上) : マクロ経済学の基礎的理解を示す試験の成績、通常を取り組みともに顕著に優れている

評価A (89~80点) : 試験の成績、通常を取り組みともに優れている

評価B (79~70点) : 試験の成績、通常を取り組みともに良い

評価C (69~60点) : 試験の成績、通常を取り組みともに普通

評価F (59点以下) : 試験の成績、通常を取り組みともに不十分

■評価方法

期末試験[持込不可]の結果(70%)、小テスト・レポート・出席(30%)

■留意点

①予習・復習の積み重ねが不可欠な科目であり、一度欠席すると講義についていけなくなる危険性が高い。②第4講から教科書を使用するので、あらゆる手立てを駆使して入手し、必要箇所を読んでおかねばならない。③講義は教科書を読んでいることを前提として行う。連続して出席せずして、或いは教科書を購入せずして、単位を取得することは不可能であろう。

科目名 ミクロ経済学 (Microeconomics)

サブタイトル ミクロ経済学 (Microeconomics)

担当教員 下井 直毅

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

この講義ではミクロ経済学について学ぶ。ミクロ経済学は、産業社会の中で資源配分がどのように行われているのか、あるいはないのかといった、メカニズムを明らかにすることを主たる目的にしている。限られた生産資源である労働や資本などをいかに効率的に生産にまわすのか(配分するのか)という問題を扱う。また、企業や産業を取り巻く社会問題についても経済学の発想で分析し、問題把握を行う。

■講義分類

ビジネス環境理解、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標

できるだけ現実の産業社会における経済現象に関心を持ち、それを分析するための枠組みとしての経済学を学び、その基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ●Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5時間以上の取組が必要です。

■授業の概要

- 第1講 需要と供給—需要と供給の関係について理解する
- 第2講 需要曲線の構造と消費者の行動—需要曲線と消費者の行動について理解する
- 第3講 費用曲線と企業の行動—費用曲線と企業の行動について理解する
- 第4講 企業の利潤最大化行動と供給曲線—企業の最適行動について理解する
- 第5講 消費者行動の理論—消費者行動について理解する
- 第6講 消費者行動理論の展開—様々な財について理解する
- 第7講 企業の生産関数と費用最小化行動—様々な生産関数を理解する
- 第8講 一般均衡と資源配分—一般均衡の概念を理解する
- 第9講 独占の理論—独占とは何かを理解する
- 第10講 独占的競争の理論—独占的競争とは何かを理解する
- 第11講 ゲームの理論—戦略的思考について理解する
- 第12講 市場の失敗I—市場の失敗の事例を理解する
- 第13講 市場の失敗II—市場の失敗の身近な事例について理解する
- 第14講 不確実性と経済現象—不確実性とは何かを理解する
- 第15講 まとめ—これまでの内容を復習する

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 100点満点中 90点以上
- 評価 A (89～80点) : 100点満点中 80点以上 89点以下
- 評価 B (79～70点) : 100点満点中 70点以上 79点以下
- 評価 C (69～60点) : 100点満点中 60点以上 69点以下
- 評価 F (59点以下) : 100点満点中 59点以下

■評価方法

出席点あるいは授業の平常点(30%)、試験(70%)。合計100%で100点満点。

■留意点

出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

科目名 余暇マネジメント (Management of Leisure Life & Society)**サブタイトル** 文化やレジャーから社会を洞察する**担当教員** 杉田 文章**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

(1) 以下三点について知り、自分なりの知見を有することに資する。①「余暇」の概念、歴史、現状、意義 ②「余暇市場」の構造、現状、背景 ③「余暇製品」産業の使命、マーケティング方法の中核 (2)「余暇をマネジメントする」概念を理解することによって、問題発見・解決の切り口を与えること。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

本講義における「余暇」「レジャー」の概念と意義について十分理解し、たとえばあるレジャー製品（財もしくはサービス）について、そのマーケティングの在り方について論じることができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

余暇の在り方と余暇をめぐる産業市場の在り方について知り、課題を洞察したうえで解決策を探る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (文献研究課題への取り組み)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

①「余暇」「余暇市場産業」に関する諸情報、②今日の余暇市場動向や観光・レジャー政策の動向に関する情報を、講義内で示される諸資料等より、把握してもらいたい。(2～3時間程度)

■授業の概要

- 第1講 「余暇」とは何か
- 第2講 余暇と社会
- 第3講 「あそび」とは何か
- 第4講 スポーツ現象に見る、「遊び」の制度化と商品化
- 第5講 プロスポーツの現状と課題
- 第6講 レジャー産業の市場構造
- 第7講 産業政策から見たレジャー産業の市場構造
- 第8講 産業政策から見たレジャー産業の市場構造
- 第9講 レジャー産業の業域と市場構造
- 第10講 社会変動からみたレジャー産業市場構造①
- 第11講 社会変動からみたレジャー産業市場構造②
- 第12講 レジャー産業における製品と製品政策
- 第13講 レジャー産業におけるマーケティングミックスについて考察する
- 第14講 まとめ
- 第15講 試験対策、最終振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

毎回の講義毎に受講者からのコメントを集め、これに対して公開返答を実施する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 余暇の社会・歴史的背景と余暇の在り方の関係を理解していること。

評価 A (89～80点) : 講義で学んだ諸理論について深く理解していること。

評価 B (79～70点) : 余暇の概念について理解できていること。

評価 C (69～60点) : 余暇をめぐる理論、現状について、最低限理解していること。

評価 F (59点以下) : 上記のいずれも達成されていない場合、F評価とする。

■評価方法

期末試験6割、講義中のミニレポート等を含めた受講態度などの参加状況によって4割を評価することとする。

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ライティング・スキル (Writing Skill)

サブタイトル ▶▶▶ 知的な文章を自在に書く力をつける

担当教員 ▶▶▶ 樋口 裕一

対象学年 ▶▶▶ 1年生以上

区分 ▶▶▶ 秋学期

■講義目的

ビジネスパーソンとして、社会人として、産業社会で活躍し、問題発見、問題解決、論理的思考、他者の説得をするために不可欠なライティングスキルを養成する

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確に思考し、判断し、それを他者に伝える力をつける。また、文章を書くスキルを身に着けることによって、自分の高い志を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確な思考と判断を培い、それを他者に伝える力表現力と技能を身に着ける。それによって、自分の高い志を持てるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (学生同士、自分の書いた文章を好感して添削し合う)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

前もって次の週に学ぶ内容を予告するので、ネットなどでその実例を調べておく。また、復習として、時間内に書いた自分の文章を書きなます。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション 文章の書き方の基本
- 第2講 第1回課題答案作成(200字~300字程度の文章)
- 第3講 文法的に正しい文・文原稿用紙の使い方・間違いやすい表現
- 第4講 よい文章と悪い文章の違い 論理の展開
- 第5講 第2回課題答案作成(300字程度の文章)
- 第6講 様々な文体への対応(日常の文体、新聞の文体、ビジネス文体)
- 第7講 第3回課題(600字程度の文章)
- 第8講 第3回課題解説 鋭い視点で論を展開する方法
- 第9講 鋭い視点で論を展開する方法・その2
- 第10講 文章を読んで論じる方法
- 第11講 第4回課題答案作成(文章を読んで、それについて論じる)
- 第12講 第4回課題解説 グラフ・表の読みとり
- 第13講 リアリティのある文章の書き方
- 第14講 第5回課題答案作成(エントリーシート)
- 第15講 第5回課題解説・これからの勉強法

■フィードバックの要領

毎回、原稿用紙を配布し、課題への回答だけでなく要望なども書いてもらう。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : ほぼ全出席。全答案平均が A 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 10 回以上出席。全答案平均が B 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 10 回以上出席。全答案平均が C 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 10 回以上出席。全答案平均が D 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 F (59 点以下) : 出席が 9 回以下。または全答案平均が D 未満 (書き直し、発言による加点を含める)

■評価方法

提出文章 (80 パーセント)、平常点 (20 パーセント)

■留意点

授業中の私語禁止。そのほか、飲食 (ただし飲みものの摂取は許す) ・ガム・帽子着用 (宗教などの理由のある学生は許可する) ・寝る姿勢を整えての居眠り・無断退出・イヤホンの着用・教員に対する暴言など、授業を害する行為についても禁止する。目に余るものは退出させ、欠席とみなす。

科目名 ライフ・デザイン (Life Design)**サブタイトル** クオリティ・オブ・ライフ (生活の質) について考える**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

生活環境が整備され、日本人の平均寿命は80歳を超えるようになりました。さらに皆さんは人生100時代を前提にライフ・デザインを考えなければなりません。これまでと異なるライフ・デザインを描くために、少子化、高齢化、人口減少、グローバル化、産業構造の変化、ICT、科学技術の進歩を生活者の視点から学びます。そして、これからの生き方、社会のあり方に、一人ひとりが真剣に向き合い、考え、行動するための実践的知識の獲得を目指します。

■講義分類

社会人力育成、地域ビジネス、問題解決

■到達目標

1. 社会学的なものの見方、考え方を理解すること。2. 暮らし、地域に興味と関心を向けることができるようになる。3. 暮らし、地域の課題をみつけ解決のためのデザインを考える習慣がつくこと。4. 自分自身のライフデザインを考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

生活全般に関する基礎的な知識を養い、グローバルな視点から社会現象の実態、現象の起こる原因に関係するメカニズムを解明するための手法を学びます。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前に予習のための用語やポイントを説明しますので、予習しておいてください。講義後は、配布資料、ノートを元に必要な情報を自ら収集し深い学びを行ってください。(各90分程度)

■授業の概要

- 第1講 ライフ・デザインってなに？
- 第2講 今、なぜ、ライフデザインが必要なの？
- 第3講 アルバイトから働くことについて考えてみよう
- 第4講 「これが当たり前」の働き方って？
- 第5講 ワーク・ライフ・バランスの国際比較
- 第6講 日本人のワーク・ライフ・バランスはどうなってる？
- 第7講 中間試験または課題の作成
- 第8講 生活文化を楽しむこと、伝えること
- 第9講 戦後の暮らしとコミュニティ
- 第10講 共に考える、これからのライフデザイン①
- 第11講 共に考える、これからのライフデザイン②
- 第12講 優れたデザインの先行事例調査①
- 第13講 優れたデザインの先行事例調査②
- 第14講 講義のまとめ
- 第15講 講義のまとめ

■フィードバックの要領

講義内で提出されたミニ・レポートに対する回答等でフィードバックします。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 授業内容を十分に理解し、優れた意見を持っている。
- 評価 A (89～80点) : 授業内容を理解し、自分の意見を持てるようになった。
- 評価 B (79～70点) : 授業内容について理解している。
- 評価 C (69～60点) : 不十分な点もあるが授業内容を理解している。
- 評価 F (59点以下) : 著しく理解が不十分である。

■評価方法

提出物 (60%)、最終課題または試験 (40%)。絶対評価: 多摩大学の評価基準に基づいて評価します。

■留意点

出席は評価のための前提条件です。欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しません。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

Basic Office English I (Basic Office English I)

サブタイトル

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける

担当教員

中村（そ）、潮田

対象学年

2年生以上

区分

春学期

■講義目的

世界でそして地域で活躍するために必要なビジネス英語表現力を身に付け、志の実現に向かって主にビジネスの現場、オフィスで積極的に情報をやり取りし、いろいろな形のコミュニケーションに対応できるようにする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を1.5時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど

第2講 オフィスやビジネス現場での自己紹介

第3講 自己紹介と他人紹介

第4講 会社、業務、商品紹介

第5講 電話のやりとり

第6講 電話での確認や依頼

第7講 その他の電話表現

第8講 これまでの総復習と中間テスト

第9講 英語メールの様式

第10講 メールでの確認、依頼

第11講 メールでのあいさつとお知らせ

第12講 アポイントメントを取る

第13講 日時や場所を決める

第14講 約束の変更やキャンセル押さえておきたい経済用語

第15講 期末テスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 下記の配分で得点を付け、90点以上の場合

評価 A (89～80点) : 下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合

評価 B (79～70点) : 下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合

評価 C (69～60点) : 下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合

評価 F (59点以下) : 下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

出席 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

科目名 Basic Office English II (Basic Office English II)**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村 (そ)、潮田**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

世界でそして地域で活躍するために必要なビジネス英語表現力を身に付け、志の実現に向かって主にビジネスの現場、オフィスで積極的に情報をやり取りし、いろいろな形のコミュニケーションに対応できるようにする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を1.5時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなどその2

第2講 会議の準備

第3講 会議の進行

第4講 会議の進行およびまとめ

第5講 商品やサービスの説明

第6講 価格や納期の交渉

第7講 商談の成否に関する表現

第8講 これまでの総復習と中間テスト

第9講 クレームを伝える

第10講 クレームに対応する

第11講 OA機器のトラブル、その他のトラブル

第12講 求人についての問い合わせ

第13講 面接での質疑応答

第14講 会社の制度や人事情報外国での採用事情

第15講 期末テスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 下記の配分で得点を付け、90点以上の場合

評価 A (89～80点) : 下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合

評価 B (79～70点) : 下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合

評価 C (69～60点) : 下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合

評価 F (59点以下) : 下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

出席 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどによって直接お話しすることも可能です。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 English Expression I (English Expression I) ※再履修者用

サブタイトル 自習型再履修専用クラス

担当教員 中村 その子

対象学年 2年生以上

区分 春・秋学期

■講義目的

この授業は教室では開講されず、別途掲示されるテキストを大学コンビニエンスストアで購入、自習して、各学期の期末試験期間内に実施される試験を受け、その点数によって単位が認定される形式です。最初は自己紹介、自由時間の過ごし方と好きなこと、自分の長所や短所、成功体験、失敗談などを語るころから始め、スモールトークや日常会話を円滑に行えるようにする。徐々に、アルバイトやボランティア活動、自分の住んでいる町の特徴などについて話す練習、ものごとの起源やプロセスを説明する練習に移り、英語力の社会的な幅を広げて行きたい。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。以下がこの授業のゴールとなる。客観的指標として TOEIC350 点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ●問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

指定されたテキストを学期を通して十分に自習し期末試験に備えること

■授業の概要

- 第1講 アイスブレイキング、自己紹介、自分を語る
- 第2講 キャンパスライフ、買い物、娯楽などの日常生活について語る
- 第3講 自分の住んでいる町やふるさとを語る
- 第4講 食生活や外食、レストランなどに関係する表現を学ぶ
- 第5講 職業にまつわる英語表現を学ぶ
- 第6講 留学に関連した英語表現を学ぶ
- 第7講 プレゼンテーション技術について学ぶ
- 第8講 体の調子や病院での会話を学ぶ
- 第9講 ここまで学習した事項の復習 1
- 第10講 ここまで学習した事項の復習 2
- 第11講 ここまで学習した事項の復習 3
- 第12講 ここまで学修した事項の復習 4
- 第13講 これまでの総復習
- 第14講 スクーリングおよび期末試験準備
- 第15講 スクーリングおよび期末試験準備

■フィードバックの要領

学期中のスクーリング時に学修アドバイスをする

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : テストの点数が 90 点以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : テストの点数が 80 点から 89 点
 評価 B (79 ~ 70 点) : テストの点数が 70 点から 79 点
 評価 C (69 ~ 60 点) : テストの点数が 60 点から 69 点
 評価 F (59 点以下) : テストの点数が 59 点以下

■評価方法

テストの点数が 100%

■留意点

このクラスは、学生番号が 218... を含んでそれより以前の入学年度の学生番号を持っている学生だけしか履修できません。基本は再履修クラスです。教室での授業は行われず、指定のテキストを購入して自習、期末試験期間内に実施される試験を受けて、その点数によって単位が認定されます。1 学期に 2 回程度 T-next に予告掲示をしてスクーリング (教室での学習相談) を行います。

科目名 English Expression II (English Expression II) ※再履修者用**サブタイトル** 自習型再履修専用クラス**担当教員** 中村 その子**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

この授業は教室では開講されず、別途掲示されるテキストを大学コンビニエンスストアで購入、自習して、各学期の期末試験期間内に実施される試験を受け、その点数によって単位が認定される形式です。最初は自己紹介、自由時間の過ごし方と好きなこと、自分の長所や短所、成功体験、失敗談などを語るころから始め、スモールトークや日常会話を円滑に行えるようにする。徐々に、アルバイトやボランティア活動、自分の住んでいる町の特徴などについて話す練習、ものごとの起源やプロセスを説明する練習に移り、英語力の社会的な幅を広げて行きたい。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。以下がこの授業のゴールとなる。客観的指標として TOEIC350 点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ●問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

指定されたテキストを学期を通して十分に自習し期末試験に備えること

■授業の概要

- 第1講 アイスブレイキング、自己紹介、自分を語る
- 第2講 キャンパスライフ、買い物、娯楽などの日常生活について語る
- 第3講 自分の住んでいる町やふるさとを語る
- 第4講 食生活や外食、レストランなどに関係する表現を学ぶ
- 第5講 職業にまつわる英語表現を学ぶ
- 第6講 留学に関連した英語表現を学ぶ
- 第7講 プレゼンテーション技術について学ぶ
- 第8講 体の調子や病院での会話を学ぶ
- 第9講 ここまで学習した事項の復習 1
- 第10講 ここまで学習した事項の復習 2
- 第11講 ここまで学習した事項の復習 3
- 第12講 ここまで学修した事項の復習 4
- 第13講 これまでの総復習
- 第14講 スクーリングおよび期末試験準備
- 第15講 スクーリングおよび期末試験準備

■フィードバックの要領

学期中のスクーリング時に学修アドバイスを

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : テストの点数が 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : テストの点数が 80 点から 89 点
- 評価 B (79 ~ 70 点) : テストの点数が 70 点から 79 点
- 評価 C (69 ~ 60 点) : テストの点数が 60 点から 69 点
- 評価 F (59 点以下) : テストの点数が 59 点以下

■評価方法

テストの点数が 100%

■留意点

このクラスは、学生番号が 218... を含んでそれより以前の入学年度学生番号を持っている学生だけが履修できません。基本は再履修クラスです。教室での授業は行われず、指定のテキストを購入して自習、期末試験期間内に実施される試験を受けて、その点数によって単位が認定されます。1 学期に 2 回程度 T-next に予告掲示をしてスクーリング (教室での学習相談) を行います。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 IT 概論 I (Introduction to IT I)**サブタイトル** ビジネスにおいて知っておくべき IT 基礎知識**担当教員** 佐藤 洋行**対象学年** 2 年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

今やすべてのビジネスで必須となっている IT について、ビジネスパーソンが知っておくべき基礎知識を学ぶ。そのために、IT が実際のビジネスの現場でどのように活用されているのかを、販売促進／顧客管理／物流／製造など、バリューチェーン／マーケティングにおける活動単位で解説する。それを通じて、ビジネスに共通して必要な IT 知識を体系的に理解してもらう。身近で実践的な事例を交えた講義とするので、ビジネス環境理解のため、また社会人基礎力を養うために是非受講していただきたい。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標

産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力として、ビジネスで必要とされる IT 知識の基礎を身につけてもらう。具体的には、ビジネスと IT との関わりについて、バリューチェーンにおける活動単位と関連付けて概説することができること、およびビジネスを取り巻く IT 環境と組織／企業関係の変化についてトレンドを理解していることを到達目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

IT について、ビジネスでの応用事例を学ぶことで、産業社会における課題に対処していける専門的知識を習得するとともに、それらに関する課題を考えることで、課題発見力を養う。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回講義のはじめに前回講義内容に関する小テストを行うので、前回講義資料および講義記録ノートによる復習をすること (1.5 時間程度)

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション ビジネスと IT (予告編)
- 第2講 販売促進活動と IT (販売促進活動基礎編)
- 第3講 販売促進活動と IT (デジタルマーケティング編)
- 第4講 販売促進活動と IT (マスメディア編)
- 第5講 販売促進活動と IT (店頭編)
- 第6講 顧客管理と IT (顧客管理基礎編)
- 第7講 顧客管理と IT (ダイレクトビジネス編)
- 第8講 顧客管理と IT (非ダイレクトビジネス編)
- 第9講 物流と IT
- 第10講 製造と IT
- 第11講 ビジネスと IT (環境編)
- 第12講 ビジネスと IT (組織編)
- 第13講 ビジネスと IT (法務編)
- 第14講 IT マネジメント (まとめ 1)
- 第15講 IT マネジメント (まとめ 2)

■フィードバックの要領

レポートへのコメント、定期試験の結果の掲示によりフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : ビジネスと IT との関わりについて、講義の範囲すべてを概説することができる
- 評価 A (89 ~ 80 点) : ビジネスと IT との関わりについて、事例を基に語るることができる
- 評価 B (79 ~ 70 点) : ビジネスにおける IT の活用事例をいくつか挙げるることができる
- 評価 C (69 ~ 60 点) : ビジネスにおける IT 活用事例をいくつか挙げるることができる
- 評価 F (59 点以下) : ビジネスと IT との関わりについて、語るべきところが無い

■評価方法

出席 60%、期末試験 40%

■留意点

必ず PC を持参すること。

科目名 IT 活用法 II (Utilizing Method of IT II)**サブタイトル** リポジトリ管理システムを利用した協業**担当教員** 出原、彩藤**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

近年、情報技術スキルの証明には、公開リポジトリサービス上での活動が求められるようになってきた。本講義では、リポジトリ管理システムを利用したクラウド上でのチーム協業の演習を基盤として、情報技術を用いた新しいビジネス（ゲームなどを含むサービス全般）の発想と提案を行うことができるようになることを目的とする。本講義の到達点である、マーケティング視点に基づくものづくりの発想法と、リポジトリへの蓄積、および、チーム協業は、社会において大きな競争力になる。受講者の到達レベルに応じて、講義内容を変更することがある。

■講義分類

ビジネス ICT、ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標

新しい情報サービスについて、そこで使用されている情報技術が理解できる。また、新しい情報技術を用いて、新たなサービスが提案できる。その過程で、戦略的な発想法を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

情報技術を用いた新しいビジネス（ゲームなどを含むサービス全般）の発想と提案を行うことができるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています**●講義 ●演習**

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ●その他(リポジトリを利用した協働)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

各回に示す内容について、チームごとに90分の議論を行い、記録する。(一部個人課題)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス・チーム決定
- 第2講 環境設定
- 第3講 クラウドを利用した共同作業
- 第4講 チーム Wiki の設置
- 第5講 チームウェブページの設置
- 第6講 サービスと要素技術
- 第7講 サービスと要素技術
- 第8講 制限要素発想法
- 第9講 要素制限法による独自サービスの考案
- 第10講 プレゼンテーション
- 第11講 ウェブ技術を利用したサービス
- 第12講 ウェブ技術を利用したサービス
- 第13講 サービス立案
- 第14講 ミニプレゼンテーション
- 第15講 プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対するコメント

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 数値評価で90点以上
 評価 A (89～80点) : 数値評価で80点以上90点未満
 評価 B (79～70点) : 数値評価で70点以上80点未満
 評価 C (69～60点) : 数値評価で60点以上70点未満
 評価 F (59点以下) : 数値評価で60点未満

■評価方法

欠席理由を問わず3分の2以上の出席を前提として、平常点60点、個人レポート40点で評価する。

■留意点

- ・第1回目の講義で全体のオリエンテーションを行うので必ず出席すること。特段の事情がある場合を除き、第1回講義に欠席した場合、受講を認めない。
- ・PCは必須である。PCを持参しない者の受講を、認めない。
- ・受講者の到達レベルに応じて、講義内容を変更することがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ITパスポート (IT passport)**サブタイトル** ITパスポート試験対策を含む**担当教員** 小西 英行**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

国家試験である「ITパスポート試験」は、「ビジネスICT」の分野で「問題解決のための理論や方法」についての実践的知識を問うものであり、具体的には「ストラテジー系」分野と「マネジメント系」分野、そして「テクノロジー系」分野があります。本講義では、この「ITパスポート試験」を受験しようとする学生を対象に、合格に必要な知識を得ることを目的とします。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、ビジネスICT

■到達目標

本講義は、グローバル社会に対する理解を深めるために必要な、ビジネスICTに関する専門知識について、①専門用語についての定義や用例などを理解し、②具体例を挙げて説明出来ることを学修目標とします。そしてこれらの学修成果の定着を図るために、授業に対する「予習」「復習」を習慣化することを目標とします。そしてこれらの学修を通じて最終的には「ITパスポート試験」合格を目指します。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

「ビジネスICT」の分野で「問題解決のための理論や方法」についての実践的知識を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前に配布する予習用サブノートを用いて、毎回1時間以上の予習が必要。さらに、授業終了時に配布する復習用ワークシートを用いて、毎回1時間以上の復習が必要。

■授業の概要

第1講 国家試験「ITパスポート試験」について

第2講 1-1 企業活動①

第3講 1-1 企業活動②

第4講 1-1 企業活動③

第5講 2-1 経営戦略マネジメント①

第6講 2-1 経営戦略マネジメント②

第7講 2-1 経営戦略マネジメント③

第8講 授業内中間試験

第9講 2-3 ビジネスインダストリ

第10講 3-1 システム戦略①

第11講 3-1 システム戦略②

第12講 8-1 コンピュータ構成要素

第13講 8-2 システム構成要素①

第14講 8-2 システム構成要素②

第15講 授業内期末試験

■フィードバックの要領

チャトルカードで毎回コメントバック。択一式期末試験で、解答公開による自己採点。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、具体例を挙げて詳細に説明できる。

評価 A (89~80点) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、具体例を挙げて説明できる。

評価 B (79~70点) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、詳細に説明できる。

評価 C (69~60点) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、大まかに説明できる。

評価 F (59点以下) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、ほとんど理解していない。

■評価方法

授業内期末試験(100%)ただし、予習・復習・発言等に応じて、ボーナスポイントを付加する。また、単位を取得するためには、出席率が3分の2以上であることが必要。

■留意点

①授業時に教科書及び、ノートパソコン又はタブレット等を使用するので、必ず持参してください。②授業毎に「予習」と「復習」の履行状況を確認しますので、毎回必ず行ってください。

科目名 NPO・NGO論 (NPO・NGO Theory)**サブタイトル** 社会的事業の組織論**担当教員** 松本 祐一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

社会的な問題の解決の主体であるNPOやNGO(以下、2つの概念を合わせて便宜上NPOと表記)が登場した歴史的背景、現代における存在意義、経営の特徴を学び、ソーシャルイノベーションを生み出す組織原理について理解する。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

NPO特有の組織原理を理解すること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

企業や行政とは違うNPO独自の組織のあり方を理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

最低1.5時間以上の興味のあるNPOの事例の収集

■授業の概要

第1講 講義の目的と内容を共有する。(オリエンテーション)

第2講 NPOという組織を学ぶ意味を考える。

第3講 NPOがなぜ必要かを考える。

第4講 NPOがなぜ必要かを考える。第2回

第5講 NPOの組織的特色を理解する。

第6講 NPOと他の組織の違いを総括する。

第7講 NPOの成果とは何かを考える。

第8講 NPOに必要なマーケティング志向を理解する。

第9講 NPOマーケティングの枠組みとプロセスを理解する。

第10講 NPOの資源動員について考える。

第11講 NPOに関わる「人」について考える。

第12講 NPOの経営の特徴について、総括する。

第13講 社会的事業の開発を考える。

第14講 社会的事業の開発を考える。第2回目。

第15講 授業のふりかえりを行う。

■フィードバックの要領

2回のセッションレポートについて、中間的な評価をフィードバックする。

■評価基準

評価A+(90点以上):すべて出席し、内容を理解し、オリジナル性がある。セッションレポートが2回ともA

評価A(89~80点):9割以上出席し、内容を理解している。セッションレポートのうち、2回ともB以上。

評価B(79~70点):8割以上出席し、内容を理解。セッションレポートのうち、1回以上B

評価C(69~60点):6割以上出席し、内容をある程度理解。

評価F(59点以下):5割以下の出席率。またはセッションレポートが2回ともD

■評価方法

授業中提出のワークシート(ミニテスト・セッションレポート)40% 中間レポート20% 最終レポート40%

■留意点

①10分以上の遅刻は欠席として扱う。②中間レポートと最終レポートの提出が単位修得の最低限の条件で、授業内で2回行うセッションレポートで2回ともDを取った場合、単位修得できない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

Practical English Conversation I (Practical English Conversation I)

サブタイトル

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける

担当教員

中村 その子

対象学年

2年生以上

区分

春学期

■講義目的

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようになる。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を1.5時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなどその1
- 第2講 電話での会話やPC(SNS)に関連した表現、アポイントメントに関連した表現その1
- 第3講 家族や結婚、自分の生活や趣味、ショッピングやデート、スポーツその1
- 第4講 アニメーション、映画やテレビ番組、メディア関連その1
- 第5講 人物、製品、サービスなどを魅力的に描写その1
- 第6講 食品販売、レストラン、料理など、食に関連した英語表現その1
- 第7講 比較対照、提案、オファー、選択決定、意見やアドバイスのやりとりその1
- 第8講 自由時間、週末の楽しみ方、趣味、旅行、特技その1
- 第9講 的確な指示の与え方と説明の仕方その1
- 第10講 アルバイト、インターンシップ、就職活動、ボランティア活動などについてその1
- 第11講 因果関係、同意不同意、将来計画、予想予測、論理思考その1
- 第12講 ファッション、音楽、および音楽関連産業に関する英語表現その1
- 第13講 地球にやさしい英語表現=環境問題その1
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション 世界に発信すべき日本の伝統と文化
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 下記の配分で得点を付け、90点以上の場合
- 評価 A (89～80点) : 下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合
- 評価 B (79～70点) : 下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合
- 評価 C (69～60点) : 下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合
- 評価 F (59点以下) : 下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

出席20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどによって直接お話しすることも可能です。

科目名 Practical English Conversation II (Practical English Conversation II)**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村 その子**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を1.5時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなどその2
- 第2講 電話での会話やPC(SNS)に関連した表現、アポイントメントに関連した表現その2
- 第3講 家族や結婚、自分の生活や趣味、ショッピングやデート、スポーツその2
- 第4講 アニメーション、映画やテレビ番組、メディア関連その2
- 第5講 人物、製品、サービス内容などを魅力的に描写その2
- 第6講 食品販売、レストラン、料理など、食に関連した英語表現その2
- 第7講 比較対照、提案、オファー、選択決定、意見やアドバイスのやりとりその2
- 第8講 自由時間、週末の楽しみ方、趣味、旅行、特技その2
- 第9講 的確な指示の与え方と説明の仕方その2
- 第10講 アルバイト、インターンシップ、就職活動、ボランティア活動などについてその2
- 第11講 因果関係、同意不同意、将来計画、予想予測、論理思考その2
- 第12講 ファッション、音楽、および音楽関連産業に関する英語表現その2
- 第13講 地球にやさしい英語表現=環境問題その2
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション 世界に発信すべき日本の伝統と文化
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 下記の配分で得点を付け、90点以上の場合
- 評価 A (89～80点) : 下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合
- 評価 B (79～70点) : 下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合
- 評価 C (69～60点) : 下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合
- 評価 F (59点以下) : 下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

出席20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどによって直接お話しすることも可能です。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 TOEIC I (TOEIC I)**サブタイトル** 特に英語検定試験受験を必要とする海外活動のために**担当教員** 石川 晴子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

English Expression と並行してまたはその後、英語力を継続的に高め、TOEIC の点数アップをめざす学生のための授業である。英語の総合的な力が上がれば TOEIC の点数も、もちろん上がって行くはずであるが、特徴のある能力資格試験なので、どのような傾向の問題がどんな形で出題されるのか、といった予備知識や技術的な訓練、慣れも大切な要素となる。この講義では TOEIC の得点を少なくとも現在の自分の点数から 100 点は上げることをめざし、リスニングリーディング両セクションで確実に点数を取ることに加えて、語彙、文法、読解力の増強をはかる。ただ、TOEIC の点数を上げるだけが英語を学ぶ目的ではないので、単なるノウハウに終わらせることなく、最後には、TOEIC の勉強をしたことが一人一人の英語コミュニケーション能力を総合的に高める結果につながる。

■講義分類

英語検定試験準備、自己表現・英語コミュニケーション

■到達目標

授業履修前の TOEIC 得点より 100 点アップした実力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

英語検定試験に必要な英語力と受験スキルを身に着ける。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

TOEIC 受験へ向けての準備、各回最低 2 時間程度

■授業の概要

第 1 講 TOEIC の概要と構成について

第 2 講 TOEIC の各パートの概要、出題形式、傾向について

第 3 講 Travel- 旅行中に使う表現、人物 (一人) の動作をあらわす表現、WH 疑問文、時制など

第 4 講 英語の音声パターンについて (連結、脱落など)

第 5 講 Dining Out レストランで使われる表現、人物 (一人) の位置・場所をあらわす表現など

第 6 講 リスニング問題で心がけること。聞き取りのポイントについて。

第 7 講 Media- 能動態・受動態、ニュースで使われる表現、接続表現など

第 8 講 聞きとると同時に自分の発音もよりよいものに。発音練習。

第 9 講 Entertainment- 人物 (複数) の動作をあらわす表現、図表問題、動名詞・不定詞など

第 10 講 リーディング問題の傾向と対策。問題の解き方について。

第 11 講 Purchasing- 人物 (複数) の位置・場所をあらわす表現、店内での会話、代名詞など

第 12 講 リーディングパートの点数をあげるために日頃どのようなものを読んだら良いか。

第 13 講 Clients- 顧客との取引に関する英語表現、品詞、代名詞、意図問題など

第 14 講 速読の技法を身に付ける。できばさきと問題を片づけるコツを身につける。

第 15 講 期末試験および総括

■フィードバックの要領

課題・試験等に対して行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 評価方法により計算された総合点が 90% 以上の場合

評価 A (89 ~ 80 点) : 評価方法により計算された総合点が 80 ~ 89% 以上の場合

評価 B (79 ~ 70 点) : 評価方法により計算された総合点が 70 ~ 79% の場合

評価 C (69 ~ 60 点) : 評価方法により計算された総合点が 60 ~ 69% の場合

評価 F (59 点以下) : 評価方法により計算された総合点が 59% 以下の場合

■評価方法

授業への出席および参加 20%、授業内活動 (小テスト、課題、宿題含む) 40%、授業内試験 40%

■留意点

①事前履修科目について:【2011~2013 年度入学生適用】同一言語にて 4 単位 (English Expression I と II、中国語 I と II、韓国語 I と II、もしくは IT 活用法 I と II) を修得していること。【2014 年度以降入学生適用】同一言語にこだわらず D 区分 4 単位を修得していること。②履修定員について: 本科目は原則 30 人の人数制限がある。初回の授業の出席者の履修を優先する。

科目名 TOEIC II (TOEIC II)**サブタイトル** 特に英語検定試験受験を必要とする海外活動のために**担当教員** 石川 晴子**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

English Expression と並行してまたはその後、英語力を継続的に高め、TOEIC の点数アップをめざす学生のための授業である。英語の総合的な力が上がれば TOEIC の点数も、もちろん上がって行くはずであるが、特徴のある能力資格試験なので、どのような傾向の問題がどんな形で出題されるのか、といった予備知識や技術的な訓練、慣れも大切な要素となる。この講義では TOEIC の得点を少なくとも現在の自分の点数から 100 点は上げることをめざし、リスニングリーディング両セクションで確実に点数を取ることに加えて、語彙、文法、読解力の増強をはかる。ただ、TOEIC の点数を上げるだけが英語を学ぶ目的ではないので、単なるノウハウに終わらせることなく、最後には、TOEIC の勉強をしたことが一人一人の英語コミュニケーション能力を総合的に高める結果につながる。

■講義分類

英語検定試験準備、自己表現・英語コミュニケーション

■到達目標

授業履修前の TOEIC 得点より 100 点アップした実力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

英語検定試験に必要な英語力と受験スキルを身に着ける。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

TOEIC 受験へ向けての準備、各回最低 2 時間程度

■授業の概要

第 1 講 TOEIC の概要と構成について

第 2 講 TOEIC の各パートの概要、出題形式、傾向について

第 3 講 Recruiting, Personne 一人事に関する英語表現、Yes/No 疑問文、問題先読みの方法など

第 4 講 英語の音声パターンについて (連結、脱落など)

第 5 講 Advertising 一物の位置関係をあらわす表現、比較など

第 6 講 リスニング問題で心がけること。問題に解答するための聞き取りのポイントについて。

第 7 講 Meetings 一会議に関連する英語表現、付加疑問文、前置詞など

第 8 講 さきとると同時に自分の発音もよりよいものに。発音練習。

第 9 講 Offices 一オフィスでの英語表現、依頼・許可表現、接続詞、前置詞、代名詞など

第 10 講 リーディング問題の傾向と対策。問題の解き方について。

第 11 講 Daily Life 一提案・勧誘の表現、関係代名詞など

第 12 講 reading part の点数をあげるために日頃どのようなものを読んだら良いか紹介する。

第 13 講 Sales and Marketing 一営業、マーケティングの英語表現、選択疑問文など

第 14 講 速読の技法を身に付ける。できばさきと問題を片づけるコツを身につける。

第 15 講 期末試験および総括

■フィードバックの要領

課題・試験等に対して行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 評価方法により計算された総合点が 90% 以上の場合

評価 A (89 ~ 80 点) : 評価方法により計算された総合点が 80 ~ 89% の場合

評価 B (79 ~ 70 点) : 評価方法により計算された総合点が 70 ~ 79% の場合

評価 C (69 ~ 60 点) : 評価方法により計算された総合点が 60 ~ 69% の場合

評価 F (59 点以下) : 評価方法により計算された総合点が 59% 以下の場合

■評価方法

授業への出席および参加 20%、授業内活動 (小テスト、課題、宿題含む) 40%、授業内試験 40%

■留意点

①事前履修科目について：【2011～2013年度入学生適用】同一言語にて4単位 (English Expression I と II、中国語 I と II、韓国語 I と II、もしくは IT 活用法 I と II) を修得していること。【2014年度以降入学生適用】同一言語にこだわらず D 区分 4 単位を修得していること。②履修定員について：本科目は原則 30 人の人数制限がある。初回の授業の出席者の履修を優先する。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 WebデザインI (Web Design I)**サブタイトル** ソースコード (HTML、CSS) を用いてホームページを作成する**担当教員** 良峯 徳和**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

この授業では、ウェブサイト（ホームページ）の構築、登録、更新を行うために必要な基本的な概念、技術の習得を目指す。インターネットが始まった当初から今日に至るまでのウェブサイトのデザインおよびその技術的変遷について学ぶと同時に、「ハイパーテキスト」という概念がもたらしたインターネット上の情報を構造的かつ動的に表現するための理論的な方法論について学習する。具体的には、HTML、CSS（スタイルシート）といったウェブページ構築に必要な基本的な言語および具体的手法等を、実習を通じて習得する。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネス ICT

■到達目標

① HTML および CSS を用いて、ウェブページを作成・編集するための知識、スキルの習得・ウェブページのソースファイルの意味や機能の理解、把握 ② ウェブページを構成するさまざまなファイルを、サーバー側の要求に合わせて、アップロードしたり、アップデートする方法の習得 ③ ウェブデザインに関するさまざまな概念や知識の習得

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

HTML、CSS を用いてウェブページを作成・編集するための基本知識を習得し、社会でウェブページが果たしているさまざまな役割とその重要性について理解する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(4択テスト、Web ページ作成)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業の開始時に毎回前回の授業の内容理解を確認するための復習テストを行う。その準備として、1.5 時間以上の復習を行ってこよう。

■授業の概要

第1講 インターネットの歴史、WWW の概念

第2講 Web ページのソースファイル; フォントとフォーマットのための HTML タグ

第3講 画像表示; ハイパーリンク

第4講 表の作成; デザインテーブル

第5講 フレームを使ったホームページ

第6講 リスト、フォーム、ボタン

第7講 HTML 全般の復習と練習問題

第8講 CSS の基本的文法; ホームページの背景を設定、画像表示

第9講 CSS によるテキストの設定、各種テキストスペースの設定; フォントの設定

第10講 アプリケーションを使ってスタイルシートを設定する方法; ボーダースタイルの設定

第11講 マージン、パディングの設定; イメージフロート

第12講 CSS 疑似クラス

第13講 CSS 全般の復習と練習問題

第14講 オリジナルホームページの作成

第15講 オリジナルホームページの作成、アップロード

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、修正点やコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上): 講義内容を十分に理解し、目的に応じて学んだ内容を応用、発展させることができる。

評価 A (89 ~ 80 点): 講義内容を理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度柔軟に活用することができる。

評価 B (79 ~ 70 点): 講義内容をほぼ理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度活用することができる。

評価 C (69 ~ 60 点): 講義内容の基本的事柄を理解し、簡単なことであれば、応用ができる。

評価 F (59 点以下): 講義内容について基本的な知識も理解も有していない。

■評価方法

出席: 10%、課題提出: 30%、小テスト: 40%、学期末課題: 20%。ただし、出席は全体の 2/3 以上、課題提出および小テストも全体の 2/3 以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

①本授業は Web デザイン II を履修する際の必須要件となっている。Web デザイン II も継続的に履修したい学生は必ず本授業を履修すること。②毎週の課題提出および小テスト正解率が全体で 2/3 を越えない学生、出席が全体の 2/3 に満たない学生は、単位を取得することができない。③就職活動に伴う欠席については活動していたという証明書がある場合に限り、これを正当な理由として考慮する。

科目名 WebデザインII (Web Design II)**サブタイトル** javascriptを学んで、動的、インタラクティブなWebページをデザインする**担当教員** 良峯 徳和**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

この授業は、HTMLやCSSの基本をマスターした学生を対象に、より高度な表現力、よりインタラクティブなコミュニケーションを可能とするWebページ制作技術の習得を目的とする。具体的には、HTML、CSSの基礎に加えて、javascriptと呼ばれるクライアントサイドのWebプログラミングの技法をWebページに組み込むための基礎知識ならびに制作技術を学ぶ。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネスICT

■到達目標

①プログラミングの基本となるアルゴリズム、構文ルールを理解・習得し、プログラムを構築する基礎能力を身に着ける。②Webデザインに有効なさまざまなメソッドの使い方を理解・習得し、必要に応じて使いこなす技術力を身に着ける。③Webのユーザビリティやアクセシビリティについての理解を深めるとともに、著作権への配慮やセキュリティの問題についても関心を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

自分が意図するWeb上の表現内容を読み手が見やすく、アクセスしやすく、プログラミング技術を使って実現する技能を養う

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(四択テスト、Webページ作成)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業の開始時に毎回前回の授業の内容理解を確認するための小テストを行う。その準備として、1.5時間以上の復習を行ってこよう。

■授業の概要

- 第1講 javascriptとは何か? ; javascriptはWebの世界でどのように利用されているか。
- 第2講 javascriptの基本構文1
- 第3講 javascriptの基本構文2
- 第4講 javascriptの基本構文3
- 第5講 ポップアップウインドウを使ったプログラミング技法を習得。
- 第6講 ループ(繰り返し)処理を使って、作業を大量かつ高速に行わせるプログラミングの技法
- 第7講 ループ(繰り返し)処理を具体的な課題に応用
- 第8講 イベント処理を伴うダイナミックWebページの作成方法
- 第9講 文字列オブジェクトを対象としたさまざまな操作や処理
- 第10講 日時に関するオブジェクトや行列を対象とした操作や処理
- 第11講 行列(array)や数オブジェクトを対象としたさまざまな操作や処理
- 第12講 HTML要素をオブジェクトとしたさまざまな操作や処理
- 第13講 最終課題作成実習
- 第14講 最終課題作成実習
- 第15講 最終課題作成実習

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、修正点やコメントを記入することでフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+(90点以上): 講義内容を十分に理解し、目的に応じて学んだ内容を応用、発展させることができる。

評価A(89~80点): 講義内容を理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度柔軟に応用することができる。

評価B(79~70点): 講義内容をほぼ理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度応用することができる。

評価C(69~60点): 講義内容の基本的な事柄を理解し、簡単なことであれば、応用ができる。

評価F(59点以下): 講義内容について基本的な知識も理解も有していない。

■評価方法

出席: 10%、課題提出: 30%、小テスト: 40%、学期末課題: 20%。ただし、出席、課題提出、小テストのいずれにおいても全体の2/3以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、該当小テスト後の1週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、最初の授業で説明する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ アドバンスド・ライティング・スキル (Advanced Writing Skill)

サブタイトル ▶▶▶ 文章の達人になる！

担当教員 ▶▶▶ 樋口 裕一

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 秋学期

■講義目的

産業社会で活躍し、問題発見、問題解決、論理的思考、他者の説得をするためのライティングスキルをマスターして文章の達人になることをめざす。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確に思考し、判断し、それを他者に伝える力をつける。また、文章を書くスキルを身に着けることによって、自分の高い志を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確な思考と判断を培い、それを他者に伝える力表現力と技能を身に着ける。それによって、自分の高い志を持てるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (学生同士、自分の書いた文章を好感して添削し合う)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

前もって次の週に学ぶ内容を予告するので、ネットなどでその実例を調べておく。また、復習として、時間内に書いた自分の文章を書きなます。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション 論理的文章の書き方の基礎を復習
- 第2講 第1回課題答案作成(600字～800字の文章)
- 第3講 第1回課題解説 論を深めるテクニック
- 第4講 文章について論じるテクニック
- 第5講 第2回課題答案作成(文章について800字程度で論じる)
- 第6講 文章を正確に読み取るテクニック
- 第7講 説得力を高めるテクニック
- 第8講 第3回課題(エッセイ)
- 第9講 魅力的な文章を書くテクニック
- 第10講 リアリティを作り出すテクニック
- 第11講 第4回課題答案作成(エッセイ)
- 第12講 文章にメリハリをつけるテクニック
- 第13講 引き締まった文体にするテクニック
- 第14講 第5回課題答案作成(自己PR・レポート・宣伝文)
- 第15講 第5回課題解説・これからの勉強法

■フィードバックの要領

毎回、原稿用紙を配布し、課題への回答だけでなく容貌なども書いてもらう。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ほぼ全出席。全答案平均が A 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)

評価 A (89～80点) : 10回以上出席。全答案平均が B 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)

評価 B (79～70点) : 10回以上出席。全答案平均が C 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)

評価 C (69～60点) : 10回以上出席。全答案平均が D 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)

評価 F (59点以下) : 出席が9回以下。または全答案平均が D 未満 (書き直し、発言による加点を含める)

■評価方法

提出文章 (80パーセント)、平常点 (20パーセント)

■留意点

授業中の私語禁止。そのほか、飲食 (ただし飲みものの摂取は許す)・ガム・帽子着用 (宗教などの理由のある学生は許可する)・寝る姿勢を整えての居眠り・無断退出・イヤホンの着用・教員に対する暴言など、授業を害する行為についても禁止する。目に余るものは退出させ、欠席とみなす。

科目名 アメリカ経済論 (American Economy)**サブタイトル** オバマ前政権およびトランプ政権の経済政策および政策意図を把握する**担当教員** 千原 則和**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義の目的は、アメリカ政府が毎年公表する『Economic Report of the President (ERP: 大統領経済報告)』および日本政府が毎年発表する『世界経済の潮流』(内閣府)・『通商白書』(経済産業省)を通じて、オバマ政権・トランプ政権の経済政策とその意図を把握することにある。本講義では、両政府の政府刊行資料を読み解くために必要な基礎知識を修得することから始める。前半の講義では、高校までに修得してきたアメリカの歴史・地理・文化に関する内容を復習したのち、現在のアメリカの政治・経済の概況を確認する。後半の講義では、前半の講義で修得した知識を用いて、政府刊行資料にて詳細に分析されているオバマ・トランプ両政権の経済政策の政策意図およびその背景を、分かりやすく説明する。本講義の最終目標は、最新のアメリカ経済のニュースの内容を理解し、独力で最前線事例に触れられるようになることである。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力養成、グローバルビジネス

■到達目標

①アメリカ経済をより深く理解するために必要な基礎知識を修得する ②アメリカ政府が発表する資料(『Economic Report of the President (ERP: 大統領経済報告)』など)、および日本政府が発表する資料(『通商白書』、『世界経済の潮流』など)を通じて、アメリカ経済に関連する最前線事例に触れ、課題発見のための素地を養う ③オバマ前政権およびトランプ政権の経済政策および政策意図を理解する

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

DP1: 政府刊行資料を読み解くために必要な基礎知識(歴史、地理、文化、政治、経済)を修得する。DP2: 映像資料等を通じて最前線事例に触れることによって、課題の発見・問題解決の方法の模索のための場を提供する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (映像資料内容理解度チェックテストの即時実施)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

[予習] 政府刊行資料の通読 [復習] 配布資料や講義ノートを使った講義の復習(1.5時間)

■授業の概要

第1講 イン트로ダクション

第2講 アメリカを知るための基礎知識(1)

第3講 アメリカを知るための基礎知識(2)

第4講 アメリカを知るための基礎知識(3)

第5講 アメリカを知るための基礎知識(4)

第6講 【オバマ政権の経済政策】(1) 経済格差という問題の提起①

第7講 【オバマ政権の経済政策】(2) 経済格差という問題の提起②

第8講 【オバマ政権の経済政策】(3) 経済格差解消の取り組みとその意義①

第9講 【オバマ政権の経済政策】(4) 経済格差解消の取り組みとその意義②

第10講 【オバマ政権の経済政策】(5) 経済政策と政策意図

第11講 【トランプ政権の経済政策】(1) 2019年のアメリカ経済の動向

第12講 【トランプ政権の経済政策】(2) 通商政策: 自由貿易から保護貿易への転換①

第13講 【トランプ政権の経済政策】(3) 通商政策: 自由貿易から保護貿易への転換②

第14講 【トランプ政権の経済政策】(4) 財政・金融政策①

第15講 【トランプ政権の経済政策】(5) 財政・金融政策②

■フィードバックの要領

定期試験では知識を問う問題を出題するため、原則フィードバックは行わない。

■評価基準

評価A+ (90点以上): 評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、90~100点

評価A (89~80点): 評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、80~89点

評価B (79~70点): 評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、70~79点

評価C (69~60点): 評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、60~69点

評価F (59点以下): 評価方法配分の要素を合算した100%を100点に換算し、59点以下

■評価方法

定期試験(70%)、授業内の課題の取り組み・出席など(30%)

■留意点

①出欠確認を兼ねた課題(小テスト)に取り組むこと、講義中に携帯端末(スマートフォン、タブレットなど)を使用しないことを、受講の条件とする。②課題に取り組む姿勢、課題の中身を基に、加点評価・減点評価をする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶アントレプレナーシップ論 (Entrepreneurship)

サブタイトル ▶▶▶ 立志起業家論

担当教員 ▶▶▶ 趙 佑領

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春学期

■講義目的

将来にビジネスを起こしたいと考えている学生がその実践に生かせる手がかりを学ぶことを科目の目的とする。この場合の「手がかり」とは、起業家に必要な最低限の「初歩的知識」すなわち、ビジネス・プラン、戦略、組織、マーケティング等のことであり、さらにはビジネスを立ち上げようという「志」、「やる気、思い」である。本講義においては知識以上に「志」、「やる気、思い」は重要なキーワードである。この授業では、理論を中心とした部分と共に志・実践に役立つ部分を強化している。趙が講義した内容と対応するかたちで、外部講師として本学に招いたベンチャー業界の実務家（産業社会で活躍し名声を得ている起業家、インキュベーター、メンター）は、起業経営の現実と最前線事例のダイナミクスさを学生諸君に感じさせるであろう。将来何をしたいのか漠然としている学生にとっても実務家の体験談を交えた講義は志・キャリア設計の参考のうえでも有意義であると思われる。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

①ビジネスの立ち上げとビジネスプラン作成に必要な知識習得、②起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングを理解する、③自分にとって経営（学）を勉強する意味を含む志・人生設計及び問題解決を考えさせるきっかけづくり。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ベンチャー企業を巡る社会問題に関連する経営環境と問題解決への手がかりと関心を理論的に理解させ、先進的な問題解決に関わる実務者の講演を通じて、社会変革に関与していこうという学生の高い志の確立につなげる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他（ ）

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他（ ）

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他（ ）

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

配布資料には翌週講義回の内容が記載しており、講義終了間際に教員が示す事前学習ポイントを中心に、それらを授業前に読んで上で（各 1.5 時間以上）当該回の講義に臨み、授業後には WORD を用いてレポートを提出する。

■授業の概要

- 第1講 ベンチャー企業とは何か、アントレプレナーシップとは何か
- 第2講 個人事業と会社設立における手順とルール
- 第3講 起業家としての志と勇気ある生き方（外部講師講演）
- 第4講 世界各地域の地域振興の事例とイノベーションの関係
- 第5講 ベンチャー企業経営論のフレームワーク
- 第6講 インキュベーター事業経験からみた成功する起業家、失敗する起業家（外部講師講演）
- 第7講 事業機会の発見・評価とビジネスモデル構築
- 第8講 ベンチャー企業の組織のマネジメント
- 第9講 ベンチャー企業の新価値創出と組織のあり方（外部講師講演）
- 第10講 限りある自社資源の限界を超えるための他社の経営資源活用
- 第11講 ベンチャー企業のグローバル化の意義
- 第12講 ベンチャー・ファイナンスー日本の銀行とベンチャーキャピタル
- 第13講 起業家・ベンチャー企業のマーケティング
- 第14講 日本の起業家・志ある経営（外部講師講演）
- 第15講 総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、評価あるいはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングを大変良好に理解している

評価 A (89 ~ 80 点) : 起業経営特有の戦略、組織、マーケティングをかなり理解している

評価 B (79 ~ 70 点) : 起業に必要な知識を良好に習得、レポートでは自分の考えが良く述べられている

評価 C (69 ~ 60 点) : 起業に必要な知識がある程度習得、レポートでは自分の考えが一定部分述べられている

評価 F (59 点以下) : ベンチャー経営の基本を理解しておらず、レポートも未提出

■評価方法

- ・期末定期試験 (40%) + レポート (3本・30%) + 出席 (30%)
- ・期末試験は趙の講義内容、レポート3本は外部講師の内容を中心に行う
- ・レポート3本は、MS Office word を用いた課題作成提出

■留意点

①講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後変更する場合がある。②外部講師の講義日もスケジュール状況によって変更になる場合もある。③私語、携帯電話、本授業と無関係のパソコン使用、途中退室は絶対不可であり、熾烈に厳しく注意する。学生の社会人としての常識涵養のための注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。

科目名 韓国ビジネスコミュニケーション I (Korean Business Communication I)**サブタイトル** 中級韓国語 (ハングル能力検定試験 4 級取得を目指す)**担当教員** 高 昌弘**対象学年** 2 年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

この講義では、1 年間初級韓国語を学習した学生 (2 年生以上) を対象に、次のステップである中級韓国語 (ハングル検定 4 級レベルの文法や語彙など) を学び、ハングル能力検定試験 4 級レベルの実力を身につけることを目的としている。

■講義分類

グローバルビジネス、社会人力育成

■到達目標

春学期の前半は 2019 年 06 月に行われる予定のハングル能力検定試験 5 級の合格を目指し、過去問を使って模擬試験を行うなど試験対策をし、後半では 2020 年 06 月にあるハン検 4 級に向けて「ハングル」検定の公式テキストを使い、4 級レベルの語彙や文法表現を学習していく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

様々な韓国語表現を学習することでコミュニケーション能力を高め、より明確な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ●その他 (毎回小テストを行う)
 [ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()
 [グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()
 [上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

復習に必要な時間は 2 時間以上。前回に学んだ内容をしっかり覚えているかどうかを確認するために毎回小テストを行う。

■授業の概要

- 第 1 講 オリエンテーション及び自己紹介
- 第 2 講 試験対策 (1) 「発音の変化」
- 第 3 講 試験対策 (2) 「語彙①」
- 第 4 講 試験対策 (3) 「語彙②」
- 第 5 講 試験対策 (4) 「語彙③」
- 第 6 講 試験対策 (5) 「語彙④」
- 第 7 講 試験対策 (6) 「文法」と「挨拶表現」
- 第 8 講 試験対策 (7) 「模擬試験 (聞き取り・筆記)」
- 第 9 講 1 課 [ㄷ変格動詞] / 2 課 [~처럼・같이]
- 第 10 講 3 課 [~네요] / 4 課 [안~ / ~지 않다]
- 第 11 講 5 課 [못~ / ~지 못하다] / 6 課 [~니까]
- 第 12 講 7 課 [~습니다] / 8 課 [~잖아요]
- 第 13 講 9 課 [~르까요] / 10 課 [~르게요]
- 第 14 講 11 課 [~르 거예요] / 12 課 [~기 전에]
- 第 15 講 映画鑑賞・面談

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 出席と小テストの合計が 90 点以上であること。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 出席と小テストの合計が 89 点から 80 点の間であること。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 出席と小テストの合計が 79 点から 70 点の間であること。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 出席と小テストの合計が 69 点から 60 点の間であること。
 評価 F (59 点以下) : 出席と小テストの合計が 59 点以下であること。

■評価方法

出席 50% 小テスト 50%

■留意点

韓国語 I・II を履修していなくてもハングルが読めて初級レベルの単語や文法表現を知っていれば受講できる。すでにハングル検定 5 級を持っている人は試験対策をやっている間 (4 月・5 月) は作文 (会話練習) を書く時間にする。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 韓国ビジネスコミュニケーション II (Korean Business Communication II)**サブタイトル** 中級韓国語 (ハングル能力検定試験 4 級取得を目指す)**担当教員** 高 昌弘**対象学年** 2 年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

この講義では、1 年間初級韓国語を学習した学生 (2 年生以上) を対象に、次のステップである中級韓国語 (ハングル検定 4 級レベルの文法や語彙など) を学び、ハングル能力検定試験 4 級レベルの実力を身につけることを目的としている。

■講義分類

グローバルビジネス、社会人力育成

■到達目標

2020 年 06 月に行われる予定のハングル能力検定試験 4 級を受けるために春学期に引き続き「ハングル」検定の公式テキストを使い、4 級レベルの語彙や文法表現を学習していく。秋学期ではテキストの中後半を学習した上で過去問を使って実際に模擬試験を行うなど試験対策をし、できるだけ試験問題に慣れるようにしていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

様々な韓国語表現を学習することでコミュニケーション能力を高め、より明確な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ●その他 (毎回小テストを行う)
 [ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()
 [グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()
 [上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

復習に必要な時間は 2 時間以上。前回に学んだ内容をちゃんと覚えているかどうか毎回テストを行うのでしっかり復習してくること。

■授業の概要

- 第 1 講 オリエンテーション
- 第 2 講 13 課 「～는 중이다」 / 14 課 「～으십시오」
- 第 3 講 15 課 「否定の連体形」 / 16 課 「～고 있다」
- 第 4 講 17 課 「～지 않다」 / 18 課 「～가/이 되다」
- 第 5 講 19 課 「～ㄴ 사이에」 / 20 課 「～해 보다」
- 第 6 講 21 課 「～ㄴ 생각이다」 / 22 課 「～ㄴ 결과」
- 第 7 講 23 課 「～서」 / 24 課 「～해하다」
- 第 8 講 25 課 「～으면」 / 26 課 「～해도 되다」
- 第 9 講 27 課 「～해야 되다」 / 28 課 「～ㄴ 데」
- 第 10 講 29 課 「～으려고」 / 30 課 「～라고 하면」
- 第 11 講 31 課 「～지 말아야 되다/하다」 / 32 課 「～도 아닌데」
- 第 12 講 33 課 「～ㄴ 가운데」 / 34 課 「～ㄴ 끝에」
- 第 13 講 35 課 「～으시겠어요?」 / 36 課 「～ㄴ 것처럼」
- 第 14 講 模擬試験 (聞き取り・筆記) と解説
- 第 15 講 映画鑑賞・面談・願書作成

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 出席と小テストの合計が 90 点以上であること。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 出席と小テストの合計が 89 点から 80 点の間であること。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 出席と小テストの合計が 79 点から 70 点の間であること。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 出席と小テストの合計が 69 点から 60 点の間であること。
 評価 F (59 点以下) : 出席と小テストの合計が 59 点以下であること。

■評価方法

出席 50% 小テスト 50%

■留意点

韓国語 I・II と韓国ビジネスコミュニケーション I を履修していなくてもハングルが読めて初級レベルの単語や文法表現を知っていれば受講できる。

科目名 キャリア・デザイン I (Career Design I)**サブタイトル** 社会の変化を知る、自己を知る、業界・企業を知る**担当教員** 初見、浜田、キャリア支援課**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義を通して、自己の将来を考え、卒業後の職業生活（キャリア）の方向性を検討する。具体的には、(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解することの3点を通して、将来のキャリアデザインを設計していく。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成

■到達目標

(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解するまた、上記3点を通して、自己のキャリアに対する関心と意欲を養っていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会の変化、自己理解、業界・企業の分析を通して、職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習 (1.5 時間)。講義後の振り返りシートの作成と内容の復習、指定図書を読むなど (1.5 時間)。

■授業の概要

第1講 キャリア・デザイン I ガイダンス (講義概要と目的の理解)

第2講 社会の変化を知る①

第3講 社会の変化を知る②

第4講 社会の変化を知る③

第5講 社会の変化を知る④

第6講 社会の変化を知る⑤

第7講 社会の変化を知る⑥

第8講 振り替え休講①

第9講 業界・企業を知る①

第10講 業界・企業を知る②

第11講 業界・企業を知る③

第12講 業界・企業を知る④ [フィールドワーク]

第13講 業界・企業を知る⑤

第14講 振り替え休講②

第15講 キャリア・デザイン I まとめ

■フィードバックの要領

講義内容に関する小レポートについて、評価・フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 出席 13 回以上、提出物について大変優れている場合

評価 A (89 ~ 80 点) : 出席 13 回以上、提出物について十分な到達度に達している場合

評価 B (79 ~ 70 点) : 出席 12 回以上、提出物について一定の到達度に達している場合

評価 C (69 ~ 60 点) : 出席 11 回以上、提出物について十分な到達度に達していない場合

評価 F (59 点以下) : 出席 10 回以下、提出物について期待される最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

出席 (40%) フィールドワークへの参加 (40%) フィードバックシート等の提出物 (20%)

■留意点

本講義ではインターンシップイベントへのフィールドワークに参加することが重要となる。また、本講義の履修後、2 年生後期に「キャリア・デザインⅡ」、3 年生前期に「キャリア・デザインⅢ」、3 年生後期に「キャリア・デザインⅣ」を履修することが望まれる。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 キャリア・デザイン II (Career Design II)**サブタイトル** 社会の変化を知る、自己を知る、業界・企業を知る**担当教員** 初見、浜田、キャリア支援課**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義はキャリア・デザイン I と連続する科目である。本講義を通して、自己の将来を考え、卒業後の職業生活（キャリア）の方向性を検討する。具体的には、(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解することの3点を通して、将来のキャリアデザインを設計していく。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解するまた、上記3点を通して、自己のキャリアに対する関心と意欲を養っていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会の変化、自己理解、業界・企業の分析を通して、職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習（1.5時間）。講義後の振り返りシートの作成と内容の復習、指定図書の読書など（1.5時間）。

■授業の概要

第1講 キャリア・デザインIIガイダンス

第2講 自己を知る①

第3講 自己を知る②

第4講 自己を知る③

第5講 自己を知る④

第6講 自己を知る⑤

第7講 振り替え休講①

第8講 業界・企業を知る①

第9講 業界・企業を知る②

第10講 業界・企業を知る③

第11講 業界・企業を知る④ [フィールドワーク]

第12講 業界・企業を知る⑤

第13講 振り替え休講②

第14講 キャリア・デザインIIまとめ①

第15講 キャリア・デザインIIまとめ②

■フィードバックの要領

講義内容に関する小レポートについて、評価・フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 出席 13 回以上、提出物について大変優れている場合

評価 A (89 ~ 80 点) : 出席 13 回以上、提出物について十分な到達度に達している場合

評価 B (79 ~ 70 点) : 出席 12 回以上、提出物について一定の到達度に達している場合

評価 C (69 ~ 60 点) : 出席 11 回以上、提出物について十分な到達度に達していない場合

評価 F (59 点以下) : 出席 10 回以下、提出物について期待される最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

出席 (40%) フィールドワークへの参加 (40%) フィードバックシート等の提出物 (20%)

■留意点

本講義ではインターンシップイベントへのフィールドワークに参加することが重要となる。また、本講義の履修後、3年生前期に「キャリアデザインⅢ」、3年生後期に「キャリアデザインⅣ」を履修することが望まれる。

科目名 業界研究 I (Industry Research I)**サブタイトル** 産業界・経済界の構造を知る**担当教員** 浜田 正幸**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

世界にはいろいろな産業・ビジネスがあり、経済や政治が回っている。どれひとつとして不要な業界などなく、その業界がなくなれば、現在の経済社会は停止してしまう。ならばどのような産業や業界があり、それが社会の中でどのような役割を担っているのかを知る必要がある。それを自ら探索し、分析できるようになることが、本講の目的である。興味・関心のある業界を調査し、将来の就職につながることを期待する。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネス環境理解

■到達目標

どのような業界であっても、どのような新規のビジネスや企業であっても、それを自ら、グローバルな視点で捉え、分析できることが目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

産業界の構造を自ら調べる能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

自ら担当する業界について深掘りし、何を聞かれても答えられるよう準備する(1.5h)。各回で取り上げる業界についてリサーチし、わからないこと(質問)を明確にし、のちにそれらを整理する(1.5h)。

■授業の概要

- 第1講 本講の進め方とルールの説明
 第2講 調査チームでのグループワーク
 第3講 1. 小売業界 2. アパレル業界
 第4講 3. 流通業界 4. 商社業界
 第5講 5. フードサービス(飲食)業界 6. 食品業界
 第6講 7. 自動車業界 8. 重工業界
 第7講 9. 電子・電気機器業界 10. 通信・ソフトウェア業界
 第8講 11. 不動産業界 12. 建設業界
 第9講 13. 金融業界 14. 保険業界
 第10講 15. ホテル・旅行業界 16. 運輸・物流業界
 第11講 17. エネルギー業界 18. プラント業界
 第12講 19. 生活・公共サービス業界 20. 人材サービス業界
 第13講 21. 医療機器業界 22. 製薬業界
 第14講 23. 化粧品業界 24. 広告業界
 第15講 達成度確認テスト

■フィードバックの要領

業界について調査・発表したものについて、都度授業内でフィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて優れた成果を出したものの。

評価 A (89～80点) : 発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて評価点に到達したものの。

評価 B (79～70点) : 発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて評価点に到達したものの。

評価 C (69～60点) : 発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて評価点に到達したものの。

評価 F (59点以下) : 発表回数、質問回数、確認テストの合計点が59点以下のもの。

■評価方法

チーム得点55点(発表1回につき10～20点、質問点1回1点) 個人得点55点(レポート1回につき2点、最終確認テスト30点)

■留意点

この授業はチームで進め、チームが獲得した得点で成績評価が決まる。チームは第1講で決定し、以降チームで授業に参加することが必須となる。業界研究(調査)をするため、毎回PC、タブレットを持参のこと。スマホは禁止。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 業界研究 II (Industry Research II)**サブタイトル** 業界研究**担当教員** 村山 貞幸**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

日本のさまざまなビジネス業界は、業界固有の課題と日々戦いながら、あらゆる問題解決に挑んでいる。講義では、各業界からゲストをお招きし、その生々しい状況をご説明いただく。リアルな最前線事例を聴くことを通じて、さまざまな業界を具体的に理解することを目的とする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

(1) 業界の現状、将来性をグローバルの視点から理解する。(2) 業界の状況をアップデートし、分析できるようになる。(3) 業界を理解し、関心のある業界を見定める。(4) 特定の業界の状況を明快に、正確に説明できるようになる。(5) 関心のある業界で働き、どのように社会貢献するか志をつくる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

さまざまな業界を理解することで視野と関心を広げ、高い志をたてる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

次週の業界に関する情報を書籍、新聞等で確認し、まとめる。解説された内容に基づき予習内容を修正する。さらに、業界の中で、関心のある企業を調査、分析する。必要時間は、予習、復習各 1.5 時間。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 日本経済新聞を利用した業界研究
- 第3講 金融業界の解説
- 第4講 不動産業界の解説
- 第5講 IT業界の解説
- 第6講 コンサルティング業界の解説
- 第7講 福祉業界の解説
- 第8講 福祉業界の解説
- 第9講 部品業界の解説
- 第10講 通信業界の解説
- 第11講 税理士業界の解説
- 第12講 小売業界の解説
- 第13講 卸業界の解説
- 第14講 物流業界の解説
- 第15講 講義内試験

■フィードバックの要領

最終回に各界の講師による講義をまとめてフィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 業界を完全に理解し、自分の志に適切に結び付けられている。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 業界を 8 割理解し、自分の志に適切に結び付けられている。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 業界を 7 割理解し、自分の志に適切に結び付けられている。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 業界を 6 割理解し、自分の志に適切に結び付けられている。
 評価 F (59 点以下) : 業界の理解が 6 割を下回っている。

■評価方法

出席 50%、試験 50%

■留意点

(1) 外部講師を意識した行動をとること。マナーに反する学生は退室させることがある。(2) 授業中の私語、携帯電話、飲食等授業を妨げる行為は禁止する。(3) 遅刻は認めない。(4) 講師のご都合等により、日程、業界が変更されることがある。

科目名 金融論 (Finance)**サブタイトル** 金融論 (Finance)**担当教員** 下井 直毅**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

この講義では、金融の理論と仕組みの基礎知識について学ぶ。また、産業社会にとっても重要である金融の役割を理解する。

■講義分類

ビジネス環境理解、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標

日本の金融の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ●Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要

- 第1講 金融の基本的な機能—金融の基本的な機能を理解する
- 第2講 企業と政府のファイナンス—企業と政府のファイナンスを理解する
- 第3講 日本の金融機関と金融市場—日本の金融機関や金融市場について理解する
- 第4講 貨幣とインフレ—貨幣とインフレについて理解する
- 第5講 金融政策の運営—金融政策の運営について理解する
- 第6講 債券市場と金利—債券市場と金利について理解する
- 第7講 株式市場と株価—株式市場と株価について理解する
- 第8講 金融規制の課題と仕組み—金融規制の課題と仕組みについて理解する
- 第9講 金融危機の発生—金融危機の発生について理解する
- 第10講 国際金融—国際金融について理解する
- 第11講 金融派生商品とリスク・ヘッジ—金融派生商品とリスク・ヘッジについて理解する
- 第12講 日本の金融をめぐる諸問題 (I)—日本の金融をめぐる諸問題を理解する
- 第13講 日本の金融をめぐる諸問題 (II)—日本の金融をめぐる諸問題を理解する
- 第14講 講義前半の復習—金融の基本的な機能や金融市場について復習する
- 第15講 講義後半の復習—金融規制の課題や金融危機発生メカニズムを復習する

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている
- 評価 F (59 点以下) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない

■評価方法

出席点あるいは授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計 100% で 100 点満点。

■留意点

出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 クリエイティブデザイン I (Creative Design I)**サブタイトル** マルチメディア実践/デジタル図形の描き方、動画制作ほか**担当教員** 彩藤 ひろみ**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

動画を作成する機会が増えてきた。動画編集について基本的な知識を習得する。その周辺で、デジタル図形の描き方、使い方、色の仕組み、著作権への配慮、著作権フリーの映像や音楽の探し方、使い方を理解する。また、魅力的なシナリオ構築の方法を身につける。特に、2つのものを比較してどちらを選択するか、という問題解決をコンピュータを使って考える。具体的には、家具の配置図などをデジタル作画して比較する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

動画編集について基本的な知識を習得する。その周辺で、デジタル図形の描き方、使い方、色の仕組み、著作権への配慮、著作権フリーの映像や音楽の探し方、使い方を理解する。シナリオの作り方、それを実現する方法についても演習を通じて理解する。目的・情報の受信者の状況に応じた情報の表現方法や情報機器の選択について理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ●その他(作品制作)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

好きな映画やアニメ、CMなどをよく見て、どこが面白いポイントなのか、自分なりに分析してみる。準備に1.5時間以上、復習作業に1.5時間以上かかる。

■授業の概要

第1講 6秒ムービーの鑑賞

第2講 gifアニメーションの作成

第3講 ムービー編集はじめの一步

第4講 ムービーの特殊効果について

第5講 音楽やサウンド効果について

第6講 第1作品 6秒ムービーの完成と鑑賞

第7講 イラスト作成方法の習得

第8講 ベクトルデータの活用

第9講 3DCGの活用

第10講 第2作品の構想

第11講 第2作品 イラストと実写の組み合わせ、または、3DCGと実写の組み合わせ

第12講 動画編集基礎知識確認

第13講 グループ作品シナリオ作り

第14講 作品中間チェックと仕上げのための作業

第15講 作品発表会

■フィードバックの要領

全3回の課題を順番にクリアしないとイケない。各回で、結果をフィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 動画編集の基本的知識習得および各課題での技術点と芸術点が特に優れているもの。

評価 A (89~80点) : 動画編集の習得および各課題での技術点と芸術点が優れているもの。

評価 B (79~70点) : 普通程度の動画編集知識があり、作品づくりが出来たもの。

評価 C (69~60点) : 頑張ったことがわかる作品を作れたもの。

評価 F (59点以下) : 課題の放棄、修正を行わなかったもの。

■評価方法

授業内基礎知識テスト(20%) 作品の技術点(40%)と芸術点(40%) 3課題とも提出は必須。

■留意点

最初からPCは必須になる。マウスを準備するほうがよい。外部を撮影する場合は、肖像権などに充分配慮すること。

科目名	クリエイティブデザイン II (Creative Design II)		
サブタイトル	クリエイティブデザイン II ～3DCG 制作とその社会的浸透		
担当教員	彩藤 ひろみ	対象学年	2 年生以上
		区分	秋学期

■講義目的

3DCG を利用した CM, アニメ、映画、ポスターなどが増えてきた。立体をそのまま 3D プリンターで印刷することも簡単になってきた。3DCG を制作体験しながら、これからの社会のどのような方面に応用できるか考察し、具体的に提案できるようにする。情報伝達・発信のひとつの表現方法として、3DCG を身につける。個々人の技術習得も狙うが、問題発見、解決の糸口として、グループワーク、プレゼンテーションを実施する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

3DCG ソフトの種類の理解、3DCG ソフトの利用、グループワーク、プレゼンテーションを通じてのプロジェクトの推進、3DCG の社会的価値の考察と成果発信

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

オープンソースソフトウェア {<http://blender.org>}Blender の練習に、予習、復習とも 1.5 時間以上かかる。

■授業の概要

- 第1講 インTRODクション：3DCG が当たり前になってきた世界
- 第2講 Blender の使い方・基本オブジェクトの操作
- 第3講 Blender の使い方・オブジェクトの編集
- 第4講 ロケットの 3DCG モデル作成練習その 1
- 第5講 ロケットの 3DCG モデル作成練習その 2
- 第6講 3DCG 基礎知識の確認
- 第7講 キャラクター 3DCG の仕上げりまでの流れ
- 第8講 ゲームと 3DCG
- 第9講 AR・VR と 3DCG
- 第10講 キャラクタモデリングその 1 顔
- 第11講 キャラクタモデリングその 2 ボディ
- 第12講 キャラクタモデリングその 3 手指、髪の毛
- 第13講 キャラクタモデリングその 4 仕上げ
- 第14講 キャラクターアニメーションの流れ
- 第15講 作品鑑賞会

■フィードバックの要領

全 3 回の課題に対する努力と成果に対して、フィードバックをする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 技術の著しい伸びと 3DCG に対する深い理解

評価 A (89 ~ 80 点) : 技術の伸びと 3DCG に対する理解

評価 B (79 ~ 70 点) : 技術が一定レベルを超えたもの、およびレポート普通評価。

評価 C (69 ~ 60 点) : 基本をおさえた評価できるもの。

評価 F (59 点以下) : 基準に達しないもの。

■評価方法

授業内でのミニ知識テストなどの平常点 (20%) と作品課題 (30%)、レポート (20%)、出席 (30%)

■留意点

PC は最初から必要。マウスを用意してほしい。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 クリエイティブデザイン III (Creative Design III)**サブタイトル** バーチャルリアリティ技術の習得とインタラクティブアプリケーション制作**担当教員** 出原 至道**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

学生にとって、新しいアイデアを出し、協業によってそれを実現していく能力を鍛えることは、極めて重要である。本講義は、コンピュータを用いたバーチャルリアリティアプリケーションのチーム開発の演習を通して、各種のアルゴリズムの実装とユーザ視点のものづくりを行うことを目的とする。具体的には、Unity {<http://madewith.unity.com/>} を利用したアプリケーション開発を行う。Unity は、ゲーム開発に限らず、PC からスマートフォンまで、ひろくさまざまなプラットフォーム上で、物理・景観シミュレーションの能力を活かした実務アプリケーション開発でも実績が増えている。Unity の便利な機能を活かしつつも、コーディングスキルを高めるために、あえて車輪の再発明を行うことも含まれている。

■講義分類

ビジネス ICT、社会人力育成、ビジネスマネジメント

■到達目標

①スクラムによるアジャイル開発手法を実践する、② github を利用した共同開発手法に熟練する、③ Unity を利用したアプリケーション開発を理解する、④実用的なアルゴリズムの実装が C# でできるようになる、⑤コンピュータを利用したシミュレーションを理解し、実装できるようになる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

コンピュータを利用したシミュレーション技法について、独自の実装を考案・実施できる。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(プログラムの実装)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義後、各チームで独自に実装研究を 90 分程度行い、記録すること。プロジェクト管理システム上で、作業時間の報告を行うこと。作業成果は、github 上に随時反映させること。

■授業の概要

第1講 ガイダンス

第2講 環境整備

第3講 github の利用(復習)

第4講 Unity 入門

第5講 Interactive Unity

第6講 プロジェクトゴールの設定

第7講 実現しようとするコンセプトの確定

第8講 ユーザインタフェースの設計

第9講 実装演習

第10講 実装演習

第11講 実装演習

第12講 実装演習

第13講 実装演習

第14講 プレゼンテーション準備

第15講 プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対してコメントをフィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上): 数値評価 90 点以上

評価 A (89 ~ 80 点): 数値評価 80 点以上 90 点未満

評価 B (79 ~ 70 点): 数値評価 70 点以上 79 点未満

評価 C (69 ~ 60 点): 数値評価 60 点以上 70 点未満

評価 F (59 点以下): 数値評価 60 点未満

■評価方法

平常点 (github 上での寄与) 50%、最終プレゼンテーション 40%、最終プレゼンテーション相互評価 10%

■留意点

①全体の講義では、モデリングはほとんど行わない。意欲のある学生は、自主的にモデリング技術を探求すること ②毎回、コンピュータを持参すること ③特段の事情がある場合を除き、第1回の講義に出席していないもの受講は認めない ④github 上に個人リポジトリを用意しておくことが望ましい ⑤外付けのマウスを持参することが望ましい、

科目名 グローバルヒストリーⅣ (Global HistoryⅣ)**サブタイトル** グローバル近現代史：世界と日本（西洋の世界を中心に）**担当教員** 椎木 哲太郎**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講座は、史学科学的な歴史研究ではなく、諸君が確固たる歴史（時代）認識を持つとともに、現代の世界が直面する諸課題とその歴史的背景を探り、複雑な相互連関の中にある国際関係や経済問題を考察するための共通認識を深め、未来への選択につなげていけるような歴史的教訓を得ることをねらいとしている。グローバル化の中を生き抜くためには、他者を知らねばならない。歴史を扱う際の時代的制約（現代の価値基準で評価することの危険性、等）を十分意識しつつ、地域統合や持続可能性、ポピュリズムといった現代の問題意識に沿って、通史よりもテーマ中心の大胆なアプローチを試みたい。前半で歴史を動かす諸要因について検討し、後半では欧州、米国、アジア、イスラーム世界等々、そして日本の近現代史について概観する。配布資料の事前の読解を前提に、ディスカッションを交えた密度の濃い講座となるよう心がけたい。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

世界と日本の相互作用、光と影に満ちた近現代史を学ぶことを通じて、現代社会の直面する諸課題の解決につながる豊富な示唆を獲得し、学問としての社会研究の基盤と、グローバル社会に生き、グローバルビジネスを円滑に進めるために有効な視座（歴史観）を構築し、多様な価値観や文化的背景を理解して、社会の発展に貢献することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

世界と日本の近現代史を広く学ぶことを通じて、世界潮流を認識するための視座を構築し、現代社会の諸課題の解決に貢献することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●ワークシート ●その他（小テストの実施と解説）

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク＝ペア ○ロールプレイ ○その他（ ）

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他（ ）

[上記以外]（なし）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回週過分の講義資料を配布する。必ず 1.5 時間読了した上で受講すること。全く読んでこなかった者の参加は認めない。予め決められた各回の報告担当者は、必ず当該資料に関連した質問と問題提起を行う義務がある。

■授業の概要

- 第1講 近現代史と現代社会 現代とのつながりを意識し、近現代史を学ぶ意義を考える。
- 第2講 近現代通史を紐解く 近代の始まりから時系列的に近現代史の流れを跡づける。
- 第3講 歴史からの教訓 第一次世界大戦後のドイツ、「ヴァイマル共和政」を例に考える。
- 第4講 リーダーシップの役割 歴史の動向を決定つけたリーダーたちの決断について考える。
- 第5講 近代経済成長と社会経済思想の役割 経済成長の軌跡と社会経済思想の影響。
- 第6講 欧州の近現代 EU 統合に至る二度の世界大戦を経たヨーロッパの近現代史について。
- 第7講 アメリカの近現代 自由と民主主義、孤立主義は、200年でどう変貌を遂げたか。
- 第8講 ロシアの近現代 世界初の共産主義革命、大國ロシアの集権制の背景を探る。
- 第9講 中国の近現代 帝国主義の侵略、辛亥革命、人民共和国の建国以後の歴史を考察する。
- 第10講 日本の近現代 (1) 後発近代化の歩みと日本人の世界認識の変遷を辿る。
- 第11講 日本の近現代 (2) アジア・太平洋戦争の惨禍と復興・高度経済成長から学ぶ。
- 第12講 アジア・アフリカの近現代 独立運動とその後の国家経営の軌跡を辿る。
- 第13講 イスラーム世界の近現代 「復興・改革運動史」と中東紛争を軸に展望する。
- 第14講 20世紀から21世紀へ 20世紀とは？ 21世紀は何を解決すべきかを考える。
- 第15講 再び、近現代史と現代産業社会 我々は近現代史から何を学んだのか。

■フィードバックの要領

小テストを採点して返却する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：試験の成績、質疑の内容、ともに顕著に優れている

評価 A (89～80 点)：試験の成績、質疑の内容、ともに優れている

評価 B (79～70 点)：試験の成績、質疑の内容、ともに良い

評価 C (69～60 点)：試験の成績、質疑の内容、ともに普通

評価 F (59 点以下)：試験の成績、質疑の内容、ともに不十分

■評価方法

期末試験 (70%)、レポート・小テスト・出席 (30%)

■留意点

①講義は毎回、前週に配布した資料を読み込んでいることを前提として進行する。資料の持参を忘れた者、読んでこなかった者は、原則として当日の受講を認めない。②第2回の講義までに全く出席しなかった者、さらに途中で連続欠席3回となった者は、本講座の履修を認めない。③グローバルヒストリーⅡの単位取得者は履修登録できない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 グローバルマーケティング (Global Marketing)**サブタイトル** グローバル化に対する企業のマーケティング活動の概要**担当教員** 須山 憲之**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

グローバル市場にてマーケティング活動を推進するマーケットターにとって、必要な知識およびスキルを体系的に修得することを講義目的とする。具体的には、自社の経営資源を活用し、外部環境を戦略的に踏まえ、消費者に対する価値を創造する活動を効果的に実行するための手法を学ぶ。理解促進のため、講義形式の授業のほか、ケーススタディ（事例研究）を通じて現実のグローバルビジネスに関する課題を発見し、問題解決のための方法をマスターする。授業にて習得した知識ならびにスキルを活用し、現実の小売業をベンチマークし、マーケティング戦略の立案を課題とする。活動単位は、基本的に3～7名程度のグループとする。対象の小売業は、第1回授業にて指示する。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

マーケティングの本質を理解するとともに、グローバルマーケティングの基本的フレームワークおよび理論について理解する。またビジネスマネジメントへの応用事例について消費者の視点からビジネスを捉える目を培うことを到達目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (現実の小売業をベンチマークし、マーケティング戦略を立案する。)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業の復習、事前配布物の精読、提出課題の作業など(予習1時間、復習30分)

■授業の概要

第1講 オリエンテーション

第2講 マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク(1)

第3講 マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク(2)

第4講 マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク(3)

第5講 マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク(4)

第6講 マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク(5)

第7講 グローバル市場の分析(政治、経済)

第8講 グローバル市場の分析(社会、文化、宗教)

第9講 グローバル市場の分析(データランキング)

第10講 データ分析手法(1)

第11講 データ分析手法(2)

第12講 データ分析手法(3)

第13講 グループディスカッション、グループワーク(ケーススタディ)

第14講 グループワーク(発表)

第15講 まとめと理解度の確認

■フィードバックの要領

提出課題についてはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+(90点以上):理論、概念、フレームワークを完全に理解し、現実のビジネス課題に応用できる。

評価A(89～80点):理論、概念、フレームワークを十分に理解している。

評価B(79～70点):授業で習った理論、概念、フレームワークを平均的に理解している。

評価C(69～60点):授業で習った理論、概念、フレームワークの理解は不十分。

評価F(59点以下):授業で習った理論、概念、フレームワークを理解できていない。

■評価方法

課題レポートおよび発表(グループ単位)80%、平常点(授業への貢献ほか)20%。授業への参加は前提条件とする。また、絶対評価とする。

■留意点

場合により、履修制限を行います。方法は別途連絡します。

科目名 経営科学 (Management Science)**サブタイトル** management science I**担当教員** 増田 浩通**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

Excel を用いて経営科学の問題を扱います。主にローンの基礎となる複利計算が身につくよう、数学の基本的な考え方から理解することを目的とします。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

数学的思考を身につけ、Excel の基本が身につくことを到達目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

この授業には EXCEL の基本的な使い方があります。もし基本的な使い方を知らない人は、各自 EXCEL の入門書を読んでください。そのために予習 1.3 時間以上、授業後の復習に 1.5 時間以上を当ててください。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：半年間の講義の目的と授業の予定を述べる。
 第2講 EXCEL を用いて授業を行います。パソコンは毎週持ってくること。
 第3講 EXCEL の復習 2
 第4講 EXCEL の復習 3
 第5講 EXCEL の復習 4
 第6講 EXCEL の関数
 第7講 経営科学に使われる数学の復習：等比数列①
 第8講 中間課題の作成と提出
 第9講 経営科学に使われる数学の復習：等比数列②
 第10講 経営科学に使われる数学の復習：等比数列③
 第11講 EXCEL 関数 SUM 関数
 第12講 単利計算
 第13講 複利計算
 第14講 EXCEL 関数 IF 関数
 第15講 期末課題の作成と提出：第9講以降の学習内容を元に最終レポートを課します。

■フィードバックの要領

課題に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：T-NEXT に提出された課題と期末課題の総合評価が 90 点以上の場合。
 評価 A (89～80 点)：T-NEXT に提出された課題と期末課題の総合評価が 89～80 点の場合。
 評価 B (79～70 点)：T-NEXT に提出された課題と期末課題の総合評価が 79～70 点の場合。
 評価 C (69～60 点)：T-NEXT に提出された課題と期末課題の総合評価が 69～60 点の場合。
 評価 F (59 点以下)：課題の未提出など

■評価方法

授業内での T-NEXT への課題 80%、期末課題 20%

■留意点

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営学概論 (Introduction to Management)**サブタイトル** 経営とは何か、企業とは何か、戦略と組織を理解する (経営学の初級レベル)**担当教員** 野坂 美穂**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

日頃の私達の生活と企業は、密接な関わりがある。本講義では、経営学とは何か、企業とは何かを理解し、「経営学」という学問を身近に感じ、関心を高めてもらうことを目的とする。経営学という学問の二本柱である戦略論と組織論の導入科目と位置づけ、企業とは何であるのか、その全体像を理解する。より理解を深めるために、実際の事例の紹介や学生自らがケース分析を行う。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント

■到達目標

(1)「グローバル社会に対する理解」:企業の全体的なイメージを持つとともに、国内外で活動を行う企業の実態を理解する。(2)「社会の発展に貢献する力」:様々な企業の特徴や強みおよび課題を自分なりに見つけ出すこと。(3)「役割分担により組織目標の達成に貢献する力」:企業のケースについて、自分の言葉で説明することができ、プレゼンテーション能力を高めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

企業内での様々な問題がなぜ生じるのかについて、因果関係(原因と結果)を明らかにし、理論を用いて説明することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎回の講義では、ワークシート等を配布します。そのワークシートを埋める形で、予習・復習を行ってください。(1.5時間) 予習復習について提出を求める場合、成績評価に反映します。

■授業の概要

第1講 イントロダクション:経営学とは何か、日常生活と企業との関わり

第2講 企業を取り巻く環境① 企業を取り巻く様々な市場

第3講 企業を取り巻く環境② プレゼンテーション

第4講 経営資源の流れを学ぶ①

第5講 経営資源の流れを学ぶ②

第6講 企業の戦略について学ぶ① 企業戦略と事業戦略

第7講 企業の戦略について学ぶ② 競争戦略

第8講 CSRとCSV

第9講 理論やフレームワークの復習ゲーム

第10講 企業の境界

第11講 企業の成長 事業構造と事業の多角化

第12講 組織とは何か① 組織デザインと組織構造

第13講 組織とは何か② 組織のインセンティブシステム

第14講 企業のケース分析(戦略・組織)に関するプレゼンテーション①

第15講 企業のケース分析(戦略・組織)に関するプレゼンテーション②

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対する評価を返却する。

■評価基準

評価A+(90点以上):戦略と組織の全体像を的確に捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。

評価A(89~80点):戦略と組織の全体像を捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。

評価B(79~70点):戦略と組織の全体像をある程度捉えることができ、自分の言葉で説明することができる。

評価C(69~60点):戦略と組織の全体像をある程度捉えているが、自分の言葉での説明が不十分。

評価F(59点以下):戦略と組織の全体像をほとんど捉えておらず、自分の言葉で説明もできていない。

■評価方法

出席40%、レポート20%、プレゼンテーション20%、テスト20%

■留意点

科目名 経営思想史 (History of Management Thought)**サブタイトル** 江戸時代から戦前までの日本のマネジメント**担当教員** 高橋 恭寛**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

現代社会における経営思想は、マネジメントにせよ戦略論にせよイノベーションにせよ、グローバルビジネスの時代において、様々な角度から語られており、それ自体経営学として体系的に学ぶものだと思います。ただ、それらを教科書的に学ぶだけでは机上の空論で終わってしまうのです。日本における商活動がどのようなものであり、ビジネスに対してどのような態度で臨んでいたのかを理解しなければ、知識も実地で活用する効果が薄まるに相違ありません。そこで本講義では、江戸時代から近現代に至るまでの日本における独特な経営思想を唱えた人物を中心に学んでいきます。昔の経営理念とはいえ、その特色を知ること、どこかしら現代のビジネス環境にも引き継がれている文化的土壌が見えてくることもあると思われます。そのような日本の経営に関する風土の伝統を知ることが出来れば、ビジネスマネジメントについてもより深い理解を得られることでしょう。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント

■到達目標

商活動のハンドルの操作に関する日本独特の多彩な考え方があったことを理解する。それによって、現代の様々な経営思想に関わる知識が日本の風土でどのように活かせるのかを自分なりに考えることが出来るようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネス環境、そしてビジネスマネジメントへの知識を深めることになり、今後実社会で自らが活動する際、自らが置かれた環境の背景を理解したうえで積極的に行動する高い志を養います。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(ミニッツペーパー)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

1.5時間。各講義で取り上げる人物やテーマについて、授業最初に復習ペーパーを提出してもらう予定です。本時予習のチェックテストも行う予定です。前もってメモ作成等の準備をしてきてください。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション—経営についての考えを、歴史的に見ることは出来るのか
- 第2講 江戸時代の武家社会には経営感覚がなかったのか
- 第3講 江戸時代の経営コンサル—荻生徂徠と海保青陵—
- 第4講 石田梅岩と通俗道徳
- 第5講 井原西鶴と元禄時代
- 第6講 江戸時代の商家の経営理念
- 第7講 二宮尊徳の思想
- 第8講 大原幽学と大蔵常永
- 第9講 福沢諭吉とその門下生
- 第10講 渋沢栄一の「道徳経済同一説」
- 第11講 伊東要蔵と明治の企業運営
- 第12講 20世紀の近代工業と企業運営
- 第13講 戦後復興と経営思想
- 第14講 現代に目を向ける—ドラッカーやマイケル・ポーターなど—
- 第15講 まとめ—前近代～近代の日本型経営思想の着眼点おさらい—

■フィードバックの要領

授業中書いてもらうミニッツペーパーはコメントを付してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点のうち 90点以上
- 評価 A (89～80点) : 評価点 100点のうち 89点～80点
- 評価 B (79～70点) : 評価点 100点のうち 79点～70点
- 評価 C (69～60点) : 100点のうち 69点～60点
- 評価 F (59点以下) : 評価点 100点のうち 59点以下

■評価方法

評価点 100点は、期末テスト (50%)、ミニッツペーパー・ワークシートによる授業の理解度 (50%) の合計点で換算する。

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営シミュレーションゲーム (Management Simulation Game)**サブタイトル** 経営シミュレーションゲームを通じたアクティブラーニング経営体験プログラム**担当教員** 出原 至道**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

多摩大学式経済経営シミュレーションゲームを通して企業経営の基本を理解する。ゲームでは、ゲーム上の仮想の市場で、企業経営を経験する。講義では、ゲームをベースに、経営の基本および企業経営の計数的理解を深めることを目指す。

■講義分類

ビジネスICT、ビジネスマネジメント

■到達目標

企業経営の基本を理解すること。企業経営の計数的理解を深めること。コンピュータを使用しての学習経験を深めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

本講義では、シミュレーションゲームを通じた会計の実践的な知識の獲得と戦略決定を通じて、企業経営の基本を理解し、実践できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ●その他(シミュレーション世界への参加)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義外の時間で、シミュレータは継続的に動作する。常に市場動向に気を配り、競合製品の価格や消費者の動きに対して対応し、それを記録すること(15分×6日)。最終レポートに、この記録が重要である。

■授業の概要

第1講 (講義) 「オリエンテーション」(ゲーム)「経営シミュレーションゲームの説明」

第2講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「お話し1・2期」

第3講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「お話し3・4期」

第4講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「お話し5・6期」

第5講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「お話し7・8期」

第6講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「ゲーム第1期」

第7講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「ゲーム第2期」

第8講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「ゲーム第3期」

第9講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「ゲーム第4期」

第10講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「ゲーム第5期」

第11講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「ゲーム第6期」

第12講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「ゲーム第7期」

第13講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「ゲーム第8期」

第14講 (講義) 「企業経営の基礎」(ゲーム)「ゲーム第9期」

第15講 講義内でのテスト、理解のみきわめを行う。

■フィードバックの要領

課題や試験等に対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で90点以上

評価 A (89～80点) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で80点以上

評価 B (79～70点) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で70点以上

評価 C (69～60点) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で60点以上

評価 F (59点以下) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件に達しない。または、数値評価で60点未満。

■評価方法

(1) 講義中の課題への取り組み、ゲームへの参加度および出席 35% (2) レポート 15% (3) 最終試験 50%

■留意点

初回講義出席者の中から履修許可者(上限90名)を選抜する。講義開始後、受講生の理解や興味・関心に応じて、講義内容を変更する場合がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。

科目名 経営情報論 I (Management Information Systems I)**サブタイトル** 経営情報の基本を学ぶ**担当教員** 小林 (英)、小西他**対象学年** 2 年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

経営情報学科の共通リテラシーの内容として、論理的思考とプログラミングの基本的事項、および、企業・社会が何を目的として情報システムを活用するのか、どんな情報システムを活用しているのか、経営情報システムはどのように発展してきたのか、今後の情報社会がどのように変わっていくのかを理解する。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標

①企業や社会が、何を目的として情報システムを利用しているのかを、具体的に理解する。②企業や社会が目的達成のために利用している情報システムのポイント・核心を知る。その結果、ICT に関する基礎的な学力、課題発見力等を修得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

経営情報を事例を知り理解することにより、経営情報の学びの関心を高め、より深く知る意欲を喚起する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ●その他 (ミニッツペーパー)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする (1.5 時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 インTRODクション
- 第2講 アルゴリズムの基礎
- 第3講 プログラミング 1 Scratch の使い方を学ぶ
- 第4講 プログラミング 2 動きを作ってみる
- 第5講 プログラミング 3 ゲームを作ってみる
- 第6講 プログラミング 4 自分で工夫して作ってみる 1
- 第7講 プログラミング 5 自分で工夫して作ってみる 2
- 第8講 経営情報システムの歴史
- 第9講 開発方法論と SE の仕事
- 第10講 物流システム
- 第11講 CIO と情報セキュリティ
- 第12講 SNS とネット・リテラシー
- 第13講 人工知能
- 第14講 経営情報システムのまとめ
- 第15講 期末レポート提出

■フィードバックの要領

毎回提出のコメントシートの講評と、質問・意見への回答、コメントを翌回講義で行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 60 点未満

■評価方法

授業貢献点 30%、プログラミング課題 20%、期末レポート 50%。プログラミング基礎を既に習得していると考えられる者は、自分のスキル説明文書提出と第 7 講課題の提出を以て第 4 ~ 7 講の出席の代替とすることを認める。

■留意点

授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業での受講態度や提出物の品質を、A (授業を聴き良い気づきがあった)、B (授業を聴いていた)、C (授業を聴いていたとは思われない) の 3 段階評価する。A は加対象 (3 点)、B が標準 (2 点)、C は減点 (-2 点)、欠席は 0 点。受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大 30 点。プログラミング課題は第 3 ~ 7 講の成果を Scratch 上で公開することを評価する。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営情報論 II (Management Information Systems II)**サブタイトル** 最新の情報技術サービスの理解**担当教員** 出原、増田**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

企業活動を効果的に行うには顧客嗜好や社会動向をタイムリーかつ的確につかむ必要がある。IoT、Web システム、ビッグデータ、人工知能、シミュレーションなどの技術の発達によって、人間の行動や感情、意見を企業活動に活かすことが可能となってきた。実例を通じて、これらの技術と応用について学ぶ。また、思考を整理し伝達するための手法として、さまざまな図化技術をまなび、局面によって適切に使い分けられるようになる。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス ICT

■到達目標

最先端の情報処理技術について学び、次の4点を理解する。(1) 最新技術の動向を理解する。(2) 活用方法をしているかを理解する。(3) 社会全体の変化を理解する。(4) 企業と顧客の関係について理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

経営情報学科の学生として必要な知識を広く身につけ、専門教育の基礎とする。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義外の時間で、最先端の情報技術の動向を継続的に捉えることが求められる。情報技術サイトの巡回(15分*4回)、講義で説明した技術や手法の復習(30分)程度の講義外の学習を求める。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 シミュレーション
- 第3講 センサ技術
- 第4講 創発性(1)
- 第5講 創発性(2)
- 第6講 位置情報システムとデータベース
- 第7講 人工知能
- 第8講 フローチャート(1)
- 第9講 フローチャート(2)
- 第10講 状態遷移図(1)
- 第11講 状態遷移図(2)
- 第12講 IoTとビッグデータ
- 第13講 ビッグデータと人工知能
- 第14講 発想法
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたレポートに対して、コメントの形でフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 総合評価で90点以上
- 評価 A (89~80点) : 総合評価で80点以上
- 評価 B (79~70点) : 総合評価で70点以上
- 評価 C (69~60点) : 総合評価で60点以上
- 評価 F (59点以下) : 総合評価59点以下

■評価方法

講義中の理解度確認テストおよびレポート課題(60%)、期末レポート(40%)

■留意点

・先端事例を紹介するため、各回の講義内容は、適宜変更する場合がある。・パソコンを持参しないものの受講を認めない場合がある。

科目名 国際経営入門 (Introduction to International Management)**サブタイトル** 21世紀の国際経営の基礎理解**担当教員** 飯田 健雄**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

国際経営は世界政治・経済に利益を求めてダイナミックに動くトランスナショナルな超国家的組織体です。この組織を外部・内部から探究していきましょう。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標

国際経営の基礎を包括的に学んでいく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

国際経営の知識と理解を得ることで産業の未来を描くことができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

NHKの経済ニュースを見よう。また、日本経済新聞を毎日、読む習慣をつけよう。隔週ごとの項目に関して、1時間半程度、指定教科書を事前に読み、講義後、板書された項目を理解していこう。

■授業の概要

- 第1講 国際経営とは何か
- 第2講 国際経営組織
- 第3講 国際経営戦略
- 第4講 国際人事管理
- 第5講 国際法務
- 第6講 国際マーケティング
- 第7講 国際ブランディング
- 第8講 国際生産管理
- 第9講 国際SCM
- 第10講 異文化経営論
- 第11講 国際会計
- 第12講 国際財務
- 第13講 国際提携/M&A戦略
- 第14講 国際研究開発
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

レポートの全体的感想と今後の推薦図書とキーワードを指摘する。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : すべての講義にでること。試験は5問中、すべてに解答し、90点以上を取得すること。
- 評価 A (89～80点) : ほとんど講義に出ること。試験は5問中、すべてに解答し、80点以上を取得すること。
- 評価 B (79～70点) : 10回以上講義に出ること。試験は5問中、4問すべてに解答し、70点以上を取得すること。
- 評価 C (69～60点) : 7回以上講義に出ること。試験は5問中、3問すべてに解答し、50点以上を取得すること。
- 評価 F (59点以下) : 出席が5回以下、および、試験は5問中、3問以下で50点以下の水準にあること。

■評価方法

試験(70%)出席(30%)試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 国際経済学 (Global Economy)**サブタイトル** 国際経済 (International Economics)**担当教員** 下井 直毅**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

この講義では、最前線事例を紹介しつつ、国際経済をめぐる問題をとりあげる。国際経済は日本経済に大きな影響を及ぼしている。グローバル化という言葉をよく耳にするが、世界の経済状況がめまぐるしく変わる中で、その動きを理解することはとても大切である。日頃、目や耳にしている出来事や現象を通して、日本や世界を取り巻く産業社会における経済動向の仕組みやメカニズムについて学んでほしい。

■講義分類

ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

世界経済の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ●Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5時間以上の取組が必要です。

■授業の概要

- 第1講 国際化の中の日本—日本経済の状況を概観する
- 第2講 戦後の国際経済体制の流れについて—戦後の国際経済体制の流れをおさえる
- 第3講 貿易の基本的メカニズムについて (1) —貿易の基本的メカニズムについて理解する
- 第4講 貿易の基本的メカニズムについて (2) —貿易の基本的メカニズムについて理解する
- 第5講 保護貿易や自由貿易の功罪—保護貿易や自由貿易について理解する
- 第6講 外国為替について—外国為替について理解する
- 第7講 為替レートの決定理論 (1) —短期の為替レートの決定理論について理解する
- 第8講 為替レートの決定理論 (2) —長期の為替レートの決定理論について理解する
- 第9講 為替相場制度について—様々な為替相場制度について理解する
- 第10講 国際収支表の見方 (1) —国際収支表の見方を理解する
- 第11講 国際収支表の見方 (2) —国際収支表の見方を理解する
- 第12講 貿易摩擦について—貿易摩擦の歴史を振り返る
- 第13講 GATT/WTOの原則と例外について—GATT/WTOの原則と例外について理解する
- 第14講 開放経済における経済政策について—開放経済における経済政策について理解する
- 第15講 まとめ—これまでの復習

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている

評価 A (89～80点) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている

評価 B (79～70点) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている

評価 C (69～60点) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている

評価 F (59点以下) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない

■評価方法

出席点あるいは授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計100%で100点満点。

■留意点

出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

科目名 財務会計 (Principle of Accounting)**サブタイトル** 財務諸表の読み方**担当教員** 木村 太一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書といった財務諸表の存在を知り、これらにどのような情報が記載されているのかを知る。また、財務諸表に記載されている情報を通じて、企業がどのような状態なのかを読み取ることを目的とする。財務諸表は企業の活動をまとめたものであるから、今の企業の情報が豊富に載っている。そうした財務諸表に対して苦手意識を持たずに触れ、少しでも情報を汲み取れるようになることが、この授業の目的である。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、社会力育成

■到達目標

①財務諸表（貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書）にそれぞれどのような情報が記載されているのかを知る。②基本的な分析（構成比率や伸び率）を理解する。③応用的な分析（安全性分析、キャッシュ・フロー分析、収益性分析等）を理解する。本講義では、大阪商工会議所が主催するビジネス会計検定試験3級の取得を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

財務諸表分析の手法を習得し、これを通じて個々の企業の強みと弱みを定量的に発見する能力を養い、客観的なデータを基に判断を下す能力を育てる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

予習よりも復習に重きを置いて、その回に用いられたテキストやレジメの数値例で何度も計算をすること。また、新聞やニュースに注意を向けてみて欲しい。きっと学んだ用語や比率を見つけることができるはずである。

■授業の概要

- 第1講 財務諸表の理解①（貸借対照表）
- 第2講 財務諸表の理解②（損益計算書）
- 第3講 財務諸表の理解③（キャッシュ・フロー計算書）
- 第4講 財務諸表の復習
- 第5講 財務諸表分析の基本
- 第6講 収益性分析①（資本利益率）
- 第7講 収益性分析②（売上高に対する各比率）
- 第8講 収益性分析③（資産回転率）
- 第9講 収益性分析の復習と事例分析
- 第10講 安全性分析（流動比率と固定比率）
- 第11講 安全性分析の復習と事例分析
- 第12講 キャッシュ・フロー情報の利用
- 第13講 一株当たり分析
- 第14講 1人当たり分析
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

適宜小テストを行い、それを基にした指導を行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が90点以上。

評価 A (89～80点) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が80点以上90点未満。

評価 B (79～70点) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が70点以上80点未満。

評価 C (69～60点) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が60点以上70点未満。

評価 F (59点以下) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が60点未満。

■評価方法

授業内小テスト 30%、授業内期末テスト 70%

■留意点

電卓を使用するので各自購入のこと。また、教科書は指定した本の最新の版を用いるので、表記に関わらず最新版を用意すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 サブカルチャー論 (Subculture Theory)**サブタイトル** 日本のサブカルチャーについて**担当教員** 中澤 弥**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

海外からも注目される日本のサブカルチャー。マンガやアニメを通して日本に興味を持つ外国人も多く、日本へのツーリズムの目玉ともなっている。本講義では、日本のサブカルチャーの歴史をひもとくとともに、その問題点をすくい取り、今後の可能性を探っていく。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解

■到達目標

日本のサブカルチャーの流れを理解するとともに、メディアに対する思考力・判断力を得て、課題を解決する能力を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

日本のサブカルチャーの歴史を理解し、現代のメディアにおけるサブカルチャーの位置を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

サブカルチャーの歴史について調べておく。約1.5時間を要す。

■授業の概要

- 第1講 サブカルチャーとは何か?
- 第2講 サブカルチャーを通して見る世界の中の日本
- 第3講 日本のアニメーションの原点
- 第4講 1960年代、マンガ雑誌の台頭
- 第5講 1960年代、マンガからアニメへ
- 第6講 怪獣映画と戦後日本
- 第7講 怪獣映画の展開
- 第8講 〈おたく〉から〈オタク〉へ
- 第9講 寺山修司とアングラ
- 第10講 ホラー・ジャパネスク
- 第11講 少女マンガの時代
- 第12講 〈闘う少女〉たち
- 第13講 人形とサブカルチャー
- 第14講 サブカルチャーの現状
- 第15講 サブカルチャーの可能性

■フィードバックの要領

各回のミニ・レポートにフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 日本のサブカルチャーについて理解し、課題を自ら発見し、説明することができる。
- 評価 A (89～80点) : 日本のサブカルチャーについて理解し、課題を自ら発見することができる。
- 評価 B (79～70点) : 日本のサブカルチャーについて理解し、その課題を説明することができる。
- 評価 C (69～60点) : 日本のサブカルチャーについて、その流れを理解している。
- 評価 F (59点以下) : 日本のサブカルチャーの流れと課題について理解することができていない。

■評価方法

各回の講義内容に基づく小レポート、小テスト50%、OFFICE (Word) を使用した課題レポート50%

■留意点

科目名 事業構想論 I (Business Concept Theory I)**サブタイトル** 創造型問題解決の考え方・事例紹介**担当教員** 松本他**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

事業構想とは、社会の不条理に立ち向かい問題解決するためのビジネスにあって、様々な障壁、ルールによる制約、環境変化などの困難を克服するために行われる取り組みを含む事業活動全般のことをいう。本学ではこれを「創造的問題解決」と呼び、問題解決力、事業構想力を身に付けるために本講義を開講することとしている。学生の「事業を構想する力」が育まれることにつながるよう、本講義においては、「事業構想（創造的問題解決）とは何か」「どのようにしてそれは起こるのか」について、基本的な考え方や方法を本学教員が講義するとともに、実際の「事業構想事例」を、その実践者から直接聞くことによって幅広く知り、自分の将来を構想する糧としてもらうことを意図している。

■講義分類

ビジネス創造、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標

毎回異なる教員とゲストの話の聞き、事業構想にとって重要なポイントを自分なりに考えることができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

事業構想事例から事業構想とは何かという基礎的な認識と知識について理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

前回は話された内容を、自分のメモを元にまとめ、①講演者にとっての事業構想とは何か ②成功のためのポイントは何か ③質問して理解を深める点は何か について整理しておく(90分程度)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 事業構想の考え方・理論①
- 第3講 外部講師による講演①
- 第4講 事業構想の考え方・理論②
- 第5講 外部講師による講演②
- 第6講 事業構想の考え方・理論③
- 第7講 外部講師による講演③
- 第8講 事業構想の考え方・理論④
- 第9講 外部講師による講演④
- 第10講 事業構想の考え方・理論⑤
- 第11講 外部講師による講演⑤
- 第12講 事業構想の考え方・理論⑥
- 第13講 外部講師による講演⑥
- 第14講 講義のふりかえり
- 第15講 最終レポート提出

■フィードバックの要領

ふりかえりの回を設けて、フィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 事業構想について特筆すべき説明をすることができる。
- 評価 A (89～80点) : 事業構想についてよく説明することができる。
- 評価 B (79～70点) : 事業構想について一定の説明をすることができる。
- 評価 C (69～60点) : 事業構想について拙いが断片的な説明はできる。
- 評価 F (59点以下) : 事業構想についてほとんど説明することができない。

■評価方法

出席 40%、ミニレポート 30%、最終レポート 30%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 事業構想論Ⅱ (Business Concept Theory II)**サブタイトル** 創造型問題解決の考え方・事例紹介**担当教員** 松本他**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

事業構想とは、社会の不条理に立ち向かい問題解決するためのビジネスにあって、様々な障壁、ルールによる制約、環境変化などの困難を克服するために行われる取り組みを含む事業活動全般のことをいう。本学ではこれを「創造的問題解決」と呼び、問題解決力、事業構想力を身に付けるために本講義を開講することとしている。学生の「事業を構想する力」が育まれることにつながるよう、本講義においては、「事業構想（創造的問題解決）とは何か」「どのようにしてそれは起こるのか」について、基本的な考え方や方法を本学教員が講義するとともに、実際の「事業構想事例」を、その実践者から直接聞くことによって幅広く知り、自分の将来を構想する糧としてもらうことを意図している。

■講義分類

ビジネス創造、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標

毎回異なる教員とゲストの話聞き、事業構想にとって重要なポイントを自分なりに考えることができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

事業構想事例から事業構想とは何かという基礎的な認識と知識について理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前回は話された内容を、自分のメモを元にまとめ、①講演者にとっての事業構想とは何か ②成功のためのポイントは何か ③質問して理解を深める点は何か について整理しておく（90分程度）

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 事業構想の考え方・理論①
- 第3講 外部講師による講演①
- 第4講 事業構想の考え方・理論②
- 第5講 外部講師による講演②
- 第6講 事業構想の考え方・理論③
- 第7講 外部講師による講演③
- 第8講 事業構想の考え方・理論④
- 第9講 外部講師による講演④
- 第10講 事業構想の考え方・理論⑤
- 第11講 外部講師による講演⑤
- 第12講 事業構想の考え方・理論⑥
- 第13講 外部講師による講演⑥
- 第14講 講義のふりかえり
- 第15講 最終レポート提出

■フィードバックの要領

ふりかえりの回を設けて、フィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 事業構想について特筆すべき説明をすることができる。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 事業構想についてよく説明することができる。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 事業構想について一定の説明をすることができる。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 事業構想について拙いが断片的な説明はできる。
- 評価 F (59 点以下) : 事業構想についてほとんど説明することができない。

■評価方法

出席 40%、ミニレポート 30%、最終レポート 30%

■留意点

科目名 社会心理 (Social Psychology)**サブタイトル** 歴史に残るさまざまな心理学実験を通じ、人間の本质について考える**担当教員** 良峯 徳和**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

人間は「社会的動物である」と言われるように、私たちの意識や行動は、家族、学校、職場、地域、国など、さまざまな集団・社会を抜きにしては考えられない。この授業では、個人と社会の関わり合いについて実証的に研究する社会心理学の成果を、具体的な事例や有名な実験などを紹介しつつ、社会的な存在としての人間の行動や認知、他者と共に生活することの意味やその影響について、理解を深める。

■講義分類

社会人力育成、顧客理解

■到達目標

①社会心理学の方法論や実証研究の成果について理解し、基本的な知識を身に付けること。②自分の考え方や周りの人達の生き方や行動が、さまざまな社会的要因の影響を受けていることを理解できるようにする。③この授業で学んだことを、よりよい自分の生き方、他者への理解、対人関係や集団、社会のなかでの活動のあり方に活かせるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

心理学に関する基礎的な学力を養い、社会生活で発生するさまざまな問題に心理学の観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(四択テスト)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業の開始時に毎回内容理解を確認する復習テストを行う。その準備として、1.5時間以上の復習を行ってこよう。

■授業の概要

- 第1講 社会心理学とは何か。この授業での学習内容の全体像、授業方針を示す。
- 第2講 ミルグラムのアイヒマン実験。
- 第3講 傍観者効果とは何か。キティ・ジェノビーズ事件から学ぶ。
- 第4講 集団の手抜きとは何か。リンゲルマンが行った実験をもとに、原因と対策を考える。
- 第5講 認知的不協和によって生じる「不合理」な行動はどのように説明されるか。
- 第6講 スタンフォード監獄実験：権力がいかにひとを変えてしまうのか。
- 第7講 協力と裏切りの心理：「囚人のジレンマ」ゲーム実際にやってみる。
- 第8講 ひとを説得する技術とその心理。
- 第9講 同調行動とそれを成立させる心理的メカニズム。
- 第10講 集団意思決定とリスクシフト。
- 第11講 ひととは感情を隠すことができるか。「微表情」と感情の関係。
- 第12講 人間の心の能力をどのように測るか。
- 第13講 悲観的な性格の人と楽観的な性格の人の違いは何か。
- 第14講 悲観脳のメカニズムと改善方法。
- 第15講 心と脳：「自由意志」という幻想？

■フィードバックの要領

復習テスト、レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：社会心理学に関する理論をよく理解し、具体的な状況でそれを応用することができる。

評価 A (89～80点)：社会心理学に関する理論をよく理解し、授業への取り組みが熱心で、積極的である。

評価 B (79～70点)：社会心理学に関する理論をおおまかに理解しており、授業への取り組みもまじめである。

評価 C (69～60点)：社会心理学に関する基本的な知識を有しているが、授業への取り組みがやや不足。

評価 F (59点以下)：社会心理学に関する基本的な知識も理解十分でなく、授業への取り組みが不真面目。

■評価方法

出席 20%、小テストおよび期末試験 50%、レポート 30%。ただし、出席は全体の2/3以上、小テストも全体の2/3以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、復習テスト実施後の1週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、授業内で説明する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 消費心理 (Consumer Psychology)**サブタイトル** 消費者理解とそれを仕掛ける企業側の心理学**担当教員** 浜田 正幸**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

①消費者の心理を理解するための、消費者行動分析ができるようになる ②商品やその価格、広告などで、消費者の心理を動かすことができるようになる ③ビジネスの世界で、心理学を使うことができるようになる

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解

■到達目標

①消費心理に関する一般的テーマや理論を把握する ②消費心理を把握する方法を身につける ③消費心理や消費行動の分析方法を知る

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

消費者行動の特徴を知り、また消費者行動を把握する調査方法を知る。ビジネスの中で心理学が広く取り入れられ、活用されていることを知り、自らの知識を活用できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前にキーワードについて調べて整理する。フィールド(店舗など)調査を行う(1.5時間)。事後にワークシートの完成、あるいはレポートを提出する(1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 「消費心理」とは何か説明する
- 第2講 消費者心理を知るための購買プロセスモデル
- 第3講 流行の心理。ロジャーズのイノベーション普及学
- 第4講 消費者の行動分析
- 第5講 消費者の行動分析 ID-POS データの分析
- 第6講 消費者行動の総合的分析
- 第7講 消費者行動分析に関する小テスト
- 第8講 装いの心理学
- 第9講 おカネの心理
- 第10講 おカネの心理
- 第11講 おカネの心理に関する小テスト
- 第12講 サービスの心理学
- 第13講 小売店の心理学
- 第14講 サービスと小売に関する理解到達度小テスト
- 第15講 これまでの全体の振り返りと到達度確認テスト

■フィードバックの要領

毎回の課題レポートに対し、フィードバックを行い、理解を促進する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 得点合計が90点以上。
 評価 A (89~80点) : 得点合計が80~89点。
 評価 B (79~70点) : 得点合計が70~79点。
 評価 C (69~60点) : 得点合計が60~69点。
 評価 F (59点以下) : 得点合計が60点未満。

■評価方法

毎回の課題レポート15点。達成度確認テスト10点×3回、最終確認テスト55点。

■留意点

指示した時以外は、私語やスマホは禁止。指定席になる予定である。

科目名 情報法 (Information Law)**サブタイトル** 知的財産法**担当教員** 佐藤 恵太**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

情報社会で生き抜くために必須の法律知識を説明する。

■講義分類

ビジネス ICT、ビジネス環境理解、ビジネス創造、グローバルビジネス

■到達目標

情報のインターネットにおける利用に関連する法律問題に直面した時に、どの法律にかかわる問題かを見抜き、解決策の方向性を考える力を養うこと。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

産業社会で発生する問題に対処する専門的能力を養う

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク(一部授業回) ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業内容(特に適宜行われる小テスト)を復習して理解すること。

■授業の概要

- 第1講 【導入】 SNS・ウェブサイトの利用時の注意事項を眺めてみよう
 第2講 プライバシーを入口に、法律と裁判の世界を、のぞいてみよう
 第3講 個人情報の漏洩は、なぜ問題になるの？
 第4講 プロバイダを訴えてやる！は、うまくいくか
 第5講 文化祭で他人の楽曲をコピーバンドで演奏していいの？
 第6講 自分のSNSにアップロードしていた自撮り写真が他人のサイトに勝手に掲載された
 第7講 大学に提出するレポートを作成する時、他人のサイトに掲載された写真を使ってもいいの？
 第8講 自分のブログにタレントの写真を貼ったら、事務所から警告状が来た！
 第9講 自分のブログに、人気映画を無料公開している YouTube サイトのリンクを貼ってよいのか
 第10講 Facebookの「いいね」数を増やすため、投稿者にだけ値引き販売をする店舗
 第11講 ブログのタイトルに、「広瀬すずの部屋」「サマンサタバサ・ファンの部屋」
 第12講 ネット・オークションに出品するとき、自分で撮影した商品の写真を貼ってお大丈夫？
 第13講 ドメイン名、メタタグ、ハッシュタグと商標権
 第14講 いけないパクリと許される模倣を、どのように区別するか
 第15講 【授業のまとめと情報法の将来】 ロボット検索、AI技術の革新的発展に伴う問題

■フィードバックの要領

小テストは、実施直後に解説する。期末試験については模範解答等を提供する予定。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 講義内容を正確に理解し、積極的に掘り下げた調査を行って、成果をあげている。
 評価 A (89～80点) : 講義内容を正確に理解している。
 評価 B (79～70点) : 講義内容をほぼ理解できているが、一部に理解できていない点がある。
 評価 C (69～60点) : 講義された事項について、基礎的な最低限の事項を理解している。
 評価 F (59点以下) : 講義内容の理解が不十分である。

■評価方法

期末試験(80%)、小テスト(20%、実施回数は、開講後に説明します)

■留意点

授業の進行によってシラバスを修正することがあり、授業中に変更後内容を説明します。また、配布物は原則として配布回の次の回までしか保管しません。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報倫理 (Information Ethics)**サブタイトル** 情報社会における諸問題と倫理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義は、情報通信技術と人々の倫理観についての関わり、社会生活における情報の価値、情報通信技術の役割や影響力などを理解し、情報社会における望ましい態度やあり方、情報倫理の必要性を理解することを目的とする。現代の社会において、情報通信技術は必要不可欠な存在である。情報通信技術の進展によって生じた諸問題について把握するとともに、それらの問題を解決するひとつの緒として情報倫理という考え方やその必要性について考える。また、情報関連の法律や規制、最前線事例についても学習する。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

情報通信技術が社会や人々の生活に対して及ぼした影響を理解し、情報社会における様々な問題について思考する力と倫理的態度を身につけることをめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

情報倫理に関わる問題に対し、その原因を分析し、問題解決に向けた自己の考えを他者に対して説明し、説得する能力、他者の考えを汲み取り、互いの意見を擦り合わせて新たな考えや解決方法を生み出せる能力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各1.5時間程度(合計3時間程度)である。

■授業の概要

- 第1講 情報通信技術の進展と情報社会
- 第2講 個人情報と個人情報保護法
- 第3講 マイナンバー制度と個人情報の価値
- 第4講 表現の自由とプライバシー
- 第5講 インターネットとコミュニケーション
- 第6講 SNSとその功罪
- 第7講 SNSとプライバシー
- 第8講 知的財産と知的財産制度
- 第9講 著作権制度
- 第10講 著作権とTPP
- 第11講 情報社会のサービス
- 第12講 情報社会におけるデータの活用
- 第13講 情報セキュリティとその考え方
- 第14講 情報セキュリティ技術
- 第15講 情報社会における倫理観

■フィードバックの要領

各講義において Google クラウドームを用いてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 下記1~4を関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。5の資質が十分である。

評価 A (89~80点) : 下記1~4を個別に、自分の考察を含めて的確に説明できる。5の資質が十分である。

評価 B (79~70点) : 下記1~4のうち2つ以上を、自分の考察を含めて説明できる。5の資質が十分である。

評価 C (69~60点) : 下記1~4のうち2つ以上を説明できる。5の資質が十分である。

評価 F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

レポート45%、授業内の課題40%、出席状況15%に授業への参加態度を加味。次の5点を中心に評価する。1:個人情報やプライバシー、2:知的財産や著作権、3:ICTを活用したコミュニケーション、4:データ活用、5:倫理観

■留意点

①著作権検定、個人情報保護法検定の内容に一部対応。②状況によって、講義内容や扱う回の入替えを行う場合がある。

科目名 スポーツ II- シェイプアップフィットネス (Sports II-Fitness)**サブタイトル** シェイプアップフィットネス**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

スポーツ文化の諸側面を学ぶことによって、(1) 自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2) 生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力(「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります)を身につけること。(3) スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4) スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となります。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ●その他(グループワーク)

[上記以外] (地域活動)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に蒐集し、理解しておくこと。(90分程度)

■授業の概要

第1講 本講義の目的、到達目標、評価の方法、受講にあたっての注意点等についての説明。

第2講 身体測定①

第3講 ストレッチと身体ほぐし

第4講 ストレッチ・身体ほぐし・トレーニング

第5講 ストレッチとトレーニング

第6講 ストレッチとトレーニング

第7講 ストレッチとトレーニング

第8講 ストレッチとトレーニング

第9講 有酸素運動の理論と実践

第10講 有酸素運動とトレーニング

第11講 有酸素運動を体験する

第12講 身体測定②

第13講 3日間の食生活調査表の作成①

第14講 3日間の食生活調査表の作成②

第15講 振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

トレーニング日誌の確認とコメント記載によるコミュニケーション等

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。

評価 A (89～80点) : 技能の開発が十分行われ、将来活かされる準備ができていくこと。

評価 B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること

評価 C (69～60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること

評価 F (59点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

■評価方法

・参加の姿勢(出席を含みます) : 60% (各回の講義内容と目標を理解し身体運動を行ったかを3段階で評価します。)

・課題の提出 : 40% (指定された内容について課題を作成し提出してもらいます。)

■留意点

①講義と実技の組み合わせになります。②受講希望者が多数の場合、学期の第1講出席者を優先し抽選となります。③欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しません。また就職活動による欠席は考慮しませんので注意してください。今年度の講義内容については、オリンピック・パラリンピック2020関係行事により講義内容を変更する場合があります。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ スポーツ II- 世代間交流健康トレーニング (Sports II)

サブタイトル ▶▶▶ 筋力トレーニング、ストレッチ、体力測定

担当教員 ▶▶▶ 大澤 拓也

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

大学周辺地域在住の方々とともに、筋力トレーニング、ストレッチなどを行い、自身の体を動かすとともに、他の世代との交流をはかります。また、体力測定を行い、自身や他の学生、そして他の世代の体力や健康を理解します。これらは自身の身体理解につながるだけでなく、家族のように自分の周りの方々と、そして、将来の自分を考える新しい視点を持てるようになります。体力に自信のある学生は自分よりも年長の方々を引っ張っていく経験、体力に自身のない学生は地域の方々と共に体をつくる経験を積んでもらいたいと思います。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

体を動かすことにより、自身の体を理解すること、そして同世代や他世代の方との交流により、他者との関わり方を向上させることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】 DP5 高い志【環境対応能力と先進性】

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

運動を通じて、他の世代と交流することにより、自身が他者に興味を持ち、他者を理解できるようになるだけでなく、他者に自身の興味を持たせ、自身を理解してもらえる能力を養える。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (他の学生や地域在住者との交流、相互教授)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習としては、体に関するテレビや雑誌を見るように心がける。また、復習としては、講義内で実施する筋力トレーニングやストレッチ等、また体力測定の方法を自宅で実施する。(1.5時間)

■授業の概要

第1講 オリエンテーション

第2講 体力測定の理解と実践①

第3講 体力測定の理解と実践②

第4講 世代間交流①：地域在住者の体力測定会

第5講 世代間交流②：自体重筋力トレーニング1-1、体づくり講座1

第6講 世代間交流③：自体重筋力トレーニング1-2、体づくり講座2

第7講 世代間交流④：自体重筋力トレーニング2-1、体づくり講座3

第8講 世代間交流⑤：自体重筋力トレーニング2-2、体づくり講座4

第9講 世代間交流⑥：自体重筋力トレーニング3-1、体づくり講座5

第10講 世代間交流⑦：自体重筋力トレーニング3-2、体づくり講座6

第11講 世代間交流⑧：自体重筋力トレーニング4-1、体づくり講座7

第12講 世代間交流⑨：自体重筋力トレーニング4-2、体づくり講座8

第13講 世代間交流⑩：学生と地域在住者の体力測定会

第14講 体力測定結果のまとめと考察①

第15講 体力測定結果のまとめと考察②

■フィードバックの要領

レポートに対して、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。

評価 A (89～80点)：技能の開発が十分行われ、将来活かされる準備ができていないこと。

評価 B (79～70点)：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。

評価 C (69～60点)：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。

評価 F (59点以下)：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

■評価方法

出席 60%、レポート 40%

■留意点

①高校までの「体育」とコンセプトが異なることに留意して履修してもらいたい。②各講義において、指示が異なるので、これによく留意して受講してもらいたい。③原則として、受講希望者は、学期の第1講の日時に、指定された教室に集合しなければならない。(T-NEXTにて指示する)

科目名 スポーツ II- テニス (Sports II-Tennis)**サブタイトル** テニスを通じて学ぶスポーツの価値**担当教員** 佐藤 文平**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本演習では、ラケットとボールを操作するために必要な、眼と手のコーディネーショントレーニングを行いながら、テニスの基本を学んでいく。また、ゲームを通じて、マナーや他人とのコミュニケーションスキルも習得する。技術の定量化にはボール挙動測定器 TRACKMAN を用い、ボール速度やボール回転速度の理解を深める。

■講義分類

最前線事例、社会人育成、実践的知識獲得、社会人基礎力

■到達目標

テニスは、生涯スポーツとして社会人となってからも個人の体力に応じて楽しめるスポーツである。本演習の目的は、テニスの打球スキルとルールを学び、ゲームを楽しむようになり、生涯スポーツの価値を地域・社会に落とし込める視点を持つことである。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 PD3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

生涯スポーツであるテニスの最低限必要な技術を習得するとともに他人とのコミュニケーション能力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ●Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ●マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

生涯スポーツ(テニス)の存在意義と基本的な歴史やルールを理解して授業に臨むことを基本とする。

■授業の概要

- 第1講 生涯スポーツの価値を予め予習し、理解を深める。
 第2講 サーブ、ストローク、ボレー、スマッシュというテニスに必要なスキルの理解。
 第3講 フォア・バックハンドストロークの基本的な打球方法を予め理解したうえで行う。
 第4講 ネットプレーの基本的な打球方法やタイミングを予め理解したうえで行う。
 第5講 サーブの種類(フラット、スライス、キック)の違いを予め理解したうえで行う。
 第6講 TRACKMANを用いてのサーブ速度測定実習を行ない、自身の技術の定量化を行う。
 第7講 講義(テニスとジェントロジー：生涯スポーツとしての役割)
 第8講 ダブルスのルールを予め理解したうえでポイントゲーム練習を行う。
 第9講 講義(テニスにおけるビジネスマーケティングの視点)
 第10講 シングルのルールを予め理解したうえでポイントゲーム練習を行う。
 第11講 ダブルスのフォーメーションを予め理解したうえで行う。
 第12講 テニスにおけるメンタルトレーニングを行い、プレーに落とし込み、変化を感じる。
 第13講 テニスのスキルテストを行なう。
 第14講 第六講目に行なった TRACKMAN で計測した測定値と比較する。
 第15講 まとめ。全ての技術を結集させて、シングルの試合とダブルスの試合を行う。

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入しフィードバックを行う。スキルテストでは、口頭によるフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：出席および授業参加意欲が高く、練習等のコーディネート能力が高い。
 評価 A (89～80点)：出席および授業参加意欲があり、テニスの基本技術が備わり、試合ができる。
 評価 B (79～70点)：テニスの基本技術は備わっているが、出席および授業参加意欲が不十分。
 評価 C (69～60点)：出席、授業参加意欲、テニスの基本技術ともに最低限度。
 評価 F (59点以下)：出席、授業参加意欲が不十分で、テニスの基本技術を習得しようとする意欲がない。

■評価方法

出席 50%、技術テスト 30%、レポート 20%

■留意点

個人でラケットを所有している学生は、各々のラケットで授業に参加することが好ましい。運動の際にはテニスシューズであることが好ましい。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 スポーツ II- フットサル (Sports II-Futsal)**サブタイトル** フットサルと出会い、その奥深さをしるための入門スクール**担当教員** 福角 有祐**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

①人生を豊かにするためのスポーツ教養の一つとして、フットサルの知識と技能を身に着けること。②フットサルを実践することを通じて、社会人として求められる基礎能力であるコミュニケーションや判断力、実行力、協同する力などを育成すること。③フットサルを通じて、競技者へのシンパシーを獲得し、観戦する（応援する）価値について知ること。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

競技のルールやマナーの概要を知り、その面白さ、楽しさについて十分理解し他人にもそれを伝えることができる。フットサルゲームに参加し協同者と協力して楽しむことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

フットサル競技の特性は、そのスピード感であり、判断力、決断力、実行力がきわめて大切であり、社会人力育成につながる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に収集し、理解しておくこと。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 クラスメンバーの決定
- 第2講 フットサルに出会う!
- 第3講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得①
- 第4講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得②
- 第5講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得③
- 第6講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ①
- 第7講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ②
- 第8講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ③
- 第9講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ④
- 第10講 フットサル競技の実践①
- 第11講 フットサル競技の実践②
- 第12講 フットサル競技の実践③
- 第13講 フットサル競技の実践④
- 第14講 フットサル競技の実践⑤
- 第15講 全体の振り返り

■フィードバックの要領

担当教員から学びの状況と今後の方向性について直接アドバイスします。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
- 評価 A (89～80点) : 技能の開発が十分行われ、将来活かされる準備ができていること。
- 評価 B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
- 評価 C (69～60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
- 評価 F (59点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

■評価方法

出席 100%

■留意点

高い競技レベルを前提としてはいない。むしろ、初心者や、スポーツ未経験者にスポーツ体験をしてもらうことを重視している。経験者には、これまでの経験を踏まえて、初心者受講生へのコーチングなどを通じてよりスポーツへの理解を深めてもらうことを期待する。

科目名 スポーツと健康 (Sports and Health)**サブタイトル** スポーツ文化と健康に関する基礎知識を学ぶ**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

健康の保持増進のために身体運動は不可欠です。身体との関わり方を間違えると逆効果となり、健康を損ねてしまいます。人生100年時代を迎える学生の皆さんが、健康に関する知識やスポーツ文化を学び、実践することで充実した生活を送ってくれるよう願っています。講義では、①健康の保持増進のための3大条件(身体運動・栄養・休養)に関する基本的な知識、②身体運動やスポーツを安全に効果的に行うための基本的知識、③産業社会における健康やスポーツの意味や価値等々、幅広い知識を学ぶことを目的としています。

■講義分類

社会人力、社会人基礎力、地域ビジネス、産業社会、問題解決

■到達目標

1. 現代社会における健康課題を理解し自ら対策に取り組める能力を身につける。2. 健康管理方法、身体運動、スポーツとの関わり方を正しく理解する。4. 運動、スポーツ、レジャー、レクリエーションの享受能力を高める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会の発展に積極的に関与し問題解決に向かう姿勢。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前に予習のための用語やポイントを説明します。指定図書等で予習しておいてください。講義後は、講義資料とノートを参考に復習を行ってください。(1.5時間)

■授業の概要

第1講 講義の目的、内容、予習・復習の仕方、評価基準、評価の方法等についての説明。

第2講 世界保健機構(WHO)の健康定義、健康問題、問題解決の現状

第3講 日本における健康課題とその取組み、健康産業、健康ビジネスについて

第4講 こどもの時の身体運動が一生のからだをつくる

第5講 思春期・青年期の健康、スポーツの課題と解決策1

第6講 思春期・青年期の健康、スポーツの課題と解決策2

第7講 中年期・壮年期・老年期における健康の注意点と運動の方法

第8講 食の重要性について

第9講 身体運動・トレーニングの基礎理論

第10講 スポーツの起源、本来の意味、文化としてのスポーツ

第11講 スポーツとは何か・近代・現代社会とスポーツ

第12講 社会的からだについて

第13講 まとめ

第14講 授業内テスト

第15講 全体のまとめ、試験の解答と解説

■フィードバックの要領

次の講義での回答、メールでの対応。

■評価基準

評価A+ (90点以上) : 講義内容について十分に理解し、オリジナリティが発揮されている。

評価A (89～80点) : 授業の内容について十分に理解し、自分の考えもまとめて表現できている。

評価B (79～70点) : 授業の内容について理解しているが、その内容の表現が不十分である。

評価C (69～60点) : 学んだ内容について理解していない。

評価F (59点以下) : 著しく理解が不十分である。

■評価方法

講義内の課題提出による評価が40%、試験または課題が60%を基本とします。絶対評価方法にて評価します。

■留意点

出席は評価のための前提条件です。欠席が3分の1を越えた場合、原則として単位を付与しません。就職活動による欠席は考慮しませんので、3年までに履修してください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 地域スポーツ論 (Local Sports Theory)**サブタイトル** スポーツが現代の地域社会にもたらす価値とは。**担当教員** 佐藤 文平**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義では、スポーツが地域社会にもたらす価値を理解しながら、高齢化社会に寄与できることは何かを考えられる視点を育む。スポーツ(する、みる、支える)をもってQOLの向上を考える。

■講義分類

多摩学、最前線事例、地域ビジネス

■到達目標

学生主体の調査をもとにグループで多摩地域の地域スポーツを創造し、実践する。ケーススタディやグループディスカッションを通じて得るコミュニケーションスキルをもって、幅広い年齢層との地域スポーツを構築する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域スポーツの価値を理解し、実践的理解を深め、今後の地域社会に落とし込める能力を育む。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

○個人 ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ●Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ●KJ法 ●マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

各回の予習課題には最低限1.5時間程度の学習が必要となる。さらに毎回の講義内容で学んだ事柄については、積極的に知見を広げ、問題意識を深めるための復習として、1.5～2時間程度の復習が必要となる。

■授業の概要

第1講 本講義の概要、目的、意味を理解する(ガイダンス)

第2講 現代社会の傾向、仕組み、問題について学ぶ。

第3講 地域スポーツとはなにか①

第4講 地域スポーツにおける“する”スポーツとは何か①

第5講 地域スポーツにおける“みる”スポーツとは何か②

第6講 地域スポーツにおける“ささえる”スポーツとは何か③

第7講 地域社会に反映できるスポーツをエージカテゴリー別に考える(0～5～10歳、10～15歳)。

第8講 地域社会に反映できるスポーツをエージカテゴリー別に考える(15～20歳、20～40歳)。

第9講 地域社会に反映できるスポーツをエージカテゴリー別に考える(40～60歳)。

第10講 地域社会に反映できるスポーツをエージカテゴリー別に考える(60～80歳以上)。

第11講 北欧における地域スポーツのあり方①

第12講 北欧における地域スポーツのあり方②

第13講 実践的課題演習①

第14講 実践的課題演習②

第15講 講義のまとめ。

■フィードバックの要領

講義内で提出されたレポートに対する回答等でフィードバックします。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 講義内容を十分に理解し、オリジナリティーのある優れた意見をもっている。

評価 A (89～80点) : 講義内容を理解し、自身の意見を持てるようになった。

評価 B (79～70点) : 講義内容について理解している。

評価 C (69～60点) : 講義内容を理解している。

評価 F (59点以下) : 講義への積極的な参加もなく、理解も乏しい。

■評価方法

出席50%、中間テスト10%、最終課題40%、絶対評価:多摩大学の評価基準に基づいて評価します。

■留意点

やむを得ず欠席の場合は、証明するものを提出し、考慮を考える。

科目名 地域政策プランニング (Regional Policy Planning)**サブタイトル** 政策による問題解決企画の技法**担当教員** 中庭 光彦**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

現代社会において問題解決とは、企業—行政—NPO等、更には個人とグループ、先輩といった「多目的な人々の連携」の下で進められる。問題特定—政策企画—政策実施—政策評価という一連の過程を、多角的な組織・個人で合意をしながら、問題解決を進める。それが政策プランニングである。これからは人口減少局面を前提にした政策を企画しなければならない。いくつかのケースを題材に、解決方法立案のトレーニングを行うのが本講義の狙いである。

■講義分類

地域ビジネス

■到達目標

因果関係図をつくり、それをもとに政策企画を行い、それを説明できるようにすること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域分析の基本的学力を身につけ、地域政策の考え方から現実の課題発生の原因関係把握法と解決手法を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

日経新聞過去記事検索データベースで、テーマ内容を調べてくる(予習)。講義・作業の内容をノートに整理してまとめ直す(復習)。両方で1.5時間。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 政策と因果関係図
- 第3講 ケース学習1 木造建築密集地域問題
- 第4講 東京都の防災政策
- 第5講 ケース学習2 高尾山観光客増加問題
- 第6講 ケース学習3 食品メニュー偽装問題
- 第7講 ケース学習4 地域福祉問題
- 第8講 ケース学習5 空き家問題
- 第9講 人口減少社会を考えるための基礎知識
- 第10講 ケース学習6 中心市街地問題
- 第11講 ケース学習7 中心市街地活性化政策
- 第12講 ケース学習8 多摩市まちひとしごと創生総合戦略
- 第13講 ケース学習9 多摩市の政策評価と合意形成
- 第14講 人口減少問題に対する地域政策についてレポート制作
- 第15講 これからの地域政策

■フィードバックの要領

レポートを提出してもらい、翌週に添削したものを全員に配布する。

■評価基準

評価A+ (90点以上) : 講義内容を十分に理解し、新たな情報を加えて伝えることができる。

評価A (89～80点) : 講義内容を十分に理解して、伝えることができる。

評価B (79～70点) : おおよその内容は把握しているが、論理的に伝えるまで至っていない。

評価C (69～60点) : 内容をあまり理解できておらず、伝えることも十分ではない。

評価F (59点以下) : 著しく理解に欠けており、伝えることはできない。

■評価方法

レポート60%、出席40%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 地域ビジネスプランニング (Regional Business Planning)

サブタイトル 地域における事業構想とビジネスモデル

担当教員 中庭 光彦

対象学年 2年生以上

区分 春学期

■講義目的

いま都市と地域が、大きく変わりつつあります。出生率が低い都市、まじめに農業をしても収益を得られない地域、大学を卒業しても働き口が無い地域、災害に弱い地域。日本では、人口減少に伴い、事業による地域の問題解決、すなわち地域の事業構想が必要です。本講義では、地域について考えてみたいという2年生を対象に、地域課題分析の基本的知識とビジネスモデルや事業構想の考え方を事例をベースに紹介します。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、地域ビジネス

■到達目標

地域問題に関するニュース記事を理解したレポートを書けるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域分析の基本的学力を身につけ、地域ビジネスの考え方、ビジネスモデルの考え方から現実の企業・産業を解釈できる能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

日経新聞過去記事検索データベースで、テーマ内容を調べてくる(予習)。講義・作業の内容をノートに整理してまとめ直す(復習)。両方で1.5時間。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 地域ビジネスの主体
- 第3講 地域の特徴を理解する
- 第4講 人口を増やす
- 第5講 仕事を増やす
- 第6講 中心市街地問題とコモンズ論
- 第7講 企業・産業立地と集客
- 第8講 ビジネス事例①食品加工—小豆島醤油製造
- 第9講 ビジネス事例②多摩地域のものづくり企業
- 第10講 ビジネス事例③流通(1)商店街からショッピングセンターへ
- 第11講 ビジネス事例④流通(2)ネットビジネス・プラットフォーム
- 第12講 ビジネス事例⑤流通(3)買い物難民問題とビジネスチャンス
- 第13講 プラットフォームビジネスとシェアリングエコノミー
- 第14講 地域ビジネスについてのレポート作成
- 第15講 レポート講評とまとめ

■フィードバックの要領

レポートを3回課し、翌週に全員分を添削して全員に返却する。

■評価基準

評価A+(90点以上)：地域問題に関するキーワードを十分に使いこなし、レポートも特筆すべきものである。

評価A(89～80点)：地域問題に関するキーワードを使いこなし、レポートもしっかりと書けている。

評価B(79～70点)：地域問題に関するキーワードはあまり使われていないが、レポートは書けている。

評価C(69～60点)：地域問題に関するキーワードは使われていないが、レポートは書けている。

評価F(59点以下)：キーワードを使わず、レポートもほとんど書けていない。

■評価方法

レポート60%、出席40%。

■留意点

科目名 中級簿記 (Intermediate Level Bookkeeping)**サブタイトル** 複式簿記の基礎**担当教員** 木村 太一**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本学の「初級簿記」では、複式簿記の入門講義として商品売買や現金の貸借、固定資産の処理といった基本的な取引の仕訳を取り扱った。本講義では、「初級簿記」取り扱った仕訳に加えて、やや発展的な取引に対する仕訳を学んでいく。また、一年間の記録のまとめを「決算」と呼ぶが、「初級簿記」では簡単にしか扱わなかったこの決算を、本講義では本格的に扱う。「初級簿記」の内容を補うような位置付けであり、「初級簿記」の内容に加えて本講義の内容を学ぶことで、基礎的な取引を一通りマスターすることになる。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解

■到達目標

「初級簿記」に引き続いて、複式簿記において取引をどのように記録していくかを学んでいく。一年間の記録のまとめに必要な手続きを本格的に学んでいく(試算表、精算表、貸借対照表、損益計算書の作成)。なお、なお、本講義では東京商工会議所が主催する日商簿記検定試験初級の取得を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

商業簿記に関する中級レベルの知識を得るとともに、企業で行われる典型的な取引・部分的に応用的な取引に関する理解を得ることや簿記の構造に関する理解を得ることを通じ、企業行動における課題発見能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

複式簿記の習得には、とにかく多くの問題を解き、慣れることが大切である。予習は特に必要ないが、復習として、その日に取り扱った内容に関する問題を次の講義までに何度も解いて身につけていくことが求められる。

■授業の概要

第1講 商品売買①

第2講 商品売買②

第3講 商品有高帳と商品売買のまとめ

第4講 これまでのまとめと試算表の作成①

第5講 小口現金と貸付金・借入金

第6講 商品券と給料

第7講 固定資産と有価証券、資本と訂正仕訳

第8講 これまでのまとめと試算表作成②

第9講 現金過不足と消耗品

第10講 売上原価と貸倒れ

第11講 これまでのまとめと精算表作成①

第12講 減価償却

第13講 見越・繰延

第14講 これまでのまとめと精算表作成②

第15講 帳簿の作成と貸借対照表・損益計算書と総まとめ

■フィードバックの要領

適宜小テストを行い、それを基にした指導を行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が90点以上。

評価 A (89~80点) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が80点以上90点未満。

評価 B (79~70点) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が70点以上80点未満。

評価 C (69~60点) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が60点以上70点未満。

評価 F (59点以下) : 授業内小テストおよび授業内期末テストの総得点が60点未満。

■評価方法

授業内小テスト30%、授業内期末テスト70%

■留意点

本講座は「初級簿記」の単位を有する者のみを対象とする。電卓を使用するので各自購入のこと。また、教科書は指定した本の最新の版を用いるので、表記に関わらず最新版を用意すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国ビジネスコミュニケーション I (Chinese Business Communication I)**サブタイトル** 中国人と中国の最新ビジネス事情**担当教員** 田 園**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

中国人の行動上の特徴、思考様式を理解し、簡単なビジネス文書を作成し、変化しつつある新しい中国ビジネス事情を知ることを通して、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

①ビジネスに特化したスキルと知識の習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

現代中国の社会と経済の現状を理解した上で、ビジネス場面におけるコミュニケーションの能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前に、キーワードとなっている専門用語を事前に調べて、理解しておく。授業後、中国経済に関連する記事を日本経済新聞などで目を通す。(各1.5時間)

■授業の概要

第1講 ガイダンス

第2講 中国人について：①メンツを重んじる

第3講 中国人について：②輪の文化

第4講 中国人について：③年功序列

第5講 中国人について：④「80後」の中国人

第6講 中国ビジネステーブルマナー

第7講 実践：ビジネス連絡文書の書き方

第8講 中国の産業について：①その展開

第9講 中国の産業について：②産業構造の変化

第10講 事例研究：アリババの事業展開

第11講 中国の企業

第12講 日本企業の中国進出

第13講 中国ビジネスのリスクとチャンス

第14講 復習及び総括

第15講 期末レポートの発表

■フィードバックの要領

課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：特に優れているもの

評価 A (89～80点)：優れているもの

評価 B (79～70点)：一応の努力が認められるもの

評価 C (69～60点)：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの

評価 F (59点以下)：Cの水準に達しないもの

■評価方法

期末レポート60%、課題達成状況20%、平常点20%による総合評価

■留意点

実際の状況により、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科目名 中国ビジネスコミュニケーション II (Chinese Business Communication II)**サブタイトル** 中国人と中国の最新ビジネス事情**担当教員** 田 園**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

中国ビジネスコミュニケーション I に続き、中国人の行動上の特徴、思考様式を理解し、変化しつつある新しい中国ビジネス事情を知ったうえで、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

①ビジネスに特化したスキルと知識の習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

現代中国の社会と経済の現状を理解したうえで、ビジネス場面におけるコミュニケーションの能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前に、キーワードとなっている専門用語を事前に調べて、理解しておく。授業後、中国経済に関連する記事を日本経済新聞などで目を通す。(各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 中国人の伝統的な消費意識
- 第3講 「80後」たちの消費意識
- 第4講 中国人は最も気前よく金をかけるもの
- 第5講 中国人の金銭感覚
- 第6講 中国人の資産運用と投資について
- 第7講 実践：中国に関する新しいビジネス事情——「11.11」について
- 第8講 プレゼンテーションの作成について
- 第9講 中国の越境ECによるショッピング
- 第10講 モバイル決済の事例研究：①配車サービス
- 第11講 モバイル決済の事例研究：②自転車シェアリング
- 第12講 モバイル決済の事例研究：③シェアリングエコノミー
- 第13講 中国ビジネスの在り方
- 第14講 復習及び総括
- 第15講 プレゼンテーションの発表

■フィードバックの要領

課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：特に優れているもの
- 評価 A (89～80点)：優れているもの
- 評価 B (79～70点)：一応の努力が認められるもの
- 評価 C (69～60点)：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
- 評価 F (59点以下)：Cの水準に達しないもの

■評価方法

プレゼンテーションの発表 60%、課題達成状況・レポート 20%、平常点 20% による総合評価

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データサイエンス I-A (Data Science I-A)**サブタイトル** データサイエンスの超入門：データの分析**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

データサイエンスの根本となる知識・スキルを修得します。また、ビッグデータを扱うための基礎力を身につけ、統計的思考力を養成します。

■講義分類

ビジネス ICT、顧客理解、社会人力育成

■到達目標

データを活用して、データの加工・変換、特徴の解明、関係性の把握、グループ間の差異の検出、複数の変数感の傾向を説明など、基礎的な考え方とスキルの修得を目標とします。学修の内容としては統計検定3級程度を目標とします。なお、演習においてSPSSを使用する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

データ分析に関する基礎的な学力を養い、産業社会で発生する問題にデータサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他 (Google フォーム)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

統計的な考え方について該当する項目をあらかじめ調べる (1.5時間)。また、当日解析した結果について考察する (1.5時間)。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション・調査項目の種類と集計方法

第2講 さまざまなグラフ表現

第3講 時系列データ

第4講 度数分布表とヒストグラム

第5講 量的変数の代表値

第6講 5数要約と箱ひげ図

第7講 分散と標準偏差

第8講 観測値の標準化とはずれ値

第9講 相関と散布図

第10講 相関係数

第11講 確率の基本的な性質

第12講 反復試行と条件付き確率

第13講 標本調査

第14講 問題解決のプロセス

第15講 実験・調査の計画、最終レポート

■フィードバックの要領

課題に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 最終課題提出者でワークシート・ミニテスト・最終課題の合計点が 90 点以上。

評価 A (89 ~ 80 点) : 最終課題提出者でワークシート・ミニテスト・最終課題の合計点が 80 点以上 89 点以下。

評価 B (79 ~ 70 点) : 最終課題提出者でワークシート・ミニテスト・最終課題の合計点が 70 点以上 79 点以下。

評価 C (69 ~ 60 点) : 最終課題提出者でワークシート・ミニテスト・最終課題の合計点が 60 点以上 69 点以下。

評価 F (59 点以下) : 最終課題未提出者、もしくはワークシート・ミニテスト・最終課題の合計点が 59 点以下。

■評価方法

毎回のワークシート 45 点 (3 点×15 回)、ミニテスト 45 点 (3 点×15 回)、最終課題 10 点 (10 点×1 回)。なお、最終課題提出者のみを評価する。

■留意点

2019 年度に統計検定 3 級合格した者は加点する (本科目を合格 (C 以上) として取り扱う)。社会調査士科目のため、第 1 ~ 8 講には、「基本的な資料とデータの分析」の内容を含む (詳細を参照)。

科目名 データサイエンス I-B (Data Science I-B)**サブタイトル** データ利活用の基礎的スキル**担当教員** 佐藤 洋行**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

ビジネスのインターネット化、ハードウェアの低廉化、デバイスやセンサーの多様化 (IoT 含む) により、データの利活用は現在のビジネスに欠くべからざるものとなっている。本講義では、データ利活用の基礎力の習得を目指し、データ分析の入門を取り扱う。具体的には、データ分析プロセスについていくつかのフレームワークを学び、データの要約と可視化、データの比較と関係性の分析、因果関係の検証の実際的手法についての知識習得と実践を行ってもらう。このようなスキルは現在のビジネスでは会社のどの部署でも必要とされるものであるため、受講をお勧めする。なお、講義では分析を実体験することで理解を深めることを重視するため、コンピュータソフトを用いてデータ分析をするスキルも演習により習得してもらう。適宜、グループワークによるレポート作成やプレゼンテーションも行ってもらおう。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会力養成、ビジネス ICT

■到達目標

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を養うため、データ分析の基礎を学んでもらう。最終的には、データ分析のフレームワークに基づいたデータ利活用ができることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

データ分析の基礎技術の学習により、産業社会における課題に数理的にアプローチする技能を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

毎回、EXCELを利用した表計算を行うので、事前に必要な機能を理解しておくこと。また、毎回の授業のはじめに前回講義内容に関する小テストを行うので、前回講義資料をしっかりと復習すること (1.5時間程度)。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション データ分析入門
- 第2講 データ分析の基礎 (1) データの要約—データの代表する値
- 第3講 データ分析の基礎 (2) データの要約—データのバラつきを表す値
- 第4講 データ分析の基礎 (3) データの要約と可視化
- 第5講 演習 (1) データの理解①
- 第6講 演習 (2) データの理解②
- 第7講 データ分析の基礎 (4) データの比較—2つのデータの比較
- 第8講 データ分析の基礎 (5) データの比較—3つ以上のデータの比較
- 第9講 演習 (3) データの分析—比較編①
- 第10講 演習 (4) データの分析—比較編②
- 第11講 データ分析の基礎 (6) データの関係性の把握①
- 第12講 データ分析の基礎 (7) データの関係性の把握②
- 第13講 データ分析の基礎 (8) データの関係性の数式化
- 第14講 演習 (5) データの分析—相関編②
- 第15講 演習 (6) データの分析—相関編②

■フィードバックの要領

レポートにコメントを付けて返却する。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 課題解決のためのデータ分析を行い、結果を正しく表現して価値ある考察ができる
- 評価 A (89～80点) : データ分析プロセスのフレームワークに従って分析を実践することができる
- 評価 B (79～70点) : データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎を理解している
- 評価 C (69～60点) : データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎をある程度身に付けている
- 評価 F (59点以下) : データ分析プロセスのフレームワークの要点について説明できない

■評価方法

出席 30%、レポート 70% (統計検定試験に合格した場合は、成績の一部として評価する)

■留意点

①必ずPCを持参すること。②本講義は毎回、前回講義の内容を理解していることを前提として行う。また、グループワークとしてデータ分析やレポート作成などのアクティブラーニングを行うので、1回目の講義から欠席せずに受講すること。社会調査士科目のため、第1～8講には、「基本的な資料とデータの分析」の内容を含む (詳細を参照)。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データサイエンス II (Data Science II)**サブタイトル** 実践統計学入門**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

高度情報化により、情報が数量として扱われるデータを扱う必要性はますます高まっている。本講義では、データに基づく課題解決や問題解決に必須の統計学に関して、その基礎概念の理論的な理解を深め、社会現象を確率モデル・統計モデルとして扱うために必要な統計的方法を活用できることを目標としている。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

(1) 基礎的な確率分布について理解し、適用できる (2) 標本抽出について理解できる (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる (4) 検定問題が理解でき、適用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

DP2 思考と判断：ビジネス環境で必須の統計的思考力と課題解決のための統計分析プロセスを計画実行することができる。DP3 実践的統計モデルを用いて、周りの人々とともに問題を解決できる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

統計学に関する知識の理解だけでなく、実際の問題解決を求める。実際のデータから解を求めるので1.5時間程度の復習時間を必要とするので余裕を持ってあたること。

■授業の概要

- 第1講 統計学の基礎
- 第2講 データの整理：平均と標準偏差と平均のバラツキ
- 第3講 相関関係と相関係数
- 第4講 確率分布の期待値
- 第5講 離散確率分布について
- 第6講 正規分布
- 第7講 2つの確率変数の和と差
- 第8講 母集団の平均値と分散の推定
- 第9講 平均値の区間推定と仮説検定
- 第10講 平均値の差の検定
- 第11講 因果分析のための単回帰モデル
- 第12講 単回帰分析での決定係数
- 第13講 単回帰での係数の検定予備
- 第14講 残差分析
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：到達目標 (4) 検定問題が理解でき、適用できる
- 評価 A (89～80点)：到達目標 (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる
- 評価 B (79～70点)：到達目標 (2) 標本抽出と平均の性質について理解している
- 評価 C (69～60点)：到達目標 (1) 基礎的な分布の性質を理解している
- 評価 F (59点以下)：上記のいずれも理解しておらず、適用もできない

■評価方法

講義中の小テスト(50%)、期末試験(50%)により行う。統計的なものの考え方・データをもとにした統計処理の仕方ができているかどうかを評価する。統計検定試験の結果を成績評価の一部として評価する。

■留意点

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義ではチーム毎のデータ収集、レポート提出のアクティブラーニングを行うので、1回目の講義から欠席せずに受講すること。「データサイエンスⅢ」、「データサイエンスⅣ」、「経営科学Ⅰ」、「経営と意思決定」の履修には本講義を履修しておくことが望ましい。

科目名 データベース I (DataBase System I)**サブタイトル** データベースの作成と管理**担当教員** 後藤 涼子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

実社会の様々な場所において構築・利用されているデータベースについて基礎から学習する。特に、リレーショナルデータベース管理システム (RDBMS: Relational DataBase Management System) について、Microsoft Access を使用した演習により経験を重ねることで、リレーショナルデータベースの構築やデータ管理についてのビジネス ICT および社会人基礎力を習得する。

■講義分類

ビジネス ICT、ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

データベースに関する基礎知識、リレーショナルデータベース設計の基本概念、Microsoft Access を使用してデータベースを作成する基本的なスキルを習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

データベースの作成に関する基礎知識や技術的手法を養い、産業社会におけるデータベースの活用または作成で発生する問題に対処する専門的能力を体系的に習得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に前講までの学習内容を理解しておくこと。授業後には練習問題を行い Access の操作について復習すること。必要な予習・復習時間は 1.5 時間程度である。

■授業の概要

- 第1講 データベースの概要
- 第2講 リレーショナルデータベース管理システムと Access の基本操作
- 第3講 データベースとテーブルの作成
- 第4講 データのインポート、エクスポート
- 第5講 リレーションシップの作成
- 第6講 テーブルの正規化
- 第7講 クエリの作成、データの並べ替え
- 第8講 データの抽出 (1) 単一条件、複合条件、部分一致条件
- 第9講 データの抽出 (2) Between ~ And 演算子、パラメータクエリ
- 第10講 フォームの作成と編集
- 第11講 フォームによるデータの入力、コントロールの編集
- 第12講 レポートの作成と編集
- 第13講 各種帳票と宛名ラベルの作成と編集
- 第14講 総合演習 「会員情報管理」データベースの作成
- 第15講 期末テスト 「得意先売上情報管理」データベースの作成

■フィードバックの要領

課題に対し処理条件に従って正しく設定されているか採点してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
 評価 B (79 ~ 70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
 評価 C (69 ~ 60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

出席 20%、課題 20%、授業内期末テスト 60%

■留意点

授業には毎回各自のノート PC を必ず持ってくる。課題に対して積極的に取り組み、Access の操作に慣れること。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データベース II (DataBase System II)**サブタイトル** SQLを用いたデータベースの作成と管理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

データベースは、大量データを管理し、容易にデータの検索や更新などを行うための技術である。本講義は、データベース管理の概念やしきみについて、データベース管理システム (DBMS : DataBase Management System) の操作を通じて学習することを目的とする。

■講義分類

ビジネス ICT、問題解決

■到達目標

リレーショナルデータベース管理システム (RDBMS : Relational DataBase Management System) を使って、SQL (Structured Query Language) によるデータベース作成やテーブルの追加・設定変更・削除、テーブル間の関係の定義・削除、テーブルへのデータの追加・更新・削除などデータ操作技法を習得すること、またデータベースが社会でどのように役立っているのか、その活用場面などについて理解することを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

RDB の操作や管理に関する技能をもとに、RDB を活用して問題解決する力を身につける。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ●その他 (データベースの設計と構築)
 [ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()
 [グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()
 [上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

前講までの学習内容を理解しておくこと。また、ほぼ毎時課題を出すので、その課題作成を通じて SQL の記述方法について必ず復習すること。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度 (合計 3 時間程度) である。

■授業の概要

- 第1講 データベースの概念
- 第2講 リレーショナルデータベースと SQL の概要
- 第3講 SELECT 文を利用したデータ検索 (1) 検索、並び替え
- 第4講 SELECT 文を利用したデータ検索 (2) 集合関数
- 第5講 副問合せ (1) 副問合せの基本
- 第6講 副問合せ (2) 副問合せにおける集合関数の利用
- 第7講 データ検索の総合演習 (1)
- 第8講 データ検索の総合演習 (2)
- 第9講 データ操作文 (1) 行の追加、更新
- 第10講 データ操作文 (2) 行の追加、更新
- 第11講 データ定義文 (1) 表の作成
- 第12講 データ定義文 (2) 制約、ビューの作成
- 第13講 データベースを用いた問題解決演習 (1)
- 第14講 データベースを用いた問題解決演習 (2)
- 第15講 データベースを用いた問題解決演習 (3)

■フィードバックの要領

第3講以降、各講義回で全体に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 下記 1~3 が全てできる。4 の考え方を理解し、合目的に実践できる。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 下記 1~3 が全てできる。4 の考え方を理解し、実践できる。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 下記 1 ができる。2、3 のどちらかができる。4 の考え方を理解し、実践できる。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 下記 1 ができる。4 の考え方を理解し、実践できる。
 評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末試験 50%、課題 50% に授業への参加態度などを加味。次の 4 点を中心に評価。1 : SELECT 文を利用したデータ検索、2 : 行の追加、削除、更新、3 : 表の定義、制約の設定、4 : データベースを問題解決の手段として利用できる

■留意点

- ・「データベース I」で習得した知識と技能をもとに行われる講義であるため、「データベース I」は必ず履修しておくこと。
- ・各回の講義は、前回の講義内容を下敷きになっているため、第 1 講から欠席せずに履修すること。
- ・特に初回は必要なアプリケーションのインストールと設定を行うので必ず出席すること。

科目名 哲学入門 (Introduction to Philosophy)**サブタイトル** 東洋思想と西洋思想の多様性**担当教員** 高橋 恭寛**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

グローバルビジネスへのアプローチには、様々な考え方を理解することが大切です。そのために、まず足下の「日本」における伝統的な思想を知ることで自らの立ち位置を知ることが必要ではないでしょうか。また東アジアの思想的立ち位置が分からずに「世界」を知ることが出来ません。日本において、どのような哲学があったのか、そして道徳・思想が重んぜられてきたのかを見る事は、日本の経済思想にも直結します。さらに、伝統的な道徳・思想が、現代日本における商活動やマネジメントの背後にも、どこが残っていることにも気付かされ、実践的知識獲得の基礎となることでしょう。以上のことから本講義では、日本・西洋・アジアの思想世界をそれぞれみてゆきます。さまざまな古典思想や文化事象が、現代社会のビジネスやマネジメントの要諦にも繋がっている点を自らの手で見出してください。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、社会人育成

■到達目標

今後、実社会で様々な人と交流するとき、誰もがそれぞれの背景を背負っており、価値観にも多様性が存在していることに思いをさせることが出来るようになる。また、是非判断や自己決定をせねばならないときに、自らの考えを自分なりに説明出来るようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

実社会に出て多くの人と交流する際、他者理解ひいては顧客理解には様々な材料が必要です。まずはそのための知識を身に付け、問題解決のための理論を学び、自らの発想力へと活かすことを求めます。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(ミニッツペーパー)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

1.5時間。各講義で取り上げる人物やテーマについて、授業最初に復習ペーパーを提出してもらう予定です。本時予習のチェックテストも行う予定です。前もってメモ作成等の準備をしてきてください。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクションー「哲学」・「思想」とは何かー
- 第2講 日本に「哲学」はあるのか?ー西田幾多郎・鈴木大拙ー
- 第3講 ギリシア哲学の世界
- 第4講 「正直」とは何か
- 第5講 「誠実さ」とは何か
- 第6講 キリスト教の登場とギリシア哲学との出会い
- 第7講 I.カントと〈動機の純粋性〉
- 第8講 J.S.ミルと〈結果の重視〉
- 第9講 自由主義と自己決定権
- 第10講 哲学の世界では「正義」とはどのような意味で使われているのか
- 第11講 現代哲学の応用その1ー「人間」・「生命」の理解ー
- 第12講 儒・仏・神と伝統的な死生観
- 第13講 哲学の応用その1ー環境思想ー
- 第14講 哲学の応用その2ー経済思想の一端ー
- 第15講 まとめー経済思想からビジネス倫理学へー

■フィードバックの要領

授業中書いてもらうミニッツペーパーはコメントを付してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点のうち 90点以上
- 評価 A (89～80点) : 評価点 100点のうち 89点～80点
- 評価 B (79～70点) : 評価点 100点のうち 79点～70点
- 評価 C (69～60点) : 評価点 100点のうち 69点～60点
- 評価 F (59点以下) : 評価点 100点のうち 59点以下

■評価方法

評価点 100点は、期末テスト (50%)、ミニッツペーパー・ワークシートによる授業の理解度 (50%) の合計点で換算する。

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 特別講座I・II (Consideration Revolution I・II)

サブタイトル 寺島実郎学長監修リレー講座

担当教員 寺島、金、小林(英)、バードル、中庭、中澤、佐藤(洋)、良峯、小西、水越、野坂、初見、加藤、長島、佐藤(文)、西村(知)、木村、小林(昭)、高橋

対象学年 2年生以上

区分 春・秋学期

■講義目的

寺島実郎学長が提唱してきた「世界潮流と日本の進路」を軸に、国際情勢、経済、歴史、社会、AI、IoTなど各分野における精鋭の専門家を講師として招き、通年の体系的なプログラムを開催する。現代世界は、単なる同時不況、経済危機を超え、本質的な意味での構造転換に直面している。「外は広く、内は深い」、このことを知るだけで人間の重心は下がる。鈴木大拙の言葉のごとく、より広い視野で世界を見渡し、より深く自らの立脚点を見つめる視座が求められている。この連続講義では、我々が生きている時代を的確に把握し認識するために、世界から見た日本、また日本国内の諸問題について複数回にわたり多面的に取り上げることで、問題意識の提起と深化を目指す。時代に発信する識者の生の声を聞いて現代世界を生きるヒントを得てもらいたい。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス ICT、地域ビジネス

■到達目標

自分自身が生きている時代を把握し認識するために、連続講座を通じて提起される数々の問題や課題について自身なりの解決策を考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

国際情勢、経済、歴史、日本社会、企業、AI、IOT、多摩地域などグローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していきける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(ミニッツペーパー)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前に、パンフレットのテーマに従いキーワードを調べる(1時間)。授業後に、講義において生じた疑問、感じた問題点について調べた上で、気付きや自分なりの意見を専用ノートの右側のページに記述する(2時間)。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 外部講師による講演
- 第3講 外部講師による講演
- 第4講 外部講師による講演
- 第5講 外部講師による講演
- 第6講 外部講師による講演
- 第7講 外部講師による講演
- 第8講 前半6講演の内容を基に中間レポートを作成
- 第9講 外部講師による講演
- 第10講 外部講師による講演
- 第11講 外部講師による講演
- 第12講 外部講師による講演
- 第13講 外部講師による講演
- 第14講 外部講師による講演
- 第15講 後半6講演の内容を基に最終レポートを作成する。

■フィードバックの要領

講義専用ノートに対してコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が、90%以上であること。
- 評価 A (89～80点) : 出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が、89～80%であること。
- 評価 B (79～70点) : 出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が、79～70%であること。
- 評価 C (69～60点) : 出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が、69～60%であること。
- 評価 F (59点以下) : 出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が59%以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

出席 (40%)、講義専用ノート (30%)、中間および最終レポート (30%) の割合で評価する。

■留意点

- ①第1回目のガイダンスに出席しない場合履修できない。尚、履修希望者が多い場合(座席数が限られている為)履修者を選抜する。
- ②地域住民をはじめとする一般参加者430名(有料)と一緒に外部講師の講演を聴講するため、受講ルールを厳守すること。
- ③001教室の座席は、事前に指定された席に着席すること。
- ④講義内容及び講義内容に関する自分の意見は、特別講座専用ノートに整理して記入すること。

科目名	日経BP 総研サステナブル経営ラボ中堅中小企業経営センター冠講座 (SME Management and Leadership (NIKKEI BP))		
サブタイトル	隠れた優良企業の経営者から学ぶ～「会社」とは何か、そこで自分を輝かせる方法		
担当教員	日経BP	対象学年	2年生以上
		区分	春学期

■講義目的

中小優良企業の経営者などから「働く」ことの意味と、企業で自分を生かす方法を理解する

■講義分類

ビジネスマネジメント、社会人育成、ビジネス創造

■到達目標

学期中に10～13人の経営者・専門家を招き、それぞれの会社や専門分野について毎回約60分の講義を受ける。講師の企業や講師の企業が目指す方向を理解し、その中で自分が果たすることができる役割などを具体的に考察してみる。実際に、アイデアを具体化して発表することにより、さらに深い理解に到達する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

学生にとって見えにくい企業と経営について学び、働くことに対する志を高めて就職に備える。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク＝ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (ミニッツペーパー 講師との質疑応答)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講師からの推薦図書や資料を事前に読み、授業の準備をする

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション、「会社で働くこと」について日経BP 総研中小企業経営研究所の講義
- 第2講 経営者の講演その1
- 第3講 経営者の講演その2
- 第4講 経営者の講演その3
- 第5講 経営者の講演その4
- 第6講 経営者の講演その5
- 第7講 中間発表。これまで学んだ経営者についてまとめ、その中で自分の生かし方を考える。
- 第8講 経営者の講演その6
- 第9講 経営者の講演その7
- 第10講 経営者の講演その8
- 第11講 経営者の講演その9
- 第12講 経営者の講演その10
- 第13講 後半分の中間発表。後半で学んだ経営者の考えをまとめ、自分の働き方を考える。
- 第14講 産業別、企業タイプ別の特徴分析。財務情報、報道などからの企業評価を学ぶ。
- 第15講 最終発表。10人の経営者の考えをまとめ、その中で自分の生かし方を発表する。

■フィードバックの要領

2回の中間発表と1回の最終発表にたいして、その場でフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+ (90点以上) : 企業の経営スタイルの違いを十分に理解し、その中で自分の働き方を分かりやすく発表

評価A (89～80点) : 企業の違いは十分に理解。その中で自分の働き方には納得感があるものの、発表が不十分

評価B (79～70点) : 企業の違いは十分に理解したものの、自分の働き方の提案やプレゼンテーションが不十分

評価C (69～60点) : 企業経営への理解が今一步で、自分の働き方の提案やプレゼンテーションが不十分

評価F (59点以下) : 企業経営への理解ができておらず、自分の働き方の提案やプレゼンテーションができない

■評価方法

出席 50、授業内中間テスト(発表) 15×2、授業内最終テスト(発表) 20

■留意点

- ・実際に企業の経営者を講師として迎えます。本当は会社の事業が忙しい中を縫って講義に来ていただきますので、授業を受ける側もそれにきちんと向き合ってください。この授業を十分に理解することができれば、就職活動ではそれが役立つはずですが。
- ・履修許可人数は最大100名です。履修希望者は初回の講義に必ず出席してください。
- ・授業では毎回A4、1枚ワード作成のレポートを課します。提出期限は、翌日午後5時です。

科目名 ビジネスコミュニケーション I (Business Communication I)**サブタイトル** 図解表現**担当教員** 久恒 啓一**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

どのような経営体にも経営資源がある、その経営資源をコミュニケーション活動によって活性化し、新しい商品やサービスを創り出すのが経営である。この講義では、上述の観点からビジネスにおけるコミュニケーションと情報に焦点をあて、今までの文章と簡条書きを中心とした情報処理の欠陥を克服するため、産業社会、世界潮流、顧客理解、ビジネス創造などをテーマに、図を用いたコミュニケーションの理論と技術を学ぶ。毎回、産業社会の現場の最前線のテーマを題材に実習を行い「図解コミュニケーション」という新しい問題解決の武器を身につけてもらう。

■講義分類

ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標

①新聞社説等による個人ワーク、グループでのプレゼンテーションやディスカッションをふまえ、「日本の論点」(文春)の中の一読論者の時事論文をパワーポイントを用いて一枚の図に要約する技術を身につける。又、二枚以上の感想をワードで書く技術を身につける。②自身で作成した図解を用いて大人数を対象に自信を持ってプレゼンテーションができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

グローバル社会に対する理解、考え抜く力、コミュニケーション能力を高め、組織目標の達成に貢献する力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(図解作成)

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ●その他(図解コミュニケーション)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

目についての新聞・雑誌の記事、他の先生の講義内容を努めて図解する。(60分)、毎回の授業で作った図解をブラッシュアップする。(60分)

■授業の概要

- 第1講 講義「マネジメントと図解コミュニケーション」
- 第2講 講義「ビジネスと経営」・実習
- 第3講 講義「コミュニケーションと情報」・実習
- 第4講 講義と実習「ビジネスに関するトピックス」
- 第5講 講義と実習「ビジネスに関するトピックス」
- 第6講 講義と実習「ビジネスに関するトピックス」
- 第7講 講義と実習「コミュニケーションに関するトピックス」
- 第8講 講義と実習「コミュニケーションに関するトピックス」
- 第9講 講義と実習「コミュニケーションに関するトピックス」
- 第10講 講義と実習「経営情報に関するトピックス」
- 第11講 講義と実習「経営情報に関するトピックス」
- 第12講 講義と実習「商品に関するトピックス」
- 第13講 講義と実習「時事に関するトピックス」
- 第14講 講義と実習「時事に関するトピックス」
- 第15講 講義「経営情報とビジネスコミュニケーション」

■フィードバックの要領

毎回提出させるアンケートのまとめを、次回授業で提示し、疑問などに答えていく。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 全回出席。レポートが特に優れている。
 評価 A (89 ~ 80 点) : ほぼ全回出席。レポートが優れている。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 高い出席率。レポートが良い。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 高い出席率。レポートの提出あり。
 評価 F (59 点以下) : 低い出席率。レポート提出なし。

■評価方法

1. 出席 50 点、2. 提出する図 25 点、3. 毎回の授業に関するレポートの内容 25 点

■留意点

毎回実習(作図・プレゼン・ディスカッション)を行うことで力をつけていくので、毎回出席することが望ましい。

科目名 ビジネスコミュニケーション II (Business Communication II)**サブタイトル** 多摩や地元の魅力を発信して自己プロデュース。地域要人と SNS で交流する実践法**担当教員** 久米 信行**対象学年** 2 年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

現代はチャンスに満ちています。SNS 活用で、無名の個人が一夜にして有名になり、世界中から観光客が押し寄せることさえあるのです。私は中小国産 T シャツメーカーの経営者ですが、SNS で人生が好転して、各界で活躍する数千人のネット友達ができました。おかげさまで本業以外にも、全国の観光地域づくりやブランディング、企業経営者・NPO リーダー向けの研修講師、ビジネス書や記事の執筆、美術館・オーケストラ・バレエ団の支援などで、学生時代には想像しなかった楽しい毎日を送っています。多摩大生にも同じように予想を超えるような明るくて楽しい未来を切り開いて欲しいのです。この講義では SNS を友人との連絡だけでなく、有用な情報を広く発信して縁を広げる技術を学びます。多摩のお薦め情報を発信＝勝手に観光協会しながら自分と地域をプロデュースします。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス ICT、地域ビジネス

■到達目標

日々のインスタグラムで次の 3 大スキルを磨き「友達」と「いいね」を増やしてネット上の評価を高めます。1) 毎日ひとつは SNS でシェアしたくなるモノ・店・風景などを発見する「脳のバラボラ力×心のズーム力」2) 記事を見た人が思わず「いいね」を押したくなる「写真撮影・加工×キャッチコピー作成センス」3) シェアしたお店の店主など地元キーパーソンと楽しいご縁を結び「友達申請×名刺活用×メール術」

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスコミュニケーションを円滑にする SNS 活用法として、プロフィール作成、記事投稿時の写真撮影・文章作成、友達申請・フォロー、コメント・メッセージ・メール・名刺作成交換の技術や作法を学ぶ。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ●その他 (SNS 発信)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・マップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎週の課題 (例: 通学路の美味しいパン屋) に合わせ、講義前にインスタグラムで魅力的な写真と短い文章で投稿します。講義や優秀投稿記事からの学び (数行程度) を講義ブログや Facebook にコメントします。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 講師紹介とガイダンス: インスタグラムの開設 & 活用、講義ブログ & Facebook への投稿
- 第2講 教科書「すぐやる人だけがチャンスを手に入れる」感想発表と SNS 開設 & 投稿講座
- 第3講 スマホでお気に入りのお店やスポットを見つけるコツ
- 第4講 インスタグラム映えする写真の撮り方と加工法
- 第5講 記事で紹介した店主などへのメッセージの出し方つながり方
- 第6講 多くの人の興味を惹くタイトルやキャッチコピーの付け方
- 第7講 多くの人に検索され見ってもらえるハッシュタグの付け方
- 第8講 Facebook で目立って信用される自己紹介文の作り方
- 第9講 Facebook 向きのプロフィール写真とカバー写真の撮り方選び方
- 第10講 自分らしさをアピールする独自のこだわりテーマの見つけ方
- 第11講 リアルなおつきあいから SNS へと導く個人名刺の作り方と活用法
- 第12講 就活にも生きる SNS 記事の蓄積法とアピール法
- 第13講 最終レポートと全員 1 分プレゼンテーションの準備
- 第14講 最終レポート提出と全員 1 分プレゼンテーション 1
- 第15講 最終レポート提出と全員 1 分プレゼンテーション 2

■フィードバックの要領

講義レポートに寄せられた質問については講義とブログで回答する

■評価基準

評価 A+ (90 点以上): レポート提出 (出席) 皆勤 (ゼミ等諸事情考慮) 課題期限内投稿 最終課題・発表優秀
 評価 A (89 ~ 80 点): レポート提出 (出席) 8 割以上 全課題期限内投稿 最終課題・発表実施
 評価 B (79 ~ 70 点): レポート提出 (出席) 7 割以上 全課題投稿 最終課題・発表実施
 評価 C (69 ~ 60 点): レポート提出 (出席) 8 割以上 課題投稿 8 割以上 最終課題・発表実施
 評価 F (59 点以下): 上記評価 C の最低条件を満たさない場合

■評価方法

毎回講義中の 5 分間レポート (20%) 毎回の事前課題: インスタグラム投稿 (20%) 毎回の事後課題: 講義ブログへのコメント (20%)
 期末レポートと課題ページ作成 (20%) 最終プレゼンテーション (20%)

■留意点

〈受講の条件〉 1) インスタグラムや Facebook を活用できるスマートフォンを所有していること 2) SNS に自分の顔写真やプロフィールを公開して、記事を発信して自分をブランド化する覚悟があること 3) 多摩地域のおいしいお店やおもしろスポットを探して発信する覚悟があること

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネス数学 I (Business mathematics I)**サブタイトル** 行列の演算とそのビジネス利用**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

ビジネスの現場で使える数学の基礎的な実力、特に、数学で物事を考える力を養います。

■講義分類

ビジネスマネジメント、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

ビジネスに利活用できる数的処理力、またグループワークを通して協業力や情報収集力を養う。また、関数等を活用したエクセルのスキルやそれをレポートとしてまとめるためのワードのスキルを養う。データ分析を用いてマーケティング戦略の立案と提案するための数学の基礎力をつけ、自ら問題を設定し数的処理により解決できるように学修する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(4択クイズ)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

初回までに、四則演算、割合の計算等、特に、ビジネス数学基礎の内容を復習のこと。また各授業においては、内容についての復習(1.5時間)、次回内容について予習(1.5時間)を実行すること。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション

第2講 行列の積

第3講 正方行列と逆行列

第4講 連立1次方程式

第5講 行列式

第6講 行列の演習

第7講 行列式の演習

第8講 連立1次方程式の演習1

第9講 連立1次方程式の演習2

第10講 中間試験

第11講 行列の回転と複素数

第12講 変換

第13講 行列式でできるもの

第14講 線形空間

第15講 内積

■フィードバックの要領

課題や試験等に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 中間試験の点数とミニレポート点の合計点で90点以上

評価 A (89~80点) : 中間試験の点数とミニレポート点の合計点で80点以上89点以下

評価 B (79~70点) : 中間試験の点数とミニレポート点の合計点で70点以上79点以下

評価 C (69~60点) : 中間試験の点数とミニレポート点の合計点で60点以上69点以下

評価 F (59点以下) : 中間試験の点数とミニレポート点の合計点で59点以下

■評価方法

中間試験50点、ミニレポート50点(5点×10回)。10回以上出席した者(もしくは欠席回数が5回未満の者)に対して評価を行う。

■留意点

科目名 ビジネス数学 II (Business mathematics II)**サブタイトル** ビジネスのための微分・積分入門**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

経営上では、情報を活用して、未来の状態を予測し、そこで発生する問題を事前に対応できるようにすることは重要である。本講義では、ビジネス課題の解決のために数学的知識を用いたモデル構築のための基礎としての、数学的な考察およびモデルの構築を目指す。関数の概念とその応用、微分積分の概念と応用について、基礎的な概念についての理解と実際の計算方法についての習得を目指す。できるだけ、実際での問題解決のための数学と位置づけて講義を行う。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

(1) 初等関数について微分積分を理解して行える (2) 多変数関数の微分を理解して行える (3) 関数近似について理解して行える

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断 【考え抜く力】

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

DP1 知識と理解：ビジネスの中で必要な基礎的な学力を養い、産業社会での問題を数学モデルを用いて理解する DP2 実際の問題から数理モデルを構築でき、それを用いて課題解決を図れる

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

各講義回において出される経営に関する実際の問題を次回までに解いて整理しておくことが求められる。問題の理解と解を求め整理する時間としては1.5時間以上必要となるので余裕も持って準備すること。

■授業の概要

- 第1講 グラフから学ぶ
- 第2講 グラフから学ぶⅡ
- 第3講 微分の基本となる差分について講義する
- 第4講 基本的な関数の微分法
- 第5講 合成関数の微分法
- 第6講 合成関数の微分法 演習
- 第7講 テラー展開
- 第8講 テラーの公式
- 第9講 最適化問題
- 第10講 最適化問題Ⅱ
- 第11講 不定積分の基本
- 第12講 不定積分の基本Ⅱ
- 第13講 置換積分と部分積分
- 第14講 多変数関数と偏微分
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：学習した内容について理解して実際の問題に適用し、解を求めることができる。

評価 A (89～80点)：学習した内容について理解して解を求めることができる。

評価 B (79～70点)：学習した内容について理解して少なくとも2つの内容に関する解を求めることができる。

評価 C (69～60点)：学習した内容について理解して少なくとも1つの内容に関する解を求めることができる。

評価 F (59点以下)：学習した内容について理解が不十分で解を求めることができない。

■評価方法

通常の課題等による平常点(60%)と学期末の試験結果(40%)により総合評価

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネス戦略 (Business Strategy)**サブタイトル** 「徹底したグループワーク」で、ビジネスの基本戦略とイノベーション戦略を学ぶ**担当教員** 志賀 敏宏**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

①ビジネス戦略の基本（ひとつひとつの事業の成功のために必要なこと）を学ぶ ②イノベーションを理解しその成功のために必要なことを学ぶ ③事例研究、グループワーク、プレゼンテーションというアクティブラーニング手法を通じて学ぶ

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

皆さんが「グループワーク」での資料作成、プレゼン、質疑応答を通じて、ビジネス戦略とイノベーション戦略の基本的理解を養うこと。合せて課題発見力、論理的に考える力、発言力、討論する力を身につけること。必ず「就活の強力な武器」となります。この目標に共感する人、高い志をもって、【努力することを強く約束できる人】のみ履修登録、受講して下さい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネス全般の基礎的成功要因とイノベーションの成功に関する知識と理解を得て思考力を高め、自ら調べた情報を基に成功要因に関する判断力（優先順位付け）を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ●その他(プレゼンテーション)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

グループワークでの資料収集と発表資料作成、授業中のノートでの復習が必須です。全員が、どこかのグループメンバーとなり、最少2回の発表を担当します。各回平均 1.5 時間程度の予習・復習が必須です。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション。本授業の進め方を説明、グループ決定、発表テーマを選びます。

第2講 事例研究の進め方説明。グループ、担当テーマの確定。

第3講 [テーマ：カフェビジネス]の「プレゼンテーション」

第4講 [テーマ：コンビニビジネス]の「プレゼンテーション」

第5講 [テーマ：ネット通販ビジネス]の「プレゼンテーション」

第6講 [テーマ：乗用車ビジネス]の「プレゼンテーション」

第7講 [テーマ：テーマパークビジネス]の「プレゼンテーション」

第8講 [テーマ：スマフォビジネス]の「プレゼンテーション」

第9講 [テーマ：ネット系サービスのイノベーション]の「プレゼンテーション」

第10講 [テーマ：機械系の大型イノベーション]の「プレゼンテーション」

第11講 [テーマ：一芸家電のプチイノベーション]の「プレゼンテーション」

第12講 [テーマ：ニーズ対応のプチイノベーション]の「プレゼンテーション」

第13講 [テーマ：大型ハイテクイノベーション]の「プレゼンテーション」

第14講 [テーマ：ソーシャルイノベーション]の「プレゼンテーション」

第15講 最終試験

■フィードバックの要領

口頭（授業中コメント）、ノート・ワークシートへのコメントで行います。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：下記の評価方法と配分に従って 90 点以上

評価 A (89 ~ 80 点)：下記の評価方法と配分に従って 80 点以上、89 点以下

評価 B (79 ~ 70 点)：下記の評価方法と配分に従って 70 点以上、79 点以下

評価 C (69 ~ 60 点)：下記の評価方法と配分に従って 60 点以上、69 点以下

評価 F (59 点以下)：下記の評価方法と配分に従って 59 点以下

■評価方法

出席 25 点。プレゼンテーション 35 点。授業中の発言等 15 点。テスト結果を上記に加点し 100 点満点。本科目の到達目標に照らして評価。私語等によっては減点、受講停止を求めます。

■留意点

1. 次の3点の約束を守れる人が履修して下さい。①グループワークで努力する人 ②私語・遅刻等で迷惑をかけない人 ③他グループの発表を真剣に聞きノートをとる人。守れない場合は受講停止を求めることがあります。2. T-NEXT の連絡を見落とした場合は成績に関する異議を受け付けません。3. 受講を停止する際は必ず履修削除して下さい。就活時に成績で不利にならないために重要です。

科目名 ビジネス法 (Business Law)**サブタイトル** 会社の運営、労使関係、情報セキュリティにおける法的問題を中心として**担当教員** 王 佳子**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義は、企業が行うさまざまな活動に関わる法律の中で、会社法、労働法、サイバー法に親しむことによって、法的観点から企業の行うさまざまな活動を認識できるようにすることを目的とする。会社法は、企業の根幹にかかわる法律である。会社法を通して、企業がどのように設立され、運営され、資金調達をしていき、規模を拡大していくかを勉強していく。労働法は、労働者と使用者の関係を調整する法体系である。労働法を通して、労働者と使用者が遵守すべき労働基準にはどのようなものがあるか、そのような労働基準をどのように労働契約に反映させるか取り入れるべきか、労使関係の調整において労働組合がどのような機能を果たしていくかを勉強していく。サイバー法は、サイバーセキュリティに関する公的部門や民間部門の責務を明確にするための法体系である。サイバー法を通して、国、地方公共団体、サイバー関連事業者、教育研究機関等に要求される情報保護の枠組みを勉強していく。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標

条文や重要な判例の習得や、具体的な事例の検討に伴う応用を通して、会社法、労働法、サイバー法の法体系を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネス法の根幹をなす法律が実務においてどのような問題に適用されるのか、適用の際にどのような解釈が加えられたのかを習得し、現実生活の中における同様の問題に対処できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

予習については、日経新聞の朝刊で授業のテーマに関係する新聞記事に目を通してください(30分)。復習については、授業中に配布した資料等を参照しながら、リアクションペーパーを作成してください(1時間)。

■授業の概要

- 第1講 ビジネス法総論
- 第2講 会社の設立(発起設立、募集設立、発起人の責任)
- 第3講 コーポレートガバナンス(機関設計)
- 第4講 コーポレートガバナンス(株主総会)
- 第5講 コーポレートガバナンス(取締役・取締役会)
- 第6講 コーポレートファイナンス(株式・新株予約権、社債)
- 第7講 コーポレートファイナンス(計算)
- 第8講 M&A(友好的買収)
- 第9講 M&A(敵対的買収)
- 第10講 労働法(内定、非正規雇用)
- 第11講 労働法(賃金、労働時間)
- 第12講 労働法(安全と衛生)
- 第13講 労働法(労働組合)
- 第14講 労働法(労働者の配置と異動)
- 第15講 サイバー法(サイバーセキュリティ基本法や個人情報保護法制)

■フィードバックの要領

リアクションペーパーに対して、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 会社法、労働法、サイバー法の法体系をほぼ完璧に理解している。
- 評価 A (89～80点) : 会社法、労働法、サイバー法に関する基礎理解力も応用力も一応できている。
- 評価 B (79～70点) : 会社法、労働法、サイバー法に関する基礎理解力ができているが、応用力に欠ける。
- 評価 C (69～60点) : 会社法、労働法、サイバー法の法体系に関する基礎理解力がかるうじてできている。
- 評価 F (59点以下) : 会社法、労働法、サイバー法の法体系をほぼ理解できていない。

■評価方法

リアクションペーパー(20%)、期末定期試験(80%)

■留意点

なし

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶ プログラミング入門 I (Introduction to Programming Language I)**サブタイトル** ▶▶ C# Programming using Unity**担当教員** ▶▶ 彩藤 ひろみ**対象学年** ▶▶ 2年生以上**区分** ▶▶ 春学期**■講義目的**

本講義は、ゲームエンジン Unity で採用されている C# 言語を中心に、プログラミング言語を学ぶ。基礎からきちんと積み上げることで、いずれゲーム作成などの実力となって跳ね返ってくる。コンピュータにどうやってこちらの考えを伝えるのか、そのアルゴリズムを学び、実践する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

アルゴリズムの理解、プログラミングの組み立て、結果の予測とバグフィックス。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[個人] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

教科書を順番に学ぶ。オンラインチュートリアルも利用する。予習に 1.5 時間以上、復習に 1.5 時間以上かかる。

■授業の概要

- 第1講 Unity と C#
- 第2講 C# の基本形 クラスと計算
- 第3講 クラスの理解
- 第4講 メソッドの定義
- 第5講 アルゴリズムの理解 その1 条件分岐
- 第6講 アルゴリズムの理解 その2 繰り返し
- 第7講 配列変数 複数のデータを扱う
- 第8講 前半まとめ ミニテスト
- 第9講 Unity でゲーム作成 その1
- 第10講 Unity でゲーム作成 その2
- 第11講 物理パズルゲームをつくる その1
- 第12講 物理パズルゲームをつくる その2
- 第13講 物理パズルゲームをつくる その3
- 第14講 成果で遊ぶ
- 第15講 期末テスト準備

■フィードバックの要領

毎回の演習の進捗を確認し、正しい解法や考え方をフィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : ほぼ完ぺきな理解度と評価

評価 A (89 ~ 80 点) : 上位の評価

評価 B (79 ~ 70 点) : 中位の評価

評価 C (69 ~ 60 点) : 下位の評価

評価 F (59 点以下) : 不十分な理解度と評価

■評価方法

学期末試験 50% レポートなど平常点 50%

■留意点

①プログラミング言語の学習においては、面倒がらずに自分でプログラムを打ち、実行して確認していくことが重要である。いろいろなエラーを経験すること、つまり失敗することが、成功すること以上に意味を持っている。わからないことは、できるだけ授業中に質問して解決するように心がけよう。②授業には毎回各自のノート PC を必ず持ってくる。③課題や試験等に対してはフィードバックを行うので、確認すること。

科目名 ▶▶▶ **プログラミング入門 II (Introduction to Programming Language II)****サブタイトル** ▶▶▶ **Java 言語によるプログラミング入門****担当教員** ▶▶▶ **中村 有一****対象学年** ▶▶▶ **2年生以上****区分** ▶▶▶ **春学期****■講義目的**

本講義は、Java 言語によるプログラミングの入門コースである。将来 SE などを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生には、この科目を受講することを強く勧める。Java 言語は、最近広く普及しているプログラミング言語であり、この言語を一通り習得していると、さまざまな場面で役に立つ。また「情報処理技術者試験」などの資格試験を受ける場合にも有効である。授業は、基礎的なプログラミングの構造の説明と、その演習の繰り返しで行っていく。単元ごとにレポートの提出を求めるため、各自、空き時間にはしっかりと復習をすることが必要である。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

Java 言語を一通り使いこなせるようになることが最終目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

Java 言語を基礎から学ぶことにより、プログラミング言語に特有の知識を身につけ、将来 SE などの職種で活躍できるようにする。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ●その他 (クイズ)

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでもできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5 時間) 復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたら確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 Java 言語入門：プログラム・プログラミング・プログラミング言語。
- 第2講 開発環境の整備：Java の開発環境を整備し、使い方を学ぶ。
- 第3講 入出力と変数：変数名のつけ方、変数の型。
- 第4講 四則演算と代入：計算式の書き方。
- 第5講 枝分かれ：if 文と switch 文の違い。
- 第6講 for 文による繰り返し：回数が決まっている繰り返し、漸化式。
- 第7講 while 文、do while 文による繰り返し：条件が成り立っているあいだ繰り返しを行う構文。
- 第8講 配列：規則的に並んだデータを扱う場合に用いられるデータ構造。
- 第9講 関数：ひとまとまりの処理に名前を付け部品として呼び出す。
- 第10講 GUI の利用：GUI 機能を使ったプログラミング手法。
- 第11講 乱数とグラフィクス：Java における乱数生成とグラフィクス機能。
- 第12講 タイマーとサウンド：Java におけるタイマーとサウンド出力の機能。
- 第13講 イベント処理：Java におけるイベント処理の機能を取り上げる。
- 第14講 レポート作成：ある程度の大きさの実用的なプログラムを作成する。
- 第15講 レポート作成：ある程度の大きさの実用的なプログラムを作成する。

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：ほぼ完ぺきな理解度と評価
- 評価 A (89 ~ 80 点)：上位の評価
- 評価 B (79 ~ 70 点)：中位の評価
- 評価 C (69 ~ 60 点)：下位の評価
- 評価 F (59 点以下)：不十分な理解度と評価

■評価方法

学期末試験 50% レポートなど平常点 50%

■留意点

①プログラミング言語の学習においては、面倒がらずに自分でプログラムを打ち、実行して確認していくことが重要である。いろいろなエラーを経験すること、つまり失敗することが、成功すること以上に意味を持っている。わからないことは、できるだけ授業中に質問して解決するように心がけよう。②授業には、毎回各自のノート PC を必ず持ってくる。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶ **プログラミング入門 III (Introduction to Programming Language III)****サブタイトル** ▶▶ Python プログラム入門**担当教員** ▶▶ 今泉 忠**対象学年** ▶▶ 2年生以上**区分** ▶▶ 秋学期**■講義目的**

この講義ではプログラム言語【Python】について学ぶ。Pythonは、オブジェクト指向、命令型、手続き型、関数型などのスタイルでプログラムを書くことができる。開発効率が高く、フリーの優秀なフレームワークや開発環境が揃っている。何らかのプログラミング言語で、自ら構想したアルゴリズムの実装が可能になりたいなどの将来SEなどを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生やには、この科目を受講することを強く勧める。本講義の前半では順次処理、分岐処理、繰り返し処理について学び、Pythonのコーディングスキルを確かなものにする。後半では、データの作成や集計、並び替えのプログラミングを實踐して、データを処理するアルゴリズムの基礎について理解を深める。自分の頭で考えて、アイデアを表現する力を身につける。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

Pythonのプログラミングと、アルゴリズムの基礎を身につけることを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

DP1：ルゴリズムを実現できるための論理力などを習得する DP2：ビジネス環境で必須の課題解決のためのプログラミング力を習得する

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義で課されたプログラム課題について次回までに実行し確認しておくこと。プログラムの説明なども記入するので復習時間として1.5時間以上必要となるので余裕を持って行うこと。

■授業の概要

- 第1講 開発環境の確認と入出力
- 第2講 Google Driveのセットアップと復習
- 第3講 四則演算と余りの復習
- 第4講 if文について
- 第5講 if文の復習と計算機の開発
- 第6講 関数入門
- 第7講 関数応用
- 第8講 乱数の生成と繰り返しと配列を復習して、検索アルゴリズムを学ぶ
- 第9講 乱数の生成と繰り返しと配列を復習して、検索アルゴリズムを学ぶ
- 第10講 ファイルの入出力と合計、平均を学ぶ
- 第11講 ファイルの入出力と合計、平均を学ぶ
- 第12講 最小値、最大値を探すプログラムの開発
- 第13講 並び替えプログラムの開発
- 第14講 並び替えプログラムの開発
- 第15講 学期末レポート

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価A+ (90点以上)：出席、課題、テストを総合して、90%以上の高得点を獲得している。

評価A (89～80点)：Pythonの応用的なプログラムを書くことができる。

評価B (79～70点)：Pythonの簡単なプログラムを書くことができる。

評価C (69～60点)：Pythonのプログラムを読んで理解することができる。

評価F (59点以下)：出席数が足りない。あるいは、基本的なPythonの文法が理解できていない。

■評価方法

日常課題50%、期末テスト50%。出席が80%を満たさない場合は減点する。

■留意点

- ・デザインワークショップの内容を理解していることを前提とする。
- ・講義と日常の課題を通して、Pythonを身につける努力をしたかを学期末レポートで問う。出席や日常課題だけでは単位はとれません。

科目名 ベンチャー企業論 (Venture Company Theory)**サブタイトル** 企業家精神の習得**担当教員** 小林 英夫**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

付加価値や雇用の創出においてベンチャー企業の果たす役割は非常に大きい。また、ベンチャー企業を興し発展させていくことを司る精神—企業家精神—は、創業に携わるかどうかにかかわらず、創造的なビジネス活動を行っていく上で重要なものである。本講義では、組織のマネジメントとそれを支える行動規範としての企業家精神について包括的に学ぶとともに、現在活躍中の企業家や事業家の生き方を知ることを通じて、ベンチャー企業の経営やベンチャー企業への参画について学び、自らのライフマネジメントについて考える。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標

①ベンチャーと企業家精神とは何かを理解することを通して、自らのキャリアデザインを考えられるようになる、②事業立ち上げや発展に必要な知識を習得し、事業創業や急成長時に特有の課題や戦略を理解する、③ベンチャー企業創造につながるアイデアを発見し、それを具体化させられるようになる、の3点を到達目標とする。これを通じ、社会発展に貢献する力や高い志を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

起業家精神を持ち新しいことに取り組むことを促して、ベンチャー参画を通じキャリアを築いていくことを自らの選択肢とすることができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(ミニッツペーパー)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする(1.5時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する(1.5時間)。

■授業の概要

第1講 イントロダクション—ベンチャーの意義

第2講 起業を取り巻く環境

第3講 ベンチャーの概念と歴史

第4講 キャリア形成手段としてのベンチャー

第5講 起業プロセス—楽天

第6講 事業計画書

第7講 リーンスタートアップ

第8講 資本政策

第9講 創業支援

第10講 学生起業

第11講 就業後起業

第12講 世界の起業家

第13講 起業家の志

第14講 まとめ—ベンチャーへの転換

第15講 学習成果の確認—授業内期末試験

■フィードバックの要領

毎回提出のコメントシートの講評と質問・意見への回答・コメントを翌回講義で行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 授業貢献点と期末試験の合計が90点以上

評価 A (89~80点) : 授業貢献点と期末試験の合計が80点以上90点未満

評価 B (79~70点) : 授業貢献点と期末試験の合計が70点以上80点未満

評価 C (69~60点) : 授業貢献点と期末試験の合計が60点以上70点未満

評価 F (59点以下) : 授業貢献点と期末試験の合計が60点未満

■評価方法

授業貢献点(59%)、期末試験(41%)。授業貢献点は単なる出席点ではなく、授業を聴き自ら考えたかを評価する。期末試験は、ベンチャー企業に関する知識と、企業家精神を通じた事業構想活動の理解度を評価する。

■留意点

授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてコメントシートの提出を求め、その内容をA(授業を聴き良い気づきがあった)、B(授業を聴いていた)、C(授業を聴いていたとは思われない)の3段階評価し授業貢献点とする。Aは加点対象(6点)、Bが標準(4点)、Cは減点(-4点)、欠席は0点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大59点。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ マーケティング・データ分析 (Marketing Data Analysis)

サブタイトル ▶▶▶ Rを用いた統計分析の基礎

担当教員 ▶▶▶ 佐藤 洋行

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 秋学期

■講義目的

よりよいサービスを提供するためには、顧客のニーズを把握することが必要である。そのための手段として、定量的なデータに基づいたサービスのあり方の検討は、今の時代では必要不可欠である。この授業では、調査・実験データを多角的な観点から表現・分析するための知識を学んでもらい、マーケティングデータ分析に必要な能力を身につけてもらう。特に、実際に自身で仮説を立て、調査項目を設計し、実際にデータを分析し発表するという一連の流れを体験する。それに関連して、データを統計ソフトRを用いて分析するための基礎や、Google クラウドサービスを利用したプレゼンテーション手法などを学ぶ。なお、本科目は社会調査士認定科目Cに指定されている。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

1. マーケティングの課題を整理し、リサーチクエストを設定することができる 2. リサーチクエストに対して、検証可能な仮説を構築することができる 3. 仮説を検証するための調査設計ができる 4. 統計的仮説検定を利用して、仮説を検証することができる 5. マーケティング課題に対する分析結果をプレゼンテーションし、レポートにまとめることができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

データ分析に関わる基礎的な知識を理解した上で、正しくデータを分析し、他者に説明する能力を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回の授業に際して 30 分程度の予習を課す。さらに、復習及び演習課題について 1 時間程度の復習を課す。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション
- 第2講 マーケティングにおけるリサーチクエスト (1)
- 第3講 マーケティングにおけるリサーチクエスト (2)
- 第4講 仮説の構築と統計的仮説検定 (1)
- 第5講 仮説の構築と統計的仮説検定 (2)
- 第6講 仮説の構築と統計的仮説検定 (3)
- 第7講 分散分析とカイ二乗検定
- 第8講 回帰分析
- 第9講 ロジスティック回帰と重回帰
- 第10講 調査票の作成
- 第11講 データの可視化
- 第12講 クラスタ分析
- 第13講 分析結果のプレゼンテーション (1)
- 第14講 分析結果のプレゼンテーション (2)
- 第15講 マーケティングデータ分析レポート

■フィードバックの要領

Google クラウドサービス上でフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 分析結果をレポートにまとめ、プレゼンテーションすることができる。

評価 A (89 ~ 80 点) : 調査結果について適切な統計処理を行い、仮説を検証できる。

評価 B (79 ~ 70 点) : リサーチクエストに対して適切な仮説の構築と調査設計ができる。

評価 C (69 ~ 60 点) : マーケティングの課題を整理し、リサーチクエストを設定することができる。

評価 F (59 点以下) : マーケティングの課題を整理し、リサーチクエストを設定することができない。

■評価方法

出席 30%、プレゼンテーション 30%、レポート 40%

■留意点

1. 「履修状況に応じて、内容を変更することがある」。2. 「この授業ではパソコンを用いた実験・調査を行い、授業資料は web での配信を予定している。したがって、授業の際に端末を十分に充電して持参すること。なお、端末を忘れた場合には欠席扱いにするので気をつけること」。3. Google Classroom を用いて連絡を行うために随時確認すること。

科目名 マーケティングリサーチ (Marketing Research)**サブタイトル** 基礎からはじめるマーケティングリサーチ**担当教員** 加藤 みずき**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

初めてマーケティングリサーチに関して学ぶ人を主な対象とし、消費(者)行動に焦点を当てながら、マーケティングリサーチの必要性、活用の仕方を理解する。また、統計の基礎的な知識および分析法(具体的には、データの数値要約、サンプリング法、相関、t検定など)や質問紙の作成法を修得した上で、それらの統計的手法を用いたマーケティングリサーチの調査計画の立て方を学ぶ。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解

■到達目標

基礎的な統計の知識を活用し、身近な消費行動を数値で表すための適切なデータ収集計画を立てることができる。収集したデータについて適切な手法を用いて分析し、結果を正しく解釈した上で、報告書の形でわかりやすくまとめることができる。授業で学んだ統計手法を組み合わせて応用的な調査計画を立てることができる。授業で扱う知識や技能の修得において、班のメンバーと協同し、メンバー全員の理解度を高めることに貢献できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

提示されたデータについて、目的に沿った分析方法を考え、解釈することができるようになる。またその結果をわかりやすく表現することができるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習と復習合わせて1.5時間。事前、事後学習ポイントの詳細については前の授業で指示するので事前に調べてくること。その他、各班が作成した調査に回答し、得られたデータを集計する作業も必要に応じ行う。

■授業の概要

第1講 ガイダンス・代表値の使い分け方

第2講 協同学習の基本原則・平均値と標準偏差、正規分布の理解

第3講 二つの平均値には差があると言えるか①:統計的検定の基本的な考え方

第4講 二つの平均値には差があると言えるか②:t検定の実施と解釈

第5講 二つの平均値には差があると言えるか③:班で調査計画案を考える

第6講 二つの平均値には差があると言えるか④:分析と結果の解釈

第7講 二つの変数間の関連を見る①:相関分析の実施と結果の解釈

第8講 二つの変数間の関連を見る②:相関分析の実施と結果の解釈

第9講 二つの変数間の関連を見る③:班で調査計画案を考える

第10講 二つの変数間の関連を見る④:データの分析と結果の解釈

第11講 これまでの分析を使って模擬データを分析しよう①:分析方針の決定と分析

第12講 これまでの分析を使って模擬データを分析しよう②:結果の解釈とまとめ

第13講 調査計画案を作ろう①:与えられたテーマから班で調査計画を立てる

第14講 調査計画案を作ろう②:個人で問いから調査計画を立て、最終計画書を作成

第15講 統括とまとめ

■フィードバックの要領

翌週の授業で配付する授業通信の中で回答することでフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+ (90点以上):各評価対象において、顕著にすぐれた水準に達している

評価A (89~80点):各評価対象において、到達すべき水準を十分に超えている

評価B (79~70点):各評価対象において、到達すべき水準に達している

評価C (69~60点):各評価対象において、十分とは言えないが最低限の水準を満たしている

評価F (59点以下):本講義で到達すべき水準に達していない

■評価方法

平常点(30%):授業内課題への記入・提出などを含めた参加点小テスト(20%):統計の運用に関する正しい理解の確認のために実施調査計画書作成課題(50%):班で練った調査計画案をシートにまとめる。

■留意点

- ・到達目標にも示したように、グループワークを通して理解を深めることを目指しているため、授業中・授業外ともに積極的な参加を行うことが望ましい。
- ・本講義は社会調査士取得のための認定科目(B分野)に該当する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ヨーロッパ経済論 (European Economy)**サブタイトル** ヨーロッパの今を読む**担当教員** 田中 理**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

ヨーロッパでは各国・各地域が民族、言語、文化、宗教などの垣根を越え、政治、経済、司法、外交・安全保障など様々な分野で政策の統一や調整を進めている。1950年代に6ヶ国で始まったヨーロッパ統合のプロセスは28ヶ国体制に拡大。単一通貨ユーロの崩壊や解体の危機が叫ばれた債務危機の最中、ヨーロッパ諸国は統合を次のステージに進めることで危機克服を目指した。だが、長引く景気停滞、失業や貧困の増加から、ヨーロッパ市民の間では現状への不満が高まっている。こうした不満の矛先は統合への批判や難民・移民の排斥という形でヨーロッパの各地で噴出している。ヨーロッパは今、統合の求心力を保てるかの岐路に立たされている。本講義では、こうした現在進行形のヨーロッパ情勢と一般的なヨーロッパ経済の教科書に書かれている内容の“橋渡し”を意識し、時事的なトピックを随時取り上げる。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

ヨーロッパの政治・経済・金融情勢を題材に、国際問題に関する情報収集の力を磨き、それを整理し、分かりやすく伝える能力を身に付けることを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ヨーロッパの現代的な課題を通じて、国際問題をみる目を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

予習：過去1週間に新聞、雑誌、テレビなどで取り上げられたヨーロッパに関連するニュースに目を通しておく(15分/日×7日=約100分)。復習：授業資料で意味の分からない言葉について調べる(約100分)。

■授業の概要

- 第1講 欧州経済・欧州通貨統合の基礎
- 第2講 英国のEU離脱危機
- 第3講 欧州債務危機
- 第4講 欧州の難民危機
- 第5講 欧州の金融政策
- 第6講 欧州の政治潮流
- 第7講 欧州の産業構造・通商政策
- 第8講 欧州の雇用問題・高齢化
- 第9講 ドイツの政治・経済
- 第10講 フランスの政治・経済
- 第11講 英国の政治・経済
- 第12講 南欧の政治・経済
- 第13講 中東欧の政治・経済
- 第14講 ウクライナ危機
- 第15講 ロシアの政治・経済

■フィードバックの要領

レポート・試験・課題に対して、コメントを記入してフィードバックを行なう。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：講義内容を非常によく理解している。
 評価 A (89～80点)：講義内容をよく理解している。
 評価 B (79～70点)：講義内容を概ね理解している。
 評価 C (69～60点)：講義内容の理解で不十分な点がある。
 評価 F (59点以下)：講義内容を理解していない。

■評価方法

出席(30%)、中間レポート(30%)、期末レポート(40%)。履修者が少ない場合にはレポートの代わりにグループワークやプレゼンテーションで代替する。

■留意点

レポート執筆にあたって、統計データの入手方法や分析・加工方法を知りたい履修者は、別途指導する機会を設けるので、担当教員に相談すること。

科目名 リーダーシップ論 (Leadership Theory)**サブタイトル** リーダーシップ理論の学習とその実践**担当教員** 西村 知見**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

経営者や管理者のリーダーシップは、企業の成果をあげるために不可欠である。しかしながら、「リーダー=凄い人」というイメージのために、自分自身のリーダーシップに気付いていない人も多い。実際、リーダーシップは決して遠い存在ではなく、あなたの身近に存在する。本講義では、そのようにイメージを変えながら、理論や事例を学び実践することで、「私なりのリーダーシップ」を見つけ出すことを目指す。

■講義分類

ビジネスマネジメント、問題解決のための理論、社会人力育成

■到達目標

理論・事例学習とグループゲームやワークを通じて、自分自身の得意な、あるいは出来そうなリーダーシップを発見することを目指す。就職面接において、しばしば「リーダーシップを発揮した出来事」を質問されることもあり、これにしっかりと対応できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

グループゲームやワークの中で、他者と協力しながら目標を達成することに挑戦しつつ、理論や事例を学習していく。他の意見を傾聴しながらも物事をまとめ上げ、それを発信していくことも授業内で経験する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(授業内での復習ワークシート)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ●その他(グループゲーム&ワーク)

[上記以外] (VTR学習)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする(1.5時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する(1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 イン트로ダクション：リーダーシップとは何か?を考える
- 第2講 リーダーシップに対するイメージを考えるI(グループゲーム①)
- 第3講 リーダーシップに対するイメージを考えるII(VTR学習①)
- 第4講 リーダーシップの基礎的理論I
- 第5講 リーダーシップの基礎的理論II
- 第6講 リーダーシップの基礎的理論III(VTR学習②)
- 第7講 リーダーシップの基礎的理論IV&中間テストに関する説明
- 第8講 中間テスト
- 第9講 ディスカッション・リーダーシップI(グループゲーム②)
- 第10講 ディスカッション・リーダーシップII(VTR学習③)
- 第11講 リーダーシップ・スピーチI
- 第12講 リーダーシップ・スピーチII
- 第13講 リーダーシップ・スピーチIII
- 第14講 リーダーシップ・スピーチIV(グループワーク振り返り)
- 第15講 総まとめ(期末レポートについて)

■フィードバックの要領

ワークシートの回答に対する講評、質問・意見に対するコメントを翌回の講義で実施する。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が90点以上
- 評価 A (89～80点) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が80～89点
- 評価 B (79～70点) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が70～79点
- 評価 C (69～60点) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が60～69点
- 評価 F (59点以下) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が59点以下

■評価方法

授業貢献点(40点)、中間テスト(30点)、期末レポート(30点) 授業貢献点は、ワークシート+プレゼンテーション等グループワークでの貢献を総合して評価する。

■留意点

およそ毎回の授業においてワークシートの提出を求め、その内容をA(授業を聴き良い気づきがあった、2点)、B(授業を聴いていた、1点)、C(授業を聴いていたとは思われない、0点)の3段階で評価し授業貢献点とする。プレゼンテーション等グループワークの貢献度は10点の範囲で評価する。欠席は0点となる。授業の受講態度が悪い場合は、欠席以下の評価となる。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 立志人物伝 (Ambitious Person Theory)**サブタイトル** ライフマネジメントを考える**担当教員** 久恒 啓一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

ビジネスはコミュニケーション活動によって成り立っており、その活動を担うのは人である。経営資源を束ねる人的資源の重要性はますます高まっている。今後はキャリア形成を含むライフマネジメントの視点から人的資源の活性化を考えながら、組織や経営やビジネスについて考察することが求められる。この講義においては、近代日本を作った明治期を中心とするわが国の志を実現した偉人の生涯（経営者・政治家・芸術家・作家・ジャーナリスト）の資料やYouTubeの映像を題材に、いくつかの切り口—仰ぎ見る師匠の存在、敵との切磋・友との拓磨、持続する志、怒涛の仕事量、修養・鍛錬・研鑽、飛翔する構想力、日本への回帰—を用いて今日の産業社会で生きるための問題解決の知恵について学び、自らの志とキャリアマネジメント、ライフマネジメントについて深く考える力を養う。

■講義分類

ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標

自身のロールモデルを発見し、最終レポートとしてパワーポイントを用いて「私のロールモデル ○○○○の人生鳥瞰図」を作成し、ワードを用いて「私のロールモデル ○○○○から学んだこと」をレポートできる力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会の発展に寄与してきた過去の偉人たちの業績と志、そして生き方を知り、自身のキャリア意識の向上を図る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ●その他(性格タイプ別グループワーク)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

次回に取り上げる予定の偉人について自分なりに調べておくこと。(60分)、毎回の授業で紹介したYouTube映像を見る。(60分)

■授業の概要

- 第1講 講義 「近代日本のわが国の偉人たちのライフマネジメント」
- 第2講 講義 「仰ぎ見る師匠の存在Ⅰ」
- 第3講 講義 「仰ぎ見る師匠の存在Ⅱ」
- 第4講 講義 「敵との切磋、友との拓磨Ⅰ」
- 第5講 講義 「敵との切磋、友との拓磨Ⅱ」
- 第6講 講義 「持続する志」
- 第7講 講義 「怒涛の仕事量Ⅰ」
- 第8講 講義 「怒涛の仕事量Ⅱ」
- 第9講 講義 「修養・鍛錬・研鑽」
- 第10講 講義 「飛翔する構想力」
- 第11講 講義 「日本への回帰」
- 第12講 講義 「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅰ」
- 第13講 講義 「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅱ」
- 第14講 講義 「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅲ」
- 第15講 講義 「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅳ」

■フィードバックの要領

毎回提出させるアンケートのまとめを、次回授業で提示し、疑問などに答えていく。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 全回出席。レポートが特に優れている。
 評価 A (89～80点) : ほぼ全回出席。レポートが優れている。
 評価 B (79～70点) : 高い出席率。レポートが良い。
 評価 C (69～60点) : 高い出席率。レポートの提出あり。
 評価 F (59点以下) : 低い出席率。レポートの提出なし。

■評価方法

出席 50点、毎回の提出アンケート 25点、最終レポート 25点

■留意点

次回に取り上げる予定の偉人について、自分なりに調べておくことを心がけてもらいたい。講義で興味を持った人物の自伝や伝記を読んでほしい。

科目名 Web サービス開発 (Web Service Building)**サブタイトル** JavaScript + Web API**担当教員** 出原 至道**対象学年** 3 年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義は、「Web プログラミング」と並んで、開発系科目の最上位に位置づけられる。開発の分野を志す学生にとって、大きな武器となる科目である。「Web プログラミング」がサーバサイドのアプリケーション開発を行うのに対し、本講義では、Web ページに埋め込まれる形で実行されるクライアントサイドアプリケーション開発を実践する。具体的には、ウェブ上で提供されている様々なデータを API (Application Programming Interface) を通してリアルタイムで自動的に収集し、それに基づいたサービスを利用者に提供するアプリケーションを開発する。講義では、最先端の API を実装実験するため、実際に取り上げる API は変更される場合がある。

■講義分類

ビジネス環境理解社会人育成、ビジネス ICT

■到達目標

- ・クライアントサイドアプリケーションが実装できるようになる。
- ・XML 形式のデータ構造が理解できる。
- ・Web API の概念を理解し、自力で自由に使える。
- ・新しい Web サービス提案ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

Web API の概念を理解し、自力で自由に使えるようになることで、新しい Web サービス提案ができるようになる。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ●その他 (プログラムの実装)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義内では、API の概要を説明し、簡単な実験を行う。実装は、各自が次回講義までに行い、課題として提出すること。(1.5 時間) この課題提出がない場合、単位の取得を認めない。

■授業の概要

- 第1講 インTRODクシヨN (基本技術の確認・開発環境の整備)
- 第2講 JavaScript 入門
- 第3講 API に関する基礎知識
- 第4講 Google API を使ってみる
- 第5講 Google Maps API を使う
- 第6講 Graph を使う
- 第7講 ストリートビューの利用
- 第8講 画像 SNS が提供している API を利用する
- 第9講 中間課題作業日
- 第10講 中間作品発表日
- 第11講 その他の API の利用
- 第12講 その他の API の利用
- 第13講 作品準備作業日
- 第14講 最終作品発表会
- 第15講 全講義の復習とまとめ

■フィードバックの要領

試験の模範解答を受講生に公開する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 未満

■評価方法

10 回以上の出席、かつ、中間発表・最終発表を前提として、以下の配分で評価する。授業内レポート (30%)、作品 (20%)、試験 (50%)

■留意点

ウェブデザイン・プログラミングの能力を当然に要求する科目である。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 Webプログラミング (Web Programming)**サブタイトル** サーバサイドプログラミング**担当教員** 出原 至道**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

この講義は、ビジネスICTの開発系スキルの集大成として、実践を通じて、Webプログラミング環境構築、HTML、CSS、PHPプログラミング、データベースシステムとの連携を習得し、Webプログラミングの全体像を理解することを目的とする。これにより、受講生は、さまざまなシーンで高度にWebを活用して問題解決に資する能力を得ることができ、実社会で高く評価される。講義にはPCを持参すること。受講生の技術レベル・進度に応じて、講義内容を調整することがある。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

(1) Webプログラミング環境を構築できる (2) HTMLを使ったWebページを作成できる (3) HTMLにCSSを組み込んでWebページを作成できる (4) PHPプログラムを作成できる (5) PHPプログラムによりHTMLのフォームを作成し処理できる (6) PHPプログラムによりウェブデータベースシステムが構築できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

さまざまなシーンで高度にWebを活用して問題解決に資する能力を得る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(プログラムの実装)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

各回の講義では、実習時間が不十分であるので、各回90分程度の実習を通して、説明した要素技術について習熟を深めること。

■授業の概要

第1講 Webの基礎と環境構築

第2講 HTMLの基礎(タグの概念)

第3講 HTMLの基礎(アンカー)

第4講 CSS

第5講 CSSの応用

第6講 PHPの基礎の習得

第7講 PHPを使ったプログラムの作成

第8講 PHPを使ったプログラムの作成

第9講 PHP

第10講 PHPとHTMLの連携

第11講 PHPとデータベース

第12講 PHPとデータベース

第13講 PHPとデータベース

第14講 統合:これまでの知識を統合し実装する

第15講 試験

■フィードバックの要領

試験結果の講評をウェブ上で行う。

■評価基準

評価A+ (90点以上): 数値評価で90点以上

評価A (89~80点): 数値評価で80点以上90点未満

評価B (79~70点): 数値評価で70点以上80点未満

評価C (69~60点): 数値評価で60点以上70点未満

評価F (59点以下): 数値評価で60点未満

■評価方法

講義内で複数回出題される課題提出(60%)、試験(40%)。試験は講義の最終回に実施する予定。

■留意点

・コンピュータを持参すること。前提知識として、①Webの使い方、②基礎的なプログラミングの知識・能力を持っていること。扱う内容が多岐にわたり(HTML、CSS、PHPなど)、それらの知識を積み上げていく必要があるため、理解が難しいと感じた場合は自らWebや参考書籍などで調べてフォローする必要がある。

科目名 アジア経済論Ⅰ (Asian EconomyⅠ)**サブタイトル** アジアビジネスと企業戦略、そして起業家精神**担当教員** 金 美德**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

今や日本企業は、アジア市場に進出するか、アジアのヒト・モノ・カネ・情報を取り込まずして、生き残れない。換言すれば「ビジネス=アジア」、「人生=アジア」の時代と言っても過言でない。したがって本授業では、アジア経済の体系的な知識・理論やアジアの企業・産業・市場・情勢に関する情報の収集・分析方法を学ぶ。また、「アジア」をキーワードにして、日本企業の戦略・営業・経営企画・ビジネスモデルや日本経済の課題を考える。さらに、アジア経済論Ⅰで学んだことを「いかに就活や起業に活かせるか」をシミュレーションする。本授業のキーワードは、アジアビジネス、グローバルビジネス、アジア・ユーラシアダイナミズム、アジアマーケティング、外国人観光客（インバウンド）の日本誘致策と新たなサービス、新興国ビジネスモデル、アジアの知恵と日本の知恵の融合、地政学的知と地政学的戦略、アジアマインド、アジアセンス。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス環境理解、社会人育成

■到達目標

①アジアの政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎的な知識・理論を習得する。②アジア発のビジネス情報の収集力・分析力・発信力を身に付ける。③アジアの潮流・論理・視点に基づく経営戦略力、ビジネスモデル構築力、起業力を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

アジア・ユーラシアダイナミズムに向き合う姿勢や勇気を育み、グローバルビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

アジア情勢やアジアビジネスに関するニュースやネット情報を調べること (1.5時間)。授業開始時に3～5名の学生に報告してもらう (30分)。

■授業の概要

- 第1講 アジア経済論Ⅰガイダンス
- 第2講 アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか (1)
- 第3講 アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか (2)
- 第4講 アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか (3)
- 第5講 ビジネスに重要な平和に対する敏感さ (1)
- 第6講 ビジネスに重要な平和に対する敏感さ (2)
- 第7講 ビジネスに重要な平和に対する敏感さ (3)
- 第8講 日本企業の現状と課題 (1)
- 第9講 日本企業の現状と課題 (2)
- 第10講 アジア市場とアジア戦略 (1)
- 第11講 アジア市場とアジア戦略 (2)
- 第12講 アジア市場とアジア戦略 (3)
- 第13講 アジア市場とアジア戦略 (4)
- 第14講 アジア戦略レポートのテーマ発表①
- 第15講 アジア戦略レポートのテーマ発表②

■フィードバックの要領

レポートのテーマや設定理由について、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、90%以上であること。

評価 A (89～80点) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、89～80%であること。

評価 B (79～70点) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、79～70%であること。

評価 C (69～60点) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、69～60%であること。

評価 F (59点以下) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が59%以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

評価は、出席 (35%)、毎回提出の講義メモ (35%)、最終レポート (30%) の割合で行う。①講義メモは、採点后、講義の最終段階で返却する。②最終レポートは、A4用紙3枚以上とする。

■留意点

①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。③遅刻および途中退室は、厳禁とする。途中退室は、必ず入退室を記録 (日付・時間・学籍番号・氏名) すること。④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 アジア経済論Ⅱ (Asian EconomyⅡ)

サブタイトル アジアで活躍できる人財を目指そう

担当教員 バートル

対象学年 3年生以上

区分 秋学期

■講義目的

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。本講義では、世界経済の牽引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を中心としながら、大中華圏（中国・台湾・香港・シンガポール）や中国の「一帯一路」構想の最新動向を踏まえ中国の辺境経済圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎知識の習得と知見の広がり、そして日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を「読む」力の養成を目指す。具体的には最前線事例を取りあげながら産業社会が求める問題発見能力と問題解決能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて習得した知識を自分の将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネス創造、グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏・中国辺境経済圏のビジネスに関する基礎的な知識の習得。②中国・大中華圏・中国辺境経済圏の特徴と関連企業の経営戦略を分析し、日本企業の新たな経営戦略・ビジネスモデルの立案、企業間の協力の可能性について考える。③講義で習得した知見を就職活動に活用できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

中華圏・中国辺境経済圏に関する基礎的な学力を養い、グローバル（中華圏・中国辺境経済圏）とローカル（日本）の関係を意識しながら産業社会に発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (海外留学やインターンシップ参加者によるプレゼンテーションを実施する。)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

大中華圏や中国の辺境地域に関する時事問題をはじめ、講義内容の中で自分自身に関心をもつ分野についての情報の収集、分析、調査を行う習慣をつけること。上記準備学習に要する時間は最低2時間とする。

■授業の概要

- 第1講 大中華圏(1)～台湾編：台湾の歴史、文化、経済状況
- 第2講 大中華圏(2)～香港編：香港の歴史、文化、華人財閥
- 第3講 大中華圏(3)～シンガポール編：シンガポールの歴史、文化、経済状況
- 第4講 中国の「辺境経済圏」(1)：「新シルクロード経済圏」
- 第5講 中国の「辺境経済圏」(2)：「グレーターメコン経済圏」
- 第6講 中国の「辺境経済圏」(3)：「東北アジア経済圏」
- 第7講 中国の「辺境経済圏」(4)：「ヒマラヤ経済圏」
- 第8講 中国企業の経営戦略：国営企業と民営企業
- 第9講 中国企業の対外投資の現状と課題：中国企業の海外進出の目的と成果
- 第10講 中国の対外関係(1)～米中関係
- 第11講 中国の対外関係(2)～中露関係：中国とロシア両国の経済・外交関係、SCO
- 第12講 中国の対外関係(3) 中国と中東・アフリカ関係：中国と中東アフリカ関係の現状
- 第13講 中国の対外関係(4)～中国と欧州関係：中国と欧州関係の現状
- 第14講 日中経済関係の現状と課題：日中経済関係の最新状況
- 第15講 秋学期の総括：大中華圏・中国の辺境経済圏・「一帯一路」・AIIBの最新動向。

■フィードバックの要領

講義レポートや最終レポートに対しコメントをつけてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：100 点満点中 90 点以上。
 評価 A (89 ～ 80 点)：100 点満点中 89 ～ 80 点。
 評価 B (79 ～ 70 点)：100 点満点中 79 ～ 70 点。
 評価 C (69 ～ 60 点)：100 点満点中 69 ～ 60 点。
 評価 F (59 点以下)：100 点満点中 59 点以下。

■評価方法

出席 30 点、講義レポート 30 点、最終レポート 30 点、質問 10 点の 100 点満点で絶対評価。

■留意点

<成績評価について> 出席と毎回提出する講義メモを重視 (30 点 + 30 点 = 60 点) する。最終レポート (30 点) は、A4 用紙 3 枚以内。講義内の質問・意見 (10 点) は、講義への積極的な参加・貢献として評価し、発言回数に基づいて 1 点～10 点の評価を加える。講義メモは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、問題解決へ向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点后、最後に返却してフィードバックを行う。

科目名 韓国経済論 (Korean Economy)**サブタイトル** 日韓ビジネス**担当教員** 金 美徳**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

一つは、韓国企業について学ぶ。日本企業（中小・ベンチャー企業含む）が韓国進出するか否か、韓国企業をライバルにするかパートナーにするか、韓国人観光客や韓国企業の日本への誘致策を考える。また、韓国企業と日本企業の経営スタイルやグローバル戦略を比較研究することにより、新たな経営戦略やビジネスモデルを考察する。さらに、韓国企業を通じて、アジア企業やアジアビジネスについて学ぶことである。もう一つは、朝鮮半島情勢を知る。朝鮮半島は、韓国と北朝鮮、南北に分断されており、緊迫かつ不安定な情勢である。そのため、日本の平和や企業のリスクマネジメントを考える上で、朝鮮半島の情勢分析は必要不可欠である。本講義のキーワードは、日韓ビジネスと日韓企業連携、韓国企業とアジア企業、韓流マーケティングとアジアマーケティング、アジアビジネスと新興国ビジネス、激動する朝鮮半島とアジアダイナミズムである。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

①韓国と北朝鮮の政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎知識を習得する。②韓国企業の経営スタイルやグローバル戦略などの特徴を分析し、日本企業の新たな経営戦略やビジネスモデルを立案する。または日韓ビジネスのアイデアを考える。③朝鮮半島問題に対する問題意識の向上を図り、国際情勢や平和に敏感になる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

平和に敏感なビジネスパーソンや経済人として、日韓ビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク＝ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

朝鮮半島情勢や日韓ビジネスに関するニュースやネット情報を調べること（1.5時間）。授業開始時に3～5名の学生に報告してもらう（30分）。

■授業の概要

- 第1講 韓国経済論ガイダンス
- 第2講 韓国政治の基礎 (1)
- 第3講 韓国政治の基礎 (2)
- 第4講 韓国政治の基礎 (3)
- 第5講 韓国政治の基礎 (4)
- 第6講 韓国経済の基礎 (1)
- 第7講 韓国経済の基礎 (2)
- 第8講 韓国経済の基礎 (3)
- 第9講 韓国経済の基礎 (4)
- 第10講 北朝鮮の政治・経済の基礎 (1)
- 第11講 北朝鮮の政治・経済の基礎 (2)
- 第12講 北朝鮮の政治・経済の基礎 (3)
- 第13講 北朝鮮の政治・経済の基礎 (4)
- 第14講 最終レポートのテーマ、設定理由、目次の発表①
- 第15講 最終レポートのテーマ、設定理由、目次の発表②

■フィードバックの要領

レポートのテーマと設定理由は、フィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、90%以上であること。

評価 A (89 ~ 80 点) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、89 ~ 80%であること。

評価 B (79 ~ 70 点) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、79 ~ 70%であること。

評価 C (69 ~ 60 点) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、69 ~ 60%であること。

評価 F (59 点以下) : 出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が 59%以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

①出席 (35%)、毎回提出の講義メモ (35%)、最終レポート (30%) の割合で評価する。②講義メモは、最低限の記述内容が記載されていない場合は、減点する。③最終レポート (30%) は、A4 用紙 3 枚以上とする。

■留意点

①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。③遅刻および途中退室は、厳禁とする。④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 キャリア・デザイン III (Career Design III)**サブタイトル** 社会の変化を知る・自己を知る・業界と企業を知る**担当教員** 初見 康行**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義の目的は、「社会の変化」、「自己理解」、「業界・企業の理解」を通して、将来のキャリア・デザインに役立てていくことです。本講義では、はじめに、社会の変化（長寿化・人口動態・労働市場・新卒採用市場・AI等による変化）について学んでいきます。次に、自分自身や業界・企業に対する理解を深めていきます。本講義を通して、上記3点に対する理解を深め、将来のキャリア・デザインに活かしていくことが、最終的な目的です。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解

■到達目標

(1) 社会の変化を理解すること、(2) 仕事に対する自分の価値観・姿勢を理解すること、(3) 業界・企業分析のフレームワークを習得し、自分自身で分析できること、(4) 分析結果を志望動機の作成や将来のキャリア・デザインに活かしていくこと

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会の変化に対する知識を獲得し、将来のキャリアに向けた適切な判断力を養っていく。業界・企業分析のフレームワークを学び、志望業界・企業の分析を行うことができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習：指定図書熟読、事前課題の実施(1.5時間) 復習：講義内容の振り返り、課題の提出(履歴書の提出を予定)

■授業の概要

第1講 キャリア・デザインⅢガイダンス& PROG テスト①

第2講 キャリア・デザインⅢガイダンス& PROG テスト②

第3講 社会の変化を知る①

第4講 社会の変化を知る②

第5講 社会の変化を知る③

第6講 社会の変化を知る④

第7講 社会の変化を知る⑤

第8講 社会の変化を知る⑥

第9講 社会の変化を知る⑦

第10講 PROG テスト③「解説会」

第11講 自己を知る

第12講 業界・企業分析①

第13講 業界・企業分析②

第14講 業界・企業分析③

第15講 キャリア・デザインⅢまとめ

■フィードバックの要領

提出されたレポートや履歴書等に対し、評価とコメントによるフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 出席 13 回以上、提出物について大変優れている場合

評価 A (89 ~ 80 点) : 出席 13 回以上、提出物について十分な到達度に達している場合

評価 B (79 ~ 70 点) : 出席 12 回以上、提出物について一定の到達度に達している場合

評価 C (69 ~ 60 点) : 出席 11 回以上、提出物について十分な到達度に達していない場合

評価 F (59 点以下) : 出席 10 回以下、提出物について期待される最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

①講義への出席(50%) ②履歴書などの提出物(40%) ③講義への積極的な参加(10%) ※詳細については講義内で説明を行う

■留意点

※2018年度以前の入学生は、認定科目となりますので、評価基準は授業内で教員が指示します。本科目は主に3年生を対象とした講義です。就職活動を控えた学生に対し、社会の変化、業界・企業分析の方法、またその結果を履歴書等につなげていくための技法を学んでいきます。将来のキャリア・デザインに向けて、学生みなさんの真摯な学修態度と意欲が望まれます。

科目名 キャリア・デザイン IV (Career Design IV)**サブタイトル** 就職活動準備の実践**担当教員** 初見 康行**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本学の理念の一つは、「すべての道はキャリアに通ず」である。就職し、就業し、職業を通して成長し、職業を通じて社会の問題解決に貢献する人材を育成する事であり、就職活動は、その中核にある。多摩大学の教育をこの理念に近づけるために本講義を設置する。すなわち、就職、就業に向けて、「①自己を知る」、「②産業社会を知る」、「③企業を知る」、「④何をすべきかを知り、実践する」ことがよりよく実践されるために必要な講義を行う。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解

■到達目標

(1) 就職活動に関する基本的な知識、方法を習得する。(2) 自己分析を行い、自分を理解する。(3) 自分と関心のある仕事、企業を結びつけ、社会に貢献する方法を身につける。(4) 効果的な自己アピールができるようになる。(5) 関心のある企業と結びつけて志をつくる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

自己分析、業界分析、自己PR、模擬面談などの演習を通じ、高い志をたてる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

履歴書等に収められていくべき「自己理解」「開発が必要なスキルへの認識」や、企業や産業に対する認識や見方を育成するための予習、復習を必要とする。必要な時間は、予習 1.5時間、復習 1.5時間。

■授業の概要

第1講 就職活動に関するプロのファシリテーションにより「就勝つ」必要な要素を学ぶ。

第2講 大学生の進路状況について

第3講 新卒採用市場の現状

第4講 業界・企業分析①

第5講 業界・企業分析②

第6講 自己PR・志望動機について①

第7講 自己PR・志望動機について②

第8講 自己PR・志望動機について③

第9講 自己PR・志望動機について④

第10講 履歴書について①

第11講 履歴書について②

第12講 面接について①

第13講 面接について②

第14講 本講義のまとめ①

第15講 本講義のまとめ②

■フィードバックの要領

ワークに対するコメントを講義中に個別に行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 出席 13回以上、提出物について大変優れている場合

評価 A (89～80点) : 出席 13回以上、提出物について十分な到達度に達している場合

評価 B (79～70点) : 出席 12回以上、提出物について一定の到達度に達している場合

評価 C (69～60点) : 出席 11回以上、提出物について十分な到達度に達していない場合

評価 F (59点以下) : 出席 10回以下、提出物について期待される最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

出席 (50%) 提出物 (40%) 講義に対する積極的な参加 (10%)

■留意点

※2018年度以前の入学生は、認定科目となりますので、評価基準は授業内で教員が指示します。授業全体のマイナスになると担当者が判断する場合には、他の学生の利益を確保するために、退出を命じることもあるので、くれぐれも留意されたい。全講義に出席し、自己PR、履歴書作成、修正など、予習・復習を徹底することが強く望まれる。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 業界研究 III (Industry Research III)**サブタイトル** 経営学・中小企業論 I**担当教員** 秋庭 淳志**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

現代は情報が溢れており、業界や企業に関する情報は容易に入手できるようになった。しかし、氾濫する情報を適切に処理するための知識や視点を有していなければ、業界研究に多くの時間を費やし、思うような成果を上げることは難しい。よって、本講義では業界・企業研究に必要な知識や視点を身につけるとともに、基本的な進め方を理解することが目的となる。なお、企業の中には知名度は高くないものの、独自性の高い商品・サービスを提供し、安定した経営基盤を築いている中小企業が多く存在する。本講義ではこの種の隠れた優良企業の事例を研究することにより、経営学に係る知見を得るとともに、中小企業の特徴を理解することも目的の一つとする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

(1) 業界・企業研究を行う上での基本的な進め方を理解している (2) 業界・企業を研究する際に必要な知識や着眼点を身につけており、業界の将来性などがある程度見通せるようになっている (3) 就職を希望する業界がある程度絞り込んでいる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

業界・企業研究を行う上で不可欠な知識や視点などを身につけることができ、就職を希望する業界についてある程度説明できるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

次週で取り上げる業界に関する情報を収集し業界の将来性やリスク要因についてまとめる。また、業界内で特徴的なビジネスモデルを有する企業の情報を収集する。(1.5時間)

■授業の概要

第1講 業界・企業研究の意義と進め方

第2講 中小企業と BtoB 企業 (法人向けのビジネスを行っている企業) の特徴について

第3講 業界・企業研究①

第4講 業界・企業研究②

第5講 業界・企業研究③

第6講 業界・企業研究④

第7講 業界・企業研究⑤

第8講 業界・企業研究⑥

第9講 業界・企業研究⑦

第10講 業界・企業研究⑧

第11講 業界・企業研究⑨

第12講 業界・企業研究⑩

第13講 業界・企業研究⑪

第14講 期末レポートのフィードバック

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

特徴的なレポートに対し、講義を通じてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を十分に理解しており、期末レポートが論理的な構成で表現力に長けている。

評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を十分に理解しており、期末レポートが論理的に構成されている。

評価 B (79 ~ 70 点) : 期末レポートの構成に多少の論理矛盾はあるが、講義内容は概ね理解している。

評価 C (69 ~ 60 点) : 期末レポートの構成・表現に工夫が必要だが、講義内容は一定程度理解している。

評価 F (59 点以下) : 講義内容の理解が十分ではない。

■評価方法

出席 (60%)、期末レポート (40%)

■留意点

科目名 業界研究Ⅳ (Industry ResearchⅣ)**サブタイトル** 経営学・中小企業論Ⅱ**担当教員** 秋庭 淳志**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

近年は人手不足が深刻化しており、売り手市場との見方が強い状況にある。しかし、外部環境の不確実性が増しているのも事実であるため、業界だけでなく企業を分析するためのスキルと思考力も身につけなければ、今後の方向性を見出すのは難しい。よって、本講義では業界・企業研究に必要な分析力や思考力を身につけることが目的となる。なお、企業の中には知名度は高いものの、独自性の高い商品・サービスを提供し、安定した経営基盤を築いている中小企業が多く存在する。本講義ではこの種の隠れた優良企業の事例を研究することにより、経営学に係る知見を得るとともに、中小企業の特徴を理解することも目的の一つとする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成

■到達目標

(1) 業界・企業に必要な分析力と思考力を身につけており、業界の将来性等を見通せるようになっている (2) 就職を希望する業界が明確になっており、希望する理由を明快に説明できる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

業界・企業研究を行う上で不可欠な分析力と思考力を身につけることができ、就職を希望する業界について説明できるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

次週で取り上げる業界に関する情報を収集し、業界の将来性やリスク要因について分析する。また、業界内で特徴的なビジネスモデルを有する企業を調査する。(1.5時間)

■授業の概要

第1講 業界・企業研究の意義と進め方

第2講 中小企業とBtoB企業(法人向けのビジネスを行っている企業)の特徴について

第3講 業界・企業研究①

第4講 業界・企業研究②

第5講 業界・企業研究③

第6講 業界・企業研究④

第7講 業界・企業研究⑤

第8講 業界・企業研究⑥

第9講 業界・企業研究⑦

第10講 業界・企業研究⑧

第11講 業界・企業研究⑨

第12講 業界・企業研究⑩

第13講 業界・企業研究⑪

第14講 期末レポートのフィードバック

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

特徴的なレポートに対し、講義を通じてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 講義内容を十分に理解しており、期末レポートが論理的な構成で表現力に長けている。

評価 A (89～80点) : 講義内容を十分に理解しており、期末レポートが論理的に構成されている。

評価 B (79～70点) : 期末レポートの構成に多少の論理矛盾はあるが、講義内容は概ね理解している。

評価 C (69～60点) : 期末レポートの構成・表現に工夫が必要だが、講義内容は一定程度理解している。

評価 F (59点以下) : 講義内容の理解が十分ではない。

■評価方法

出席(60%)、期末レポート(40%)

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営組織 (Management Organization)**サブタイトル** 組織理論の理解と実践**担当教員** 小林 英夫**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

企業は最も重要な経営資源である人を一つの組織としてまとめあげ、直面する内外の課題を解決し、成果をあげ続けることを目指す存在である。時代とともに変貌する組織のあり方、組織を構成する人的資源を最大に発揮する方法などを考える科目である。この問題に対してこれまでの学術的成果を踏まえ理論的側面からの検討を行うとともに、理論を実務に適用する際の考慮点を学び、実践的行動ができる能力を獲得する。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標

①組織とは何で企業組織はどのように運営されているのかを理解し説明できる、②組織の主要構成要素である人的資源が組織の中でどのように活かされているのかを理解し説明できる、③自らが組織を通じてキャリアを築き産業社会へ貢献するイメージを描くことができる、の3点を到達目標とする。これらを通じ、社会に貢献していくための知識や意欲、および組織の中で役割分担により組織目標の達成に貢献する力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

組織理論を体系的に学び理論を用いて実務的な問題解決方法を考えることができるとともに、組織的課題への対処を事例から学び、思考力や判断力、状況対応力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(ミニッツペーパー)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする(1.5時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する(1.5時間)。

■授業の概要

第1講 イントロダクション

第2講 モチベーション

第3講 古典的管理論

第4講 新古典派組織論

第5講 近代組織論

第6講 行動科学的管理論

第7講 事例からの組織理論体系の確認 1

第8講 事例からの組織理論体系の確認 2

第9講 組織構造と分類

第10講 リーダーシップ

第11講 企業理念と組織文化

第12講 組織社会化

第13講 組織とキャリア

第14講 キャリアマネジメント

第15講 学習成果の確認ー授業内期末試験

■フィードバックの要領

毎回提出のコメントシートの講評と質問・意見への回答・コメントを翌回講義で行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 授業貢献点と期末試験の合計が 90点以上

評価 A (89～80点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 80点以上 90点未満

評価 B (79～70点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 70点以上 80点未満

評価 C (69～60点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 60点以上 70点未満

評価 F (59点以下) : 授業貢献点と期末試験の合計が 60点未満

■評価方法

授業貢献点 (59%)、期末試験 (41%)。授業貢献点は出席点ではなく、授業を聴き自ら考えたかを評価する。期末試験は、経営組織の知識、組織理論の理解、組織を通じた自らのキャリア形成への理解を評価する。

■留意点

授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてコメントシートの提出を求め、その内容をA(授業を聴き良い気づきがあった)、B(授業を聴いていた)、C(授業を聴いていたとは思わない)の3段階評価し授業貢献点とする。Aは加点对象(6点)、Bが標準(4点)、Cは減点(-4点)、欠席は0点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大59点。

科目名 経営と意思決定 (Decision Making for Management Sciences)**サブタイトル** 量的意思決定支援の方法**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

経営では、競争があり、そこではさまざまな問題解決のためには戦略的なアプローチが必要である。それは、これらがリスク下での意思決定問題として表現できることからわかる。本講義では、さまざまな状況下で適切に判断できる能力や技法などの意思決定の基礎について合理的な解決に活用しうる数理的方法及び統計的方法について実例を交えながら学ぶ。いくつかの課題については、グループ課題として行う。1. 意思決定とは、2. 確実性のもとでの意思決定、3. 不確実性のもとでの意思決定、4. ベイズ意思決定。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

意思決定に関して次の項目について講義する。1. 意思決定とは、2. 確実性のもとでの意思決定、3. 不確実性のもとでの意思決定、4. ベイズ意思決定。特に次の習得を目標とする。(1) AHP 法について理解している、(2) Decision Tree について理解している、(3) ベイズ意思決定について理解している。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

DP2: 思考と判断 意思決定に関して、その問題や課題での状況と目的に応じてモデル化できる能力を修得する。また、意思決定をわかりやすく伝え、相手の意見をもとによりよい意思決定を実践できるようになる。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義での課題を次回の演習時間に提出することを想定している。課題を解くには、1時間程度、レポートとしてまとめるのに0.5時間ほど必要と考えられるので十分余裕をもっておくこと。

■授業の概要

第1講 意思決定を考える：何故定量的な意思決定が必要かについて講義する

第2講 確実性のもとでの意思決定

第3講 確実性のもとでの意思決定 機会費用とサンクコスト

第4講 確実性のもとでの意思決定 代替案の選択Ⅰ 選択基準

第5講 確実性のもとでの意思決定 演習

第6講 選択基準 (効用を評価する)

第7講 選択基準 期待値

第8講 多属性意思決定 AHP

第9講 多属性意思決定 AHP 演習Ⅰ

第10講 多属性意思決定 AHP 演習Ⅱ

第11講 不確実性のもとでの意思決定 デジションツリーⅠ

第12講 不確実性のもとでの意思決定 デジションツリーⅡ

第13講 デジションツリーとベイズ意思決定Ⅰ

第14講 デジションツリーとベイズ意思決定Ⅱ

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

講義をもとに提出されたリフレクションシートをもとに行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 学習した方法を理解して、問題解決に適用し提案できるか。

評価 A (89 ~ 80 点) : 学習した方法を理解して、問題解決に適用できるか。

評価 B (79 ~ 70 点) : 学習した手法のうち、すくなくとも2つの手法について問題解決に適用できるか。

評価 C (69 ~ 60 点) : 学習した手法のうち、1つの手法について問題解決に適用できるか。

評価 F (59 点以下) : 学習した手法について、理解不十分で問題解決に適用できない。

■評価方法

出席 20%、講義内レポート 40%、最終課題 40%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営とセキュリティ (Management and Security)**サブタイトル** 情報化社会に対応する企業活動の変化と必要とされる情報セキュリティ**担当教員** 諸橋 正幸**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

インターネット技術の急速な発展に伴い、企業や組織においてもインターネットを前提とした情報収集・利用やそれに基づくサービス提供が当たり前となっている。また、サービスを受ける側の情報リテラシーも十分な態勢にあることを前提とした情報化社会への変化が急速に進みつつある。そうした変化に対応するために必要な考え方やそれに対応する技術として、情報セキュリティが注目され、情報セキュリティ技術者の重要性が高まっている。本講義では、情報化社会の現在と今後の方向性を理解した上で、情報セキュリティ技術の重要性を認識し、それに対応できる情報セキュリティプロフェッショナルとしての知識を習得する。これにより、情報セキュリティに関連する問題を解決する能力を身に付けることを目標とする。

■講義分類

ビジネスICT、社会人力育成

■到達目標

(1) 情報化社会の現在と未来を理解している (2) 情報セキュリティの重要性を説明できる (3) 情報セキュリティへの脅威を認識し、対策をとることができる 関連する資格：情報セキュリティスペシャリスト、情報セキュリティ管理士

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

新しい技術や人工知能技術を如何に企業活動に取り入れ、我々の生活を豊かにできるかを考える。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

各講義の事前、事後学習ポイントに記載されたキーワードをあらかじめ調べてまとめる。また、講義中に話した内容に基づいて、まとめを加筆・修正し、授業終了後に提出する。設定課題の準備には1.5時間を想定。

■授業の概要

- 第1講 インターネットを中心とした情報の流れ-1
- 第2講 インターネットを中心とした情報の流れ-2
- 第3講 情報システム概論
- 第4講 従来型情報システム
- 第5講 インターネット独自の情報システム
- 第6講 データマイニングとビッグデータ
- 第7講 政府の取組
- 第8講 情報化社会で変わる生活-1
- 第9講 情報化社会で変わる生活-2(勤務形態)
- 第10講 情報化社会で変わる生活-3(グループワーク)
- 第11講 情報化社会で変わる生活-4(発表資料の作成と提出)
- 第12講 情報社会における安全の確保-1
- 第13講 情報社会における安全の確保-2
- 第14講 安全を確保するための情報技術
- 第15講 セキュリティ管理

■フィードバックの要領

T/Fテストや成績評価がフィードバックになる。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 講義内容を十分に理解し、身につけている。
 評価 A (89～80点) : 講義内容を理解し、身につけている。
 評価 B (79～70点) : 講義内容をある程度理解している。
 評価 C (69～60点) : 講義内容をなんとか理解できている段階にある。
 評価 F (59点以下) : 十分な知識がない。出席していない。試験を受けていない。

■評価方法

試験 60% グループワークおよび平常点 40%

■留意点

就活等の理由により出席できなかった学生は、その回の配布資料に記述されている内容に関して調べたことをまとめてレポートの形で提出することで出席扱いにする(教員の側からのコメントを付けて返却する)。ただし、内容が不十分であるときには、再提出させることもありうる。(病欠等についても同様の扱いをする)

科目名 経済統計学 (Economic Statistics)**サブタイトル** 経済統計学 (Economic Statistics)**担当教員** 下井 直毅**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

産業社会を分析する上では多種多様な問題が提起される。経済成長の見通しはどうか、中高年層の雇用の予想はどうか、為替相場の動向はどう予想されるのか、等々である。こうした問題について経済理論はもちろん必要だが、経済統計データもあわせてみる必要がある。この講義では、日本経済の現状および日本経済が抱える課題について学び、最前線事例を紹介しつつ、その際に必要なデータについての基礎知識を身につけることを目的としている。

■講義分類

ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

日本経済の現状と課題についての基本的な知識や経済データに関する必要な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ●Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5時間以上の取組が必要です。

■授業の概要

- 第1講 日本経済の全体像—日本経済の全体像を把握する
- 第2講 戦後日本の経済成長—戦後日本の経済成長の推移を理解する
- 第3講 景気循環の姿とそのとらえ方—景気循環について理解する
- 第4講 ストックから見た日本経済—ストック面から日本経済を概観する
- 第5講 雇用の変動と日本型雇用慣行の行方—雇用環境について理解する
- 第6講 企業行動と日本型企業経営の行方—日本の企業行動について理解する
- 第7講 産業構造の変化と将来—産業構造の変化や将来のリーディング産業について考える
- 第8講 物価の変動とデフレ問題—物価の変動とデフレの問題について理解する
- 第9講 円レートの変動と日本経済—為替相場の変動や日本経済に及ぼす影響について理解する
- 第10講 貿易と国際収支の姿—貿易と国際収支の姿を概観する
- 第11講 直接投資と空洞化をめぐる議論—直接投資と空洞化をめぐる議論を概観する
- 第12講 財政をめぐる諸問題—財政をめぐる諸問題について考える
- 第13講 経済再生の鍵を握る金融—経済再生の鍵を握る金融について考える
- 第14講 講義前半の復習
- 第15講 講義後半の復習

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 100点満点中 90点以上
- 評価 A (89～80点) : 100点満点中 80点以上 89点以下
- 評価 B (79～70点) : 100点満点中 70点以上 79点以下
- 評価 C (69～60点) : 100点満点中 60点以上 69点以下
- 評価 F (59点以下) : 100点満点中 59点以下

■評価方法

出席点あるいは授業の平常点(30%)、試験(70%)。合計100%で100点満点。

■留意点

- ①出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。
- ②試験に対してフィードバックを行う。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 現代メディア論 (Contemporary Media Studies)

サブタイトル メディアを読む、世界を読む

担当教員 中澤 弥

対象学年 3年生以上

区分 春学期

■講義目的

メディアは変化の時代を迎えている。現代社会を生きるためには、情報を読み解き、判断していく力が求められている。そのためには、情報の受け手として、メディアを批判的にとらえていく必要がある。その出発点は、それぞれのメディアの成り立ちを知り、その成長の跡をたどることである。その上立って未来のメディアのありようを想像し、さらにはSNSなど新しいメディアに対処していく知見を得なくてはならない。

■講義分類

社会人育成、ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

現在のメディア状況を理解し、深い問題意識を持つことができる。問題発見能力、問題解決能力を身に付け、自分の言葉で語るができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

大量の情報のなかから正しい情報を選び取り、読み解く思考力を鍛え、自らの判断と決断でビジネスや暮らしに活かしていく力、メディアとのかかわりが不可欠な現代社会における生きる力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎回の予習課題には最低限1.5時間程度の学習が不可欠となる。さらに教室で学んだ事柄について知見を広げ、問題意識を深めるための復習として1.5～2時間程度の学習を課す。

■授業の概要

- 第1講 現代メディアの風景—活字からデジタルへ
- 第2講 新聞のむかしと今
- 第3講 新聞をいかに活用するか。
- 第4講 スポーツメディア1—スポーツとメディア
- 第5講 スポーツメディア2—スポーツと創作
- 第6講 スポーツメディア3—スポーツの産業化、イベント化
- 第7講 メディアとプロパガンダ1
- 第8講 メディアとプロパガンダ2
- 第9講 映像の時代1—映画の誕生と進化
- 第10講 映像の時代2—映像と環境
- 第11講 映像の時代3—受容者から発信者へ
- 第12講 ゲームメディアの未来
- 第13講 デジタル・メディアの展望
- 第14講 歴史意識とメディアリテラシー
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

ミニ・レポートの内容についてコメント、疑問点などへの回答を行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 講義による知見をもとに、メディアについてオリジナリティーに富む考えを提示できる。
 評価 A (89～80点) : レポートから自分の視点、発想で考ようとする努力がうかがえる。
 評価 B (79～70点) : 講義を真摯に聴講し、知見の獲得に努力したことがうかがえる水準に達してる。
 評価 C (69～60点) : 最低限の知見の獲得努力はうかがえるが、それを表現する水準に到達できていない。
 評価 F (59点以下) : レポート不提出をはじめ、講義による知見獲得への真摯さと努力がうかがえない。

■評価方法

学期末の課題レポート : 40%、それぞれのテーマに対するミニレポート : 40%、講義における発言など 20%

■留意点

科目名 国際公共政策 (International public policy)**サブタイトル** 地球規模の諸課題と、新しいグローバルな公共政策**担当教員** 椎木 哲太郎**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」(宮沢賢治『農民芸術概論綱要』) というのは少し極端としても、我々の生活が地球社会全体の在りようと密接に関連していることは、紛れもない。国際公共政策とは、平和、安全保障、開発、人権、基本的自由といった国際的共通価値、「国際公益」を実現するための政策の総称[高阪章編(2008)『国際公共政策学入門』大阪大学出版会 p.1]である。本講座は2014年度まで開講されてきた「社会経済政策」を引き継ぎ、幅広く先端研究を援用してグローバルな視点からの「総合政策論」的發展を企図している。「ポスト産業社会」を生きる市民の生活の質を高めていくためにも、成熟した「持続可能な社会」につながる体系的な公共政策が不可欠である。国際機関、政府、NGO、企業等が協力し合い新たな制度、政策を創出して社会問題の解決に取り組んでいく試みに、多少なりとも参加していきたいものである。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

先進国、途上国双方を視野に入れた幅広い国際公共政策、社会経済政策を学ぶことによって、成熟した「持続可能な社会」を実現するための総合的な視座、政策論的問題解決技法を身に付け、高い志を持って地球市民、主権者たる日本国民として連帯し、積極的にグローバルな行動ができるようになる。企業で働く際にも、国際ルールを遵守し、よき企業市民、グローバル人材として、問題解決、社会の発展に貢献することが容易となる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

成熟した「持続可能な社会」を実現するための(価値を含めた)総合的な視座、(プロセスを明確にした)政策論的問題解決技法、(よりよいビジネスのための)新たな国際公共財創出につながる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●ワークシート ●その他(双方向授業・小テストの実施と解説)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

初回講義時に配布する講義計画に従って、毎週1.3時間を目標に必ず予習してくること。課題の小テスト(復習)は、それぞれ約30分を使って次の講義までに必ず仕上げてください。

■授業の概要

- 第1講 国際公共政策と社会経済政策
- 第2講 経済と社会
- 第3講 経済成長と生活の質、幸福度
- 第4講 経済成長政策
- 第5講 貿易・通商政策
- 第6講 労働政策
- 第7講 社会保障政策
- 第8講 国際協力、人間の安全保障
- 第9講 NGOとCSO
- 第10講 国際公共財・国際課税・責任投資原則
- 第11講 国際通貨制度とブルデンス政策
- 第12講 開発援助政策
- 第13講 少子化対策と教育文化政策
- 第14講 地球環境政策
- 第15講 国際公共政策：総括

■フィードバックの要領

小テストを採点して返却する。最終レポート完成に向けた指導を随時行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 試験の成績、通常の見組みとともに顕著に優れている

評価 A (89～80点) : 試験の成績、通常の見組みともに優れている

評価 B (79～70点) : 試験の成績、通常の見組みともに良い

評価 C (69～60点) : 試験の成績、通常の見組みともに普通

評価 F (59点以下) : 試験の成績、通常の見組みともに不十分

■評価方法

期末試験 [または最終レポート] の結果 (70%)、小テスト・レポート・出席 (30%)

■留意点

①本講座は連続性を重視した積み重ね型の講義であり、最初に重要な点を概説する。これらの理解なくしてその後の学習は困難である。②長期的に取り組んで頂くための課題を提示する可能性がある。したがって、第3回目までに全く出席しなかった者は原則として履修を許可しない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 コンピュータネットワーク活用 (Utilization of Computer Network)**サブタイトル** インターネットの仕組みを理解し活用する**担当教員** 中村 有一**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

ネットワーク技術は、いま世の中でもっとも必要とされる技術の1つである。単に概念を理解するだけでなく、具体的にネットワークにコンピュータを接続し、システムとして機能するようにしなければならない。さらに安定してネットワークを利用するには、セキュリティや信頼性の面にも配慮しておく必要がある。これらのことを、1つ1つ意味を理解しながらできるようにしていくのがこの講義の目的である。受講にあたっては、基本的な用語とその概念を理解し、実習を通して、具体的なネットワーク構築に必要な知識を習得する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

現在主流として使われているネットワーク技術 TCP/IP の基礎的な仕組みを理解し、実際にネットワークを利用したり、トラブルに対処したりできるように、知識とスキルを身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

コンピュータネットワークの基礎的な用語を理解し、実際に活用するために演習を通して経験を深める。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5時間) 復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5時間)

■授業の概要

第1講 ネットワークとプロトコルの話

第2講 物理層の話

第3講 無線ネットワークとデータリンク層の話

第4講 インターネット層の話 (1)：IP アドレス、2進数や16進数

第5講 インターネット層の話 (2)：CIDR とネットワークの分割

第6講 インターネット層の話 (3)：インターネット層における補完的なプロトコル

第7講 トランスポート層の話：TCP と UDP の違い、ポート番号

第8講 ドメイン名と DNS の話：アプリケーション層、ホスト名・ドメイン名、DNS

第9講 DHCP と文字端末の話：DHCP、TELNET、SSH

第10講 ウェブとファイル転送の話：FTP、HTTP

第11講 電子メールとネットワーク管理の話：SMTP、POP、IMAP、SNMP、NTP

第12講 ルーティングとアドレス変換の話：ルーティングプロトコル、アドレス変換

第13講 インターネットセキュリティの話：プロキシサーバ、ファイアウォール

第14講 パケットキャプチャの話：パケットキャプチャツール

第15講 暗号と認証の話：公開鍵暗号の基本的な仕組み

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：ほぼ完璧な理解度と評価

評価 A (89～80点)：上位の評価

評価 B (79～70点)：中位の評価

評価 C (69～60点)：下位の評価

評価 F (59点以下)：不十分な理解度と評価

■評価方法

学期末試験 70% レポートなど平常点 30%

■留意点

コンピュータを使った演習については、自分で必ず実際に動かしてみることに。単に本を読むだけでは得られない知識が得られるはずである。

科目名 サービス産業論 (Service Industry)**サブタイトル** サービスの市場創造とマネジメント**担当教員** 杉田 文章**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

「サービス」のプロダクトとしての本質を理解するとともに、狭義の「サービス」製品のみならず、サービス化したといわれるあらゆる産業分野におけるサービスの側面にも着目し、「サービス」産業経済の成長に資する知見を身につける。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

① 産業経済におけるサービス産業の必要性と有効性について理解していること。② プロダクトとしてのサービスの概念について深く理解すること。③ ①②をふまえて、サービス産業のマネジメントの課題を知り、これを解決する方法論を論じることができること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

サービス産業分野が、国際競争力の確保の上からも、国内市場の成長の観点からも重要な課題であることを深く理解した上で、今後のサービス市場分野の発展に対する知見を説明できる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (例えばカスタマーハラスメントに対する疑似的な対応にトライする)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

提示されたテキスト、参考書を中心に、講義内容に即した予習と、講義後に示された課題を講義ごとに行うこと。(1回につき合計1.5時間程度以上)

■授業の概要

- 第1講 本講義の概要、目的、意味を理解する(ガイダンス)
- 第2講 製品 (product) としての「サービス」について学ぶ①
- 第3講 社会の「サービス化」と産業の「サービス化」
- 第4講 製品 (product) としての「サービス」について学ぶ②
- 第5講 サービスと「おもてなし」～グローバル市場における日本文化と産業のマッチング～
- 第6講 分野別サービスマーケティングマネジメント① レジャー産業におけるサービス
- 第7講 分野別サービスマーケティングマネジメント② フードサービス
- 第8講 分野別サービスマーケティングマネジメント③ 医療福祉
- 第9講 分野別サービスマーケティングマネジメント④ (広義の) 教育
- 第10講 サービス製品市場のマーケティング
- 第11講 サービス産業のイノベーション
- 第12講 サービスの品質管理と品質向上マネジメント
- 第13講 サービス価値向上のためのSPCを学ぶ
- 第14講 サービス産業・企業の躍進のために。サービス産業拡大の方程式
- 第15講 まとめと振り返り

■フィードバックの要領

講義時に提出するミニレポート等に対して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : サービス市場を深く理解し、問題解決を提案できる
- 評価 A (89～80点) : サービス産業や市場、製品について深く理解している
- 評価 B (79～70点) : サービス産業や市場、製品について一定の理解をしている
- 評価 C (69～60点) : サービス業と製造業の違いやそれぞれの特徴について説明できる
- 評価 F (59点以下) : 「サービス産業」「サービス製品」について説明できない

■評価方法

出席および講義内で課されるミニレポート3割、最終レポート3割、講義内試験4割の割合で評価する。

■留意点

サービス業に従事しようと考えている学生を想定し、そのキャリア形成に資することを意図して講義を行う予定です。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 事業デザイン論 I (Business Design Theory I)**サブタイトル** 事業開発 (business creation) の方法論**担当教員** 松本 祐一**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

企業、行政、NPO等、様々な組織が行う営みを、「事業」という同じ枠組みでとらえ、その歴史や特徴を理解し、自分で事業をデザインするための方法論を学ぶ。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

具体的な事業開発の方法を習得し、自分でプランを構想することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

最低1.5時間以上のビジネスプランを立案するための情報収集等。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 「事業」とは何か?①
- 第3講 「事業」とは何か?②
- 第4講 「事業開発」のメカニズム
- 第5講 「事業開発」の枠組み①
- 第6講 「事業開発」の枠組み②
- 第7講 環境：どうなるべきか?①
- 第8講 環境：どうなるべきか?②
- 第9講 使命：どうなりたいか?
- 第10講 能力：どうなれるか?
- 第11講 価値：コンセプト
- 第12講 仕組み：どうやるか?
- 第13講 プロトタイピング①
- 第14講 プロトタイピング②
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

各授業において、各グループのアウトプットに対する評価・アドバイスを実施する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : すべての授業に出席。自分でビジネスプランを組み立てられて、独自性がある。

評価 A (89～80点) : 9割以上出席し、自分でビジネスプランを組み立てることができる。

評価 B (79～70点) : 8割以上出席し、ビジネスプランももれなく作成できる。

評価 C (69～60点) : 6割以上出席し、要求されていることにある程度答えられている。

評価 F (59点以下) : 5割以下の出席率で、要求されていることに答えられていない。

■評価方法

授業中提出のワークシート40%、中間レポート20%、最終レポート40%

■留意点

履修生を3～5人のグループに分けて、ビジネスプランを企画するアクティブラーニング形式の演習的な講義となります。履修希望者はかならず第1回、第2回を受講してください。

科目名 事業デザイン論 II (Business Design Theory II)**サブタイトル** 「地域プロジェクト」最新事情**担当教員** 長島 剛**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

地域では企業やNPO、自治体等が様々なプロジェクトを行っている。その最新事情から、現場感覚を養うと同時に、事業デザインの重要性を体感する。レポート（戦略の構図やビジネスモデル・キャンパス等）やディスカッション、プレゼンを通じて事業デザインへの理解を深める。

■講義分類

地域ビジネス、社会人力養成、ビジネス環境理解

■到達目標

①プロジェクトの事例から要素を見出して、レポート（戦略の構図やビジネスモデル・キャンパス等）にまとめ、他者に説明できるようになること。②事例を模倣して、自分で事業アイデアを構想すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

様々な事例から学び、いま各プロジェクトの主体が直面している課題解決の現状を理解し、課題に対処できる専門的能力の修得のきっかけにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ●T/Fテスト ●問題作成 ○その他 ○()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

学習ポイントにあげたキーワード及び第一講目に発表する企業等について、ネットや文献を通じて、研究しておくこと。(2時間)

■授業の概要

第1講 オリエンテーション

第2講 事業デザインとは

第3講 事例) 地域企業①

第4講 事例) 地域企業②

第5講 事例) 地域企業③

第6講 事例) 地域企業④

第7講 事例) コミュニティビジネス①

第8講 事例) コミュニティビジネス②

第9講 事例) コミュニティビジネス③

第10講 事例) コミュニティビジネス④

第11講 事例) 自治体等支援機関①

第12講 事例) 自治体等支援機関②

第13講 事例) 自治体等支援機関③

第14講 事例) 自治体等支援機関④

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたレポートに対し講義内で特徴的なものや疑問点などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 様々な事例を学び、事業デザインの重要性を理解し、自分の事業アイデアを立案できる。

評価 A (89～80点) : 様々な事例を学び、事業デザインのツールを深く理解している。

評価 B (79～70点) : 様々な事例を学び、事業デザインのツールについて一定の理解をしている。

評価 C (69～60点) : 一部不十分な点はあるものの、事業デザインのツールについて理解している。

評価 F (59点以下) : 事業デザインのツールについて理解していない。

■評価方法

出席 30%、授業で行うレポート（到達目標①）40%、最終レポート（到達目標②）30%

■留意点

現場のヒアリングを行いながら講義を作る予定（第一講目に発表）。ヒアリングへの同席も検討する。積極的な対応を期待する。授業の内容はヒアリングの進捗状況により変更の可能性がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報工学概論 (Information Engineering)**サブタイトル** 情報技術と情報社会**担当教員** 中村 有一**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

20世紀後半からコンピュータや通信の技術が急速に発達し、情報技術が社会や産業に大きなインパクトを与えるようになってきた。さらに21世紀になって、それまで予測されていたことがほぼ現実のものとなり、本格的な情報社会が到来した。これに伴って、これまでの工業社会とは異なる考えかたやモラルが必要とされる時代となった。また個人の生活の中にもパソコンなどの情報機器が普及し、それらの原理や役割を正しく把握し、うまく利用することが求められるようになってきた。この講義の目的は、現代の情報社会で必要とされる知識やモラルを身につけ、情報産業などの分野で活躍できる基礎をつくることである。また、本講義によって情報通信の分野に、より興味をもってもらい、将来の就職にも参考になるようにしたい。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

情報技術の概略を理解すること。情報化にともなう社会変化、産業構造の変化など、大きな流れを把握した上で、さまざまな課題を自分の頭で考えられるような能力を身につける。また情報社会で生きていくうえで必要なモラルについても習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

情報技術と情報社会の分野で、広く重要な用語を理解し、新たな知識を身につけるための基礎とする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5時間) 復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 情報とは？：情報とは何か、さまざまな視点から考察する。
 第2講 ハードウェア：マイクロな仕組みとマクロな設計思想について学ぶ。
 第3講 ソフトウェアの基礎：OSの仕組みと代表的なアプリケーションソフト。
 第4講 ワードプロセッサ：仕組みと役割、関連する用語について取り上げる。
 第5講 表計算ソフト：仕組み、使い方、MOS試験対策。
 第6講 データベース：データベースの仕組み、役割などについて話す。
 第7講 ネットワーク技術の基礎：インターネット、携帯電話。
 第8講 インターネット：インターネットとは何か？さまざまな視点から考察する。
 第9講 情報化と社会生活の変化：通信手段の発達史、社会変化と問題点。
 第10講 情報産業の発展：産業構造の変化、新しい情報産業の発展。
 第11講 情報産業と政策：通信放送分野の自由化・規制緩和について考える。
 第12講 情報社会におけるモラル：情報化によって新しいモラルの考え方が必要になった。
 第13講 暗号と認証の話：情報社会の基盤として公開鍵暗号の仕組みを理解する。
 第14講 人工知能の話：トピック的に人工知能の技術を展望する。
 第15講 ロボットの話：その現状と問題点を考察する。

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：ほぼ完ぺきな理解度と評価

評価 A (89～80点)：上位の評価

評価 B (79～70点)：中位の評価

評価 C (69～60点)：下位の評価

評価 F (59点以下)：不十分な理解度と評価

■評価方法

学期末試験 70% レポートなど平常点 30%

■留意点

①スライドの資料は、概略を示したもので、これだけを読んでも理解できないだろう。復習するときに、内容を整理するために使う。②授業中に適宜紹介する参考文献を読むことにより、授業内容をより深く理解できるようにすることが望ましい。

科目名 情報と職業 (Information and Profession)**サブタイトル** 情報社会における職業人に求められる勤労観と職業倫理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義は、情報と職業についての関わり、情報に関する職業人（情報処理技術者、ネットワーク技術者など）の役割と責任について理解することを目的とする。現代の社会において、IT（情報技術）は必要不可欠な存在である。情報技術の進展によって生まれた産業の特徴や情報システムが一般社会生活のなかでどのように使われているかなど、情報技術の現状を把握するとともに、私たちの生活や既存の産業が受けた情報化の影響などについても学習する。また、情報システムを構築し運用する上で、情報処理技術者やネットワーク技術者が果たすべき役割や責任について理解し、情報技術の専門家に求められる勤労観や職業観を身につけることも目的のひとつである。さらに本講義によって、将来、情報に関する職業人を目指す高校生に対して、適切な教育指導が出来るようになることを目指す。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成

■到達目標

情報技術が産業社会や人々の生活に対して及ぼした影響を理解し、情報技術の専門家に求められる倫理観や職業観を身につけることをめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

情報と職業の関わり、情報化の影響、情報に関わる職業人の役割と責任について理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各 1.5時間程度（合計 3時間程度）である。

■授業の概要

- 第1講 情報社会までの歴史的変遷
- 第2講 戦後の産業構造の変化
- 第3講 情報社会における職業観
- 第4講 情報社会と職業教育
- 第5講 情報産業における職業教育と資格
- 第6講 情報産業の誕生と発展
- 第7講 情報産業の実像
- 第8講 企業における情報化
- 第9講 情報技術と犯罪（暗号化技術など）
- 第10講 情報技術とリスクマネジメント
- 第11講 リスクマネジメントの背景
- 第12講 リスクマネジメントとCSR
- 第13講 CSRと企業の取り組み
- 第14講 職業人として必要な倫理観
- 第15講 職業人として必要な倫理観

■フィードバックの要領

最終講義で全体に対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 下記 4 観点を関連づけ、自分の考察を含めてそれらの内容を的確に説明できる。

評価 A (89 ~ 80点) : 下記 4 観点を個別に、自分の考察を含めてそれらの内容を説明できる。

評価 B (79 ~ 70点) : 下記 4 観点について、いずれか 2 つ以上の内容を説明できる。

評価 C (69 ~ 60点) : 下記 4 観点について、いずれか 1 つ以上の内容を説明できる。

評価 F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末試験 45%、レポートや課題 40%、出席状況 15%に参加態度を加味。次の 4 点を中心に評価する。1: 産業社会の変遷、2: 人々の勤労観や職業観、3: 情報産業の特徴や技術動向、4: 職業人としての役割や責任、倫理観

■留意点

状況によって、講義内容や扱う回の入替えを行う場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報ネットワーク (Networking System)**サブタイトル** information network**担当教員** 増田 浩通**対象学年** 3 年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

情報ネットワークの概念と役割、基礎技術、インターネットの概要について学ぶ。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

ビジネスパスポート試験の問題を解くことができるレベルに到達することを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的なネットワークの知識を身に着けることが出来る。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

この授業の資料はパワーポイント形式で T-NEXT 上にアップロードします。各自予習 1.5 時間以上、授業後パワーポイント資料を見ながら、復習に 1.5 時間以上費やしてください。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 情報化時代のルールとマナー
- 第3講 通信ネットワークとは
- 第4講 情報通信ネットワークの基礎知識
- 第5講 情報格差について
- 第6講 コンピュータの原理
- 第7講 個人情報保護
- 第8講 中間レポートの作成
- 第9講 画像圧縮
- 第10講 通信技術の概要
- 第11講 ネットワークの接続形態と OSI 参照モデル
- 第12講 情報ネットワークの使い方
- 第13講 インターネットの仕組み
- 第14講 ネットワークセキュリティ
- 第15講 期末レポート

■フィードバックの要領

課題や試験等に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が 90 点以上の場合。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が 89 ~ 80 点の場合。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が 79 ~ 70 点の場合。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が 69 ~ 60 点の場合。
 評価 F (59 点以下) : 中間レポートおよび期末レポートの両方の提出がないと評価は F とする。

■評価方法

毎週配布する課題 50%、中間レポート 25%、期末レポート 25%

■留意点

科目名 人材マネジメント論 (Human Resources Management Theory)**サブタイトル** 人材のマネジメント、人事管理**担当教員** 西村 知晃**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

人材という貴重な資源を企業はどのようにマネジメントしているのか、基礎的知識を体系的に把握する授業である。もちろん、それぞれの人材マネジメントには、論理的な背景や歴史、法律への対応などが存在するため、そこをしっかりと理解する。企業側のマネジメント動向を把握することで、働く上での自分自身の身の振り方や思考・判断のための学びとしてほしい。

■講義分類

ビジネスマネジメント、ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

学生の皆さんが就職活動時や入社後に、企業の人事施策・方針を捉えることができるようになるとともに、人事パーソンを目指す人にも、人事職の役割や基本原理が理解できるようになることを到達目標とする。起業をする場合にも、従業員のマネジメントにおいてもそのようなポイントを大切にすべきか、その視点を獲得してほしい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

企業の人材マネジメントに関する基礎的な知識と様々な問題への対応を理解する。その理解を通じて、働く上での思考力や判断力、状況対応力を育む。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(授業内での復習ワークシート)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (VTR学習)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする(1.5時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する(1.5時間)。

■授業の概要

第1講 イントロダクション：人的資源管理の概要

第2講 雇用Ⅰ(会社づくりゲーム)

第3講 雇用Ⅱ

第4講 雇用Ⅲ(VTR学習①)

第5講 報酬と人事制度Ⅰ

第6講 報酬と人事制度Ⅱ

第7講 報酬と人事制度Ⅲ(VTR学習②)

第8講 中間テスト

第9講 人事異動Ⅰ(VTR学習③)

第10講 人事異動Ⅱ

第11講 労働時間・休日の管理(VTR学習④)

第12講 労働組合

第13講 人的資源管理の課題Ⅰ

第14講 人的資源管理の課題Ⅱ、この授業の総まとめ

第15講 期末テスト：学習成果の確認

■フィードバックの要領

ワークシートへの回答に対する講評、質問・意見に対するコメントを翌回の講義で実施する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が90点以上

評価 A (89～80点)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が80～89点

評価 B (79～70点)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が70～79点

評価 C (69～60点)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が60～69点

評価 F (59点以下)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が59点以下

■評価方法

授業貢献点(40点)、中間テスト(30点)、期末レポート(30点) 授業貢献点は、出席点+ワークシートでの解答状況を基に算出する。

■留意点

毎回の授業においてワークシートの提出を求め、その内容をA(授業を聴き良い気づきがあった、2点)、B(授業を聴いていた、1点)、C(授業を聴いていたとは思えない、0点)の3段階で評価し、これに出席点1点を加えて授業貢献点とする。欠席は出席点も0点となる。授業の受講態度が悪い場合は、欠席以下の評価になることもある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 多国籍企業 (Multinational Corporations)**サブタイトル** 21世紀のマルチナショナル・コーポレーションズ**担当教員** 飯田 健雄**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

21世紀の多国籍企業の動態を分析していく。とくに、発展途上国もインフラ投資に力を入れる一方で、アメリカ、ヨーロッパ、中国では、ICTのクラウド化やAIの積極的投資を進めている。20世紀の欧米中心の多国籍企業の動態分析ではなく、21世紀の直積投資の大きな領域を占める、この二つの大きな潮流を講義していく。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネスマネジメント、ビジネスICT

■到達目標

春学期は世界の代表的多国籍企業を学んでいく。特に、アメリカのICT企業に的を絞り、理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

多国籍企業の知識と理解を得ることで、未来の産業の構図を描くことができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義をよりよく理解するために、約1時半程度、NHKをはじめとする民放各社の経済ニュースで日本企業や外国企業の動向を知っていきう。日本経済新聞を読んで、世界の企業の動向を知ろう。(1.5時間)

■授業の概要

第1講 IT産業—ゲーム業界(SCE)

第2講 Fedexを中心としたロジスティクス企業の考察

第3講 インテル

第4講 グーグル

第5講 マイクロソフト

第6講 アップル

第7講 facebookとSNS業界

第8講 デルコンピュータ

第9講 民営化型インフラ I

第10講 民営化型インフラ II

第11講 民営化型インフラ III

第12講 世界の小売業界

第13講 アマゾン

第14講 ウォルト・ディズニー

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

レポートから得られた全体的感想とまとめを講義の中でフィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : すべての講義にでること。試験では、すべてに解答し、90点以上を取得すること。

評価 A (89~80点) : ほとんど講義に出ている学生。試験はすべてに解答し、80点以上を取得すること。

評価 B (79~70点) : 10回以上講義に出席。試験は5問中、4問すべてに解答し、70点以上を取得すること。

評価 C (69~60点) : 7回以上講義に出ること。試験は5問中、3問すべてに解答し、50点以上を取得すること。

評価 F (59点以下) : 15回中、5回以下、および、試験は5問中、3問以下で50点以下の水準にあること。

■評価方法

試験(70%) 出席(30%) 試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

■留意点

科目名 地域観光論 (Regional Tourism Theory)**サブタイトル** 観光まちづくりの最前線事例と地域ビジネス**担当教員** 中庭 光彦**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

日本の社会経済を支える有力な産業として「観光産業」が目まぐるしく注目を浴びています。各観光地が魅力づくりを競い、インバウンド客も増えてきていますが、「着地マーケティング」の力不足が日本の弱点となっています。本講義前半では、観光に関心のある主に3年生を対象に、観光産業の基本・現状を伝え、「移動する人間」が社会経済を変える影響力や地域観光政策の考え方について学びます。後半では観光まちづくりに焦点を絞り、観光地をつくるマーケティングや政策の戦略について学びます。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、地域ビジネス

■到達目標

観光による地域ビジネスの考え方を理解し、基本用語を使って、現代の観光についてレポートを書けるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

観光マーケティング、政策の基本的学力を身につけ、現実の観光地域の経営、観光ビジネス・産業を解釈できる能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

日経新聞過去記事検索データベースで、テーマ内容を調べてくる(予習)。講義・作業の内容をノートに整理してまとめ直す(復習)。両方で1.5時間。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 観光論が対象とする様々なビジネス
- 第3講 観光地と観光産業の関係
- 第4講 観光立国について考える
- 第5講 コンベンション・ビジネスについて考える
- 第6講 ケースで考えるホスピタリティビジネス
- 第7講 テーマパークと観光地の関係について考える
- 第8講 マスツーリズムからニューツーリズムへ
- 第9講 ケースで考える観光まちづくり①観光地プロモーションとブランド化を考える
- 第10講 ケースで考える観光まちづくり②観光地ブランド化と文化の関係を考える
- 第11講 ケースで考える観光まちづくり③エコツーリズム
- 第12講 ケースで考える観光まちづくり④歴史の魅力と観光地
- 第13講 ケースで考える観光まちづくり⑤DMOによる観光地域経営
- 第14講 観光地域づくりの体系
- 第15講 これまでのまとめとレポート作成

■フィードバックの要領

途中レポートを課し、添削を行い全員に返却する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 講義内容を十分に理解し、新たな情報を加えて伝えることができる。

評価 A (89～80点) : 講義内容を十分に理解して、伝えることができる。

評価 B (79～70点) : おおその内容は把握しているが、論理的に伝えるまで至っていない。

評価 C (69～60点) : 内容をあまり理解できておらず、伝えることも十分ではない。

評価 F (59点以下) : 著しく理解に欠けており、伝えることはできない。

■評価方法

レポート60%、出席40%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 地域金融論 (Local Finance)**サブタイトル** お金と地域の基礎講座 地域金融機関のつなぐ力**担当教員** 長島 剛**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

お金と地域を学ぶ基礎講座。自分のお金のことを考えながら、金融と地域の現状と課題を考察する。5講目からは、地域金融マンになり、市民や事業者はもとより、自治体や商工団体、教育機関等との課題解決、共創の姿を疑似体験する。地域を構成する様々な主体の仕組みと現状を理解することで、地域の未来を創造する。過去の分析や推移をたどることは最小限として、今をみて、今後を考えていく。必要に応じて、FP技能検定の試験範囲である、ローンの計算方法や税金、年金等にも触れる。

■講義分類

地域ビジネス、ビジネス環境理解、社会人養成

■到達目標

①自分のお金について関心を持ち、具体的な取扱いについて知識を持つ(前半) ②地域を構成する様々な主体の課題解決について、関心を持つ(後半) ③地域における課題解決の現状を検証、地域の未来を考察することができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

たくさんの事例から、お金や地域に関心を持ち、現在起きている課題解決や共創の現状を理解し、課題に対処できる専門的能力の修得のきっかけにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ●T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

学習ポイントにあげたキーワードについて、ネットや文献を通じて、研究しておくこと。(2時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 生活者をつなぐ力1(ライフプランニングと資金計画)
- 第3講 生活者をつなぐ力2(貯蓄/資産運用)
- 第4講 生活者をつなぐ力3(住宅ローン)
- 第5講 事業者をつなぐ力1(創業支援)
- 第6講 事業者をつなぐ力2(事業性融資)
- 第7講 農業者をつなぐ力
- 第8講 NPOをつなぐ力
- 第9講 国や県庁をつなぐ力
- 第10講 自治体をつなぐ力
- 第11講 商工団体をつなぐ力
- 第12講 教育機関をつなぐ力
- 第13講 福祉機関をつなぐ力
- 第14講 支援機関をつなぐ力
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたレポートに対し講義内で特徴的なものや疑問点などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+(90点以上): 事例をよく学び、課題解決の現状を理解し、地域の未来を考察することができる。

評価A(89~80点): 事例をよく学び、課題解決の現状について深く理解している。

評価B(79~70点): 事例をよく学び、課題解決の現状について一定の理解をしている。

評価C(69~60点): 一部不十分な点はあるものの、課題解決の現状について理解している。

評価F(59点以下): 課題解決の現状について理解していない。

■評価方法

出席30%、授業で行う確認テスト(到達目標①)20%、レポート(到達目標②)20%、最終レポート(到達目標③)30%

■留意点

現場のヒアリングを行いながら講義を作る予定(第一講目に発表)。ヒアリングへの同席も検討する。積極的な対応を期待する。授業の内容はヒアリングの進捗状況により変更の可能性がある。

科目名 地域産業論 (Local Industry Theory)**サブタイトル** 地域と共に生きる中小企業の役割と地域産業の発展に向けた方策を考える**担当教員** 野坂 美穂**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義では、地域経済を支える地域産業の意義、地域産業の主な担い手である中小企業の役割について理解することを目的とする。本授業では、地域経済における地域産業の重要性についての理解を深め、課題解決に向けた自分なりの考えや具体的な方策を示すことができるようになることを目指す。将来的な地域産業の一担い手として、自身のあるべき姿（どのような形で地域産業に貢献する人材になりたいかというビジョン）を描けるようにする。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、地域ビジネス

■到達目標

(1) 二次資料（官公庁の報告書や統計データ等、新聞記事・雑誌等）の活用によるレポート作成やプレゼンテーションを行い、情報リテラシーと数量スキルを身につける。(2) グループディスカッションやグループワークを通じて、チーム・ビルディングスキルやファシリテーションスキルを養う。(3) グループディスカッションやケース・スタディを通じて、論理的思考力および問題解決力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

地域の課題を発見し、その課題に対して自分なりの解決策を提案できるという、「課題解決力」の養成とともに、基本となる知識を身につけ適切に理解することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

主に、①または②を行う。①指定した配布した新聞（or 雑誌）記事やケース等を読み、ワークシートに穴埋めする。②配布した資料を読んで要約を行い、さらに内容に関する質問を3つ考えること。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション：地域経済における地域産業の意義と役割
- 第2講 地域産業の担い手としての中小企業の役割
- 第3講 中小企業が直面する様々な問題
- 第4講 中小企業におけるイノベーションの意義
- 第5講 中小企業のケース分析のプレゼンテーションの準備+個別質問タイム
- 第6講 中小企業のケース分析に関する成果発表（プレゼンテーション）
- 第7講 産業集積と地域イノベーション (1)
- 第8講 産業集積と地域イノベーション (2)
- 第9講 伝統的地場産業の衰退と再生 (1)
- 第10講 伝統的地場産業の衰退と再生 (2)
- 第11講 一次産業に着目した地域産業の在り方 (1)
- 第12講 一次産業に着目した地域産業の在り方 (2) 被災地の産業復興
- 第13講 テーマパーク産業について考える
- 第14講 観光戦略を通じた地域産業の活性化
- 第15講 プレゼンテーション成果発表会

■フィードバックの要領

提出したレポートに対して、コメントを添えて返却する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析が十分にでき、グループへの貢献度が高い。
- 評価 A (89 ~ 80 点)：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析ができ、グループへの貢献度が高い。
- 評価 B (79 ~ 70 点)：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析ができ、グループへの貢献度が中程度。
- 評価 C (69 ~ 60 点)：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析が不十分、グループへの貢献度が低い。
- 評価 F (59 点以下)：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析ができない、グループへの貢献度が低い。

■評価方法

出席 40%、レポート 20%、プレゼンテーション 20%、定期試験 20%

■留意点

日常生活において出来る限り、新聞記事（できれば日本経済新聞）や雑誌記事（できれば東洋経済、日経ビジネス等）を読み、中小企業の動向を把握するようにしてください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国経済論 (Chinese Economy)**サブタイトル** 中国・大中華圏で活躍できる人財を目指そう**担当教員** パートル**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。本講義では、世界経済の牽引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を立体的かつ複眼的な視点で理解を深めるための基本的な知識の習得と知見の広がり、そして日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を正しく「読む」力の養成を目指す。具体的には、中国や日中間のビジネスの最前線事例を取りあげながら産業社会が求める問題発見能力と問題解決能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて習得した知識や得た知見を自分の就職や将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標

①中国経済に関する基本的な知識を習得し知見を広げ、中国の実像を把握できるようにする。②中国経済の現状と課題を分析し、日本企業の新たな経営戦略・ビジネスモデルの立案のほか、日中間の協力の可能性について、履修者が独自の問題意識を持てるようにする。③講義で習得した知見を就職活動に利活用できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

中国経済に関する基礎的な学力を養い、グローバル（中国）とローカル（日本）の関係を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (海外留学やインターンシップ参加者によるプレゼンテーションを実施する。)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

中国や日中経済関係に関する時事問題を始め、講義内容の中で自分自身に関心を持つ分野に関する情報を収集、分析、調査する習慣をつけることが必須。上記準備学習に要する時間は最低2時間とする。

■授業の概要

- 第1講 「中国」とは～ガイダンス 講義の目的・内容の説明、中国の一般事情
 第2講 「世界の工場」と「世界市場」の両方の視点から「中国像」を提示する。
 第3講 毛沢東時代の中国の政治、経済、社会体制と鄧小平時代の改革開放政策の成果と課題
 第4講 高度成長の「光」と「影」(1) 一エネルギー需給状況、環境問題をを中心に
 第5講 高度成長の「光」と「影」(2) 一食料問題をを中心に～中国の食料需給状況と今後の見通し～
 第6講 高度成長の「光」と「影」(3) 一格差問題をを中心に～中国の格差問題の現状と対策～
 第7講 高度成長の「光」と「影」(4) 一人口問題をを中心に～中国の人口構造の現状と今後の見通し
 第8講 高度成長の「光」と「影」(5) 一戸籍制度と「農民工」問題をを中心に
 第9講 高度成長の「光」と「影」(6) 一民族問題の歴史的背景と現状、今後の展望を中心に
 第10講 高度成長の「光」と「影」(7) 一中国の政治体制と中国共産党を中心に
 第11講 中国の地域開発戦略 (1) 「東北振興」戦略
 第12講 中国の地域開発戦略 (2) 「西部大開発」戦略
 第13講 中国の地域開発戦略 (3) ～「中部掘起」戦略～
 第14講 日中経済関係の現状と課題～日中経済関係の最新状況～
 第15講 中国経済の最新動向と春学期の講義内容についての総まとめ

■フィードバックの要領

講義レポートと最終レポートに対しコメントをつけてフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 100 点満点中 90 点以上。
 評価 A (89 ～ 80 点) : 100 点満点中 89 ～ 80 点。
 評価 B (79 ～ 70 点) : 100 点満点中 79 ～ 70 点。
 評価 C (69 ～ 60 点) : 100 点満点中 69 ～ 60 点。
 評価 F (59 点以下) : 100 点満点中 59 点以下。

■評価方法

出席 30 点、講義レポート 30 点、最終レポート 30 点、質問 10 点の 100 点満点で絶対評価。

■留意点

～成績評価について～ 出席と毎回提出する講義レポートを重視 (30 点 + 30 点 = 60 点) する。最終レポート (30 点) は、A4 用紙 2 枚以内。講義内の質問・意見 (10 点) は、講義への積極的な参加・貢献として評価し、発言回数に基づいて 1 点～10 点の評価を加える。講義メモは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、問題解決へ向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点后、最後に返却してフィードバックを行う。

科目名 データサイエンス III (Data Science III)**サブタイトル** 経営情報のための統計学 / Applied Statistics for Management & Information Sciences**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

高度情報化社会となり、問題解決のためにはデータを収集して、それをもとに考えることが当然となった。データをに関してどのような目的のために収集して、活用するかが重要となってきている。この講義では経営情報におけるデータを活用するための基本力の習得を目指し、統計的データ分析を取り扱う。具体的には、データの要約と因果関係の検証のためのデータ分析を内容とする。このようなスキルは、共通のスキルであるので、受講しておくことをすすめる。なお、講義では実際に検討し、理解を深める事が重要であるので、コンピュータソフトを用いてデータ分析の基礎をも習得する。適宜、グループレポートなどを作成する。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

(1) 基礎的な離散分布と連続分布について理解し、統計的思考をもとに実際の場面で活用できる。(2) 平均の区間推定や仮説が行える。実際の問題解決問題を、統計的な枠組みで表現し分析できる。(3) 分散分析や重回帰モデルを適切に活用できる。因果関係について推測できる。(4) 意思決定に役立つ表現ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

DP2 思考と判断および DP3 関心と意欲：ビジネス環境で必須の課題解決のためのプロセスとデータをもとにした統計的分析力とを学習し、他者ともに社会や企業での課題を解決する力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ●KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

各回の最後に課される課題について、データを用いて分析すること。データを整備や分析やレポート作成などに1.5時間を費やされるので十分余裕を持ち完了して、指定した期限までに提出すること。

■授業の概要

- 第1講 二項分布再入門
- 第2講 幾何分布とポアソン分布
- 第3講 正規分布再入門
- 第4講 χ^2 分布とF分布
- 第5講 一元配置分散分析 I
- 第6講 一元配置分散分析 II
- 第7講 分散分析モデル 演習
- 第8講 重回帰モデル
- 第9講 重回帰モデルでのパラメータの推定
- 第10講 回帰分析 モデルの選択
- 第11講 重回帰分析 残差の評価
- 第12講 重回帰モデル 演習
- 第13講 二元配置分散分析
- 第14講 二元配置分散分析 演習 二元配置分散分析に関する演習を行う
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたリフレクションシートにもとづき、クラスで対応する

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 目的に応じた統計モデルを選択して、分析を実施、その結果を評価できる。

評価 A (89～80点) : 因果関係に関するモデルを適切に適用できる

評価 B (79～70点) : 確率分布をもとにしたモデルを適用できる

評価 C (69～60点) : 統計モデルを適用できる。

評価 F (59点以下) : 評価 A+～Cまでのいずれもできない。

■評価方法

課題提出 60% 期末試験 40%

■留意点

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義では各回各人のワークシートの提出やチーム毎のデータ収集、レポート提出のアクティブラーニングを行うので、1回目の講義から欠席せずに受講すること。PCなどを利用するので、その準備をすること。データサイエンスIIを履修していること

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データサイエンス IV (Data Science IV)

サブタイトル ビジネスで活かすための多変量解析・分類

担当教員 久保田 貴文

対象学年 3年生以上

区分 秋学期

■講義目的

さまざまな問題解決のために必要なデータ解析の基礎的な内容を習得し、さらに自ら問題を考えそれを解決できる能力を養います。講義のなかでは、実際のデータを用い、Rにより解析を行いワード等でレポートを作成します。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標

データ解析の考え方と手法を十分に理解し様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来る。手法については、具体的に次の4つの項目について習得していること。1. 多変量データを用いて、単純集計・クロス集計ができる 2. 回帰分析 3. 主成分分析 4. クラスター分析さらに、自ら問題を設定し、本講義で学んだ手法によってそれを解決できることがさらに望ましい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

データ分析に関する基礎的な学力を養い、産業社会で発生する問題にデータサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(4択のクイズ)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前:内容についてあらかじめデータを思い浮かべてイメージする。事後:授業でやった内容を復習する。事前1.5時間、事後1.5時間程度。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション

第2講 重回帰分析1

第3講 重回帰分析2

第4講 重回帰分析3

第5講 レポート(1)

第6講 ロジスティック回帰分析1

第7講 ロジスティック回帰分析2

第8講 ロジスティック回帰分析3

第9講 レポート(2)

第10講 主成分分析1

第11講 主成分分析2

第12講 レポート(3)

第13講 クラスター分析1

第14講 クラスター分析2

第15講 まとめとレポート(4)

■フィードバックの要領

課題に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上): レポート点で90点以上

評価 A (89~80点): レポート点で80点以上89点以下

評価 B (79~70点): レポート点で70点以上79点以下

評価 C (69~60点): レポート点で60点以上69点以下

評価 F (59点以下): レポート点で59点以下

■評価方法

レポート4回(各10点)、毎回のミニクイズ(各4点)。10×4+4×15=40+60=100

■留意点

PCは必携である。

科目名 データ分析実践 (Data Analysis Practice)**サブタイトル** ビジネス分野でのデータ活用**担当教員** 佐藤 洋行**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

ビジネスのインターネット化、ハードウェアの低廉化、デバイスやセンサーの多様化 (IoT 含む) により、データの活用は現在のビジネスに欠くべからざるものとなっている。本講義では、データ活用の技術的知識をある程度もっている前提で、実際にそれをビジネス分野で応用する上で必要な実学的知識を修得するとともに、データ活用の発想力を身につけることを目的とする。具体的には、ビジネス分野でデータ活用を行う上で必要なオープンソースソフトウェア利用、最新のクラウドサービス、オープンデータなどの技術的な知識を講義する。演習では、オープンソースソフトウェアを利用したデータ分析を体験することで、新たなデータ活用方法を発想する訓練を行う。なお、講義ではグループワークによるレポート作成やプレゼンテーションを行ってもらう。

■講義分類

ビジネス創造、グローバルビジネス、ビジネス ICT

■到達目標

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得するため、ビジネスでのデータ活用に必要な知識と技術を身につけることを目標とする。また、本講義は「社会調査士 G 科目」として申請することも可能である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

データ分析の基礎技術の学習により、産業社会における課題に数理的にアプローチする技能を習得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

postgreSQL および R を利用したデータ分析を行ってもらうので、それらソフトウェアについての必要な知識を毎回の授業の前までに学習しておくこと (1.5 時間程度)。

■授業の概要

- 第1講 インタロダクション データ活用入門
- 第2講 データ活用の基礎 (1) 理解しておくべき分析手法
- 第3講 データ活用の基礎 (2) オープンデータ
- 第4講 データ活用の基礎 (3) データ活用に関連したクラウドサービス
- 第5講 データ活用に関連したオープンソースソフトウェア
- 第6講 ビジネスデータ分析実践① RDBMS 入門
- 第7講 ビジネスデータ分析実践② RDBMS によるデータマート作成 1/2
- 第8講 ビジネスデータ分析実践② RDBMS によるデータマート作成 2/2
- 第9講 ビジネスデータ分析実践③ R による予測 1/2
- 第10講 ビジネスデータ分析実践③ R による予測 2/2
- 第11講 ビジネスデータ分析実践④ R による判別
- 第12講 ビジネスデータ分析実践④ R によるマッチング
- 第13講 データ活用ビジネスの企画① プレインストーミング
- 第14講 データ活用ビジネスの企画② プレゼンテーション準備
- 第15講 データ活用ビジネスの企画② プレゼンテーションとレポート

■フィードバックの要領

レポートにコメントをつけて返却する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : データ活用の方法について、自分なりの意見を表現することができる
- 評価 A (89 ~ 80 点) : データ活用に必要な分野の知識を広範に把握している
- 評価 B (79 ~ 70 点) : データ活用に必要な知識の分野にどのようなものがあるか理解している
- 評価 C (69 ~ 60 点) : データ活用に必要な知識をある程度理解している
- 評価 F (59 点以下) : データ活用に必要な知識を説明できない

■評価方法

出席 30%、レポート 70%

■留意点

①必ず PC を持参すること。②本講義は毎回、前回講義の内容を理解していることを前提として行う。また、グループワークとしてデータ活用企画やレポート作成などのアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せずに受講すること。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 日本経済論 (Japanese Economy)**サブタイトル** グローバル視点を踏まえた日本経済論：プレゼンと討論による学び**担当教員** 椎木 哲太郎**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

日本経済を分析対象とし、経済学的視点、歴史的視点、社会経済システム論的視点からアプローチする。さらに産業、貿易、労働、金融、財政、社会保障といった各分野毎の切り口からも接近を試みる。それによって、日本経済の現状と課題をトータルに把握したい。その上で、経済政策の果たした役割についても具体的事例に即して検討し、日本経済を取り巻く大きな環境変化に対応して、国民生活の質を高めていくための「問題解決策」として、制度改革も含めた経済政策のあり方を考える。グループワークによる調査・報告（プレゼンテーション）と討論（ディスカッション）を中心に、双方向のアクティブラーニング実践として進めていく予定である。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

経済学の理論を援用し、グローバルな視点に立って日本経済の現状・因果連関を分析し、環境変化に伴って生じる解決すべき諸課題を明確にする中で、日本経済に対するトータルな認識を深め、一市民として、主権者たる日本国民として、経済成長の意味を問いつつ国民生活の質を高めていくための「問題解決策」として、制度改革も含めた望ましい経済政策を構想（評価）することができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

日本経済の現状、全体像と課題をグローバルな視点から分析・考察し、各分野の課題を明確にした上で、全体知を活用し、プレゼンを通じて解決に向けたプロセス、政策提言を広く発信できるような創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ●その他（感想・論点記入ペーパーの集約と次回冒頭活用）

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他（ ）

[グループ] ●その他（グループ・ディスカッション）

[上記以外]（なし）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

最低 20 分の報告のために、シラバス・参考図書参照し、2 冊以上の専門書を 8 時間以上読み、PPT 作成と報告準備に 10 時間以上、最終レポートに 5 時間以上費やすこと。コメンテーターは、必ず 2 点の論点提起を用意すること。

■授業の概要

第 1 講 日本経済論の課題

第 2 講 日本経済へのアプローチ

第 3 講 世界経済の中の日本経済

第 4 講 高度成長とその終焉

第 5 講 バブル経済とその崩壊

第 6 講 長期デフレ不況といわゆる「構造改革」

第 7 講 日本の貿易と直接投資

第 8 講 日本の産業構造

第 9 講 日本の労働市場

第 10 講 日本の金融

第 11 講 日本の財政

第 12 講 日本の税制 日本の税制の現状と、制度改革の方向性を考える。

第 13 講 日本の社会保障と経済 社会保障制度の概要と政策の特質を明らかにする。

第 14 講 日本経済の近未来 2030 年の日本経済を考える。

第 15 講 日本経済の全体像 歴史的な分析と各論から、日本経済の全体像、将来像を考える。

■フィードバックの要領

報告翌週にフィードバック用紙を全員に返却し、最終レポートに向け改善点を告知する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに極めて優秀である

評価 A (89 ~ 80 点) : 文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに優秀である

評価 B (79 ~ 70 点) : 文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに良い

評価 C (69 ~ 60 点) : 文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに普通

評価 F (59 点以下) : 最終レポート、発表・討論ともに不十分。文献参照、データの分析ともに不十分

■評価方法

最終レポート (60%)、報告・討論 [メモ]・出席 (40%)

■留意点

①報告（プレゼン）に際しては、何冊かの参考文献・図書を読んで頂く。②第 1～第 3 回の講義で分担（各回の報告者とコメンテーター）を決定するので、(予め希望回を明確にして) 必ず出席すること。この間の講義に出席しなかった（分担決定に参加しなかった）諸君には、履修を許可しない。③プレゼン、最終レポート作成にあたっては、MS Office、Excel を使いこなすことを目標とする。

科目名 日本経営論 (Japanese Management)**サブタイトル** 高度成長とその後を中心に日本の企業経営を学ぶ**担当教員** 志賀 敏宏**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

第二次大戦後の日本の「良い経営・経営者とその経営環境」を事例から学びます。受講生の皆さんが環境を活かした「良い仕事」ができるようになるための歴史的な理解と思考力を身につけることを目指します。この目的のために【努力することを強く約束できる人】が履修登録、受講して下さい。

■講義分類

ビジネスマネジメント、ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

人の特長と経営環境を活かした良い経営に関して、知識と思考力を身につけること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

良い経営・経営者と経営環境に関する知識を身につけ、「経営と環境、経営と人との関係」を理解する。経営環境に応じた経営課題を思考し、経営課題を克服する思考・判断力を学ぶ。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

各講義前に、講義対象の経営者について情報収集して50文字程度の「人物紹介」を作成する。講義後に、気づきをまとめ、疑問点を調べる。100文字程度の「人物紹介」を仕上げる(各講義について1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション。本講義の趣旨、全体構成、受講生の目標と課題の説明。
 第2講 復興期の代表的な経営：復興から世界へ—ソニーのトランジスタラジオ開発と輸出
 第3講 復興期の代表的な経営：志と伝統を世界へ：キッコーマン醤油米国進出
 第4講 高度成長前期の代表的な経営：志と技術蓄積で先進国への輝きを—東海道新幹線(1)
 第5講 高度成長前期の代表的な経営：志と技術蓄積で先進国への輝きを—東海道新幹線(2)
 第6講 高度成長前期の代表的な経営：志と技術蓄積で先進国への輝きを—自動車産業
 第7講 高度成長前期の代表的な経営：志と技術で世界をリーダービクターVHSビデオ(1)
 第8講 高度成長前期の代表的な経営：志と技術で世界をリーダービクターVHSビデオ(2)
 第9講 高度成長後期、経済のサービス化、日本のサービスの開花①—コンビニ。
 第10講 高度成長後期、経済のサービス化、日本のサービスの開花②—宅配便(1)
 第11講 高度成長後期、経済のサービス化、日本のサービスの開花②—宅配便(2)
 第12講 バブル期：覇者の交代—アサヒスーパードライブール
 第13講 長期低迷期：ポスト産業資本主義時代の志①—ソニー ベットロボット アイボ
 第14講 長期低迷期：ポスト産業資本主義時代の志②—iPS細胞
 第15講 最終試験

■フィードバックの要領

口頭(授業中コメント)、ノート・ワークシートへのコメントで行います。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：下記の評価方法と配分に従って90点以上
 評価 A (89～80点)：下記の評価方法と配分に従って80点以上、89点以下
 評価 B (79～70点)：下記の評価方法と配分に従って70点以上、79点以下
 評価 C (69～60点)：下記の評価方法と配分に従って60点以上、69点以下
 評価 F (59点以下)：下記の評価方法と配分に従って59点以下

■評価方法

出席30点。事前・事後課題、授業中のワークシート作成・提出と発言等29点。授業全回の出席・理解を前提とした期末テスト結果を上記に加点し100点満点。

■留意点

- 次の3つの約束を守る人のみ履修して下さい。①私語・遅刻等で他の受講生と授業の進行に迷惑をかけない。②映像教材、講義内容に集中しノートを取り、ワークシートを記入する。③事前・事後課題を実行する。以上を守れない場合は受講停止を求めます。
- T-NEXTの連絡を見落とした場合は成績に関する異議を受け付けません。
- 受講を停止する際は必ず履修削除して下さい。就活時に成績で不利にならないために重要です。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 認知心理 (Cognitive Psychology)**サブタイトル** 個人の認識と問題解決・意思決定**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

認知心理学は、人間の心のしくみを学ぶ心理学の一分野である。人間が外部の環境や刺激をどう感じ、どう理解しているのかといったしくみを様々な角度から考察する。講義中に自分自身についても当てはめ、実験演習も行う。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標

この授業で学んだことを日常世界の中においても理解・応用できるか、経済・経営活動においてこの知識を応用・適用できるか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

人間の思考を個人の視点から学び、問題解決や意思決定に生かす。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読しておくこと (1.0 時間)。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと (0.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 概論
- 第2講 記憶と忘却
- 第3講 知覚と認識
- 第4講 顔表情の認識と感情表出
- 第5講 概念と言語
- 第6講 知識と表象
- 第7講 イメージと空間の情報処理
- 第8講 認知の制御過程
- 第9講 文章理解
- 第10講 推論
- 第11講 問題解決
- 第12講 意思決定
- 第13講 日常世界と認知心理学 (1)
- 第14講 日常世界と認知心理学 (2)
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

授業中に調査や心理実験を実施し、即座に結果を示し、個人の思考の評価を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を完全に理解できている
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を理解できている
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容をおおよそ理解できている
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 最低限の理解ができている
- 評価 F (59 点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

■評価方法

出席を前提とし、期末定期試験 (100%) により評価する。

■留意点

- ①本講義は、幅広い心理学のうちの一分野である。「消費心理」、「社会心理」等の他の心理学の講義も聴講するとより理解が深まる。
- ②「経営と意思決定」の講義にも関連がある。③講義途中で心理実験やそのレポート提出を求めることがあるので、毎回の出席及び PC の持参は必須。④私語、飲食、授業と関係のない PC 操作、携帯電話操作、帽子・サングラス着用等禁止する。

科目名 ビッグデータ活用法 (Utilizing Method of Big Data)**サブタイトル** ビッグデータの理解と具体的な活用法を企業に提案する**担当教員** 西村 公児**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

自分で問題解決の仮説・検証できる実践力

■講義分類

ビジネス創造、顧客理解、ビジネス ICT

■到達目標

ビッグデータの理論とビッグデータを活かしたビジネスへの実践学習

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、問題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (トピックについてデータや資料をグループを分析し、仮説検証のシナリオを作る)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

毎授業後にはレポートを提出すること(各授業毎 1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

第1講 概要・イントロダクション

第2講 AI(人工知能)とは

第3講 AI(人工知能)を実際に活用するには

第4講 ビッグデータとは

第5講 ビッグデータがあるからAIは学習できるとは?

第6講 顕在化した需要に応えるためのプロセスの概要とは

第7講 分析・プランニングを支える基盤とは

第8講 「知ってもらふ」ためのビッグデータの活用法

第9講 「興味を持ってもらう」ためのビッグデータの活用法

第10講 「調べてもらう」ためのビッグデータの活用法とは

第11講 「買ってもらう」ためのビッグデータの活用法とは

第12講 「ファンになってもらう」ためのビッグデータ活用法とは

第13講 ビッグデータ活用を支える知識(ツール&分析手法)

第14講 企業に提案するプレゼンテーション(グループでの立案)

第15講 企業に提案するプレゼンテーション(グループでの立案)

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上): 知識・応用力(置換能力)・洞察力(展開力)を身に着けている(実践への応用が可能)

評価 A (89~80点): 知識・応用力(置換能力)を身に着けている。(実践に向けた取り組みが可能)

評価 B (79~70点): 最低限の知識を身に着けている。(勉強レベル)

評価 C (69~60点): 最低限の知識をつけるには取り組み姿勢の改善が必要である

評価 F (59点以下): Cに達しない程度の大幅な改善を要する

■評価方法

課題レポート(50%) + プレゼンテーション(グループでの立案)(50%)

■留意点

特になし

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ **ブランドマネジメント (Brand Management)****サブタイトル** ▶▶▶ **戦略的にブランドを管理、創造****担当教員** ▶▶▶ **村山 貞幸****対象学年** ▶▶▶ **3年生以上****区分** ▶▶▶ **秋学期****■講義目的**

本講義では、ブランドをエクイティとしてとらえ、それを戦略的に創造、管理するプロセスを学ぶことで実務的知識を修得する。その上で、産業社会の実例に触れ、その課題を分析、解決する策を検討することを通じて、ブランドに関する問題発見、問題解決力を獲得することを目的とする。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、ビジネス環境理解

■到達目標

本講義は、産業社会で求められるブランドに関する諸概念と戦略的に管理・創造するプロセスを理解し、ビジネスなどにおいて実践的に応用、問題解決できるような力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

戦略的にブランドを管理、創造するための基本的な知識をベースに、ビジネス課題を分析、解決策を立案できるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

学んだ諸概念について実際の組織に当てはめて復習することに1.5時間、また、次回の講義に向けてその組織の問題を発見、分析、解決策立案することに1.5時間かける。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 ブランドの諸概念とその歴史的展開
- 第3講 戦略的ブランドマネジメント1
- 第4講 戦略的ブランドマネジメント2
- 第5講 ブランドパフォーマンスの測定1
- 第6講 ブランドパフォーマンスの測定2
- 第7講 ブランド・プランニング1
- 第8講 ブランド・プランニング2
- 第9講 ブランド・マーケティング・プログラム1
- 第10講 ブランド・マーケティング・プログラム2
- 第11講 ブランドの維持・強化1
- 第12講 ブランドの維持・強化2
- 第13講 研究発表1
- 第14講 研究発表2
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

個々の研究について講義で学んだことをベースにコメントを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 戦略的なブランドマネジメントの企画立案力がきわめて高い。

評価 A (89～80点) : 戦略的なブランドマネジメントの企画立案力が高い。

評価 B (79～70点) : 戦略的なブランドマネジメントの企画立案力が平均的。

評価 C (69～60点) : 戦略的なブランドマネジメントの企画立案力が低い。

評価 F (59点以下) : 戦略的なブランドマネジメントの企画立案力が著しく低い。

■評価方法

出席 (50%)、レポート (50%)

■留意点

ケースは受講生の関心により変更する場合がある。

科目名 問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ(Complex Problem Solving Lecture on a Special TopicⅠ～Ⅲ)**サブタイトル** 「問題解決能力」を鍛える**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

皆さんは、これまでの多摩大学での様々な学びの中で、問題解決の様々な手法を学んできました。卒業を目の前に、皆さんは、これまでの学びで得た問題解決能力を実社会で発揮していくための準備をして、社会人としての活躍につなげていかなければなりません。そこでこれまでの学びを振り返り、皆さんが得てきた「問題解決能力」を教員による個別指導の下でブラッシュアップして、実社会での問題解決能力の発揮につなげていきます。この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを確実なものとするため、教員が設定した「問題」に対して、課題の分析、解決策の探索、評価、解決策の選択という問題解決の実践演習を行っています。そのなかで、直面する問題から安易に逃げる「人生あきらめ症候群」から脱却して、社会人として当然に要求される「社会人基礎力」を高めていきます。

■講義分類

顧客理解、ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標

実社会で使える「問題解決能力」を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会人として活躍するための問題解決について学ぶことで、社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができるようになる。また、ルールや約束を守ることができる規律性を身につける事ができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (5人の教員によって実施するため、教員によってはAL技法が異なることがある。)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要です。

■授業の概要

第1講	1	大学生生活の振り返り(1)
第2講	1	大学生生活の振り返り(2)
第3講	2	問題解決の実践演習(1)
第4講	2	問題解決の実践演習(2)
第5講	2	問題解決の実践演習(3)
第6講	2	問題解決の実践演習(4)
第7講	2	問題解決の実践演習(5)
第8講	2	問題解決の実践演習(6)
第9講	2	問題解決の実践演習(7)
第10講	2	問題解決の実践演習(8)
第11講	2	問題解決の実践演習(9)
第12講	2	問題解決の実践演習(10)
第13講	2	問題解決の実践演習(11)
第14講	2	問題解決の実践演習(12)
第15講	3	今後も問題解決能力を高めていくための方策を考える

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+(90点以上)：革新性を持った確実性のある解決策を提案出来るようになった。
 評価A(89～80点)：革新性はないものの確実性のある解決策を提案出来るようになった。
 評価B(79～70点)：実現可能性に疑義があるが、一応、問題解決策をとりまとめた。
 評価C(69～60点)：解決策はまとめられたものの、問題の解決に結びつく蓋然性が低い。
 評価F(59点以下)：考察能力の不足から、有効な問題解決策を提案できていない。

■評価方法

講義への出席(評価割合50%)と問題解決の実習でとりまとめた問題解決策の評価(評価割合50%)の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとめた後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。シラバスの内容に加えて、担当教員からあらたな内容を教授することがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ロシア経済論 (Russian Economy)**サブタイトル** 外国の経済システムを理解しよう**担当教員** 小林 昭菜**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

日本の隣国であり、BRICS うちの一つであるロシアについて、経済の側面から学習する。日本と異なり天然資源が豊富なロシアは、国の根幹を担う経済に特別な「配慮」をしている。外国の経済システムや経済の流れを学習し、今後のアジア、ユーラシアにおける経済のダイナミズムについて想像を凝らしていくことを目的とする。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス創造、グローバルビジネス

■到達目標

ロシアと日本との経済協力が可能なか、ロシアとアジア諸国との経済協力は可能なか、マクロの視点から且つ具体的に何ができて何が困難かを理解できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ロシアの経済システムを理解することは、他国、異文化理解である。社会で経験を積むためには、まず知識をつけそれを理解したのち、理解した内容に思考を重ね物事を判断していく必要がある。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (上記項目以外の場合は)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業で指示するプリントを事前に読み、感想を1000字程度で記入し授業に持参すること。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション ロシアってどんな国
- 第2講 ロシア経済の位置づけ①
- 第3講 ロシア経済の位置づけ②
- 第4講 ロシア経済の歴史と政治システム①
- 第5講 ロシア経済の歴史と政治システム②
- 第6講 旧ソ連諸国の経済①
- 第7講 旧ソ連諸国の経済②
- 第8講 ロシアと中国との経済関係
- 第9講 ロシアの労働人口
- 第10講 マクロ経済・産業構造①
- 第11講 マクロ経済・産業構造②
- 第12講 民営化と企業システム
- 第13講 国民の暮らし
- 第14講 開発と環境
- 第15講 ロシア極東地域

■フィードバックの要領

授業の感想やコメントに対して授業内でフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 出席率と授業での積極的発言や学習態度が非常に良い。中間レポートと試験の出来9割以上。

評価 A (89~80点) : 出席率良好、授業での積極的発言や学習態度が良い。中間レポートと試験の出来8割。

評価 B (79~70点) : 出席率8割、授業での積極的発言や学習態度まあ良い。中間レポートと試験の出来6~7割。

評価 C (69~60点) : 出席率7割、授業での積極的発言や学習態度は良い。中間レポートと試験の出来5割。

評価 F (59点以下) : 欠席が多く授業での積極的発言や学習態度が悪い。中間レポートと試験の出来4割以下。

■評価方法

授業内で毎回課す課題(プリントを読んだ感想):50%、授業への積極的態度や発言:25%、期末レポート:25%。

■留意点

新聞記事を積極的に読むことを推奨する授業である。

科目名 立志特講Ⅰ～Ⅲ (Aspiration Lecture on a Special Topic I～III)**サブタイトル** 「志」の実現のためのロードマップづくり**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

実社会で活躍する大人たちは、様々な経験を積み重ねて、自らを成長させ、社会において必要な存在になることで、安定した生活を確保している。大学での4年間は、大人となって実社会に飛び立つための滑走路であり、この4年間に、まず卒業後の進路を見いだし、それらにむかって加速をして、社会人として飛び立っていかなければならないのである。この講義では、多摩大学で学びのなかで醸成してきた「志」について、卒業を前に整理をして、教員による個別指導の下、その実現のための経路を「ロードマップ」としてとりまとめしていく。このとりまとめを通じて、社会人として飛躍していくために、自らの可能性と向き合い、「成長する自分」を創り上げるために、大学の卒業を前に、自分の「人格」を子どもモードから大人モードに切り替えを行うこと目指していく。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人育成

■到達目標

「志」を実現するためのロードマップをとりまとめる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

多摩大学で醸成した志の実現のためのロードマップをまとめ成長する自分を創り上げるために人格形成させる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (5人の教員によって実施するため、教員によってはAL技法が異なることがある。)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要です。

■授業の概要

- 第1講 1 大学生生活の振り返り(1)
- 第2講 1 大学生生活の振り返り(2)
- 第3講 2 自分の可能性と向き合う(1)
- 第4講 2 自分の可能性と向き合う(2)
- 第5講 2 自分の可能性と向き合う(3)
- 第6講 2 自分の可能性と向き合う(4)
- 第7講 2 自分の可能性と向き合う(5)
- 第8講 2 自分の可能性と向き合う(6)
- 第9講 2 自分の可能性と向き合う(7)
- 第10講 2 自分の可能性と向き合う(8)
- 第11講 2 自分の可能性と向き合う(9)
- 第12講 2 自分の可能性と向き合う(10)
- 第13講 2 自分の可能性と向き合う(11)
- 第14講 2 自分の可能性と向き合う(12)
- 第15講 3 ロードマップをとりまとめる

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 実現可能性の高いロードマップが完成出来た。

評価 A (89～80点) : 成長の道筋が概ねまとまったロードマップが作成出来た。

評価 B (79～70点) : さらなる考察が必要だが、一応、今後の目標が発見できた。

評価 C (69～60点) : 今後、具体性を伴うように見直しが必要だが、一応、目標は発見できた。

評価 F (59点以下) : 明確な目標の記載があるロードマップが完成できていない。

■評価方法

完成したロードマップ(評価割合100%)の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとめた後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ プレゼミ I (Pre-seminar I)

サブタイトル ▶▶▶ 「社会人マイナス四年生」のゼミ入門

担当教員 ▶▶▶ 専任教員、高瀬

対象学年 ▶▶▶ 1年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

多摩大学では、大学に入学した時点での学生諸君は、「大学一年生」ではなく、「社会人マイナス四年生」である。それは、諸君が4年後に、社会人になることを前提としているからである。したがって、社会から要求されるものを身につけることが、大学4年間の諸君のミッション（使命）である。では、「社会から求められるもの」とは何か。多摩大学は、これを総称して「問題解決力」と定義する。つまり、社会とは「問題」の塊そのものであって、社会で役割を担うこと（つまり就職ということ）は、「問題を解決することだ」と考えている。この授業で諸君に求められることは、1) 緊張感のある主体的意識、当事者意識を持って参加すること、2) 教員や仲間に対し、可能な限り積極的に「情報発信」をすること、3) 考えることと物事を進めることを、同時に行うのを厭わないこと。これらを通じて、4) 経営情報学を学び、問題解決能力を身につける4年間の学びの道筋の全体像を把握することである。

■講義分類

社会人力育成、初年次教育

■到達目標

①就業意識に基づいた4年間の学修イメージが確立すること。②学びの対象を主体的に見出せるようになること。③学びの成果に対する現実的期待を抱くことができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

「問題」の「発見・分析・解決」に必要なコミュニケーションスキルを習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク＝ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ●その他(協働作業)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

この講義では、自らの成長を促すため、講義や演習で学んだことをしっかり身につけるために復習に多くの時間を割く必要がある。この講義での学びを活かすためには、復習に概ね2時間程度の取り組みが必要です。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 コミュニケーション
- 第3講 多摩大学での学びを考える
- 第4講 問題解決の演習 (1)
- 第5講 問題解決の演習 (2)
- 第6講 問題解決の演習 (3)
- 第7講 問題解決の演習 (4)
- 第8講 問題解決の演習 (5)
- 第9講 問題解決の演習 (6)
- 第10講 問題解決の演習 (7)
- 第11講 問題解決の演習 (8)
- 第12講 志を考える (1)
- 第13講 志を考える (2)
- 第14講 学科選択説明会
- 第15講 ホームゼミ説明会

■フィードバックの要領

オフィスアワーによる面談やメール等によって、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 総合評価が 60 点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。

評価 F (不合格) : 総合評価が 60 点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

①すべてに出席すること。②積極的な受講態度。③クラス毎に指定された最終課題の提出。上記①②③の総合評価（100点満点で、配分は出席 50%、受講態度 30%、最終課題 20%）によって、成績評価を決定する。

■留意点

(1) 講義の中で課題を課す場合が多くあり、その課題提出が成績評価に結びつくため、講義を欠席すると単位取得に大きな影響を与えることとなるため、すべての回に必ず出席すること。(2) かならずパソコンを持参すること。それ以外の持参物や、予習等については、各担当教員の指示に従うこと。

科目名 プレゼミ II (Pre-seminar II)**サブタイトル** 「社会人マイナス四年生」のゼミ入門**担当教員** 専任教員、高瀬**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

秋学期に開講する「プレゼミII」では、自らの成長の方向性を見いだすことを中心テーマに、今問題になっている実践的な課題を題材にした「ゼミ形式による学び」を行うことで、問題解決力に磨きをかけていく。そして、見いだした方向性を2年次から所属する「ホームゼミ」の選択につなげていく。

■講義分類

社会人力育成、初年次教育

■到達目標

①就業意識に基づいた4年間の学修イメージが確立すること。②学びを対象を主体的に見出せるようになること。③学びの成果に対する現実的期待を抱くことができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

「問題」の「発見・分析・解決」に必要なコミュニケーションスキルを習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ●その他(協働作業)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

この講義では、自らの成長を促すため、講義や演習で学んだことをしっかり身につけるために復習に多くの時間を割く必要がある。この講義での学びを活かすためには、復習に概ね2時間程度の取り組みが必要です。

■授業の概要

- 第1講 問題解決の演習(1)
- 第2講 問題解決の演習(2)
- 第3講 問題解決の演習(3)
- 第4講 問題解決の演習(4)
- 第5講 問題解決の演習(5)
- 第6講 問題解決の演習(6)
- 第7講 問題解決の演習(7)
- 第8講 学園祭に参加する(1)
- 第9講 学園祭に参加する(2)
- 第10講 問題解決の演習(8)
- 第11講 問題解決の演習(9)
- 第12講 アクティブ・ラーニング祭に参加する
- 第13講 学科選択説明会
- 第14講 問題解決の演習(10)
- 第15講 問題解決の演習(11)

■フィードバックの要領

オフィスアワーによる面談やメール等によって、フィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):総合評価が60点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。

評価F(不合格):総合評価が60点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

①すべてに出席すること。②積極的な受講態度。③クラス毎に指定された最終課題の提出。上記①②③の総合評価(100点満点で、配分は出席50%、受講態度30%、最終課題20%)によって、成績評価を決定する。

■留意点

1) 講義の中で課題を課す場合が多くあり、その課題提出が成績評価に結びつくため、講義を欠席すると単位取得に大きな影響を与えることとなるため、すべての回に必ず出席すること。2) かならずパソコンを持参すること。それ以外の持参物や、予習等については、各担当教員の指示に従うこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 石川 晴子**サブタイトル** 英語・異文化コミュニケーション・地域社会活動**担当教員** 石川 晴子**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

石川ゼミは、英語、異文化コミュニケーション、地域社会活動をテーマに、自分の個性や持ち味を生かしながら地域社会、国際社会で社会貢献ができる人材を育てることを目標に活動しています。活動内容は、地域小学校の放課後子ども教室での英語活動、地域・国際交流イベント、学内イベントの企画・運営、英語スピーチ、プレゼンテーション、グループディスカッション、ムービー制作など多岐にわたります。学生はこれらの活動を通して体験的にチームワーク、コミュニケーション力、自主性を磨き、そこで生じる様々な問題の解決に取り組んでいます。また、そこで出会う子どもから社会人まで様々な背景を持つ人々との交流を通して、社会と自らの在り方について学んでいます。

■講義分類

社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

ゼミで行う学内、学外の様々な活動を通して、社会人に必要なスキルおよびマナーを身に着けます。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

学外・学内活動、グループワークを通して、対人間力および状況を的確にとらえ適切な行動をとることのできる力を身に着ける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

レポートの提出、発表準備、資料の作成、小学校訪問の準備等、その都度指示する。(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

第1講 オリエンテーション(ゼミの目標の確認と共有、活動内容・ルール説明等)

第2講 小学校放課後子ども教室におけるゼミ活動についてのオリエンテーション

第3講 効果的なプレゼンテーションの作り方

第4講 プレゼンテーション実践

第5講 発表用パワーポイント資料作成時に気を付けること

第6講 英語(自己紹介、初対面の人へのアプローチ法について学ぶ)

第7講 英語(速読の練習を通して、英語を読む力を身に着ける)

第8講 英語(一分間スピーチの作り方、例、実践)

第9講 英語(TOEICの概要と演習)

第10講 英語(スモールトーク)

第11講 国際交流イベント準備(グループでイベント企画のアイデアを出す)

第12講 国際交流イベント準備(アイデアをより具体的にする、資料等の作成)

第13講 英語によるプレゼンテーション準備

第14講 英語によるプレゼンテーション

第15講 まとめと振り返り

■フィードバックの要領

課題等に対して行う。

■評価基準

評価P(合格):課題への取り組みの総合点が60%以上である。

評価F(不合格):課題への取り組みの総合点が59%以下である。

■評価方法

毎回の出席を前提とし、課題への取り組み(100%)で評価します。

■留意点

科目名 ホームゼミ (Seminars) 出原 至道**サブタイトル** 実装技術の習得**担当教員** 出原 至道**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

このゼミナールは、社会に出て通用するシステム構築能力を身につけることを目的とする。ゼミナール開始時のスキルは特に必要としないが、未知の領域に対する旺盛な好奇心、自発的学習能力、平均的な社会性・コミュニケーション能力については既に身につけていることを求める。2年次では、まず、手法を指定して機能を実現する練習を行い、その後、オリジナルなアイデアを自力で組み上げる段階に進む。講義時間は週1回であるが、この時間は基本的に、それまでに行った研究の発表の場である。作業時間は各自が別に確保すること。発表の場では、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすることが求められる。作業はそれ以外の時間に各自行うことになる。積極的に外部に成果を応募・発表することを奨励する。目標とする代表的な場として、IVRC (日本)、Laval Virtual (フランス)、SIGGRAPH (アメリカ)、SIGGRAPH ASIA (日中韓など)がある。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

プロジェクトベースでシステム開発能力を持つ社会人として、社会性・人間性を含めて評価される。「大学で何を勉強したか」ではなく「大学で何を生み出したか」を語ることができる。共通の目的を持つ他国の学生との交流を通じて、単なる言語や文化的興味にとどまらない、高いレベルの国際意識を身につける。このうち、ホームゼミ1では、大学において実現する目標の計画を立て、必要なスキルを明確化する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

大学において実現する目標の計画を立て、必要なスキルを明確化する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(プログラムの実装)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

講義時間(原則週1回)は基本的に、それまでに行った研究の発表の場である。作業時間(毎回1.5時間以上)は各自が別に確保すること。発表の場では、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすること。

■授業の概要

第1講 研究計画の発表と議論を行う。

第2講 研究発表と議論

第3講 研究発表と議論

第4講 研究発表と議論

第5講 研究発表と議論

第6講 研究発表と議論

第7講 研究発表と議論

第8講 研究発表と議論

第9講 研究発表と議論

第10講 研究発表と議論

第11講 研究発表と議論

第12講 研究発表と議論

第13講 研究発表と議論

第14講 研究発表と議論

第15講 研究発表と議論

■フィードバックの要領

毎週、次週への課題を支持する。期末には、休暇期間中の目標を指示する。

■評価基準

評価 P (合格) : F 以外

評価 F (不合格) :

■評価方法

平常点(60%)・期末レポート(40%)(絶対基準)。ただし、期末レポートへの取り組みに応じて、期末レポートの評価の一部を平常点によって評価することがある。

■留意点

学生の到達レベル・意欲によって、別の課題を与えることがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 今泉 忠

サブタイトル ▶▶▶ データ分析

担当教員 ▶▶▶ 今泉 忠

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

近年、ビジネスにおける問題解決において、データにもとづく解決案提案は必須になってきている。また、当然、コンピュータを利用する場面が多くなってきている。本演習では、これを、「データ (もの)」という観点から見た場合のデータ分析法やモデル構成法について学ぶ。定量的データ処理能力および統計的分析手法を習得することを目標とする。統計的データ解析やデータマイニングや意思決定問題についても学ぶ。最終的には卒論の提出を行う。基礎知識の習得については履修者全員に必須とする。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

データに基づいて問題解決を行えるようになることが目標である。

- ・統計的データ解析
主として、多変量解析の分野での手法を学ぶ。回帰分析、主成分分析、判別分析について習得する。
- ・データプレゼンテーション
解決案提案のためのプロセスにおいて、グラフ、チャート、センテンスを利活用して提案できるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 考と判断【考え抜く力】 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

産業社会での出来事に関心を持ち、そこで発生するであろう問題や課題を発見したり、解決案をデータにもとづいて提案できる能力を修得する

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

- 講義 ●演習
 [個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()
 [ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()
 [グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ●KJ 法 ○マインド・マップ ○その他 ()
 [上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

表計算ソフトを使用するので、EXCEL のピボット計算を利用できるように、予習復習すること。(各 1.5 時間以上) また、統計ソフト R をインストールし、授業で使用できるようにすること。

■授業の概要

- 第1講 基礎知識の習得・学習するのに必要と考えられる基礎を学習する。
 第2講 基礎知識の習得・学習するのに必要と考えられる基礎を学習する。
 第3講 統計分析の基礎
 第4講 統計分析の基礎
 第5講 統計分析の基礎
 第6講 統計分析の基礎
 第7講 統計分析
 第8講 統計分析
 第9講 統計分析
 第10講 データの分析
 第11講 データの分析
 第12講 データの分析
 第13講 データの分析
 第14講 データの分析
 第15講 データの分析

■フィードバックの要領

ゼミ中でのリフレクションシートをもとにフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 統計的データの分析の基礎を理解して、実際のデータを分析できるかどうか。
 評価 F (不合格) : ゼミ活動への参加が低い場合、全回出席が原則である。

■評価方法

出席 50%、演習レポート 50%

■留意点

データコンペティションなど外部とのコンペティションに参加する。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 梅澤 佳子**サブタイトル** よい余暇のあり方は人を幸せにする**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本ゼミは文献研究とフィールドワーク、地域活動を3つの柱としています。3年間のゼミ活動を通じて、人生100年を豊かに生きるためのライフ・デザインの考え方を身につけ生活者としての視点、グローバルな視点を養い、課題解決能力を身につけることを目的としています。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス創造、顧客理解、地域ビジネス

■到達目標

①文章の読解力、理解力、表現力、②コミュニケーション能力、③コミュニティデザインの手法、④ビジネス創造力、プロジェクトマネジメントの手法を習得すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断【考え抜く力】

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会の発展に貢献する力

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (グループワーク)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

地域・企業・行政・教育機関等と連携して活動を行っている為、PJチーム毎にミーティング、外部団体との打合せ、事前準備、事前・事後の活動(企画書・報告書・議事録等の作成)の時間(各回1.5時間以上)を必要とします。

■授業の概要

- 第1講 ホームゼミナールの目的、目標、仕組みの理解
- 第2講 ゼミ生による地域プロジェクト紹介
- 第3講 プロジェクトマネジメントの手法について学ぶ
- 第4講 今年度の各地域プロジェクト活動計画の立案
- 第5講 プロジェクトの進捗状況報告
- 第6講 多摩ニュータウンについて学ぶ①
- 第7講 多摩ニュータウンについて学ぶ②
- 第8講 地域活動の発表に向けて
- 第9講 地域活動の発表に向けて
- 第10講 地域活動の発表に向けて
- 第11講 地域活動の発表に向けて
- 第12講 地域活動の発表に向けて
- 第13講 地域活動の発表に向けて
- 第14講 地域発表練習(最終)。
- 第15講 地域活動の振り返り

■フィードバックの要領

地域PBL型ALを通じて、常時、フィードバックを行います。

■評価基準

評価P(合格):地域連携型PLBへ積極的に参加し、積極的に役割を果たしていること。

評価F(不合格):ゼミや地域活動の参加状況が著しく悪い。

■評価方法

- ・時間割におけるゼミの出席は前提条件です。
- ・学内外におけるゼミ活動への参加 50%・課題提出 50%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 大森 拓哉

サブタイトル ▶▶▶ 心理情報学

担当教員 ▶▶▶ 大森 拓哉

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

生活する社会の中で、情報を的確に収集・分析することは必要不可欠である。本講義では人間行動の調査の方法の習得・データの収集・分析といった一連の流れを経験し、体得することを目的とする。同時に、人間行動のシミュレーションを各自がプログラムを作成することによって行う。最終的には、心理学、統計学、プログラミングの知識と技法を体得し、人間行動の理解とモデリング全般が行えることを目標とする。

■講義分類

ビジネスマネジメント、社会人育成、ビジネス ICT

■到達目標

人間行動全般の理解と、情報の処理方法、および物事の客観的な判断・意思決定ができること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

人間の情報処理の過程と仕組みを学び、高度な思考と判断能力を備える。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ●KJ法 ●マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

心理学・統計学の学習(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第2講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第3講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第4講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第5講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第6講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第7講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第8講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第9講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第10講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第11講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第12講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第13講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第14講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第15講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。

■フィードバックの要領

毎回の授業内において、すべての課題等に対し個別にフィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格): 全てのゼミ活動に出席し、全ての課題を提出すること。

評価F(不合格): 上記以外

■評価方法

出席点90%、課題10%

■留意点

科目名	ホームゼミ (Seminars) 加藤 みずき		
サブタイトル	心理学をベースとした研究法を学ぶ		
担当教員	加藤 みずき	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

心理学の基礎的な知識や、データのとり方・分析法など、研究活動に必要な基礎的な知識を習得する。また、先行研究を参考にしながら個人あるいはグループで研究計画を立て、調査を実施しデータを実際に取って分析し、結果を解釈しまとめることを目指す。

■講義分類

ビジネスICT、社会人力育成

■到達目標

基礎的な心理学の知識に触れながら、主に調査法について学び、それらを活用した先行研究について理解できるようになる。統計的な分析法について学び、先行研究を参考にした調査計画に沿って調査データを収集し、適切に分析して結果を導き出すことができるようになる。得られた結果について解釈し、それをわかりやすく資料にまとめ他者に伝えることができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

自分の興味・関心に沿った研究計画を立案できるようになる。得られたデータについて目的に沿って分析し、結果を解釈できるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習+復習1.5時間。シラバス記載の事前、事後学習ポイントや授業で指示することについては調べてくることが望ましい。また、調査実施や分析・発表準備などは授業時間外でも行うこと。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 心理学における調査①
- 第3講 心理学における調査②
- 第4講 調査法について学ぶ①
- 第5講 調査法について学ぶ②
- 第6講 先行研究を参照し調査計画を立てる①
- 第7講 先行研究を参照し調査計画を立てる②
- 第8講 調査準備と分析方法の確認
- 第9講 調査実施と進捗状況報告①
- 第10講 調査実施と進捗状況報告②
- 第11講 調査データの分析と解釈①
- 第12講 調査データの分析と解釈②
- 第13講 調査結果の最終報告準備
- 第14講 最終報告会
- 第15講 振り返りと総括

■フィードバックの要領

基本的に授業内、もしくは翌週授業においてフィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):各評価対象において、到達すべき水準に達している。

評価F(不合格):本講義で到達すべき水準に達していない。

■評価方法

平常点(50%):授業内課題への記入・提出など含めた参加点発表(50%):研究結果の発表点(研究の実施とデータ分析、結果の解釈などを含む)

■留意点

グループでの活動を予定しているため、授業には積極的な参加を行うことが望ましい。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 金 美德**サブタイトル** 「経営・起業」と「情報・戦略」**担当教員** 金 美德**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

①経営の知識や企業・業界・情勢の情報の収集・分析を通じて、就活力・働く力・経営戦略力・起業力を身に付ける。②学生が興味のあるテーマについて調べたり、関心をもてそうなテーマを探し出し、それを自らの専門・得意・強みとする。③プレゼン力、ディスカッション力、コミュニケーション力などのスキルを習得する。④ゼミ合宿、企業訪問、社会人との交流などの学外学習や国内外のフィールドワーク（現地調査）を通じて、多くの社会体験やネットワーク作りを行う。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

2年時は、各自の関心のあるテーマ・キーワード・業界・企業を探し出す過程を通じて、情報収集力や現地調査力を身に付ける。3年時は、各自のテーマについて分析力やグループディスカッション力を身に付ける。4年時は、各自のテーマについて伝える・表現する・プレゼンする力を身に付ける。また、得意や強みを明確にし、専門分野を確立する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

学生が設定したテーマにしたがって課題を発見し、その課題を体系的かつ実践的に解決できる課題解決力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (インタビューと他已紹介)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各自のテーマにしたがって書籍・資料・ニュース・時事情報の収集や現地調査を行う。(各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習)

■授業の概要

第1講 ガイダンス

第2講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第3講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第4講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第5講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第6講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第7講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第8講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第9講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第10講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第11講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第12講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第13講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第14講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

第15講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

■フィードバックの要領

レポートの報告や論文作成の進捗状況にしたがってフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 出席 40%、報告 30%、ディスカッション 30%の合算点が 60%以上の場合、合格とする。

評価 F (不合格) : 出席 40%、報告 30%、ディスカッション 30%が 59%以下の場合、不合格とする。

■評価方法

出席 40%、報告 30%、ディスカッション 30%の割合で評価する。また、学外学習に参加した場合に加点する。

■留意点

ホームゼミでは、3年間、大学生生活、学修、専門教育、留学、進路・就職・人生などの指導を行う。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 清松 敏雄		
サブタイトル	企業の会計情報の作成と利用		
担当教員	清松 敏雄	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

ホームゼミナールでは、①就職までの間の自己の成長計画、その修正を繰り返す習慣付け、②会計情報の作成方法の理解と実践(日商簿記検定の受験)、③会計情報の利用方法の習得、④海外ゼミ合宿などを通じた視野の拡大、の4点を目的としている。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、ビジネスマネジメント

■到達目標

①自己の成長計画、その実践、その修正を繰り返す習慣を付けること、②会計情報の作成方法を理解し、日商簿記検定などに積極的にチャレンジすること、③会計情報の利用方法を習得すること、④海外ゼミ合宿などを通じて視野を拡大すること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

簿記学習や会計情報の分析を通じて、現実の企業行動における課題の発見能力や、その対処に必要な思考能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ●その他(case)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業には前回授業時に示した課題をおこなった上で参加すること。(1.5時間以上)

■授業の概要

第1講	会計情報の作成と利用
第2講	会計情報の作成と利用
第3講	会計情報の作成と利用
第4講	会計情報の作成と利用
第5講	会計情報の作成と利用
第6講	会計情報の作成と利用
第7講	会計情報の作成と利用
第8講	会計情報の作成と利用
第9講	会計情報の作成と利用
第10講	会計情報の作成と利用
第11講	会計情報の作成と利用
第12講	会計情報の作成と利用
第13講	会計情報の作成と利用
第14講	会計情報の作成と利用
第15講	会計情報の作成と利用

■フィードバックの要領

毎回のゼミの中でディスカッションにおける発言等についてフィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):到達目標に示した①~④について実践すること

評価F(不合格):授業に参加していない場合及び到達目標に示した①~④を実践していない場合

■評価方法

出席(積極的に議論に参加していること)100%。その他(ゼミ継続の条件)はゼミの時間内に説明する。

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 久保田 貴文

サブタイトル ▶▶▶ データサイエンティストの養成

担当教員 ▶▶▶ 久保田 貴文

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

世の中にある様々な課題をビッグデータの解析により、さらに統計的に思考することにより解決することを目的とするデータサイエンスのゼミである。手法としては、以下を想定する。・データの視覚化・空間データと地図との連携による可視化・SNS データを用いたネットワーク分析・スマホアプリや Web アプリの作成

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

自らデータ解析を行うことにより、世の中のさまざまな問題について解決を行うことが出来る。さらに、その方法について説明し、データやデータ解析の結果もしくは作成したアプリケーションによってその正当性を説明し説得することが出来る。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

データサイエンスに関する基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関連性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題にデータ分析の結果をエビデンスとして対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎授業後には学修した内容をまとめ、また次回の学修内容についてデータ解析の準備を進めること。(1.5 時間+ 1.5 時間)

■授業の概要

第1講 オリエンテーション

第2講 データ分析のスキル

第3講 データ分析のスキル

第4講 データ分析のスキル

第5講 データ分析のスキル

第6講 データ分析のスキル

第7講 データ分析のスキル

第8講 中間の報告会

第9講 データ分析の結果をプレゼン

第10講 データ分析の結果をプレゼン

第11講 データ分析の結果をプレゼン

第12講 データ分析の結果をプレゼン

第13講 データ分析の結果をプレゼン

第14講 データ分析の結果をプレゼン

第15講 最終報告

■フィードバックの要領

ゼミの内容について、プレゼンや報告書のフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : データ解析により、さまざまな問題について解決できる。

評価 F (不合格) : データ解析により、さまざまな問題について解決できない。

■評価方法

ゼミ活動により作成した文書もしくはプレゼン資料 (100%)。なお 15 回の出席 (もしくはそれと同等の活動) および次のいずれか 1 つを必須とする。

・統計グラフコンクールに出展

・SRC で報告

■留意点

特になし

科目名 ホームゼミ (Seminars) 小西 英行**サブタイトル** マーケティング基礎**担当教員** 小西 英行**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本ゼミでは、マーケティングの基本をしっかりと学び、各種プロジェクトを通じて学んだマーケティングの実践を通じて、応用力を養います。小西ゼミの3つの柱=①ビジネス系資格取得、②社会人基礎力、③ゼミ生の親睦⇒就職活動に役立つスキルを磨きます!!
 ①ビジネス系資格取得：日商流通マーケティング(販売士)検定・日商簿記検定・秘書検定・ITパスポート、宅地建物取引士⇒合格に向けサポートします!! ②社会人基礎力(ア)商工会議所等主催の、まちづくりコンペティションへの参加⇒企業とのタイアップによる、製品企画、販売実習など (イ) 大学祭模擬店参加、③ゼミ生の親睦 (ア) 春・夏のゼミ合宿 (イ) 各種親睦会：新ゼミ生歓迎会、忘年会、新年会、カラオケ、ボーリング etc

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

マーケティングに関する文献を毎年1冊以上読破して「マーケティング基礎知識」を理解するとともに、まちづくりコンペや大学祭模擬店等を通じて「マーケティング実践力」を身につけることを目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

マーケティングの基礎知識に基づいて、ビジネス環境を理解し、判断することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

テキスト学習及びフィールドワークそれぞれにおいて、予習1時間以上、復習1時間以上が必要

■授業の概要

- 第1講 マーケティングとは何か
- 第2講 顧客価値と顧客満足
- 第3講 マーケティング戦略の構図
- 第4講 マーケティング環境の分析
- 第5講 消費者情報処理
- 第6講 購買行動
- 第7講 マーケティング・リサーチ
- 第8講 製品戦略
- 第9講 ブランド戦略
- 第10講 価格戦略
- 第11講 流通戦略
- 第12講 マーケティング・コミュニケーション
- 第13講 サービスマーケティング
- 第14講 リレーションシップ・マーケティング
- 第15講 ソーシャル・マーケティング

■フィードバックの要領

メールや個人面談にてフィードバックを行います。

■評価基準

評価P(合格)：講義・合宿・模擬店等の全員活動への100%参加(欠席分はレポート等の課題)

評価F(不合格)：講義・合宿・模擬店等の全員活動への参加が100%未満(欠席はレポート等の課題)

■評価方法

出席(100%)

■留意点

- ・私のゼミでは、これまでの成績は不問です。
- ・よく遊びよく学ぶ、個性的な学生の参加を期待します。
- ・3年間の大学生活を、とことん充実させましょう!!

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 小林 英夫

サブタイトル ▶▶▶ 組織マネジメントと企業家精神

担当教員 ▶▶▶ 小林 英夫

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

本ゼミの目的は、ゼミ活動を通じてゼミ生のキャリアの礎を築いていくことである。本ゼミは「組織マネジメント」を対象領域とする。その中で、「組織行動」と「企業家精神」の2つの分野を基本の研究対象としているが、人が社会で生きていく限り様々な組織との繋がりは欠かせないものであり、何らかの創造的活動を行っている。従って研究テーマはゼミ生の関心に応じて幅広く設定することを可能とするが、設定したテーマに対しては真剣に取り組むことを要求する。また、大学時代は人格形成においても人間関係形成においても非常に重要な時期である。ゼミはコミュニティとしての役割を果たすものであり、社会活動を学ぶ場としても位置付けられる。大学生生活、ゼミ活動、設定したテーマに対する取り組みを通じて、良き人生を送るための土台を築くことを本ゼミの狙いとする。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

- ・社会人としての仕事をしていく際に大切な常識と物事に対する真摯な取り組み姿勢を身に付ける。
- ・社会人として、課題を発見し問題解決を行っていくための方法、理論、科学を身に付ける。
- ・キャリア選択の判断基準ともなり、その選択肢を広げることに役立つ知識を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

知識獲得や問題解決の前提となる取り組み姿勢としての真摯さを重視して習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

事前アサインされた課題項目に対し学習してくるとともに、発表資料を準備しておくこと。ゼミ後には、発表内容への教員および他ゼミ教員からのコメントを取りまとめ、次回発表資料改善に活かすこと。(1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 ゼミ活動の計画策定とメンバーの相互理解
- 第2講 研究計画書の立案と更新
- 第3講 ゼミ研究活動
- 第4講 前講に同じ
- 第5講 前講に同じ
- 第6講 前講に同じ
- 第7講 前講に同じ
- 第8講 前講に同じ
- 第9講 前講に同じ
- 第10講 前講に同じ
- 第11講 前講に同じ
- 第12講 前講に同じ
- 第13講 前講に同じ
- 第14講 前講に同じ
- 第15講 前講に同じ

■フィードバックの要領

ゼミナール活動全般に対し毎回のクラス内でコメントを行う。

■評価基準

評価P(合格): 下記配点で60点以上を合格とする。

評価F(不合格): 下記配点で60点未満を不合格とする。

■評価方法

ゼミへの出席、ゼミ活動への積極的な取組姿勢と建設的意見や質問によるゼミの品質向上への貢献、ゼミにおける発表内容や提出物の質を評価する。出席(30%)、ゼミ活動への貢献(30%)、ゼミ発表、提出物(40%)

■留意点

なし

科目名 ▶ ホームゼミ (Seminars) 齋藤 S. 裕美

サブタイトル ▶ 情報倫理について考える

担当教員 ▶ 齋藤 S. 裕美

対象学年 ▶ 2年生以上

区分 ▶ 春・秋学期

■講義目的

現代社会において、情報倫理にかかわる問題の解決は急務の課題となっている。このゼミでは、情報モラルやセキュリティ、メディアについて、知識の修得、問題意識の醸成と問題の発見・分析、問題解決方法の考察を行うことを通じて、各個人の知的な判断に基づいて内的規制・自己統制が行なえるようにすること、すなわち知的論理に基づく判断能力を習得できること、情報社会に必要な倫理的態度とは何かを理解することを目標とする。また、ゼミを進めていく際に用いるグループディスカッションやブレインストーミング、KJ法、アンケート調査、資料調査、データ分析、レポート作成などを通じて、社会に出て必要となる基礎的理論や考える手法、文章力を身につけることも目標のひとつである。また、2月にはゼミ内研究発表会において、2、3年生はグループ研究の成果を、4年生は卒業研究の成果を発表する。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、ビジネス ICT

■到達目標

①情報倫理の分野に関する知識の習得 ②情報倫理の分野に関する問題意識の醸成、問題発見・分析、問題解決方法の考察 ③グループディスカッション、ディベート、ブレインストーミング、KJ法、アンケート調査、資料調査、データ分析、論理的文章の論述ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

情報倫理に関わる問題に対し、問題を発見し、その原因を分析し、問題解決に向けた自己の考えを他者に対して説明する能力を養う。また他者との意見交換を通じて新たな考えや解決方法を生み出せる能力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイク＝ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●Buzz Group ●KJ法 ○マインド・アップ ●その他(ブレインストーミング、ブレインライティング、プレゼンテーション)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

報告準備、レジュメ作成、発表資料作成等適宜指示する課題について取り組むこと。(授業前後併せて1.5時間以上学習)

■授業の概要

第1講 ゼミで学修する内容、到達目標など

第2講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第3講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第4講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第5講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第6講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第7講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第8講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第9講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第10講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第11講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第12講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第13講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第14講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

第15講 テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。

■フィードバックの要領

活動の単元ごとに個別または全体に対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格): ・積極的参加、意欲的取組み・課題、レポートの内容、記述方法上記で60点以上

評価F(不合格): 上記評価で評価点60点未満

■評価方法

期末レポート40%、期中のゼミ活動の状況、レポートや課題、発表など60%に出席状況などを加味して総合的に評価する。

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 彩藤 ひろみ

サブタイトル ▶▶▶ 3DCG ゼミ

担当教員 ▶▶▶ 彩藤 ひろみ

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

3DCG をメインに、マルチメディアのスキルを高め、自己表現の手段として使えるようにする。また、プロジェクトを企画実践することにチャレンジする。個人発表もグループ発表も恐れなく、こなせるようになってもらいたい。キーワードは次のとおり。問題解決のための科学ビジネス ICT クリエイティブデザインユーザエクスペリエンスアプリ開発 IoT (INTERNET OF THINGS)

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

3DCG 技術以外の何らかの「スペシャリスト」になること。資格試験はいろいろあるので、各自目標をもって精進すること。3DCG 検定、色彩検定、マルチメディア検定

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前には、Blender ソフトウェアを起動し、使い方に習熟してくること 授業後は、プロジェクトの完成のために自ら努力すること (授業前後併せて 1.5 時間以上学習)

■授業の概要

- 第1講 アイスブレイク
- 第2講 プロジェクト発表
- 第3講 クラウド利用方法、SNS 利用方法ゼミバージョン
- 第4講 ミニ課題①相互評価会
- 第5講 モーションコントロール
- 第6講 ポーズづくりと物理演算シミュレーション
- 第7講 キネクトと 3DCG の関係を理解する
- 第8講 プロジェクト中間成果会の準備
- 第9講 プロジェクト中間発表
- 第10講 3D プリンタを使う
- 第11講 ミニ課題②成果発表
- 第12講 Unity ゲームアプリの作成
- 第13講 プロジェクト成果報告会
- 第14講 最終発表会準備
- 第15講 成果発表会

■フィードバックの要領

ゼミ活動については、すべての努力と成果に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 目標に沿って、よく努力したかどうか。
評価 F (不合格) : 無断欠席の積み重ね。目標に到達できない。

■評価方法

出席および取り組み態度 50%、課題や発表など定められたアウトプット 50%程度の割合で、総合的に評価する。学期ごとに 2 回の発表会があり、そこでの作品発表を重視する。

■留意点

・普段から積極的にパソコンに親しみ、表現することが好きな人。使う楽しみを知っている人を求める。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 佐藤 洋行**サブタイトル** クラウドサービスとデジタルマーケティング**担当教員** 佐藤 洋行**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

この先、企業のマーケティング活動で必ず重要なテーマとなってくる「クラウドサービス」と「デジタルマーケティング」。本ゼミでは、これら2つに関する知識と経験を得るべく、座学と実践を行う。グーグル・アマゾン・マイクロソフト、これら3社のクラウドサービスには、名前は違えども同じような機能が揃っているため、まずはそれらの機能を理解するところから始める。その後、実際に小売企業からデータを受託し、クラウド環境で分析を行い、施策を提言する機会をもらう。最終的には、これらの学習を通して、クラウドサービスとデジタルマーケティングに関するレポートをまとめてもらう。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、社会人育成、ビジネス ICT

■到達目標

物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしていける巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動していける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになるため、クラウドサービスとデジタルマーケティングについて実践的知識を獲得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

データ分析とその結果のプレゼンテーションにより、データによる周囲の人々の説得に関する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ●マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

2年生：課題図書を読み、レポートの作成(各授業毎1.5時間以上の予習・復習) 3年生：クラウドサービスを利用した作業を宿題として課す(週3～4時間) 4年生：卒業論文の作成(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

第1講	デジタルマーケティングの基礎①	概要編	1/2
第2講	デジタルマーケティングの基礎①	概要編	2/2
第3講	デジタルマーケティングの基礎②	広告編	1/2
第4講	デジタルマーケティングの基礎②	広告編	2/2
第5講	デジタルマーケティングの基礎③	CRM編	1/2
第6講	デジタルマーケティングの基礎③	CRM編	2/2
第7講	クラウドサービスの基礎①	概要編	1/2
第8講	クラウドサービスの基礎①	概要編	2/2
第9講	クラウドサービスの基礎②	実践編	1/2
第10講	クラウドサービスの基礎②	実践編	2/2
第11講	データ分析の基礎①	SQL基礎知識編	
第12講	データ分析の基礎②	SQL実践編	1/2
第13講	データ分析の基礎②	SQL実践編	2/2
第14講	まとめと復習		1/2
第15講	まとめと復習		2/2

■フィードバックの要領

授業中に適宜フィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格)：クラウドサービスとデジタルマーケティングについて、意見をまとめられる

評価F(不合格)：クラウドサービスとデジタルマーケティングについて、理解できていない

■評価方法

出席50%、授業内で作成するレポート30%、授業外で課す輪読20%

■留意点

必ずPCを持参すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 椎木 哲太郎

サブタイトル ▶▶▶ 社会経済政策 公共政策 歴史

担当教員 ▶▶▶ 椎木 哲太郎

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

社会経済政策、グローバル近現代史の視点から現代の社会・経済を分析し、直面する諸課題の解決に向けての方途を考究する。毎週のゼミでは、経済、産業・企業分析、時事・政治問題を中心として、プレゼンテーションと討論を通じたコミュニケーション能力の向上に主眼を置き、小レポートの添削による文章表現力強化を図る。そして、歴史を研究する。 *詳細は2016年度春学期、「ホームゼミⅢ」を参照

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバル

■到達目標

ソシオ・エコノミストの眼と、企画・構想力を身に付ける。グローバルな視点とローカルな視座を合わせ持ち、(地球)社会の動向に対する理解を深め、考え抜く力を涵養し、諸課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力、組織目標の達成に貢献する力を培い、高い志を抱いて社会の発展に積極的に関与していくことができるようにしたい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

幅広い社会的関心を持ち、課題解決に向けた政策論的能力を修得することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他(グループ討論)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎週1.5時間以上の課題に副った十分な予習・復習を必要とする

■授業の概要

- 第1講 年間計画を立てる
- 第2講 研究計画書の検討
- 第3講 事業環境としての社会・経済(1)
- 第4講 事業環境としての社会・経済(2)
- 第5講 事業環境としての社会・経済(3)
- 第6講 歴史研究
- 第7講 問題解決のための社会経済政策(1)
- 第8講 問題解決のための社会経済政策(2)
- 第9講 問題解決のための社会経済政策(3)
- 第10講 中間発表
- 第11講 文献研究(1)
- 第12講 文献研究(2)
- 第13講 事例研究(1)
- 第14講 事例研究(2)
- 第15講 最終報告

■フィードバックの要領

レポート等を添削し、返却する。

■評価基準

評価P(合格):ゼミへの取り組みが優れている、良い

評価F(不合格):ゼミへの取り組みが不十分

■評価方法

平常点80%、最終報告20%

■留意点

欠席する場合は、当日昼休みまでに必ずメールで連絡すること

科目名	ホームゼミ (Seminars) 志賀 敏宏		
サブタイトル	ホームゼミ		
担当教員	志賀 敏宏	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

イノベーションで志を実現し、自分とまわりの人々を幸せにする人間となる。キャリアを考える。そのために、「イノベーション＝創新」を良く理解し、実現するための知識、意欲を身につける。結果として、自然に就職力、社会人力の高い人材となる。

■講義分類

顧客理解、ビジネス創造、社会力育成

■到達目標

①面白いと思えるテーマを見つける。②それについて、調べ、課題をみつけて、解決のアイデアを出す。③調べたこと、アイデアを、「社会人レベル」でプレゼンテーションする。以上により基礎学力、課題発見力、問題解決力、コミュニケーション力を高める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

イノベーションに関する関心を高め、イノベーションに関する情報理解を深め、イノベーションに取り組む意欲を高める。イノベーションテーマの課題を発見し、解決のための創造力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ●その他(プレゼンテーション)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回の活動記録、次回に向けての「調べもの」、プレゼン資料等の準備。時間の目安は 1.5 時間。課題に対してはフィードバックを行う。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：当学期活動の基本方針や留意点について講義と意見交換
- 第2講 班・人ごとの活動計画立案と、ゼミ全体での「情報収集・処理・発表方法」等の学習 1
- 第3講 班・人ごとの活動計画立案と、ゼミ全体での「情報収集・処理・発表方法」等の学習 2
- 第4講 活動計画立案と全体学習
- 第5講 活動計画立案と全体学習
- 第6講 学外学習 (そのための手配含む) と学習結果のまとめ
- 第7講 学外学習 (そのための手配含む) と学習結果のまとめ
- 第8講 学外学習 (そのための手配含む) と学習結果のまとめ
- 第9講 学外学習 (そのための手配含む) と学習結果のまとめ
- 第10講 学外学習 (そのための手配含む) と学習結果のまとめ
- 第11講 活動のまとめとプレゼン準備
- 第12講 活動のまとめとプレゼン準備
- 第13講 活動のまとめとプレゼン準備
- 第14講 活動のまとめとプレゼン準備
- 第15講 期末プレゼン

■フィードバックの要領

フィードバックは、口頭 (授業中)、文書添削等 (レポート、ノート) で行います。

■評価基準

評価 P (合格)：下記評価方法・配分で 60 点以上

評価 F (不合格)：下記評価方法・配分で 59 点以下

■評価方法

出席点 50 点。日常活動の努力と期末プレゼンへの貢献・成果 (到達目標への達成度で評価) 50 点。

■留意点

意欲、好奇心、行動力を最優先し、その上で工夫を大切にせるゼミです。面白いことのためなら「努力を惜しまない人」を求めます。そういう人が立派な社会人として羽ばたけるようになることを約束します。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 下井 直毅

サブタイトル ▶▶▶ 経済学を学ぶ

担当教員 ▶▶▶ 下井 直毅

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

この講義では、産業社会における基礎的な政治経済について学ぶ。その際、時事的な経済問題を取りあげ、経済学的に捉えて理解することをめざす。この演習を通じて、経済の表面的な動きに惑わされることなく、変化の本質を見る目が育ち、物事を考える力がついて問題解決ができるようになることをめざす。

■講義分類

ビジネス環境理解、グローバルビジネス、社会人力育成

■到達目標

経済学的なものの考え方の修得をめざす。Word、Excel (マクロ関数を含めて) 等のソフトを活用できるようになることをめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

指定する書籍や論文を事前に読んでおくこと。その内容の復習と次回の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要

- 第1講 日本経済の歩み (I)
- 第2講 日本経済の歩み (II)
- 第3講 日本経済の成長 (I)
- 第4講 日本経済の成長 (II)
- 第5講 日本の経済政策 (I)
- 第6講 日本の経済政策 (II)
- 第7講 世界経済の歩み (I)
- 第8講 世界経済の歩み (II)
- 第9講 世界経済の成長 (I)
- 第10講 世界経済の成長 (II)
- 第11講 演習 (発表) (I)
- 第12講 演習 (発表) (II)
- 第13講 演習 (発表) (III)
- 第14講 演習 (発表) (IV)
- 第15講 演習 (発表) (V)

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : セミナールに積極的に参加し、経済学的なものの考え方を修得できている

評価 F (不合格) : セミナールへの参加意欲が乏しく、経済学的なものの考え方が修得できていない

■評価方法

ゼミナールへの参加 (100%)

■留意点

科目名 ホームゼミ (Seminars) 杉田 文章**サブタイトル** スポーツやレジャーのマネジメントを通じて、社会に貢献する方法を模索する**担当教員** 杉田 文章**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

この演習の目的として、2つのことをかかげたい。第1は、レジャーやスポーツ分野の職業を志望する学生を前提に、これらの分野で提供される製品(財やサービス)のうちの何を大切にすべきか、またそのためには、レジャー産業に関わるためにはどのような能力や知識が必要かについての全体的認識を育ててもらうことである。第2は、レジャー産業分野における経営を一つの社会現象と捉え、経済現象の一つのケーススタディとして、学習していくことである。これらの目的を達成するために、以下のような方法、内容によって演習を行う。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造、社会人育成

■到達目標

ビジネスに従事する人として社会に対する行為的な態度と理解を持ち、社会に貢献する意欲や能力を持って社会に出ることが、最終的な到達目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会への理解、洞察と、これに基づく意見表明、他者との調整などの力をはぐむことを強く意図します。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

自分のメインテーマとなるものを発見し、課題を構造化し、他者にこれを説明できるようになるために、論理的整理と、これをプレゼンテーションする諸技法について学んでいく。(予習・復習1.5時間以上)

■授業の概要

第1講 ICE BREAK

第2講 研究・プロジェクト方法論①

第3講 研究・プロジェクト方法論②

第4講 研究・プロジェクト方法論③

第5講 研究・プロジェクト方法論④

第6講 研究・プロジェクト方法論⑤

第7講 研究・プロジェクトの実行①

第8講 研究・プロジェクトの実行②

第9講 研究・プロジェクトの実行③

第10講 キャリア学習①

第11講 キャリア学習②

第12講 キャリア学習③

第13講 プロジェクト例(フットサルのプロモーション)

第14講 プロジェクト例(フットサルのプロモーション)

第15講 外部への発表とその振り返り、総括

■フィードバックの要領

課題に対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):以下の条件を満たした場合、P評価とする。

- ①ゼミの目的を理解し、それに沿った活動を実践すること。
- ②①により、社会人の基礎力を持った人材と認められる資質を持つ方向に「成長」していること。
- ③毎回のゼミへの参加。
- ④年2回(9月後半、1月後半または2月前半)の、ゼミ内合同研究発表。
- ⑤SRCへの発表。
- ⑥(4月秋学期)卒業論文の執筆、提出、発表。

評価F(不合格):上のいずれかの条件を満たさなかったと認められた時、F評価とする。

■評価方法

評価項目①～⑥をすべて満たした場合にPとする。総合評価となる。

■留意点

ゼミによる学習は、講義よりもより主体的、積極的な取り組みが重要となる。当事者意識を持って、同志となった他のゼミ生と互いに影響し合って成長するという強い意思を持った(またはそうなりたく強く望んでいる)学生の参加を希望します。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 丹下 英明**サブタイトル** 「グローバル化と地域産業・企業」研究室**担当教員** 丹下 英明**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本ゼミでは、地域産業や中小・ベンチャーについて、研究していきます。具体的には、「グローバル化と地域産業・企業」を主なテーマとして、皆さんと学んでいきます。グローバル化が進む中で、地域産業や企業は、大きな変革を求められています。海外直接投資によって海外に進出する企業もあれば、国内からの輸出で海外市場開拓を目指す企業もあります。インバウンドによって需要が増加している地域産業もあれば、海外製品との競争激化によって、厳しい状況にある地域産業もあります。本ゼミでは、こうしたグローバル化によって、地域産業や中小・ベンチャー企業が直面する現状や課題を分析し、地域ビジネスやグローバルビジネスの今後の方向性を考えていきます。そのため、文献調査だけでなく、実際の現場に出て調査することを重視します。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

地域産業や中小・ベンチャー企業が直面する問題を自らの足で調べて発見し、その課題に対する解決策を提示する問題解決力を獲得することを目指します。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ●KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習：ゼミで議論する企業や地域について、インターネットなどで概要を調べる(1.5時間)。復習：ゼミでの議論を踏まえて、報告書を作成する(1.5時間)。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション(1)

第2講 オリエンテーション(2)

第3講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第4講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第5講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第6講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第7講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第8講 フィールドワーク～地域産業・中小ベンチャー企業研究～

第9講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第10講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第11講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第12講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第13講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第14講 フィールドワーク～地域産業・中小ベンチャー企業研究～

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

報告書など成果物に対して、講義内でコメントを行う。

■評価基準

評価P(合格)：学外活動を含めたゼミ活動に主体的に参加し、問題解決力を獲得できた。

評価F(不合格)：学外活動を含めたゼミ活動を5回以上無断欠席するなど、ゼミ活動に貢献できなかった。

■評価方法

学外活動を含めたゼミ活動への出席(50%)、積極的な発言を含めたゼミ活動への貢献度(50%)

■留意点

・積極的に現場に出て、課題を自ら発見し、解決に向けて行動してください。ゼミのメンバーと一生仲良くし、人脈を築いてください。知識だけでなく、実際の問題解決力や思考力を身につけてください。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 趙 佑鎮**サブタイトル** 「環境と経営」の総合的理解 / マーケティング知識と大局観の涵養**担当教員** 趙 佑鎮**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本演習では「マーケティング」、「経営組織論」、「ベンチャー企業経営」、「流通」、「教養と歴史観」をテーマとして「環境と戦略」の具体的なケースを扱いながら企業経営の現実を理解することを目的とする。最前線事例としての具体的なケースをもとにグループディスカッション及び問題解決に関連するプレゼンテーションを通じて、経営における「智者は未萌にみる」とは何かを互いに意識できること（学生も教員に気づきを与える）を期待するものである。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

「環境と経営」の総合的理解・「マーケティング」・「ベンチャー企業経営」・「経営組織論」の3つのテーマにおける基礎知識の理解・学生と教員、ゲスト講演者（経営者等）との活発な発言、ディスカッションを通じてのコミュニケーション力の向上・教養知識と歴史観の涵養

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

マーケティング知識と大局をみる教養・歴史観の涵養を通じて、社会の問題発見と解決に関与していく高い志と社会変革への関心を確立する

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ●KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

ケーススタディー資料を授業前に読んでくる。授業前に同じグループの学生がゼミ時間外でミーティングし、協力してWORD,POWERPOINTを用いてレポート、プレゼン・発表資料をつくってこること（1.5時間以上学習）。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション、ケーススタディー・ディベートとは

第2講 キャリアとは

第3講 やる気が出ることは、動機付け・官僚制

第4講 個人の自己実現とプロジェクトドライブ制度

第5講 松下幸之助と松下イズム

第6講 マーケティングコンセプトの実践

第7講 新製品開発のマーケティング

第8講 マーケティング組織論

第9講 流通とは何か

第10講 チャンネルの組織化とパワー関係

第11講 大規模小売業のケーススタディー

第12講 中小小売商業の問題

第13講 流通と公共政策

第14講 論文の書き方

第15講 総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価P（合格）：良好な出席とレポート・プレゼン資料提出、「環境と経営」の総合的理解

評価F（不合格）：低調な出席率、レポートの未提出、不誠実な受講態度の結果による不合格

■評価方法

出席（60%）＋授業態度（20%）（グループディスカッションとプレゼンテーション）＋小テスト（10%）＋レポート（10%）

■留意点

無断欠席は絶対不可

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名	ホームゼミ (Seminars) 中庭 光彦		
サブタイトル	地域政策・観光まちづくり研究室		
担当教員	中庭 光彦	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

本ゼミナールは観光地域経営を中心に、地域政策の分析・企画を専門とするゼミです。人口減少社会で、地域の魅力を生み出す企画方法を身につけるために、現場を調査し、多くの人にインタビューを行い、討議を通して問題解決の報告書をつくり、提案力を身につけます。

■講義分類

地域ビジネス

■到達目標

① 1年間でインタビュー5件(グループで) ② 1年間で報告書1本執筆(グループで) ③ 1年間でプレゼン10回(人・グループで)

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

地域分析の基本的学力を身につけ、地域課題の把握と、課題解決の提案の方法、さらにはプレゼンテーション、討議、文章化能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ●KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

前日に配布した資料とノートを理解してくること。(1.5時間以上)

■授業の概要

- 第1講 ゼミの進め方
- 第2講 各研究会毎に調査計画書作成①
- 第3講 予備調査①
- 第4講 予備調査②
- 第5講 各研究会毎に調査計画書作成②
- 第6講 各研究会毎に調査計画書作成③
- 第7講 調査計画発表会
- 第8講 進捗状況報告①
- 第9講 進捗状況報告②
- 第10講 進捗状況報告③
- 第11講 進捗状況報告④
- 第12講 進捗状況報告⑤
- 第13講 進捗状況報告⑥
- 第14講 進捗状況報告⑦
- 第15講 進捗状況報告⑧

■フィードバックの要領

各学生に対し適時フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 到達目標達成に向けて活動している。

評価 F (不合格) : 到達目標達成に向けて活動していない。

■評価方法

出席 100%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 中村 その子**サブタイトル** 地域企業と連携した 広告・宣伝・PR・情報発信ゼミナール**担当教員** 中村 その子**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

(活動内容)

ラジオ番組企画と出演

ラジオコマーシャル研究・制作

映像・静止画コマーシャル研究・制作

ポスター、ビラやポップなどの広告印刷物研究・制作

ネーミングとキャッチコピーの手法を学ぶ

世界、そして地域をPRする＝シティプロモーション、地方公共団体や非営利組織、福祉関連団体、ボランティア活動などの広報

マスコットキャラクターやアニメキャラクターによるセールスプロモーション活動

イベント活動と企業PRの関係を探る

上記に関連する懸賞やコンテストへの応募

コミュニティラジオ局やケーブルテレビ局など、広告に関連の深い企業の見学やインターンシップ

その他企業や製品、サービスに関するPR活動全般に目を向ける

自分のアイデアを製品開発に結び付けるための研究とそのPR

■講義分類

ビジネス創造、顧客理解、地域ビジネス、社会人力育成

■到達目標

講義目的に書かれている項目において、関連する社会の現場で、自分の志を実現すべく、革新的で創造的な役割を果たして仕事を立てていくことができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

自ら動くことのできる主体性や周囲の人を動かす巻き込み力、企画やアイデアを現実のものとする実行力をゼミ活動を通して身に付ける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎週教員から告知される学習テーマについて基礎的な知識を検索しておくこと、また授業後は授業内容に関して自分の意見や提案、アイデアなどをまとめておくこと(プレゼンテーションできるようにしておくこと)(1.5時間以上)

■授業の概要

第1講 ゼミってなに？

第2講 コマーシャルとはそもそもなに？

第3講 営利活動とは関係のないコマーシャルもある

第4講 コマーシャルとことば力

第5講 世の中のすべてのものがPRになる可能性がある

第6講 ことば力で社会を動かせ〜キャッチコピーとネーミング

第7講 商品名と消費者への訴求効果

第8講 コマーシャルテクニクと人間力

第9講 人間がコマーシャルから受ける影響とその結果取る行動

第10講 ゼミナール活動とコンテスト、懸賞応募

第11講 自分のアイデアや企画、プロジェクトを効果的に情報発信する、プレゼンテーションする

第12講 人を引き付ける力とイベント企画運営

第13講 日本と海外のCM比較

第14講 行動経済学から見るコマーシャル

第15講 アイデアと商品企画

■フィードバックの要領

ゼミ活動の後には、その成果について学生と十分に話し合い、評価を伝える。

■評価基準

評価P(合格):上記活動項目について、十分な成果を出すこと

評価F(不合格):上記活動項目について、成果が出せなかった場合

■評価方法

ゼミは毎回出席することがあたりまえである テストや授業内課題 20パーセント ゼミの教室内外での活動の成果 60パーセント レポート提出 20パーセント

■留意点

科目名	ホームゼミ (Seminars) 中村 有一		
サブタイトル	情報技術による価値の創造		
担当教員	中村 有一	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

情報系のゼミで、主に、コンピュータ、ネットワーク、情報社会、数理モデルなどの分野で研究を進めている。内容的には理科系・工学系であるが、それほど前提となる知識は必要としない。情報系の分野において各自テーマを決め、研究を通して実際のな知識を身に付けることを目的とする。また最終的には卒業論文または卒業製作の形に成果をまとめる。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

自分で研究テーマを決め、研究していく能力を身につける。プログラミングや電子工作などにより、自分のアイデアを実現していくこと。成果を論文や研究発表の形で表現する能力を習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

情報技術に関して意欲的で実際に役立つ研究に取り組む。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

各自研究を進め、レポート・卒業論文などを書く。(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 各自選んだ研究テーマについて、研究計画を作成し、発表を行う。
- 第2講 情報系の図書を読みこなす
- 第3講 研究テーマの選び方
- 第4講 文献の選び方
- 第5講 研究を進める
- 第6講 進捗状況の報告
- 第7講 発表資料の作成
- 第8講 中間発表会を開催
- 第9講 プログラミング演習(1)
- 第10講 プログラミング演習(2)
- 第11講 プログラミング演習(3)
- 第12講 プログラミング演習(4)
- 第13講 MOS 試験対策(1)
- 第14講 MOS 試験対策(2)
- 第15講 最終発表会を開催

■フィードバックの要領

研究の中間発表、最終発表において、成果を講評し、フィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格): 研究発表を行い、レポート・卒業論文を提出すること

評価F(不合格): 研究発表を行わない場合、レポート・卒業論文などを提出しない場合

■評価方法

出席点・平常点70%、レポート・発表30%

■留意点

やる気をもって積極的に参加することが重要である。自分でテーマを探し、自分で研究を進めていくという自己解決能力を養うことが目標である。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 野坂 美穂**サブタイトル** 地域を元気にするための仕組みについて考え、活動する～地方創生に向けて～**担当教員** 野坂 美穂**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本ゼミでは、フィールドでの活動と知識・理論の習得の双方を重視します。①フィールド(学外)での活動:主に地方創生をテーマとした活動、特に第一次産業(農業・林業・漁業)の振興を目指した活動を行います。活動後は、必ず「振り返り」を行います。②知識や理論の習得:基本的な経営学の文献を読み、問題を分析するための知識や枠組みを学びます。地方創生や地域活性化に関連する文献を輪読します。事例分析やディスカッションも行います。③研究手法の習得:フィールドでの調査方法の文献を読み、研究方法や現場での作法を学びます。実践として、フィールドでのインタビュー等を行います。④就職に向けた準備:働くことの意味(なぜ人は働くのか)や、基本的な社会人としてのマナー、新聞の読み方などを学びます。就職のための業界分析や企業研究も行います。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、地域ビジネス

■到達目標

①自ら進んで行動する「主体性」と、自分の頭で考えていることを形にする「表現力」を身につける。②ゼミの仲間や様々な地域の人々と共に活動することで、「協調性」や「対話力」を養う。③教室内で学んだ知識と教室外(地域等)で学んだ体験を結び付け、理解を深める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域で活動を行いながら、主体性や目的を持ち、地域の人々と共に課題解決に努める力、そしてリーダーシップや協調性を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

適宜、指示します。(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション
- 第2講 フィールドで活動を行う上での心構えや注意点。振り返りについて
- 第3講 文献研究①
- 第4講 フィールドワークの方法と事前準備
- 第5講 文献研究②
- 第6講 フィールドワーク①(予定)
- 第7講 振り返り、新聞の読み方
- 第8講 地方創生に関するドキュメンタリーの視聴
- 第9講 フィールドワーク②(予定)
- 第10講 フィールドワーク③(予定)
- 第11講 振り返りと文献研究③
- 第12講 文献研究④
- 第13講 文献研究⑤
- 第14講 フィールドワーク④(予定)
- 第15講 前期の振り返り

■フィードバックの要領

提出したものについては、必ずコメント、アドバイスを添えて返却します。

■評価基準

評価P(合格):ゼミに貢献している。意欲を持って、ゼミの活動に取り組んでいる。

評価F(不合格):いかなる理由にせよ、5回休んだ場合は、不可とします。

■評価方法

出席20%、振り返りノート20%、成果物20%、グループワークやフィールドでの活動の貢献度40%

■留意点

ゼミは出席が全てです。欠席をするとチームのメンバーに迷惑がかかります。

科目名 ホームゼミ (Seminars) パートル**サブタイトル** 日本の企業戦士として中国・大中華圏で活躍できる人財を目指す**担当教員** パートル**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。本ゼミでは、世界経済のけん引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を中心としながら、中国を含めた大中華圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎的な知識の習得と産業社会が求める問題発見・解決能力に優れ、かつ高度なコミュニケーション能力を備えた「グローバル人材の育成」を念頭に置いた各種調査活動に基づいたプレゼンテーションおよびディスカッションを積極的に行う。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

学期前半は、「Asian Weekly News (毎週・全員)」や「アジア政治経済概況 (4半期・通年ベース、全員)」の作成と発信・報告を行い、日本を含めた中国・大中華圏・アジア地域に関する知見を深める。後半には、各自の研究テーマを設定し、関連文献や情報の収集、調査を行い、AL発表祭で研究成果を報告できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的なグローバルな知識と思考力を基に、現状を分析して課題発見力、課題解決に向けた計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ●Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (個人もしくはグループによるプレゼンテーションとディスカッションを行う。)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

日頃から時事問題や自分自身に関心をもつ特定分野や業界ないし企業に関する情報を収集、分析、調査する習慣 (各授業毎 1.5 時間以上) をつけ、問題の発見・解決力・コミュニケーション能力を身につける努力をすること。

■授業の概要

第1講 個人面談、SNSによる連絡体制の構築を含むガイダンス

第2講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第3講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第4講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第5講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第6講 ①「Asian Weekly News」の報告②外部セミナー参加③次回の実施事項の伝達

第7講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第8講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第9講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第10講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第11講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第12講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第13講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第14講 ①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達

第15講 ①今学期の総括②来学期の実施方針について意見交換③個人面談の実施

■フィードバックの要領

研究成果に対しアドバイスのほか、提出されたレポートへのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 出席 30%と報告・ディスカッション 40%およびレポート 30%の総合点が 60 点以上で合格。

評価 F (不合格) : 出席 30%、報告・ディスカッション 40%、レポート 30%の総合点が 59 点以下は不合格。

■評価方法

評価は、出席 (45%)、報告・ディスカッション (25%)、学年毎のレポート (30%) により行う。

■留意点

①ゼミのルール (出欠管理・課題提出期限など) を厳格に順守すること。②ゼミ内での報告等はペーパーレスで行うため、Facebook と Line の登録は必須。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 初見 康行**サブタイトル** 「労働哲学—仕事・働くとは何か—」**担当教員** 初見 康行**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本講義の目的は、自己にとっての「働くとは何か」を探求していくことである。上記目的を達成するために、(1) 文献調査、(2) インタビュー調査、(3) 就業体験 (インターンシップ) の3点を行っていく。これらの活動を通して、自分なりの仕事観、職業観、労働に対する姿勢 (スタンス) を形成していく。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

- ・文献調査を通して、「仕事・労働」の歴史を知る
- ・インターンシップを通して仕事を疑似体験し、自分に合った職業選択ができる
- ・自分にとっての「仕事・働くとは」を言語化することができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

本講義を通して、「仕事・労働」に関する知識を獲得し、インターンシップを通して職業体験積む。また、インタビュー等を通して社会人と触れ合い、将来の職業生活に対する高い志を養っていく。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

仕事・労働に関する参考図書を事前に読んでくる (1.5 時間) 講義・フィールドワーク後、そこでの学びを整理し、レポート等にとめる (1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ホームゼミ オリエンテーション
- 第2講 研究計画の立案・報告・更新①
- 第3講 研究計画の立案・報告・更新②
- 第4講 研究計画の立案・報告・更新③
- 第5講 研究計画の立案・報告・更新④
- 第6講 研究計画の立案・報告・更新⑤
- 第7講 研究計画の立案・報告・更新⑥
- 第8講 研究計画の立案・報告・更新⑦
- 第9講 研究計画の立案・報告・更新⑧
- 第10講 研究計画の立案・報告・更新⑨
- 第11講 研究計画の立案・報告・更新⑩
- 第12講 研究計画の立案・報告・更新⑪
- 第13講 研究計画の立案・報告・更新⑫
- 第14講 研究計画の立案・報告・更新⑬
- 第15講 研究計画の立案・報告・更新⑭

■フィードバックの要領

研究成果のレポートやプレゼンテーションに対して、適時フィードバックを行う

■評価基準

評価 P (合格) : 出席 (40%) セミ発表 (40%) セミ活動への貢献 (20%) の合計が 60% 以上を合格とする

評価 F (不合格) : 出席 (40%) セミ報告 (40%) セミ活動への貢献 (20%) の合計が 60% 未満を不合格とする

■評価方法

出席 (40%) セミ報告 (40%) セミ活動への貢献 (20%)

■留意点

本ゼミを履修する学生には、夏季休暇・冬季休暇中にインターンシップに参加することが望まれる。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 浜田 正幸		
サブタイトル	組織マネジメント、組織心理学		
担当教員	浜田 正幸	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

産業社会で活躍する社会人を育成する。

■講義分類

ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

卒業時には、「社会人3年目」を目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会人として必須の、高度な思考力と判断力を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ●KJ法 ●マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

毎回課題が出され、次回までに完遂しなければならない。(各授業毎 1.5時間以上) QCD は MUST である。

■授業の概要

第1講 ゼミナールの進め方説明浜田ゼミナールの理念、行動規範の説明

第2講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第3講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第4講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第5講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第6講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第7講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第8講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第9講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第10講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第11講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第12講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第13講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第14講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

第15講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

■フィードバックの要領

授業、課題の提出、ゼミ活動、ゼミイベント等、都度フィードバックする。

■評価基準

評価 P (合格) : 授業全出席 MUST 浜田ゼミ公式イベントに全出席課題の QCD を満たしている

評価 F (不合格) : 上記要件を満たしていない場合

■評価方法

出席(授業、イベント) 60%、課題の QCD を 40%として評価する。

■留意点

ゼミの授業は無遅刻無欠席であること。その他のゼミ活動(ゼミ合宿、イベント等)も出席することが必須である。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 増田 浩通

サブタイトル ▶▶▶ ホームゼミ

担当教員 ▶▶▶ 増田 浩通

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

経営情報の基礎となる書籍を輪講し、その内容を人前でわかりやすく伝えるためのプレゼンテーションの仕方を学ぶ。また MOS 試験や IT パスポート試験を受け、合格できるよう基礎的な勉強をゼミ全体で行う。またプログラミングの基礎を学ぶ。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

プレゼンテーション：人前で、自分が調べたことをパワーポイントを用いて発表できるようにする。MOS 試験や IT パスポート試験を受験する。またプログラミングの基礎を理解し、フローチャートを書けるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で必要となるシステム思考を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

ワード、エクセル、パワーポイントを使うので、このゼミで基本的な使い方をマスターすること。(各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習) あわせて、MOS 試験や IT パスポート試験の勉強を参考書を使いながら行う。

■授業の概要

第1講 ガイダンス。このゼミの半年の目的を説明する。ゼミ生自己紹介。

第2講 輪講用の書籍紹介。発表順番の決定。

第3講 輪講とプレゼンテーション1

第4講 輪講とプレゼンテーション2

第5講 輪講とプレゼンテーション3

第6講 輪講とプレゼンテーション4

第7講 プログラミング学習1

第8講 プログラミング学習2

第9講 MOS 試験対策の勉強1

第10講 MOS 試験対策の勉強2

第11講 IT パスポートの勉強1

第12講 IT パスポートの勉強2

第13講 防災ゲーミング1

第14講 防災ゲーミング2

第15講 半期のゼミの振り返り

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 総合評価が 60 点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。

評価 F (不合格) : 総合評価が 60 点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

・出席 : 50% ・発表 : 25% ・課題 : 25%

■留意点

科目名	ホームゼミ (Seminars) 松本 祐一		
サブタイトル	ソーシャルビジネス・コミュニティビジネスの事業開発		
担当教員	松本 祐一	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

将来、創業・起業したい、お店をやりたい、地域や社会の問題を解決するビジネスをやりたい、NPOの事業をやりたい、企業で商品開発や新規事業開発に携わりたいという学生を対象に、事業開発に関する理論と方法を学ぶとともに、実際に様々なプロジェクトを企画運営しながら事業開発力を養う。

■講義分類

顧客理解、ビジネス創造、地域ビジネス

■到達目標

事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域や社会の課題をとらえ、その解決のための仕組みを構想することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習
 [個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()
 [ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()
 [グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()
 [上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

ビジネスプランのケース分析や自身のビジネスプラン作成(各授業毎 1.5時間以上)

■授業の概要

第1講 2年生時：事業開発の基本とプロジェクトマネジメントの経験
 第2講 3年生時：チームによるビジネスプランの作成
 第3講 4年生時：卒業作品の制作
 第4講 上記参照
 第5講 上記参照
 第6講 上記参照
 第7講 上記参照
 第8講 上記参照
 第9講 上記参照
 第10講 上記参照
 第11講 上記参照
 第12講 上記参照
 第13講 上記参照
 第14講 上記参照
 第15講 上記参照

■フィードバックの要領

その時々アウトプットに対してコメント・評価する。

■評価基準

評価P(合格)：8割以上の出席、企画立案を独自の視点で行え、プロジェクトに積極的に貢献した。
 評価F(不合格)：上記を達成できていない場合

■評価方法

出席 40%課題等のアウトプットの質 30%授業中やプロジェクト中の姿勢 30%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 水盛 涼一**サブタイトル** 世界と日本**担当教員** 水盛 涼一**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は14億人を超えます。これは英語(6億人)、インドのヒンディー語(5億人)、スペイン語(4億5千万人)、アラビア語(3億人)、そして日本語(1億3千万人)の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口です。高齢化の進む日本、必ずや大中華圏を中心とした諸外国との交流が必要になります。そのためにも異文化を視野に各種調査活動を行い、またプレゼンテーション・ディスカッションを行っていきます。なお今後の指針については「留意点」「配分」の項目をご覧ください。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人育成、グローバルビジネス

■到達目標

ゼミ生はそれぞれ「東アジア・東南アジア班」「ヨーロッパ班」「南北アメリカ班」「南アジア・西アジア・アフリカ班」に分かれます。月の前半は指定された課題に関するディベート・プレゼンテーションを行います。また月の後半は班活動の成果を班員一人ずつが発表し、またその地域の異文化に直接接するフィールドワークを行います。また秋学期のアクティブラーニング発表祭を意識し活動していきます。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

異文化を知れば「知識と理解」に繋がります。そして異文化を聴衆に平易に伝える「表現と技能」も習得できます。そして「社会における多様な価値観」への関与を目指すわけですから「高い志」という志に結びつきます。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

担当する地域の時事問題にアンテナを張る必要があります。その情報を分析する処理能力、そしてその分析結果を周囲に伝えられるコミュニケーション能力の習得にも努力せねばならないでしょう。(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 ゼミ開始ガイダンス
- 第2講 プレゼンテーション
- 第3講 グループ発表
- 第4講 フィールドワーク
- 第5講 プレゼンテーション
- 第6講 プレゼンテーション
- 第7講 グループ発表
- 第8講 フィールドワーク
- 第9講 プレゼンテーション
- 第10講 プレゼンテーション
- 第11講 グループ発表
- 第12講 フィールドワーク
- 第13講 ディベート
- 第14講 グループ発表
- 第15講 フィールドワーク

■フィードバックの要領

各班の重要な学修となるフィールドワークには、書面でのフィードバックを行います。

■評価基準

評価P(合格):出席時の学修への参加程度(50%)、グループ発表の内容(50%)の総合が60点以上

評価F(不合格):出席時の学修への参加程度(50%)、グループ発表の内容(50%)の総合が59点以下

■評価方法

出席時の発表・質疑内容、グループ発表での班行動貢献・内容の良否、事後のA3レポートの内容の良否によります。なお信憑書類のない3回の欠席により転ゼミも視野に入れた相談を行います。

■留意点

以下に全体方針を記します。①、2年春には在日外国人へのインタビューおよび異文化交流、それを踏まえた発表、そして指摘点を踏まえた再発表。②、2年秋には春内容に加えて在外公館への訪問。③、3年春には主に在外公館の訪問を行い発表技術を高める。④、3年秋には春内容に加えて卒業研究への道筋をつける。(続きは「卒業年次生対象再試験の実施」へ)

科目名	ホームゼミ (Seminars) 村山 貞幸		
サブタイトル	イベントの企画・運営を通じてプロフェッショナルスキルと社会性を学ぶ		
担当教員	村山 貞幸	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

プロフェッショナル・ビジネスパーソンに必要な社会性とスキルを獲得することで、ビジネスの高度な問題解決を行う能力を養う。それは、就職力向上にもつながり、厳しい就職活動に打ち勝つ能力を獲得することになる。本ゼミでは、プロフェッショナル ビジネスパーソンを、「社会性を重視し、組織目標を圧倒的に優れた能力により達成する人」とする。そのために必要な能力は、社会性と社会人基礎力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）である。

■講義分類

顧客理解、ビジネス創造、ビジネスマネジメント

■到達目標

衰退の危機に直面している日本伝統文化に関する地域イベント、社会的大型イベント等を企画・運営することで社会性と社会人基礎力を獲得し、グローバル社会を理解し、考え抜く力、社会の発展に貢献する力、コミュニケーション力をベースとした組織貢献力を獲得し、高い志を確立する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

実際の社会課題を発見し、その解決策を創造、さまざまな困難に直面しながら実行することを通じ、産業社会に求められる主体性、関係者を巻き込む力、そして絶対に諦めない実行力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ●ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

ゼミで学習した内容を完全に理解するまで復習する。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 日本伝統文化1
- 第3講 日本伝統文化2
- 第4講 マナー
- 第5講 プロジェクトマネジメント
- 第6講 自己管理
- 第7講 プロフェッショナルの意味と意義
- 第8講 プロフェッショナル化の方法と実例
- 第9講 大型イベント企画、電話演習、子供イベントサポート
- 第10講 大型イベント企画、イベント先開拓電話、子供イベントサポート
- 第11講 大型イベント企画、子供イベントサポート
- 第12講 大型イベント企画、広報、子供イベントサポート
- 第13講 大型イベント実施、広報、子供イベントサポート
- 第14講 大型イベント企画、子供イベントサポート
- 第15講 前期総括

■フィードバックの要領

活動に関するフィードバックを面談により行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 出席 9割以上。社会性レベルと社会人基礎力が成長した。

評価 F (不合格) : 出席が 9割未満。社会性レベルと社会人基礎力が成長していない。

■評価方法

出席 50%、クラス貢献度 50%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 良峯 徳和

サブタイトル ▶▶▶ エンターテイメントを脳科学する

担当教員 ▶▶▶ 良峯 徳和

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

脳波計などの測定装置を用いることで、心の状態をある程度「見える化」できるようになった。心の状態を「見える化」することで、これまでの生活のあり方やビジネスの方法、コミュニケーションの方法などが変わる可能性がある。こうした可能性について、さまざまな実験を通じて、実践的に学ぶ。また BMI (Brain Machine Interface) を体験して、その実用化の可能性を実験を通して探求する。

■講義分類

ビジネス ICT、ビジネス創造、ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

①脳に関する基本的な知識の習得。②脳に関する最新研究の事例調査。③脳波計や皮膚電位計、心拍計などを使い、脳と心の状態を実験・計測する手順・方法を学ぶ。④実験計画策定→実験実施→実験結果の集計→考察→発表という一連の科学的研究方法を学ぶ。⑤グループワークでの協調性、積極的な発言力、実行力を身につける。⑥効果的なプレゼンテーション資料を制作する力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

脳波などの生体情報の測定方法を実践的に学ぶとともにデータ分析に関する基礎的な学力を養い、心に関わるさまざまな問題に脳科学、データサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

実験においては、事前準備がきわめて重要である。メンバーは分担して、実験に必要な試料や実験計画の立案、実験装置の準備などを行う。こうした準備学習 (予習・復習) のため、1.5 時間以上かけること。

■授業の概要

- 第1講 ゼミの概要説明
- 第2講 脳の構造
- 第3講 大脳の構造と機能
- 第4講 大脳辺縁系と大脳基底核、脳幹、小脳の構造と機能
- 第5講 脳と視覚情報処理
- 第6講 脳と感情
- 第7講 脳と記憶
- 第8講 脳と体性感覚、皮膚感覚、触覚
- 第9講 脳波とは何か
- 第10講 脳波測定装置を実際に使ってみる
- 第11講 脳波測定による実験計画の策定
- 第12講 脳波測定実験 1
- 第13講 脳波測定実験 2
- 第14講 脳波測定実験 3
- 第15講 実験報告レポート

■フィードバックの要領

レポートや発表内容に対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : ゼミ活動に自主的、積極的に参加し、意欲的な態度で臨んでいる。創意工夫を試み、創造的な発想を行う。各自担当のプレゼンテーションや課題、実験準備、役割をきちんとこなしている。

評価 F (不合格) : 上記基準を満たしていない場合。

■評価方法

出席および課題や役割分担への取り組み態度 60%、最終レポート 40%

■留意点

野外実習、ゼミ宿舎、研究発表会には必ず参加すること。

科目名 ホームゼミ (志) (Seminars (Aspiration))**サブタイトル** 実践力養成のため「専門ゼミ」**担当教員** 趙、小林(英)、大森(拓)、加藤、中村(有)、高橋、関 **対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

学生一人ひとりが興味、関心のあるテーマを選択し、専門分野のエキスパートである教員の指導・サポートを受けながら自主的に研究活動を行う。少人数グループでの討論、発表を通じてコミュニケーションとプレゼンテーションの能力を養うとともに、将来の生き方にもつながる「志」を培っていく。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

志をもとに、社会における問題を専門分野の方法論にて解決できることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

複雑な経営環境と問題解決の手がかりを理論的に理解させ、各分野の専門の専任教員の講義とグループ討議を通じて、学生の高い志の確立につなげる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ●KJ法 ●マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

ホームゼミ所属にあたっては、各ゼミに関連する書籍を最低でも3冊程度読み、その概要を確認しておくことが望ましい。各授業の準備として、問題解決のための調べ物やそれを報告するための準備が必要(90分程度)。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 コミュニケーション
- 第3講 問題解決の前提
- 第4講 問題発見
- 第5講 問題設定
- 第6講 問題分析1
- 第7講 問題分析2
- 第8講 問題分析3
- 第9講 問題分析4
- 第10講 問題解決1
- 第11講 問題解決2
- 第12講 問題解決3
- 第13講 まとめとディスカッション
- 第14講 まとめとプレゼンテーション
- 第15講 最終課題

■フィードバックの要領

複数の教員がレポートに対し、評価あるいはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):総合評価が60点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合

評価F(不合格):総合評価が60点未満で、この講義の到達目標に達していない場合

■評価方法

絶対評価にて評価を行う

■留意点

このシラバス(達成目標・評価基準・各々時間割)は例示であり、各教員によって内容は異なる。ホームゼミの内容・場所・時間については、教員に確認のうえ講義に望むこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 インターゼミ (Inter Seminars)**サブタイトル** 寺島学長ゼミ (社会工学研究会)**担当教員** 寺島、杉田、金、パートル、久保田、水盛、加藤、長島、佐藤(文)、西村(知)、木村、小林(昭)、高橋、萩野、(SGS:安田、大場、渡邊)**対象学年** 1年生(秋学期)以上 **区分** 春・秋学期**■講義目的**

インターゼミ(寺島学長ゼミ)の目的は、学部生・大学院生・ゼミOB/OGなど40名と寺島学長をはじめとする本学2学部と大学院の教員15名が、現代社会の抱える課題について、塾形式で切磋琢磨しながら多様な要素や手法を組み合わせた柔軟な発想で、体系的・総合的な答を志向する総合設計力を身に付けることである。学生自身による課題の発掘・発見から仮説の提示、そして多様な要素の組み合わせによる問題解決へ至るプロセスの中で、寺島学長以下、学内の教員や社会で活躍する学外の専門家による付加価値を高め、創造的問題解決を志向する。11年目を迎えるインターゼミは、1年間で46論文を完成させた。テーマは、以下希望する分野・グループから選ぶこと。①多摩学、②アジアダイナミズム、③サービス・エンターテインメント、④AI、⑤地域活性化。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネスICT、地域ビジネス

■到達目標

①産業社会の持つ課題を発見し、解決へのアプローチを目指す論文を作成する。②選択したテーマについて、文献調査とフィールドワーク、考察と執筆を行い、1年後に論文を完成させる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断(考え抜く力) DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

文献研究とフィールドワークを通じて課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

①各テーマに従って文献一覧を作成する(1時間)。②フィールドワークをアレンジする(1時間)。③年間スケジュールを作成する(1時間)。

■授業の概要

第1講 希望する分野・グループを選ぶ。

第2講 学長講話と自己紹介

第3講 グループ分け作業

第4講 グループの決定と詳細テーマの検討

第5講 学長講話と各グループの担当教員と学生からの進捗報告

第6講 学長講話とグループワーク

第7講 教員講話とグループワーク

第8講 グループワークおよびフィールドワーク

第9講 グループワークおよびフィールドワーク

第10講 学長講話と各グループの進捗状況報告

第11講 研究計画の発表と学長のアドバイス

第12講 学長講話と学長のグループ別指導

第13講 学長講話と学長のグループ別指導

第14講 学長講話グループワーク

第15講 春学期は箱根宿泊(8月中旬)での中間発表。秋学期は最終発表と完成論文の提出。

■フィードバックの要領

論文作成の進捗状況に応じてフィードバックする。

■評価基準

評価P(合格):出席、グループワーク貢献度、中間・最終発表の合算点が、60%以上であること。

評価F(不合格):出席、グループワーク貢献度、発表の合算点が、59%以下の場合不合格とする。

■評価方法

出席(25%)、グループワーク貢献度(25%)、中間および最終発表(50%)の割合で評価する。

■留意点

①毎回出席すること。欠席時は、必ず連絡すること。②授業開始時間は、16時20分であるが、原則16時に集合すること。③寺島学長の講演会やセミナーなどに積極的に参加すること。

科目名	アクティブ・ラーニング実践 I～VIII (Active Learning Practice I～VIII)		
サブタイトル	ALプログラム		
担当教員	金 美徳	対象学年	I 年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

グローバル化や少子高齢化など社会の急激な変化や予測困難な時代において、生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験でははぐくむことはできない。教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生自らが主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献出来る社会人基礎力を備えた人材に成長するためには、課題解決型の能動的学修(アクティブ・ラーニング)が必要である。このアクティブ・ラーニング実践は、上記の趣旨で、教員が用意する学外や課外での体験活動などの事前学習・実践・事後学習を通じた主体的な学びのプログラムに参加し、単位取得に必要な時間の学修をし、社会人基礎力の向上があったと担当教員が認めたときに単位を付与する講義である。

■講義分類

社会人力養成

■到達目標

①主体的に「事前学習」に取り組む。②「実践」の場面においては、主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献するように努力する。③主体的な活動の中で得られたものを「事後学習」の中で、自らの志の実現のためにどう活かしていくのかを整理する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断(考え抜く力) DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

各種プログラムへの参加を通じて、課題発見力と課題解決力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイク=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ●KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

受講者の能動的な学修が基本となる。事前学習・調査と事後学習は、22.5時間以上必要である。

■授業の概要

アクティブラーニング・プログラムは、46プログラム(2018年実績)を展開している。分野は、海外研修・留学導入、企業研究、地域研究、キャリア、知識・教養、資格であり、それぞれのプログラム内容や実施時期などは、各担当教員が案内や説明会を行う。

■フィードバックの要領

事後学習を通じて、フィードバックを行う。

■評価基準

評価N(認定):アクティブラーニング・プログラムの「計画書」と「報告書」を提出すること。

評価F(認定せず):「計画書」「報告書」の未提出や学修時間を確保できなかった場合は、認められない。

■評価方法

「アクティブ・ラーニング実践報告書」等に基づき能動的学修の達成時間で評価する。

■留意点

①アクティブラーニング・プログラムの説明会に参加し、どのような活動を行うのか、学修時間はどの程度になるのか、活動に要する負担は時間的な面、金銭的な面でどれくらいになるのかを確認してプログラムへ参加すること。②課外や学外でのプログラム参加に伴う費用は、大学から補助が出る場合を除き、受講者の負担となる。③事前学習、フィールドワーク、事後学習に必ず参加すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 AP 数学 (Advanced Practical Mathematics)**サブタイトル** ビジネス数学応用**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをするとよいか、中学から高校1年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数的・論理的処理力の基礎を完全習得する。

■講義分類

ビジネスマネジメント、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

経営情報学部で学ぶ上での必要な数学の十分な能力が身についているか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

データを扱う技法の基礎を身につけることにより、高度な分析技能と結果の表現方法を習得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ●T/F テスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

高校数学の知識を必要とするので、各回で取り扱う単元の事前学習 (0.5 時間) を行うこと。各回で完答できなかった問題を中心に、課題の復習 (1 時間) を行うこと。

■授業の概要

本講義は、1 年次ビジネス数学検定受講者のうち、中間テスト時点で合格した者のみが受講可能な講義であり、受講可能者は別途許可される。講義内容は、高校までの数学をベースに、経営情報学における基礎数学の学習と、その応用問題への適用を行い、数字 (データ、エビデンス) に基づいた考察ができるようになるためのより実践的な問題解決方法を習得する。

■フィードバックの要領

毎回の授業内課題演習のチェック、中間・期末テストのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 N (認定) : 1 年次ビジネス数学基礎受講者のうち中間試験で検定合格かつ期末試験で合格した者

評価 F (認定せず) : 期末試験で合格しなかった場合

■評価方法

出席点 50%、期末試験 50%

■留意点

①履修は許可制となる。②試験に対してフィードバックを行う。

科目名	スタディーアブロード I～VIII (Study Abroad I～VIII)		
サブタイトル	志を持って海外で活動する学生のための単位認定		
担当教員	パートル	対象学年	I 年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

原則として、大学が認定した海外活動（研修・留学・インターンシップ）に参加した学生が、留学先で取得した単位を多摩大学の正規の単位として読み替えるための科目である。ただし大学が認定した海外での活動で顕著な成果をあげた学生に授与される場合もある。いずれの場合も担当教員との事前面談、審査と事前学習、事後学習、審査、成果報告が必須である。

■講義分類

グローバルビジネス、語学・コミュニケーション

■到達目標

①自分たちの意見、考え方をしっかりとした形で伝え、提案できる（発信）、②相手からの発信を正確に理解し、状況に応じて的確な処理が行える（受信）、③自分が必要な情報（WEB/論文をはじめとする資料や文献など）を検索し、内容を読み取って利用できる（情報理解）、④グローバルイズムに対する正しい知識と、地球人として自分の志を実現するための社会における人間力、コミュニケーション力を海外での活動を通して身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

海外の活動先に対する理解を深めると共に、物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって、失敗を恐れずに粘り強く行動している実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●問題作成

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ

[グループ] ●PBL ●Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ●マインド・アップ

[上記以外] (海外の大学生とのディスカッションを通じて多様な視点や意見に触れる。)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

海外での単位認定を伴う活動のため、担当教員との面接、説明会や研修会への参加、事前学習・復習が必須。上記の準備学習に要する時間は最低 10 時間とする。

■授業の概要

経営情報学部認定留学プログラム、またはグローバルスタディーズ学部認定留学プログラムに参加し、この科目の単位を取得することができる。また、大学が認定した海外での社会的活動（インターンシップなど）で、顕著な成果をあげた学生、海外での国際交流活動や地域の国際交流活動に参加して、教員の認定を受けた学生の単位授与にも用いられる場合がある。この科目の単位取得に関係するプログラムに参加希望の学生は、T-NEXT 上に掲載される関連情報やお知らせを注意深くチェックし、指示が出たら、学生課国際交流担当者に必ずコンタクトを取り所定の手続きを行ったうえ、出発前教員と十分に相談をし、入念な準備をする必要がある。このコンタクトがない場合はプログラムに参加することはできない。留学先教育機関での単位認定を多摩大学の単位として読み替える。または海外での活動の内容を審査することにより、それにふさわしい単位数を原則として認定する。留学先教育機関の単位認定制度に原則として準じる。または、海外での活動内容を担当教員が審査、評価する。多摩大学の学生にふさわしい志をもって海外での活動に積極的に取り組んだかどうかが重視される。

■フィードバックの要領

海外活動に関する事前学習と事後報告の際に、適宜アドバイスと指導及び総括を行う。

■評価基準

評価 N（認定）：留学での活動先の成績認定に準じ、十分な成果を出したかどうかで単位を認定する。

評価 F（認定せず）：海外での活動を積極的に行わず、十分な成果を出さなかった場合。

■評価方法

出席（活動実績）70%、活動前後のレポート 30%

■留意点

①海外での単位認定を伴う活動のための事前事後審査シートの記入、担当教員との複数回の面接、担当教員が必要と判断する研修見学への参加、活動報告会での発表、必要に応じて多摩大学ホームページ（海外 NOW など）への投稿。参加する社会的活動に関連したすべての書類と資料の提出。②提出された課題に対してフィードバックを行う。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 インターンシップ I・II (Internship I・II)**サブタイトル** 就職前に必ず受けておかなければならない「就業体験」**担当教員** 浜田 正幸**対象学年** 2 年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

実際に社会で働く会社の人たちとの職業体験を通じて、「働く」ということを理解する。アルバイトとは全く異なる、「会社で働く」ということを実体験する。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

①社会人としての基本的な行動ができるようになる(マナー、報連相) ②朝から夜まで、一つの仕事に集中して取り組むことができ、毎日それが続けられる ③社会人として認められる、最低限の仕事のレベルに到達する

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会人として世の中に貢献する志を持つ。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ●その他(実習)

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前学習ならびにインターンシップ実習の終了時に、ノートやメモを復習し、追記する。またそれを次の実習前に読み返して行動の修正を考える。(それぞれ 1.5 時間ずつ)

■授業の概要**【要注意】** 秋学期の履修登録であるが、春学期に事前学習を実施する。

4/9(火)1限001教室 説明会を実施する予定である。変更がある場合は T-NEXT で事前に通知する。

事前講義を、春学期中に 8 回実施する予定である。日時と教室については、別途通知する。

夏季休暇中に 5 日間以上の実習に参加しなければならない。

9 月末にインターンシップ報告会を実施する予定である。日時と教室については、別途通知する。

以上の事前講義・実習・報告会、全て出席することが求められる。また提出物についても期日までに必ず提出することが求められる。

(日程確定次第通知する。メールや T-NEXT 等チェックすること)

■フィードバックの要領

インターンシップ先からの実習評価を、希望者に個別にフィードバックする。

■評価基準

評価 N (認定) : 事前授業、実習、報告会すべてに無遅刻無欠席。提出物の全提出

評価 F (認定せず) : 要件を満たしていない場合。

■評価方法

事前学習ならびに報告会への出席 50%、実習 50%

■留意点

【要注意】 秋学期の履修登録であるが、春学期に事前学習を実施する。①インターンシップ科目が初めての学生はこの「I」を、「II」を履修済みの学生は「II」を履修する。「I」と「II」を同時に履修することはできない。②大学から、またインターンシップ先からの連絡等は大学 gmail を使うので、必ずチェックすること。③2 年次から積極的に参加することが望ましい。

科目名 教育課程総論 (Curriculum)**サブタイトル** 教育課程改革の動向を把握し、情報科の単元指導計画を作成する**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育課程の意義及び編成の方法 (カリキュラム・マネジメントを含む。)

■講義目的

教育課程 (カリキュラム) の意義と、その編成方法・カリキュラム・マネジメントの重要性を理解し、また現代の日本の教育課程改革の動向とその課題について歴史的・国際的に把握した上で、その改善のために学校としてどのような対応ができるのかについて理解することができる。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1. 教育課程編成の意義や編成の方法を理解することができる。2. 学習指導要領の変遷から、学力観の変遷を見出すことができる。3. カリキュラム・マネジメントの意義を、実践事例を通して理解することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

授業を構築するための基礎的な理解を獲得するとともに、学校現場で生起する課題に実例を踏まえて学校のマネジメントの重要性を把握する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前学習の作業をおこない、メモ等を作成して持参する。また、事後学修を課す場合は、次回の授業にレポートを提出する。事前学習に 180 分、事後学修に 90 分程度を要する。

■授業の概要

- 第1講 教育課程と学習指導要領の関係
 第2講 学力低下問題と教育課程改革：キー・コンピテンシー、PISA 型学力とは何か
 第3講 学習指導要領の歴史的変遷と学力観①—戦後初期の教育実践とその批判
 第4講 学習指導要領の歴史的変遷と学力観②—系統主義からの転換
 第5講 教育課程編成の基本原理
 第6講 クロスカリキュラムと総合的な学習
 第7講 「主体的・対話的で深い学習」の視点とカリキュラム・マネジメント
 第8講 学校評価とカリキュラムマネジメント
 第9講 第8講科目のため空欄
 第10講 第8講科目のため空欄
 第11講 第8講科目のため空欄
 第12講 第8講科目のため空欄
 第13講 第8講科目のため空欄
 第14講 第8講科目のため空欄
 第15講 第8講科目のため空欄

■フィードバックの要領

次回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している

評価 A (89 ~ 80 点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義に参加しているが、積極的な参加姿勢が十分ではない

評価 C (69 ~ 60 点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い

評価 F (59 点以下) : 講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

事前・事後学修の課題メモ、レポートで 50%、授業での積極的な姿勢 50%で総合的に評価する。

■留意点

講義部分ではできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動とするため、事前学習が必須である。また、自主的・積極的に発言することを望む。各個人はもちろん、互いに進捗状況等を報告しあう等の調整が必要である。なお履修人数等の状況によって、扱う回の入れ替えを行う場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育原理 (Educational Principle)**サブタイトル** 幅広い「教育」という事象を科学する**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 3年生以上※(2017年度以前入学生対象)**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想

■講義目的

人間の成長をより望ましい形に方向づけようとする「教育」は、幅広い諸科学と連携しながら理論化・体系化されている。こうして形成されてきた教育学の理論を概観し、教育を科学的にとらえる「眼」を養う。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

教育という現象を科学的にとらえるための知識と技術を身につける。(※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許)

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

教育学と人間の発達に関する基本的な知識と理解を獲得し、それらの理解の上に自らが実践する教育活動のイメージと具体的な手順・方法等を考えることができる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

指定教科書の該当箇所を事前に読み、疑問点と自分なりの考察(意見)をもって授業に参加すること。不明な用語についてはweb、図書館の教育学辞典等で調べてくること。事前学修に180分、事後学修に90分を要する。

■授業の概要

第1講 教育を科学する—教育とは何か—

第2講 教育にとって家族の果たす役割

第3講 教育環境としての地域社会

第4講 近代社会の成立と学校

第5講 公教育制度の展開とゆらぎ

第6講 学校の組織と文化

第7講 教育内容と教育方法

第8講 生徒指導と道徳教育

第9講 転換期における教育

第10講 子どもの育ちと生成としての教育

第11講 教育の構造と機能

第12講 教育の文化的基礎

第13講 教育学の系譜(1)—社会現象としての教育—

第14講 教育学の系譜(2)—現代教育学の流れ—

第15講 学習社会の成立と生涯学習

■フィードバックの要領

今回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+(90点以上): 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している

評価A(89~80点): 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している

評価B(79~70点): 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない

評価C(69~60点): 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い

評価F(59点以下): 講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

事前学習の取り組み50%(提出したメモの内容)、授業での積極的な参加姿勢50%を総合的に評価する。

■留意点

本講義は、受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的・積極的に発言することなしには進まない。講義部分ではできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、事前学習が必須であることを自覚してほしい。なお、状況によって、講義内容や扱う回の入替えをおこなう場合がある。提出するメモに対してフィードバックを行う。

科目名 教育原理 (Educational Principle)**サブタイトル** 教育の原理と歴史的展開**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 1年生以上※(2018年度以降入学生対象) **区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想

■講義目的

本講義は、教職に就く者として必要とされる公教育の理念と制度、教育課程の意義、教育に関する歴史及び思想についての基礎的な知識を習得し、教育の基本的原則や理論的基礎を理解することを目標とする。諸外国と日本の教育の歴史的展開と代表的な思想家の教育思想や教育実践についての基礎的な知識を習得し、歴史的事象と教育の間に関連を見出すことによって、現在の教育課題にも関連していることに気づき、教育を科学的に捉える視点を養う。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

教職に就く者として求められる教育観を養い、基本的な知識の習得をめざす。具体的には、次の4点をめざす。①公教育の理念について、歴史的経緯等を踏まえて理解する、②教育の原理や教育観、子ども観の変遷について理解する、③諸外国の教育史および代表的な思想家の教育思想や教育実践について理解する、④学校教育の目的や理念、方法など近代以降の日本の公教育制度の整備の歴史と戦後の学校教育の原理を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

教育の原理、教育観や子ども観の変遷、公教育の理念や制度を学び、歴史的事象と教育の間の関連を見出し、教育の本質を理解できる能力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ●問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。各講で取り扱う時代について、世界史の教科書や教育学事典等で時代背景を確認しておくこと。必要な予習・復習時間は各1.5時間程度(合計3時間程度)である。

■授業の概要

- 第1講 教育の原理
- 第2講 古代ギリシア～中世ヨーロッパの教育
- 第3講 17～18世紀ヨーロッパの教育
- 第4講 近代社会の成立と教育
- 第5講 近代公教育制度の発達
- 第6講 19世紀の教育思想
- 第7講 新教育運動
- 第8講 日本の近世までの教育
- 第9講 近代教育制度の創始
- 第10講 公教育制度の整備と近代日本の教育方法の発達
- 第11講 第二次世界大戦前後の教育
- 第12講 系統主義と経験主義
- 第13講 教育の現代的課題①
- 第14講 教育の現代的課題②
- 第15講 教育の現代的課題③

■フィードバックの要領

最終講義等で全体に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 下記4点を関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。

評価 A (89～80点) : 下記4点を個別に、自分の考察を含めて説明できる。

評価 B (79～70点) : 下記4点のいずれか2つ以上の内容を説明できる。

評価 C (69～60点) : 下記4点のいずれか1つ以上の内容を説明できる。

評価 F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

レポート70%、発表30%。次の4点を中心に評価する。①公教育の理念と制度、歴史的変遷、②教育の原理、教育観、子ども観の変遷、③諸外国の教育思想や教育実践の歴史、④日本の学校教育の目的や理念、原理

■留意点

状況によって、講義内容や扱う回の入替えを行う場合がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育実習 (Practice Teaching)**サブタイトル** 学校教育インターン**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 4年生以上**区分** 春・秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育実践に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育実習 (学校インターンシップ (学校体験活動) を含む。)

■講義目的

本講義は、教育実習の前後に行う指導である。事前に、教育実習の意義、実習上の留意事項、授業の見方、授業の実施方法、実習校とのかかわり方などについて講義するとともに、模擬実習を組み込んで2週間～3週間の教育実習の指導・助言を図る。実習後には、実習体験の整理の方法などについてふれる。その際に、教育実習が単に教える技術を学ぶ場だけではなく、主体的に行動し人間関係を創ってゆく総合的な体験の機会であったことを思い起こし、この体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

教職に就く者として求められる教育実習について、講義技法と教育者としての態度を身に付け、基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

教育実習を通して、指導の方法、クラスマネジメント、およびこれまでの教職授業で得た知識を実践の場で生かすことを試みる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ●T/Fテスト ●問題作成 ○その他 ()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ●ピア・レビュー ●ノートテイク=ペア ●ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ●Buzz Group ●KJ法 ●マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

実習にあたっての事前準備として、学習指導案作成、教材研究等を行うので、関連書籍の熟読を必要とする (10 時間)。授業時に提示するプレゼンテーション課題 (模擬授業) についても万全な準備をする (10 時間)。

■授業の概要

第1講 事前学習 1

第2講 事前学習 2

第3講 事前学習 3

第4講 事前学習 4

第5講 事前学習 5

第6講 事前学習 6

第7講 教育現場実習

第8講 教育現場実習

第9講 教育現場実習

第10講 教育現場実習

第11講 教育現場実習

第12講 教育現場実習

第13講 教育現場実習

第14講 事後学習 1

第15講 事後学習 2

■フィードバックの要領

事後指導および事後報告会を行い、詳細な検討・分析を行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を完全に理解できている

評価 A (89 ~ 80 点) : 実習に行く準備・実習後のまとめがきちんとできている

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容が理解できている

評価 C (69 ~ 60 点) : 最低限の理解ができている

評価 F (59 点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

■評価方法

全講義・全実習・全提出物を完了すること。

■留意点

- ①本講義は教育実習及び教員免許法で定められているその前後の1単位の事前・事後指導を行う。②事前授業は教育実習前(事前)の指導に必要な準備をする。また教育実習後(事後)に、主体的に行動し人間関係を創ってゆく総合的な体験を思い起こし、この体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。③本講義は集中授業であるため実施日は別途連絡する。
- ④課題に対してフィードバックを行う。

科目名 教育心理学 (Educational Psychology)**サブタイトル** 学校教育・社会人教育における心身の発達および学習の心理学**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程

■講義目的

教育心理学とは、人間の「教える」「学ぶ」という営為について、心理学の観点から科学的に理解・考察する学問である。この講義の目的は、心理学の研究から得られた知見や技術を教育活動の場に応用することによって、教育という活動を社会において効率的・効果的に行えるようにすることである。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人育成

■到達目標

教育・発達について、心理学的な観点から科学的に理解し、一般社会における学校教育・社会教育においても本講義で学んだ知見を応用できるようにすることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

教育効果、モチベーションの増幅、心理発達支援、等を理解することにより心の理解をした上での教育を行うことが可能となる。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (橋本メソッドによりグループワークを実施する。)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読んでおくこと (1.0 時間)。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと (0.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 教育心理学とは何か
- 第2講 教育と発達
- 第3講 認知発達
- 第4講 学習理論
- 第5講 教授・学習過程
- 第6講 意欲と動機づけ
- 第7講 パーソナリティ・個人差
- 第8講 個に応じた学習指導
- 第9講 集団における人間関係
- 第10講 言語の発達
- 第11講 数概念の発達と算数・数学の学習
- 第12講 知能と学力
- 第13講 教育評価
- 第14講 ライフスキルを高める教育
- 第15講 心身発達と多様な学びとの関連性の展望とまとめ

■フィードバックの要領

講義内課題提出、前回授業内課題の振り返りと教師からの個別コメント等を行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を十分理解し、他者教育、自己成長に十分生かすことができるか。

評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を理解し、他者教育に十分生かすことができるか。

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容を理解し、他者教育に生かすことができるか。

評価 C (69 ~ 60 点) : 講義内容を理解し、他者教育に生かせるだけの基礎知識を獲得できているか。

評価 F (59 点以下) : 上記を満たさない場合

■評価方法

全出席を前提とする。授業内課題 50%、テスト (定期試験期間内に実施) 50%

■留意点

①本講義は教職科目中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②講義中の飲食、携帯電話操作、帽子・サングラスの着用等は厳禁である。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育制度論 (Educational System)**サブタイトル** 教育の法と制度について、比較教育学・教育社会学的な視点を含めてとらえる**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育に関する社会的、制度的又は経営的事項（学校と地域との連携及び学校安全への対応を含む。）

■講義目的

1. 主に、公教育をとりまく社会・行政の制度改革の動向を含めて考察する。2. 現在の日本の教育制度・行政等について、歴史的視点と国際比較の視点の両面から読み解く。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

日本の教育行政・制度設計および政策の動向についての基礎的な理解の上に、これを多角的・客観的に評価することができる。また、学校と地域との連携、学校安全への対応についての基礎的な知識を身につける。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

教育の制度に関する基礎的な知識をグローバルとローカルの関係性を意識して獲得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

指定教科書の該当箇所を読み、疑問点と自分なりの考察（意見）をもって授業に参加すること。不明な用語については web、図書館の教育学辞典等で調べてくること。事前学習に 180 分、事後学習に 90 分程度を要する。

■授業の概要

- 第1講 教育の「制度」とは何か、「公教育」とは何か
- 第2講 国の教育行政組織と教育政策過程
- 第3講 国の教育法令の構成と原理
- 第4講 分権改革による国と自治体の教育行政改革
- 第5講 地方自治体の教育行政組織としくみ
- 第6講 教育課程の行政としくみ
- 第7講 教科書の行政としくみ
- 第8講 学校と保護者・子どもの法的地位
- 第9講 教育の機会均等保障と教育費負担問題
- 第10講 学校の組織・運営と人事管理
- 第11講 教員の勤務問題と業務改善の課題
- 第12講 教員給与の政策と法制度改革
- 第13講 子どもの学力保障と学校改革
- 第14講 学校改革をめぐる論議と新たな学校づくりの取り組み
- 第15講 学校における安全教育と安全管理

■フィードバックの要領

今回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している

評価 A (89 ~ 80 点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない

評価 C (69 ~ 60 点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い

評価 F (59 点以下) : 講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

事前学習の取り組み 50% (提出したメモの内容)、授業での積極的な参加姿勢 50%を総合的に評価する。

■留意点

本講義は、受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的・積極的に発言することなしには進まない。講義部分はできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、事前学習が必須であることを自覚してほしい。なお、状況によって、扱う回の入れ替えをおこなう場合がある。

科目名 教育相談 (Educational Counseling)**サブタイトル** 心理・教育的支援およびカウンセリング・コミュニケーションスキル養成**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育相談 (カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。)の理論及び方法

■講義目的

本講義は、教育場面において相談を受ける立場となった時のその方法や技術・知識の習得と、理論的学問的な背景、実践場面での応用などについて学ぶ。実際にカウンセラーとなって業務を行うには数多くの経験と豊富な知識が必要であり、本講義だけでそれを満たすことは不可能であるが、相談を受ける立場の者として最低限必要な素養を身につけることを目的とする。教育場面とは、学校教育のみならず、社会人教育、人材教育などの場面も想定し、実社会で必要な、意味のある知識を習得する。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人育成

■到達目標

教育相談の理論と実践について、適切に理解し、実際の場面でも適用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

傾聴の態度を学び、コミュニケーションの基礎を体得することにより、相談を受ける知識・姿勢を学ぶ。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読了しておくこと (1.0時間)。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと (0.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 教育相談とは何か
- 第2講 幼児・児童期の発達
- 第3講 思春期・青年期の発達
- 第4講 不適応・不登校
- 第5講 いじめ・虐待
- 第6講 学習障害・発達障害
- 第7講 学校カウンセリング
- 第8講 教育相談の意義
- 第9講 カウンセリングの基本的枠組み
- 第10講 カウンセリング・心理療法の種類と技法
- 第11講 心理テストの理論とその評価
- 第12講 心理テストの技法
- 第13講 ソーシャルスキル・ライフスキル教育
- 第14講 進路・キャリア相談
- 第15講 精神障害とその理解

■フィードバックの要領

各回の講義で課題・演習・自己分析を行い、その評価とコメントを与える。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 講義内容を完全に理解し、現場での相談業務で実践できる。
- 評価 A (89～80点) : 講義内容を十分に理解し、現場での相談業務に生かすことができる。
- 評価 B (79～70点) : 講義内容を理解し、現場での相談業務に生かすことが期待される。
- 評価 C (69～60点) : 最低限の講義内容を理解し、現場実践業務に携わることができる。
- 評価 F (59点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

■評価方法

全出席を前提とする。授業内課題 60%、期末テスト (定期試験期間内に実施) 40%

■留意点

①本講義は教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②課題に対してフィードバックを行う。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育方法 (Teaching Method)**サブタイトル** 情報機器を活用した効果的な授業設計の検討と実践力の養成**担当教員** 水上 晃実**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）

■講義目的

本講義では、高等学校情報科の授業において、情報に関して倫理的態度をもって安全に配慮する規範意識のもと、実践的に情報を活用できる力を指導できる教員を養成することを目的とする。具体的には、生徒に対して情報機器等を効果的に活用したコミュニケーション能力・情報の創造力・発信力・科学的思考力・判断力等を育成し、生徒自身が情報化社会に積極的かつ主体的に参画できる能力・態度を身につけられるよう、その方法をインストラクショナルデザインの原理を用いて学ぶ。また、教育におけるアクティブ・ラーニングの重要性を考慮して、受講者全員が模擬授業を行うこととし、学習指導案の作成から授業の実施までを受講者自身が全て行うことで、個人の課題を発見するとともに、受講者同士がアドバイスを送り、互いに学び合いながら実践的な教師力・授業力を養うことを目的とする。

■講義分類

社会力育成

■到達目標

1) 教育方法の基礎的理論と実践を理解している。2) 生徒の資質・能力を育成するための教育方法を理解している。3) 学級、生徒、教員、教室、教材など授業を構成する基礎的な要件を理解している。4) 学習評価の考え方を理解している。5) 話法、板書等、授業を行う上での技術を身につけている。6) 学習指導理論を踏まえた学習指導案を作成することができる。7) 情報機器を活用し、生徒の興味・関心を高めることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

自分の意思を効果的かつ分かりやすく伝える力とコミュニケーション能力を養い、将来学校教育の現場に立って生徒の学習効果を上げる授業を展開できる技能を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

教科書の該当部分を講義前に読んでおくこと。また、模擬授業の際には、学習指導案と板書計画を作成し、事前に提出すること。その他、レポートや振り返り等の課題も含め、予習・復習には毎週2時間を要するものを課す。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンスおよびイントロダクション（教育方法の基礎的理論について）
- 第2講 効果的な教育システムの設計について学ぶ。
- 第3講 生徒の資質・能力を育成するための教育方法を学ぶ。
- 第4講 学級、生徒、教員、教室、教材など授業を構成する基礎的な要件とは。
- 第5講 学習評価の考え方について学ぶ。
- 第6講 話法、板書等、授業を行う上での技術（教師のスキル）とは。
- 第7講 情報通信ネットワークやメディアの特性・役割・情報モラルについて。
- 第8講 情報機器の活用とその操作方法を学ぶ。
- 第9講 学習指導理論を踏まえた上で、高等学校情報科の学習指導案作成方法を学ぶ。
- 第10講 模擬授業 (1) および教材の選び方の検討。
- 第11講 模擬授業 (2) および教師のスキルとしての話法・板書についての確認。
- 第12講 模擬授業 (3) および学習指導案の作成についての確認。
- 第13講 模擬授業 (4) および情報機器の活用についての確認。
- 第14講 模擬授業 (5) および主体的かつ対話的な深い学びの実現について。
- 第15講 講義全体の振り返りと到達目標の確認および最終指導案の発表。

■フィードバックの要領

学習指導案やレポート等の提出課題についてはコメントを記入してフィードバックを行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 意欲的に取組み、講義内容を十分に理解した上、学習指導案・模擬授業の完成度が高い。

評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を十分に理解し、学習指導案・模擬授業に関しても概ね良好である。

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容を概ね理解はしているが、講義の到達目標までにはあと一歩の努力を要する。

評価 C (69 ~ 60 点) : 講義内容の理解が不十分で、提出期限に遅れた課題がある。

評価 F (59 点以下) : 遅刻や欠席が多く、講義内容が理解できていない。未提出課題がある。

■評価方法

学習指導案および板書案 30%、模擬授業 40%、学期末レポート 30%。なお、欠席・遅刻に関しては正当な理由がない限り認められない。

■留意点

本講義はアクティブ・ラーニングをもとに、受講生の能動的かつ主体的な取組みを期待するものである。情報教育の理解とともに、実践的な能力の育成を目指し、模擬授業にも重きを置く。受講生の人数により模擬授業を実施する回数に変動が生じる場合があるが、教壇実習の重要性を理解し、積極的に臨んでほしい。

科目名 教職概論 (Teaching Profession)**サブタイトル** 自らの教職観を構築する**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教職の意義及び教員の役割・職務内容 (チーム学校運営への対応を含む。)

■講義目的

教職の意義と教員の役割について国内外の動向を含めて広く理解し、将来、教職に就くための基礎的資質を養う。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1. 教職の意義、教員の役割と職務内容、教職の専門性などについて総合的に理解することができる。2. 近年の学校・教員を巡る状況の変化について、世界的な動向を含めて説明することができる。3. レポート課題を含めて将来の進路選択の機会にする。4. 1.～3. を踏まえて自己の教職観を構築して、それを説明することができる。(※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許)

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

グローバルな動向を背景に、教員を巡る状況の変化について基礎的な理解を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ●Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

ディスカッションを円滑に進めるために、授業前に指定教科書の該当箇所と参考書、インターネット等でその内容を調べて、自分らの解釈をしておくこと。事前学修に180分、事後学修に90分程度を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：教員との出会いを振り返る
 第2講 教員の職務内容とその意義
 第3講 教員の地位と身分①：教員の「地位」
 第4講 教員の地位と身分②：教員の義務と身分保障の意味
 第5講 教員の地位と身分③：教員の待遇
 第6講 教員研修：その種類と意義
 第7講 教員の免許制度と教員の存在意義①：日本の教員免許制度
 第8講 教員の免許制度と教員の存在意義②：世界の教員免許制度と日本の改革動向
 第9講 教師のやりがいとバーンアウト
 第10講 価値多様化社会の中の専門職①：価値多様化社会とは何か
 第11講 価値多様化社会の中の専門職②：反省的实践家と反省的思考
 第12講 新しい教師の力量①：日本における政策動向とその対応
 第13講 新しい教師の力量②：OECDの政策動向から考える
 第14講 チーム学校
 第15講 教員への聞き取りから見えるもの

■フィードバックの要領

今回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している。

評価 A (89～80点)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している。

評価 B (79～70点)：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない。

評価 C (69～60点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の遅滞が多い。

評価 F (59点以下)：講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

最終レポート50点、コメントシート・小レポート20点、授業の参加姿勢30点の総合評価とする。

■留意点

記載した事前・事後学習以外にも自主的に学習し、質問を用意して授業に参加すること。活発な授業の展開には、学生の事前学習が重要であることを自覚して欲しい。教員への聞き取りとそれに基づく調査レポート(最終レポート)の作成に関する質問は随時受け付ける。調査レポートについては、提出の遅滞および必要事項を満たしていないものは採点しない。なお、状況によっては扱う回の入れ替え等を行うことがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教職実践演習 (Teacher Training Practice)**サブタイトル** 学生生活と教育実習を振り返り、自己の教職観を再確認する**担当教員** 峯岸 久枝**対象学年** 4年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育実践に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教職実践演習

■講義目的

学生生活（特に、教職に関すること）と教育実習の体験を丹念に省察し、その過程で自己の強み・弱みを自覚する。また、この振り返りを通して、自己の教職観を見直し、修正する。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1. 学生時代の振り返りを通して、今後の自己成長に必要なことを見出す。2. 個人ワークやグループディスカッションを通して、教育実習等の経験の振り返りをおこない、それぞれの経験を共有化する。3. これらの活動を通して、自己の教職観を再確認・修正する。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

教育実習で学んだことや考えたことについて、自分の意思をわかりやすく伝えることができる。また、自分の意見を発信する力や他者の発言を聴き入れる傾聴力を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

○講義 ●演習

○個人 ●プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他（ ）

[ペア] ●ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他（ ）

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ●KJ法 ●マインド・アップ ○その他（ ）

[上記以外]（なし）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

教育実習の記録を詳細にとっておくことに加え、主に教職課程で得られたことを、教職履修カルテや実習日誌等をもとに整理しておく。事前学習にはおよそ 180 分、事後学習には 90 分を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：本講の目的と概要
 第2講 学生時代を振り返る①：授業の振り返り
 第3講 学生時代を振り返る②：正課外の経験を振り返る
 第4講 教育実習を振り返る①：特別活動
 第5講 教育実習を振り返る②：総合的な学習の時間
 第6講 教育実習を振り返る③：情報科の授業内容の省察
 第7講 教育実習を振り返る④：情報科の授業での生徒の反応を振り返る
 第8講 教育実習を振り返る⑤：研究授業の指導案を書き直す
 第9講 教育実習を振り返る⑥：研究授業をおこなう（1）
 第10講 教育実習を振り返る⑦：研究授業をおこなう（2）
 第11講 教育実習を振り返る⑧：研究授業をおこなう（3）
 第12講 教育実習を振り返る⑨：教員との関係・校務
 第13講 教育実習を振り返る⑩：生徒との関係づくり
 第14講 教育実習を振り返る⑪：プレゼンテーションの準備
 第15講 教育実習を振り返る⑫：プレゼンテーション

■フィードバックの要領

レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している

評価 A（89～80 点）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している

評価 B（79～70 点）：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない

評価 C（69～60 点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い

評価 F（59 点以下）：欠席が多い、講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

平常点 50%、レポート 50%とする。グループワークの様子（態度や発言）を観察して積極的な姿勢を評価し、課題の提出は指定された日時に表示された方法で提出され、その内容を点数化する。これらを総合的に評価する。

■留意点

本講義は、原則として宿泊合宿の形で実施する。必要な資料を作成・持参して授業に臨むこと。この授業でさまざまな資料を駆使して振り返る作業をおこなうことを想定して、実習中に出来事を記載したメモなどを紛失しないようデータの保持につとめること。なお、履修人数等によっては、シラバスの内容を変更することもある。

科目名 情報科教育法 I (Teaching Method on Information EducationI)**サブタイトル** 「社会と情報」「情報の科学」の指導方法研究**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 3 年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教科及び教科の指導法に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

各教科の指導法 (情報機器及び教材の活用を含む。)

■講義目的

本講義は、高等学校情報科の教員として多様な高校生に「情報」の本質を指導する基本的な能力を身に付けることを目的とする。情報にかかわる理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な指導力や教師としての資質の習得を図ることを目的とする。本講義では、現行学習指導要領 (平成 25 年度入学生から学年進行で実施) の改訂ポイントや主な改善事項について触れ、模擬授業などの実習を通じて情報科教育の研究を進め、教材研究の方法、学習指導の工夫などの授業創りの実際を体験する。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

教職に就く者として求められる教科教育 (情報) について、基本的な知識と授業実践の手法の習得をめざす。①情報教育の沿革と現状、在り方を理解する②共通教科「情報」と専門教科「情報」の基本的な理念、目標、内容、構成を理解する③指導計画を作成し、それを基に模擬授業を通じた実践ができる④他の学生の模擬授業を見て、改善点や修正点などを相互に指摘できる⑤指摘を受け入れて、自らの指導計画や授業などを改善・工夫ができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

「情報科」教員として、学習指導要領に基づいて授業を設計し、授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/F テスト ○問題作成 ●その他 (学習指導案作成、教材作成)
[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()
[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ 法 ○マインド・アップ ○その他 ()
[上記以外] (学習指導案の相互評価、模擬授業の実践と相互評価)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

学習指導要領を精読すること。授業内の指示に従って学習指導案を作成すること。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度 (合計 3 時間程度) である。

■授業の概要

- 第 1 講 情報教育の沿革と現状
- 第 2 講 高等学校学習指導要領における情報教育の全体像
- 第 3 講 「社会と情報」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説①
- 第 4 講 「社会と情報」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説②
- 第 5 講 「情報の科学」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説①
- 第 6 講 「情報の科学」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説②
- 第 7 講 指導計画の作成①
- 第 8 講 指導計画の作成②
- 第 9 講 指導計画の作成③
- 第 10 講 模擬授業①
- 第 11 講 模擬授業②
- 第 12 講 模擬授業③
- 第 13 講 模擬授業④
- 第 14 講 模擬授業⑤
- 第 15 講 教育課程の編成

■フィードバックの要領

模擬授業実施回においてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 下記①を自分の考察を含めて説明でき、②から④の全てを満たす授業の設計ができる。
評価 A (89 ~ 80 点) : 下記①を説明できる。②から④の 2 つ以上を満たす授業の設計ができる。
評価 B (79 ~ 70 点) : 下記①を説明できる。②から④の 1 つ以上を満たす授業の設計ができる。
評価 C (69 ~ 60 点) : 下記①を十分ではないが説明でき、50 分間の授業の設計ができる。
評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。または 50 分間の授業の設計ができない。

■評価方法

期末試験 30%、学習指導案 30%、模擬授業 40%。次の 4 点により評価。①教職の専門用語理解、②学習指導要領に基づいた学習指導案作成、③十分な教材研究、正確で整理された授業構成、④学習指導案と模擬授業の整合

■留意点

①高等学校で使用している「情報」の教科書を講義の中心に位置付け、レジュメおよび参考資料を配布する。②各自で学習指導案・単元指導案および参考資料 (手許資料) を作成して、他の実習予定者にも配布する。③基本的な知識・態度と授業実践の手法の十分な習得が欠かせない。④指定した課題についての発表・模擬授業の機会を設け、教員としての適性の有無を観察・評価する。⑤課題や試験等に対してフィードバックを行う。

科目名 情報科教育法Ⅱ (Teaching Method on Information EducationⅡ)**サブタイトル** 「社会と情報」「情報の科学」の指導方法研究**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**教育職員免許法施行規則における科目区分**

教科及び教科の指導法に関する科目

教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

各教科の指導法 (情報機器及び教材の活用を含む。)

講義目的

本講義は、高等学校情報科の教員として多様な高校生に「情報」の本質を指導する基本的な能力を身に付けることを目的とする。情報にかかわる理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な指導力や教師としての資質の習得を図ることを目的とする。本講義では、現行学習指導要領 (平成25年度入学生から学年進行で実施) の改訂ポイントや主な改善事項について触れ、模擬授業などの実習を通じて情報科教育の研究を進め、教材研究の方法、学習指導の工夫などの授業創りの実際を体験する。

講義分類

社会人力育成

到達目標

教職に就く者として求められる教科教育 (情報) について、基本的な知識と授業実践の手法の習得をめざす。①情報教育の沿革と現状、在り方、②共通教科「情報」と専門教科「情報」の基本的な理念、目標、内容、構成、③指導計画を作成し、それを基に模擬授業を通じた実践、④他の学生の模擬授業を見て、改善点や修正点などを相互に指摘、⑤指摘を受け入れて、自らの指導計画や授業などを改善・工夫などの授業創りの実際を体験する。

【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

「情報科」教員として、学習指導要領に基づいて授業を設計し、授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ○プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ●その他 (学習指導案作成、教材作成)

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ○ロールプレイ ○その他 ()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他 ()

[上記以外] (学習指導案の相互評価、模擬授業の実践と相互評価)

準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

学習指導要領を精読すること。授業内の指示に従って学習指導案を作成すること。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度 (合計 3 時間程度) である。

授業の概要

第1講 単元の設定と展開

第2講 教材教具①

第3講 教材教具②

第4講 指導計画の作成①

第5講 指導計画の作成②

第6講 学習評価①

第7講 学習評価②

第8講 専門教科「情報」各科目の目標・内容・内容の取扱いの概説①

第9講 専門教科「情報」各科目の目標・内容・内容の取扱いの概説②

第10講 模擬授業①

第11講 模擬授業②

第12講 模擬授業③

第13講 模擬授業④

第14講 模擬授業の再検討①

第15講 模擬授業の再検討②

フィードバックの要領

模擬授業実施回においてフィードバックを行う。

評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 下記 1 を自分の考察を含めて説明でき、2 から 4 全てを満たす授業の設計ができる。

評価 A (89 ~ 80 点) : 下記 1 を自分の考察を含めて説明でき、2 から 4 の 2 つ以上を満たす授業の設計ができる。

評価 B (79 ~ 70 点) : 下記 1 を説明できる。2 から 4 の 1 つ以上を満たす授業の設計ができる。

評価 C (69 ~ 60 点) : 下記 1 を十分ではないが説明でき、50 分間の授業の設計ができる。

評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。または 50 分間の授業の設計ができない。

評価方法

学習指導案 40%、模擬授業 40%、模擬授業の評価 20%。次の 4 点を中心に評価。1: 専門用語理解、2: 学習指導要領に基づいた指導案作成、3: 十分な教材研究、正確で整理された授業構成、4: 指導案と模擬授業の整合

留意点

①高等学校で使用している「情報」の教科書を講義の中心に位置付け、レジュメおよび参考資料を配布する。②各自で学習指導案・単元指導案および参考資料 (手許資料) を作成して、他の実習予定者にも配布する。③基本的な知識・態度と授業実践の手法の十分な習得が欠かせない。④指定した課題についての発表・模擬授業の機会を設け、教員としての適性の有無を観察・評価する。

科目名 生徒指導・進路指導論 (Student Direction and Career Guidance)**サブタイトル** 道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目**担当教員** 峯岸 久枝**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

生徒指導の理論及び方法進路指導及びキャリア教育の理論及び方法

■講義目的

学校教育において学習指導と並んで重要な意義を持つ生徒指導は、教育相談、進路指導・キャリア教育への対応など多岐にわたり、意義と役割について学習することが必要である。また、生徒指導に関わる様々な局面において、具体的な事例や指導例をもとに教師が求められる役割は何かについて、当事者意識で考えて議論し、理解を深める。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1. 生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義と役割について、基本的な概念を理解し、説明することができる。2. 生徒指導・進路指導・キャリア教育・教育相談等の教育活動について、教師の果たすべき役割を理解し、そのあり方を具体的に考え、説明することができる。3. 生徒指導の実際の場面を観察・視聴し、学校現場での教職員との協力や外部機関との連携など、具体的な指導方法について意見や改善点を述べるができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

生徒の置かれている環境や状況を分析し、課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、生徒指導や進路指導の場面において、「当事者意識」で教師としてどのように課題解決を図るかを考える力をつける。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ●KJ法 ○マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

テキストの該当部分を事前に読んでおく(事前学習1.5時間)。また、配布された資料をよく読み、教師の立場で考え、自分の言葉で説明できるような指導観を講義後に整理する(事後学習1.5時間)。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション：教育課程における生徒指導・進路指導・キャリア教育の位置づけ

第2講 生徒指導・進路指導・キャリア教育と各教育活動との関連や意義

第3講 生徒指導・教育相談・進路指導・キャリア教育における組織的な指導体制について

第4講 生徒指導・進路指導・キャリア教育の組織的な計画と取組について

第5講 学校における指導体制①：集団指導と個別指導

第6講 学校における指導体制②：ガイダンス機能と個別指導

第7講 生活習慣の確立や規範意識とキャリアデザイン

第8講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援①

第9講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援②

第10講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援③

第11講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援の実際①：体験活動の計画

第12講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援の実際②：問題行動の生徒指導

第13講 生徒指導・進路指導・キャリア教育の今後の課題①

第14講 生徒指導・進路指導・キャリア教育の今後の課題②

第15講 講義全体のまとめ：場面指導に基づいた模擬授業の実施

■フィードバックの要領

レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：積極的・意欲的に参加し、内容を十分理解している。考察を深め、的確に説明できる。

評価 A (89～80点)：内容を理解しており、自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明できる。

評価 B (79～70点)：講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。

評価 C (69～60点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出の遅滞が多い。

評価 F (59点以下)：講義が全く理解できない、他者とコミュニケーションが成立せず協議等で話せず、協力できない。

■評価方法

平常点50%、レポート50%とする。グループワークの様子(態度や発言)を観察して積極的な姿勢を評価し、課題の提出は指定された日時に指示された方法で提出され、その内容を点数化する。これらを総合的に評価する。

■留意点

①本講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。②教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 特別活動・総合的な学習の時間の指導法 (Extra-Curricular Activities and Integrated studies)**サブタイトル** 学校・学級づくりと人格形成と教師の指導性**担当教員** 峯岸 久枝**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

特別活動の指導法総合的な学習の時間の指導法

■講義目的

高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。また「総合的な学習の時間」においては、探究的な見方・考え方を通して、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成ができるような力をつけることを目的とする。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。また「総合的な学習の時間」においては、探究的な見方・考え方を通して、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成ができるような力をつけることを目標とする。(※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許)

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

生徒の置かれている環境や状況を分析して課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、学級や特別活動(学校行事など)を通してどのようにアプローチをすれば解決できるかを考え、発信する力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ●演習

[個人] ●プレゼンテーション ○ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ●ペアワーク ●相互教授法 ○ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ○PBL ○Ball-toss ○ジグソー法 ○Buzz Group ●KJ法 ●マインド・マップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前学習として、指定教科書の該当部分を読み、自身が受けてきた教育や経験したことをもとに、具体的な場面・指導がおこなわれていたかを思い出しておく。事前学習に180分、事後学習に90分を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：学習指導要領における特別活動、総合的な学習の時間
- 第2講 教育課程における特別活動・総合的な学習の時間の位置づけ
- 第3講 特別活動・総合的な学習の時間と各教科との関連
- 第4講 学級・ホームルーム活動①：学級や学校の生活づくり・適応と成長及び健康安全
- 第5講 学級・ホームルーム活動②：今日の学級活動の課題
- 第6講 学校行事①：学習指導要領に示された儀式的、文化的、健康安全・体育的活動について
- 第7講 学校行事②：生徒会活動や部活動について
- 第8講 ボランティア活動・奉仕活動①：地域との連携を軸として
- 第9講 ボランティア活動・奉仕活動②：探究的な学習を軸として
- 第10講 特別活動・総合的な学習の時間の評価の方法
- 第11講 特別活動・総合的な学習の時間における話し合い活動の指導方法
- 第12講 特別活動・総合的な学習の時間における主体的な学びを促す方法
- 第13講 特別活動・総合的な学習の時間の具体的な授業計画①
- 第14講 特別活動・総合的な学習の時間の具体的な授業計画②
- 第15講 特別活動・総合的な学習の時間の授業を実施する

■フィードバックの要領

レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：積極的・意欲的に参加し、内容を十分理解している。考察を深め、的確に説明できる。

評価 A (89～80点)：内容を理解しており、自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明できる。

評価 B (79～70点)：講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。

評価 C (69～60点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出の遅滞が多い。

評価 F (59点以下)：講義が全く理解できない、他者とコミュニケーションが成立せず協議等で話せず、協力できない。

■評価方法

平常点50%、レポート50%とする。グループワークの様子(態度や発言)を観察して積極的な姿勢を評価し、課題の提出は指定された日時に指示された方法で提出され、その内容を点数化する。これらを総合的に評価する。

■留意点

①本講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。②教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回数の入れ替えなどが生じることもある。

科目名 特別支援教育概論 (Special Support)**サブタイトル** 個別の教育的ニーズに対する支援スキル養成**担当教員** 中川 宏子**対象学年** 2年生以上(2018年度以降入学生対象) **区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解

■講義目的

通常の学級にも在籍している発達障害や軽度知的障害をはじめとする様々な障害等により特別な支援を必要とする幼児、児童及び生徒が授業において学習活動に参加している実感・達成感をもちながら学び、生きる力を身に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に対応していくために必要な知識や支援方法を理解する。

■講義分類

社会人基礎力

■到達目標

1. 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の障害の特性及び心身の発達を理解する。2. 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する教育課程や支援の方法を理解する。3. 障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難とその対応を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

特別の支援を必要とする子どもの特性及び心身の発達を理解し、対応していける能力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当するものに●をつけています

●講義 ○演習

[個人] ○プレゼンテーション ●ワークシート ○T/Fテスト ○問題作成 ○その他()

[ペア] ○ペアワーク ○相互教授法 ●ピア・レビュー ○ノートテイキング=ペア ●ロールプレイ ○その他()

[グループ] ●PBL ○Ball-toss ●ジグソー法 ○Buzz Group ○KJ法 ○マインド・アップ ○その他()

[上記以外] (なし)

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

「新学習指導要領(平成29年3月公示)」を読んでおく。各回に新出した用語について調べておく。講義後に感想レポートを書き、提出する。

■授業の概要

- 第1講 「特別支援教育」とは何か
- 第2講 視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱の子どもの教育
- 第3講 LD、ADHD、ASDなどの子どもの教育
- 第4講 特別支援学校や特別支援学級での教育課程や支援の方法
- 第5講 通常学級での支援の方法と二次障害の防止
- 第6講 「通級による指導」及び「自立活動」
- 第7講 支援が必要な子どものための支援体制
- 第8講 様々な教育的ニーズ
- 第9講 第8講科目のため空欄
- 第10講 第8講科目のため空欄
- 第11講 第8講科目のため空欄
- 第12講 第8講科目のため空欄
- 第13講 第8講科目のため空欄
- 第14講 第8講科目のため空欄
- 第15講 第8講科目のため空欄

■フィードバックの要領

課題へのコメントにてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 内容を十分理解しており、ディスカッションに積極的に参加している。

評価 A (89～80点) : 内容を理解しており、ディスカッションで発言している。

評価 B (79～70点) : 講義内容について理解しているが、ディスカッションでの発言が少ない。

評価 C (69～60点) : 講義内容について理解が不十分で、ディスカッションでの発言がほとんど無い。

評価 F (59点以下) : 講義内容が理解できていない。ディスカッションでの発言が無い。

■評価方法

授業参加態度 60%、レポート 20%、発言 20%とする。

■留意点

①教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②教師を目指している人だけでなく、社会は様々な特徴を持った人によって構成されていることに気付く機会にしてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどがあることもある。※本科目は「集中科目」です。開講日は8月20日(火)～8月23日(金)ですので、注意してください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

